

Oracle® Cloud

Oracle Analytics Cloud の構成



F26047-22
2024 年 3 月



Oracle Cloud Oracle Analytics Cloud の構成、

F26047-22

Copyright © 2017, 2024, Oracle and/or its affiliates.

著者: Rosie Harvey

執筆協力者: Suzanne Gill、Pete Brownbridge、Stefanie Rhone、Hemala Vivek、Padma Rao

協力者: Oracle Analytics development, product management、 and quality assurance teams

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, MySQL, and NetSuite are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

目次

はじめに

対象読者	xiv
ドキュメントのアクセシビリティについて	xiv
ダイバーシティ&インクルージョン	xiv
関連ドキュメント	xv
表記規則	xv

第 I 部 構成の開始

1 Oracle Analytics Cloud の構成について

管理者の一般的なワークフロー	1-1
管理ページの理解	1-3
コンソールについて	1-4
クラシック管理ページについて	1-5
Oracle Analytics Cloud のコンソールへのアクセス	1-6
クラシック管理ページへのアクセス	1-7
管理者のための上位タスク	1-8
管理者のための上位タスク	1-8

第 II 部 サービスの構成

2 ユーザーが参照および実行できる内容の管理

ユーザーが参照および実行する内容を管理するための一般的なワークフロー	2-1
ユーザーおよびグループについて	2-2
ユーザーまたはグループの追加	2-2
アプリケーション・ロールについて	2-3
事前定義済アプリケーション・ロール	2-3
権限について	2-5

ユーザーが参照および実行できる内容の構成	2-6
アプリケーション・ロールの概要	2-7
アプリケーション・ロールへのメンバーの追加	2-8
管理者アプリケーション・ロールが重要なのはなぜですか。	2-9
ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当て	2-10
グループへのアプリケーション・ロールの割当て	2-11
独自のアプリケーション・ロールの追加	2-11
既存のユーザー定義のアプリケーション・ロールへの権限のコピー	2-14
アプリケーション・ロールに付与された権限の表示	2-15
アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し	2-16
アプリケーション・ロールの削除	2-18
1つの事前定義済アプリケーション・ロールを別に追加(上級)	2-18
詳細メンバーシップ・データの表示およびエクスポート	2-19
メンバーシップ・データのダウンロード	2-20
サンプル・シナリオ: ユーザー定義のアプリケーション・ロール	2-21
ユーザーに対する PDF へのワークブックのエクスポートの許可	2-21
BI コンシューマ・ロールを持つユーザーがワークブックを PDF にエクスポートできないようにする	2-22
ユーザーに対するデータセットおよびワークブックの作成の許可	2-23
DV コンテンツ作成者ロールを持つユーザーが特定のオブジェクト・タイプを作成または変更できないようにする	2-23

3 スナップショットの作成および復元

スナップショットを作成および復元するための一般的なワークフロー	3-1
スナップショットについて	3-2
スナップショットの作成時のオプション	3-3
スナップショットの復元時のオプション	3-6
スナップショットの作成および情報の復元	3-7
スナップショットの作成	3-8
スナップショットからの復元	3-8
復元者、復元内容および復元時期のトラッキング	3-10
スナップショットの説明の編集	3-10
スナップショットの削除	3-11
定期的なスナップショット(バックアップ)のスケジュール	3-11
スナップショットのエクスポートおよびインポート	3-12
スナップショットのエクスポート	3-12
スナップショットのインポート	3-14
スナップショット用の Oracle Cloud Storage Bucket バケットの設定	3-16
スナップショットを使用した Oracle Analytics Cloud の移行	3-17

Oracle Analytics Cloud の移行について	3-17
Oracle Analytics Cloud への移行の一般的なワークフロー	3-19
ファイルベース・データの移行	3-21
REST API を使用したスナップショットの管理	3-24

4 一般的な構成タスクの実行

共通の管理タスクを実行するための一般的なワークフロー	4-1
ウィルス・スキャナの構成	4-2
安全ドメインの登録	4-3
REST API を使用した安全ドメインの管理	4-4
安全ドメインの REST API を使用するための一般的なワークフロー	4-4
安全ドメインの REST API の例	4-5
ビジュアライゼーションの共有のためのソーシャル・チャンネルの設定	4-5
ソーシャル・チャンネルでのコンテンツの共有について	4-5
ワークブック・ユーザーによる LinkedIn でのビジュアライゼーションの共有の有効化	4-7
ワークブック・ユーザーによる Slack でのビジュアライゼーションの共有の有効化	4-8
ワークブック・ユーザーによる X (旧 Twitter)でのビジュアライゼーションの共有の有効化	4-9
ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテナの設定	4-10
レポート配信のための電子メール・サーバーの設定	4-11
電子メール配信のための Oracle Cloud Infrastructure の SMTP メール・サーバーの使用	4-12
エージェントによるコンテンツ配信の有効化およびカスタマイズ	4-15
レポートの電子メール送信と配信のトラッキング	4-16
1 回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信	4-16
電子メール・セキュリティ・アラート	4-16
電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング	4-17
配信の一時停止および再開	4-19
配信の所有者またはタイム・ゾーンの変更	4-19
配信スケジュールの復元および有効化	4-21
コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理	4-22
分析対象のマップ情報の管理	4-23
ダッシュボードおよび分析のマップの設定	4-23
ダッシュボードおよび分析の背景マップの編集	4-25
別の言語への切替え	4-27
クラウド・ストレージ・パスワードの更新	4-30
Oracle が管理するサービスのクラウド・ストレージ・パスワードの更新	4-30
顧客が管理するサービスのクラウド・ストレージ・パスワードの更新	4-31

5 コンテンツの管理および使用状況のモニター

コンテンツを管理して使用状況をモニターするための一般的なワークフロー	5-1
コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理	5-2
検索索引付けの構成	5-2
定期的なコンテンツ・クロールのスケジュール	5-3
検索クローल・ジョブのモニター	5-4
ユーザーがホーム・ページからデータセットを検索できるようにするためのデータセットの認証	5-4
使用されていないデータセットの削除	5-5
Oracle BI Enterprise Edition 12c からのコンテンツの移行	5-5
他のカタログへのコンテンツの移行	5-6
カタログ・アーカイブへのコンテンツの保存	5-6
カタログ・アーカイブからのコンテンツのアップロード	5-7
カタログ・アンアーカイブ・タスクの進行状況のトラッキング	5-7
ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター	5-8
サインインするユーザーのモニター	5-8
SQL 問合せおよびログの分析	5-9
カーソル・キャッシュ表に記録される問合せ情報	5-9
テスト SQL 問合せの実行	5-10
コンテンツの管理	5-10
コンテンツ管理の概要	5-11
コンテンツの所有権の変更	5-12
ユーザーのプライベート・フォルダ内のコンテンツの所有権の変更	5-13
コンテンツ管理に関するよくある質問	5-15

6 公開オプションの管理

ピクセルパーフェクト・レポートの管理について	6-1
ピクセルパーフェクト・レポート・タスクの実行に必要なロール	6-1
ピクセルパーフェクト・レポートの管理ページへの移動	6-2
システム・メンテナンス・プロパティの構成	6-2
サーバー・キャッシュ指定の設定	6-3
データベース・フェイルオーバー用の再試行プロパティの設定	6-3
スケジューラの理解	6-4
スケジューラの構成について	6-4
スケジューラ診断の確認	6-4
レポート・ビューア・プロパティの設定	6-5

サーバー・キャッシュのレポート・オブジェクトのクリア	6-6
サブジェクト領域メタデータ・キャッシュのクリア	6-6
ジョブ診断ログのページ	6-6
ジョブ履歴のページ	6-6
構成固有のファイルのアップロードと管理	6-7
診断の有効化	6-7
スケジューラ・ジョブの診断の有効化	6-7
オンライン・レポートの診断の有効化	6-8
配信先の設定	6-8
配信オプションの構成	6-9
プリンタおよび FAX サーバーの構成の理解	6-10
プリンタの追加	6-11
FAX サーバーの追加	6-12
電子メール・サーバーの追加	6-12
Oracle Cloud Infrastructure での電子メール配信サービスを使用したレポートの配信	6-13
HTTP または HTTPS サーバーの追加	6-16
FTP または SFTP サーバーの追加	6-16
SFTP の SSH オプション	6-18
コンテンツ・サーバーの追加	6-19
オブジェクト・ストレージの追加	6-20
Common UNIX Printing System (CUPS)サーバーの追加	6-22
Oracle Content and Experience サーバーの追加	6-22
ランタイム構成の管理	6-23
実行時プロパティの設定	6-24
PDF 出力のプロパティ	6-24
PDF デジタル署名のプロパティ	6-27
PDF アクセシビリティ・プロパティ	6-29
PDF/A 出力のプロパティ	6-29
PDF/X 出力のプロパティ	6-30
DOCX 出力のプロパティ	6-31
RTF 出力のプロパティ	6-31
PPTX 出力のプロパティ	6-32
HTML 出力プロパティ	6-32
FO 処理のプロパティ	6-33
RTF テンプレートのプロパティ	6-36
XPT テンプレートのプロパティ	6-37
PDF テンプレートのプロパティ	6-37
Excel テンプレートのプロパティ	6-38

CSV 出力プロパティ	6-38
eText 出力のプロパティ	6-39
Excel 出力のプロパティ	6-39
すべての出力プロパティ	6-40
メモリー・ガードのプロパティ	6-41
データ・モデル・プロパティ	6-42
レポート配信プロパティ	6-43
フォント・マッピングの定義	6-44
フォントを公開に使用できるようにする	6-44
サイト・レベルまたはレポート・レベルでのフォント・マッピングの設定	6-44
フォント・マッピングの作成	6-45
事前定義済のフォント	6-45
オープンソースのフォントによるライセンス 提供される Monotype フォントの置換	6-47
通貨書式の定義	6-48
通貨書式の理解	6-48
セキュアなレポート	6-49
PDF レポートでのデジタル署名の使用	6-49
前提条件および制限	6-49
デジタル証明書の取得	6-50
PDF ファイルの作成	6-50
デジタル署名の適用	6-50
デジタル署名を使用したレポートの実行と署名	6-53
暗号化されたレポート配信での PGP キーの使用	6-53
PGP キーの管理	6-53
PDF ドキュメントの暗号化	6-54
PDF ドキュメントの暗号化アルゴリズム	6-54
Publisher カタログ・オブジェクトの監査データ	6-54
Publisher カタログ・オブジェクトの監査データについて	6-55
Publisher の監査データの表示の有効化または無効化	6-55
Publisher の監査データのデータ・ソース接続の指定	6-55
Publisher の監査データの表示	6-56
カタログおよびレポートの翻訳の追加	6-56
Publisher での翻訳について	6-57
カタログ翻訳の制限	6-57
カタログ翻訳ファイルのエクスポートおよびインポート	6-57
テンプレートの翻訳	6-58
レイアウト・プロパティ・ページからの XLIFF ファイルの生成	6-59
XLIFF ファイルの翻訳	6-60

翻訳済 XLIFF ファイルの Publisher へのアップロード	6-60
ローカライズ済テンプレートの使用	6-60
ローカライズしたテンプレート・ファイルの設計	6-60
ローカライズ済テンプレートの Publisher へのアップロード	6-60

第 III 部 拡張構成

7 拡張オプションのカスタマイズおよび構成

高度なカスタマイズおよび構成のための一般的なワークフロー	7-1
カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルの適用	7-2
カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルについて	7-2
分析およびダッシュボードのデフォルト・スタイルの変更	7-2
テーマの管理	7-3
クラシック・ホーム・ページのリンクのカスタマイズ	7-4
データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェースのローカライズ	7-7
データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェース表示言語のローカライズ	7-7
データ・ビジュアライゼーションの地域データ形式のローカライズ	7-8
カスタム・キャプションのローカライズ	7-8
Data Visualization ワークブックのキャプションのローカライズ	7-8
ワークブック・キャプションのエクスポート	7-9
ワークブック・キャプションのローカライズ	7-9
ローカライズされたワークブック・キャプションのインポート	7-10
カタログ・キャプションのローカライズ	7-11
キャプションをカタログからエクスポート	7-11
キャプションのローカライズ	7-11
ローカライズしたキャプションをカタログにアップロード	7-12
アクション用のカスタム JavaScript の有効化	7-13
カスタム JavaScript を使用した分析における問合せの検証とブロック	7-13
分析での問合せのブロック	7-14
基準に基づいて分析をブロックする JavaScript の開発	7-14
計算式に基づいて分析をブロックする JavaScript の開発	7-15
検証ヘルパー関数	7-16
ライトバックのデプロイ	7-17
管理者のライトバックについて	7-17
分析およびダッシュボードでのライトバックの有効化	7-18
ライトバックの制限	7-20
ライトバック・テンプレート・ファイルの作成	7-22
データ・エンリッチメントのためのカスタム・ナレッジの追加	7-24

数字のみのキーの使用	7-25
使用状況のトラッキング	7-26
使用状況トラッキングについて	7-26
使用状況トラッキングの前提条件	7-27
使用状況トラッキング・データベースについて	7-28
使用状況トラッキング・パラメータについて	7-28
使用状況データの分析について	7-28
使用状況トラッキング表の理解	7-29
使用状況のトラッキングの一般的なワークフロー	7-35
使用状況トラッキング・データベースの指定	7-35
セマンティック・モデラーによる使用状況トラッキング・データベースの指定	7-36
モデル管理ツールによる使用状況トラッキング・データベースの指定	7-37
使用状況トラッキング・パラメータの設定	7-39
使用状況トラッキング・データの分析	7-40
データセットの作成による使用状況トラッキング・データの分析	7-40
セマンティック・モデルのサブジェクト領域を使用した使用状況トラッキング・データの分析	7-41
問合せキャッシュの管理	7-41
問合せキャッシュについて	7-41
キャッシュの利点	7-41
キャッシュのコスト	7-42
ユーザー間でのキャッシュの共有	7-43
問合せキャッシュの有効化または無効化	7-43
キャッシュのモニターおよび管理	7-43
キャッシュ管理ストラテジの選択	7-43
セマンティック・モデルの変更による問合せキャッシュへの影響	7-44
キャッシュを使用するためのストラテジ	7-45
キャッシュ・ヒットについて	7-46
一連の問合せの実行によるキャッシュへの移入	7-49
エージェントを使用した問合せキャッシュのシード	7-50
モデル管理ツールを使用した、特定の表のキャッシュの自動パージ	7-51
拡張オプションの構成	7-51
システム設定について	7-52
分析コンテンツ・オプション	7-52
接続オプション	7-54
エージェントによって配信される電子メールのオプション	7-55
書式オプション	7-56
その他のオプション	7-58
パフォーマンスおよび互換性のオプション	7-62

プレビュー・オプション	7-67
プロンプト・オプション	7-67
セキュリティ・オプション	7-69
使用状況トラッキング・オプション	7-73
ビュー・オプション	7-74
コンソールを使用したシステム設定の構成	7-78
REST API を使用したシステム設定の管理	7-78

8 データのレプリケート

データをレプリケートするための一般的なワークフロー	8-1
データ・レプリケーションの概要	8-2
データ・レプリケーションの前提条件	8-2
データ・レプリケーションに必要な情報	8-3
レプリケート可能なデータ	8-4
データのレプリケート先として指定できるターゲット・データベース	8-4
実行可能なレプリケーション・タスク	8-4
必要な権限と許可	8-4
Oracle Fusion Cloud Applications データ・ソースからデータをレプリケートする際に 使用できるオプション	8-5
データのレプリケート	8-5
Oracle Fusion Cloud Applications 用のレプリケーション接続の作成	8-7
データの定期的なレプリケート	8-8
レプリケーション・フローの変更	8-9
レプリケーション・フローのモニターおよびトラブルシューティング	8-9
レプリケートしたデータの別のターゲット・データベースへの移動	8-10

第 IV 部 リファレンス

A よくある質問

Oracle Analytics Cloud の構成および管理に関する上位 FAQ	A-2
ユーザー・コンテンツをバックアップおよび復元するための上位 FAQ (スナップショット)	A-3
ディザスタ・リカバリに関する上位 FAQ	A-5
コンテンツとデータの索引付けに関する上位 FAQ	A-5
Publisher の構成および管理に関する上位 FAQ	A-7
データ・レプリケーションに関する上位 FAQ	A-8

B パフォーマンスに関するヒント

問合せログの収集および分析	B-1
Apache JMeter を使用したパフォーマンスのテスト	B-8

C トラブルシューティング

一般的な問題のトラブルシューティング	C-1
構成の問題のトラブルシューティング	C-5
索引付けのトラブルシューティング	C-6

Custom Legal Notice

はじめに

ユーザーの管理、バックアップと復元、サービスの構成の方法について学習します。

トピック:

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [ダイバーシティ&インクルージョン](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

Oracle Analytics Cloud の構成は、Oracle Analytics Cloud を使用する管理者を対象としています。

- **管理者**は、Oracle Analytics Cloud へのアクセス権を管理し、他の管理職務(他のユーザーにかわり情報をバックアップおよび復元するなど)を実行します。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社ではアクセシビリティに取り組んでいます。

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

Oracle のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

ダイバーシティ&インクルージョン

Oracle はダイバーシティ & インクルージョンに積極的に取り組んでいます。Oracle は、ソート・リーダーシップと革新性を高める社員の多様性を尊重し、その価値を重んじています。従業員、お客様、パートナー様にポジティブな影響をもたらすインクルーシブな文化を醸成する私たちのイニシアティブの一環として、製品やドキュメントからインセンシティブな用語を取り除くように努めています。また、Oracle 製品お

よび業界標準が進化する中、お客様の既存の技術との互換性を維持する必要性およびサービスの継続性確保の要求にも留意しています。このような技術的な制限により、当社のインセンティブな用語を削除する取組みは継続中であり、時間と皆様のご協力が必要となります。

関連ドキュメント

ガイドの完全なリストは、Oracle Analytics Cloud ヘルプ・センターの「Books」タブを参照してください。

- <http://docs.oracle.com/en/cloud/paas/analytics-cloud/books.html>

表記規則

このドキュメントでは、標準の Oracle テキストおよび画像の表記規則を使用します。

テキストの表記規則

表記規則	意味
太字	太字は、アクションに関連付けられたグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素や、本文または用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、ブック・タイトル、強調、またはユーザーが特定の値を指定するプレースホルダー変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、またはユーザーが入力するテキストを示します。

ビデオおよび画像

Oracle Analytics Cloud、ダッシュボード、レポートおよびその他のオブジェクトのルック・アンド・フィールは、スキンおよびスタイルによってカスタマイズされます。このガイドで使用されているビデオおよび画像は、ご使用のスキンまたはスタイルと異なる場合がありますが、示されている動作および手法は同じです。

第 I 部

構成の開始

このパートでは、Oracle Analytics Cloud の構成および管理タスクの概要を示します。

章:

- [Oracle Analytics Cloud の構成について](#)

1

Oracle Analytics Cloud の構成について

このトピックでは、Oracle Analytics Cloud の構成を開始する方法について説明します。

トピック:

- [管理者の一般的なワークフロー](#)
- [管理ページの理解](#)
- [Oracle Analytics Cloud のコンソールへのアクセス](#)
- [クラシック管理ページへのアクセス](#)
- [管理者のための上位タスク](#)

管理者の一般的なワークフロー

Oracle Analytics Cloud を初めて構成する場合は、ガイドとしてこれらのタスクに従います。

タスク	ユーザー	詳細情報
管理者としてのサインイン	Oracle Analytics Cloud に管理者としてサインインし、コンソールに移動します。	Oracle Analytics Cloud のコンソールへのアクセス
ユーザーが参照および実行する内容の管理	コンソールのアプリケーション・ロール・ページを使用して、ユーザーが Oracle Analytics Cloud で参照および実行できる内容を構成します。	ユーザーが参照および実行できる内容の管理
コンテンツのバックアップと復元	環境(セマンティック・モデル、カタログ・コンテンツおよびアプリケーション・ロールなど)のバックアップおよび復元は、スナップショットというファイルを使用して行います。何か問題が発生した場合や別の環境に移行する必要がある場合に、環境を復元できるよう、ユーザーがシステムを使用し始める前と、その後一定の間隔で環境のスナップショットを作成する必要があります。	スナップショットの作成および復元
コンテンツの定期的なスナップショット(バックアップ)のスケジュール	データの損失を最小限にするために、ビジネス継続性計画の一環として、定期的にスナップショットを取得します。	定期的なスナップショット(バックアップ)のスケジュール
ウィルス・スキャンの設定	ウィルス・スキャン・サーバーに接続します。	ウィルス・スキャナの構成

タスク	ユーザー	詳細情報
コンテンツ共有のためのソーシャル・チャンネルの設定	ユーザーが Twitter 、 Slack 、 Oracle Cloud Storage および Oracle Content Management でコンテンツを共有できるようにします。	ビジュアライゼーションの共有のためのソーシャル・チャンネルの設定 ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテンツの設定
電子メール配信の設定	電子メール・サーバーに接続します。	レポート配信のための電子メール・サーバーの設定 電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング
エージェントによるコンテンツ配信の有効化	ユーザーはエージェントを使用してコンテンツを配信できます。	エージェントによるコンテンツ配信の有効化およびカスタマイズ 配信の一時停止および再開 配信スケジュールの復元および有効化
コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理	組織のデバイスを構成します。	コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理
記憶域スペースの解放	他のユーザーにかわってデータ・ソースを削除して記憶域スペースを解放します。	使用されていないデータセットの削除
コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理	ユーザーが検索時に常に最新情報を検索できるように、コンテンツの索引付けおよびクロールの方法を設定します。	コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理
マップの管理	マップ・レイヤーおよび背景マップを管理します	分析対象のマップ情報の管理
安全ドメインの登録	安全なドメインへのアクセスを許可します。	安全ドメインの登録
セッション情報の管理	SQL 問合せおよびログの分析によって、サインインしているユーザーをモニターしたり、分析に関する問題をトラブルシューティングします。	ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター
デフォルトのレポート・ページおよびダッシュボード・スタイルの変更	デフォルト・ロゴ、ページ・スタイルおよびダッシュボード・スタイルを変更します。	カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルの適用
Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 12c からの移行	レポート・ダッシュボードと分析、セマンティック・モデルおよびアプリケーション・ロールを移行します。	Oracle BI Enterprise Edition 12c からのコンテンツの移行
Oracle Analytics Server からのセマンティック・モデルのアップロード	Oracle Analytics Server からセマンティック・モデルをアップロードおよび編集します	Oracle Analytics Server からのセマンティック・モデルのアップロード クラウドでのセマンティック・モデルの編集
レポート・ダッシュボードおよび分析のローカライズ	カタログ・オブジェクトの名前(キャプションと呼ばれます)を様々な言語にローカライズします。	カタログ・キャプションのローカライズ

タスク	ユーザー	詳細情報
ビジュアル化するデータのレプリケート	Oracle Analytics Cloud でのビジュアライゼーションや分析のために、Oracle Fusion Cloud Applications のデータを高パフォーマンスのデータ・ストア (Oracle Autonomous Data Warehouse、Oracle Big Data Cloud など) にインポートします。	データのレプリケート
使用状況のトラッキング	Oracle Analytics Cloud 内のコンテンツに対するユーザー・レベルの問合せをトラッキングします。	使用状況のトラッキング
ライトバックの設定	ユーザーによる分析およびダッシュボードからのデータの更新を有効にします。	ライトバックのデプロイ
アクション用のカスタム JavaScript の設定	ユーザーによる分析およびダッシュボードからのブラウザ・スク립トの起動を有効にします。	アクション用のカスタム JavaScript の有効化

管理ページの理解

「コンソール」およびクラシック管理ページを使用して、クラウド・サービスを構成および管理します。

これらのページにアクセスし、管理タスクを実行するには **BI サービス管理者** ロールが必要です。

製品	「管理」ページ	必要なロール	説明およびアクセス方法
Oracle Analytics Cloud	コンソール	BI サービス管理者	<p>コンソールを使用して、ユーザー権限の管理、すべてのユーザーのコンテンツのバックアップ、安全ドメインの登録、ウィルス・スキャナ、電子メール・サーバー、配信の構成などを実行します。</p> <p>コンソールから、現在サインインしているユーザーを確認したり、SQL 問合せに関する問題を診断することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザーが参照および実行できる内容の管理 スナップショットの作成および復元 安全ドメインの登録 ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター テスト SQL 問合せの実行
Oracle Analytics Cloud	クラシック管理	BI サービス管理者	<p>クラシック管理ページのほとんどのオプションは、コンソールを通じて公開されます。類似したページを使用するオンプレミス製品に精通している場合のみ、クラシック管理ページを使用してください。クラシック管理ページについてを参照してください。</p>

その他の管理タスク用のツール

サービスレベルのライフサイクル・タスクとアイデンティティ管理タスクを実行するには、別のツール(Oracle Cloud Infrastructure Console)を使用します。Oracle Cloud Infrastructure

Console で管理タスクにアクセスし、実行するには、追加のロールが必要です。これらのタスクの手順は他のガイドに記載されています。

タスク	管理ツール	必要なロール	詳細情報
ライフサイクル Oracle Analytics Cloud インスタンスの作成、一時停止、再開、モニター、削除、スケール設定などのサービスのタスク。	Oracle Cloud Infrastructure コンソール	クラウド・アカウント管理者	ライフサイクル・タスクを実行する方法は、Oracle Analytics Cloud を Oracle Cloud Infrastructure - Gen 2、Oracle Cloud Infrastructure - Gen 1 または Oracle Cloud Infrastructure - Classic にデプロイしているかに応じて異なります。サービスの管理を参照してください。
アイデンティティ管理 Oracle Analytics Cloud のユーザーおよびグループ管理。	Oracle Cloud Infrastructure コンソール	アイデンティティ・ドメイン管理者	ユーザーを追加および管理する方法は、Oracle Cloud アカウントに IAM アイデンティティ・ドメインまたは Oracle Identity Cloud Service が含まれているかに応じて異なります。 ユーザーおよびグループの設定について を参照してください。

コンソールについて

コンソールを使用して、サービスを構成および管理します。コンソールにアクセスし、管理タスクを実行するには **BI サービス管理者** ロールが必要です。

タスク	詳細情報
マップ	マップへのユーザー・データの表示方法を定義します。 分析対象のマップ情報の管理 を参照してください。
拡張機能	カスタム・ビジュアライゼーションのタイプまたはカスタム・データ・アクションをアップロードします。カスタム・プラグインの管理を参照してください。
ソーシャル	ユーザーが様々なソーシャル・チャンネルでコンテンツを共有できるようにします。 ビジュアライゼーションの共有のためのソーシャル・チャンネルの設定 を参照してください。
検索索引	ユーザーが検索時に常に最新情報を検索できるように、コンテンツの索引付けおよびクロールの方法を設定します。 定期的なコンテンツ・クロールのスケジュール および 検索クロール・ジョブのモニター を参照してください。
安全ドメイン	安全なドメインへのアクセスを許可します。 安全ドメインの登録 を参照してください。
ユーザーとロール	ユーザーがアプリケーション・ロールを通じて参照および実行する内容を構成します。 ユーザーが参照および実行できる内容の管理 を参照してください。

タスク	詳細情報
スナップショット	スナップショットというファイルを使用して、セマンティック・モデル、カタログ・コンテンツおよびアプリケーション・ロールをバックアップおよび復元します。 スナップショットの作成および復元 を参照してください。
接続	セマンティック・モデルのデータベース接続を作成します。データ・モデラーのデータベース接続の管理を参照してください。
ウィルス・スキャナ	ウィルス・スキャン・サーバーに接続します。 ウィルス・スキャナの構成 を参照してください。
セッションと問合せキャッシュ	サインインしているユーザーを確認したり、レポート問合せをトラブルシューティングします。 ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター を参照してください。
SQL の発行	SQL 問合せをテストおよびデバッグします。 テスト SQL 問合せの実行 を参照してください。
メール・サーバー	電子メール・サーバーに接続します。 レポート配信のための電子メール・サーバーの設定 を参照してください。
配信のモニター	電子メール・サーバーによって送信された配信をトラッキングします。 電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング を参照してください。
システム設定	Oracle Analytics Cloud の拡張オプションを設定します。 拡張オプションの構成 を参照してください。
リモート・データ接続	ビジュアライゼーション・ワークブックへのリモート接続用に1つ以上のデータ・ゲートウェイ・エージェントを登録します。 Data Visualization 用のデータ・ゲートウェイの構成および登録を参照してください。

クラシック管理ページについて

類似したページを使用するオンプレミス製品に精通している場合のみ、クラシック管理ページを使用してください。クラシック管理ページのほとんどのオプションは、コンソールを通じて公開されるため、使用可能な場合は構成にコンソールを使用することをお勧めします。

タスク	詳細情報
権限の管理	Oracle Analytics 用に最適化されているため、デフォルトの権限を維持することをお勧めします。権限を編集すると、予期しない動作または機能へのアクセスが行われる場合があります。
セッションの管理	サインインしているユーザーを確認したり、レポート問合せをトラブルシューティングします。 ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター を参照してください。
エージェント・セッションの管理	現在、Oracle Analytics Cloud では使用できません。
デバイス・タイプの管理	組織へのコンテンツの配信に使用するデバイスを追加します。 コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理 を参照してください
メンテナンス・モードへの切替え	メンテナンス・モード がオンかオフかを指定します。メンテナンス・モードでは、カタログを読取り専用にして他のユーザーがカタログのコンテンツを変更できないようにします。ユーザーはカタログでオブジェクトを表示できますが、これらを更新できません。最近使用した項目リストなどの一部の項目は使用できません。

タスク	詳細情報
ファイルとメタデータのリロード	このリンクを使用して、XML メッセージ・ファイルのリロード、メタデータのリフレッシュ、およびキャッシュのクリアを行います。セマンティック・モデルを追加または更新した場合など、新しいデータのアップロード後にこれを実行することがあります。
ログ構成のリロード	デフォルトのログ・レベルを維持することをお勧めします。Oracle Support では、問題のトラブルシューティングに役立てるためにログ・レベルの変更を指示することがあります。
エクスポート・フォールバック・フォント	クラシック・レポートおよびダッシュボードでは、フォールバック・フォントとしてデフォルトの Go Noto フォントを使用することをお勧めします。PDF 出力の生成時に、デフォルトの PDF フォント (Helvetica、Times-Roman、Courier など) ではデータに含まれる西欧以外の言語の文字を表示できない場合に使用されます。オープンソースのフォントによるライセンス提供される Monotype フォントの置換えを参照してください。
SQL の発行	SQL 問合せをテストおよびデバッグします。テスト SQL 問合せの実行を参照してください。
更新が必要なカタログ・オブジェクトのスキャンおよび更新	このリンクを使用して、カタログをスキャンし、Oracle Analytics の古い更新で保存されたオブジェクトを更新します。
テーマの管理	デフォルトのロゴ、色、およびレポート・ページ、ダッシュボード、分析の見出しのスタイルを変更します。テーマの管理を参照してください。
キャプションの管理	ユーザーが作成するレポート・オブジェクトの名前(キャプション)をローカライズします。キャプションのローカライズを参照してください。
マップ・データの管理	マップへのユーザー・データの表示方法を定義します。分析対象のマップ情報の管理を参照してください。
パブリッシャの管理	ピクセルパーフェクト・レポートのデータ・ソースおよび配信先を設定します。スケジューラ、フォント・マッピングおよびその他多くの実行時オプションを構成します。Publisher 管理の概要を参照してください。
クロールの構成	このオプションは、コンソールから使用できます。定期的なコンテンツ・クロールのスケジュールを参照してください。
クロールのモニター	このオプションは、コンソールから使用できます。検索クロール・ジョブのモニターを参照してください。

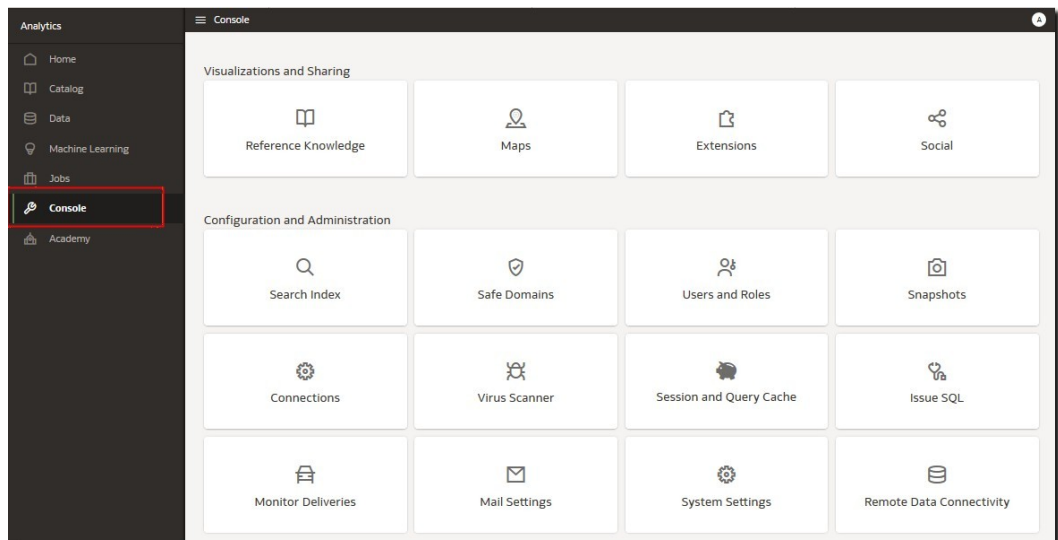
Oracle Analytics Cloud のコンソールへのアクセス

コンソールを使用して、ユーザー権限を管理し、すべてのユーザーのコンテンツをスナップショットにバックアップし、様々な構成タスクと管理タスクを実行し、システム設定を更新します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」バーをクリックし、「コンソール」をクリックします。



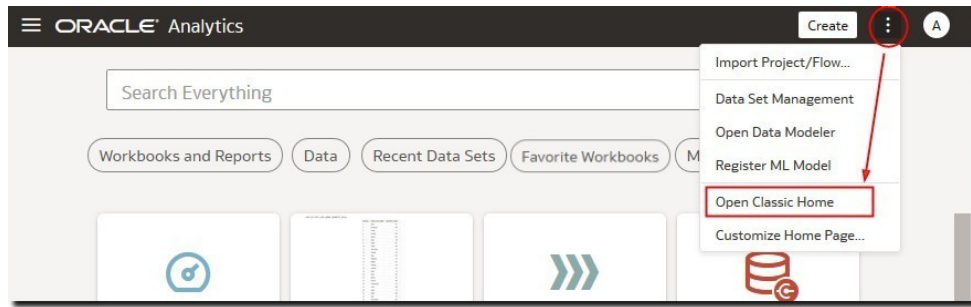
2. 「構成と管理」で、構成するオプションをクリックします。
Oracle Analytics を構成するには **BI サービス管理者** ロールが必要です。



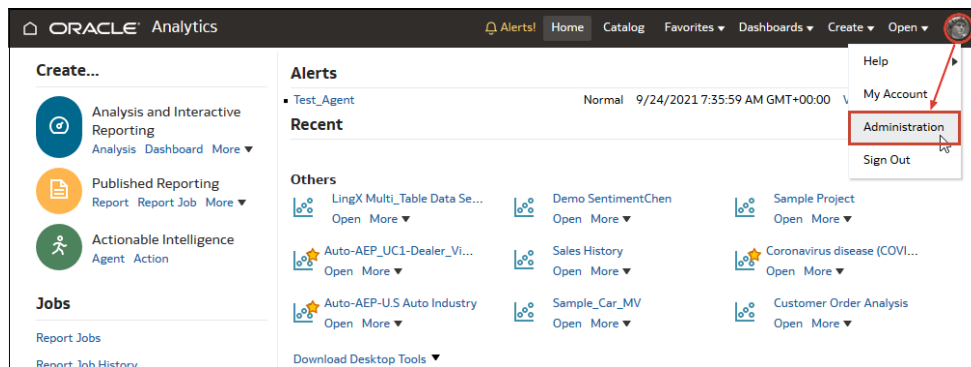
クラシック管理ページへのアクセス

類似のページが使用されているオンプレミス製品に慣れている場合は、クラシック管理ページを使用します。

1. ホーム・ページで、「ページ・メニュー」をクリックし、「クラシック・ホームを開く」を選択します。



2. 「マイ・プロフィール」をクリックし、「管理」を選択します。
「管理」メニューを表示するには **BI サービス管理者** ロールが必要です。



3. 構成する機能のリンクをクリックします。

管理者のための上位タスク

Oracle Analytics Cloud を構成および管理する上位タスクを次に示します。

タスク:

- [管理者のための上位タスク](#)

管理者のための上位タスク

このトピックでは、クラウド・サービスの構成と管理のための上位タスクについて説明します。

- [ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当て](#)
- [独自のアプリケーション・ロールの追加](#)
- [スナップショットの作成](#)
- [スナップショットからの復元](#)
- [記憶域スペースの解放](#)
- [安全ドメインの登録](#)
- [コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理](#)

第 II 部

サービスの構成

ここでは、データ・ビジュアライゼーションを提供する **Analytics Cloud** インスタンスおよび **Business Intelligence Enterprise** のモデリング・サービスの構成および管理方法について説明します。この情報は、ユーザーを管理してユーザーの生産性を維持することを主要ジョブとする管理者を対象にしています。管理者は多数の重要な職務を実行します。たとえば、ユーザー権限の管理とアカウントの修正、ユーザーが作業内容を失うリスクをなくすための定期的なバックアップの実行、安全なドメインの登録による外部コンテンツへのアクセスの許可、電子メール・サーバーとウィルス・スキャナの構成、記憶域の制限超過を防ぐためのデータ記憶域の管理、ユーザー問合せのトラブルシューティングなどです。

章:

- [ユーザーが参照および実行できる内容の管理](#)
- [スナップショットの作成および復元](#)
- [一般的な構成タスクの実行](#)
- [コンテンツの管理および使用状況のモニター](#)
- [公開オプションの管理](#)

2

ユーザーが参照および実行できる内容の管理

管理者は、データの操作時に、他のユーザーが参照および実行できる内容を管理できます。

 [ビデオ](#)

トピック:

- [ユーザーが参照および実行する内容を管理するための一般的なワークフロー](#)
- [ユーザーおよびグループについて](#)
- [アプリケーション・ロールについて](#)
- [権限について](#)
- [ユーザーが参照および実行できる内容の構成](#)

ユーザーが参照および実行する内容を管理するための一般的なワークフロー

次に、ユーザーが Oracle Analytics Cloud の操作時に参照および実行できる内容の管理を開始するための一般的なタスクを示します。

タスク	説明	詳細情報
ユーザーとグループの追加	Oracle Analytics Cloud にアクセスする必要があるすべてのユーザーのユーザー・アカウントを追加し、ユーザー・グループを設定します。	ユーザーまたはグループの追加
アプリケーション・ロールの理解	事前定義済アプリケーション・ロールおよび Oracle Analytics Cloud でユーザーに許可される操作について学習します。	アプリケーション・ロールについて
権限の理解	Oracle Analytics Cloud で特定のアクションを有効にする権限について学習します。	権限について
独自のアプリケーション・ロールの追加	Oracle Analytics Cloud にはすべての主要な機能に直接マップされているアプリケーション・ロールが用意されていますが、自分のビジネスに役立つ独自のアプリケーション・ロールを作成することもできます。	独自のアプリケーション・ロールの追加
アプリケーション・ロールへの権限の付与	事前定義済アプリケーション・ロールの権限を変更することはできませんが、作成したアプリケーション・ロールに個別の権限を付与することはできます。	アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し

タスク	説明	詳細情報
ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当て	ユーザーにアプリケーション・ロールを付与することにより、ユーザーに様々な機能へのアクセス権を付与します。	ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当て
グループへのアプリケーション・ロールの割当て	グループを使用して、ユーザーにアクセス権をより迅速に付与します。個々のユーザーではなく、ユーザーのグループにアクセス権を付与します。	グループへのアプリケーション・ロールの割当て
アプリケーション・ロールへのメンバーおよびアクションの追加	Oracle Analytics Cloud 機能へのアクセス権を様々な方法で付与します。アプリケーション・ロールに移動して、そこからユーザーおよびグループに割り当てます。	アプリケーション・ロールへのメンバーの追加

ユーザーおよびグループについて

アイデンティティ・ドメイン管理者は、*Oracle Cloud Infrastructure* コンソールを使用してユーザーを管理し、Oracle Analytics Cloud のユーザー・グループを設定します。

Oracle Cloud Infrastructure コンソールでユーザー・アカウントを設定した後、Oracle Analytics Cloud 管理者は、Oracle Analytics Cloud の「**ユーザーとロール**」ページを使用し、アプリケーション・ロールを介して個々のユーザーまたはグループに権限を付与します。[アプリケーション・ロールについて](#)および[アプリケーション・ロールへのメンバーの追加](#)を参照してください。

ユーザーまたはグループの追加

Oracle Cloud Infrastructure コンソールを使用して、ユーザーを追加し、適切なユーザー・グループに割り当てます。

アイデンティティ・ドメイン管理者が Oracle Analytics Cloud のユーザーを管理する方法は、アイデンティティ・ドメインが自分の Oracle Cloud クラウド・アカウントで使用可能かどうかによって異なります。ユーザーおよびグループの設定についてを参照してください。

Oracle Cloud Infrastructure コンソール - 基本アプリケーション・ロールの割当てオプション

アイデンティティ・ドメイン管理者の主な職務はユーザーおよびグループの設定です。ただし、Oracle Cloud Infrastructure コンソールを使用して、ServiceAdministrator、ServiceUser、ServiceViewer などの3つのアプリケーション・ロールを割り当てて、Oracle Analytics Cloud 内の基本権限をユーザーに付与することもできます。

Oracle Cloud Infrastructure コンソールで使用可能なアプリケーション・ロール	Oracle Analytics Cloud の権限
ServiceAdministrator	BI サービス管理者、BI データ・モデル作成者 および BI データ・ロード作成者 のメンバー。Oracle Analytics Cloud の管理、および他のユーザーへの権限の委任をユーザーに許可します。 サービスを作成したユーザーが自動的にこのアプリケーション・ロールを割り当てられます。
ServiceUser	BI コンテンツ作成者 と DV コンテンツ作成者 のメンバー。 コンテンツの作成および共有をユーザーに許可します。
ServiceViewer	BI コンシューマ と DV コンシューマ のメンバー。 コンテンツの表示および検索をユーザーに許可します。
ServiceDeployer	Oracle Analytics Cloud では使用されていません。
ServiceDeveloper	Oracle Analytics Cloud では使用されていません。

アプリケーション・ロールについて

アプリケーション・ロールは、ユーザーが Oracle Analytics Cloud にサインインした後に参照および実行できる内容を決定する一連の権限で構成されます。ユーザーおよびグループを 1 つ以上のアプリケーション・ロールに割り当てるのは管理者としての仕事です。

アプリケーション・ロールには 2 つのタイプがあります。

アプリケーション・ロールのタイプ	説明
事前定義済	権限の固定セットが含まれます。
ユーザー定義	管理者が作成します。 独自のアプリケーション・ロールの追加 を参照してください。

事前定義済アプリケーション・ロール

Oracle Analytics Cloud には、すぐに使用できるように、複数の事前定義済アプリケーション・ロールが用意されています。多くの場合、必要なアプリケーション・ロールはこれらの事前定義済のアプリケーション・ロールで十分です。

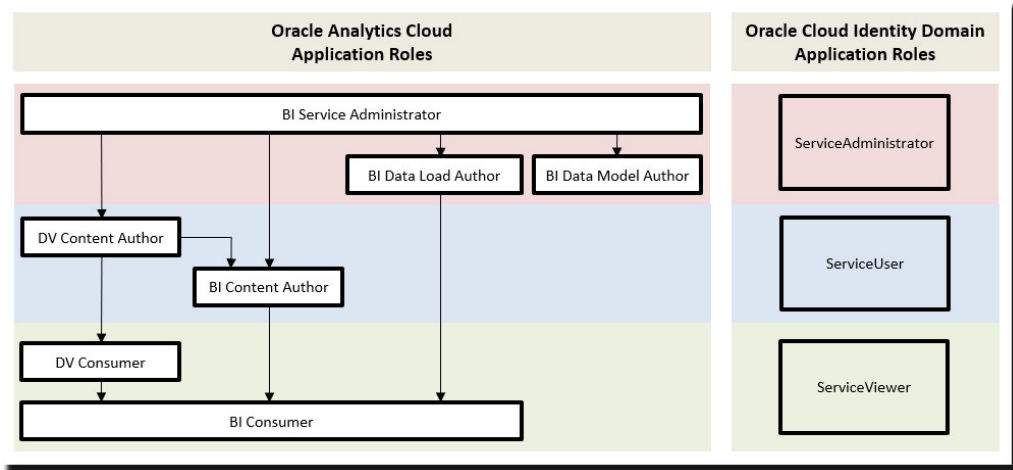
この図は、事前定義済アプリケーション・ロール階層と、それらがアイデンティティ・ドメインのデフォルトのアプリケーション・ロール(**ServiceAdministrator**、**ServiceUser**、**ServiceViewer**)にマップされる方法を示しています。ユーザーがあるアプリケーション・ロール(**DV コンテンツ作成者**など)のメンバーで、階層内の別のアプリケーション・ロール(**DV コンシューマ**など)のメンバーでもある場合、そのユーザーは 2 番目のアプリケーション・ロールの**間接メンバー**となります。

例:

- BI サービス管理者** - 図では、**BI サービス管理者**アプリケーション・ロールのメンバーが、他のすべての事前定義済アプリケーション・ロール(**BI データ・モデル作成者**、**BI データ・ロード作成者**、**BI コンシューマ**など)の間接メンバーであることを示しています。これは、**BI サービス管理者**アプリケーション・ロールを持つユーザーは、これらの個々のアプリケーション・ロールで許可されるすべての操作を自動的に実行できることを意味し

ます。たとえば、新しい管理ユーザー(John)を追加した場合、John にすべてのアプリケーション・ロールを付与する必要はありません。かわりに、John に **BI サービス管理者**アプリケーション・ロールを付与するだけで、使用可能なすべての権限が John に付与されます。

- DV コンテンツ作成者** - 図では、**DV コンテンツ作成者**アプリケーション・ロールのメンバーが、**BI コンテンツ作成者**、**DV コンシューマ**および**BI コンシューマ**アプリケーション・ロールの間接メンバーとなることを示しています。このため、ユーザーに **DV コンテンツ作成者**アプリケーション・ロールを付与した場合、そのユーザーはデータ・ビジュアライゼーションを作成、共有、探索および表示でき、分析およびダッシュボードを作成、共有、実行および表示することもできます。



Oracle Analytics Cloud の事前定義済アプリケーション・ロール 説明

BI サービス管理者	コンソールを使用した Oracle Analytics Cloud の管理および権限の他のユーザーへの委任をユーザーに許可します。このアプリケーション・ロールには、使用可能なすべての権限が割り当てられます。
BI データ・モデル作成者	セマンティック・モデラーを使用した Oracle Analytics Cloud でのセマンティック・モデルの作成および管理をユーザーに許可します。
BI データロード作成者	使用されません。
DV コンテンツ作成者	ワークブックの作成、データへの接続とデータ・ビジュアライゼーション用のデータのロード、およびデータ・ビジュアライゼーションの検索をユーザーに許可します。
BI コンテンツ作成者	ユーザーに、分析、ダッシュボードおよびクセルパーフェクト・レポートの作成と、他のユーザーとのそれらの共有を許可します。
DV コンシューマ	データ・ビジュアライゼーションの検索をユーザーに許可します。

Oracle Analytics Cloud の事前定義済アプリケーション・ロール 説明

BI コンシューマ	Oracle Analytics Cloud (ワークブック、分析、ダッシュボード、ピクセルパーフェクト・レポート)のレポートの表示および実行をユーザーに許可します。 このアプリケーション・ロールを使用して、サービスにアクセスできるユーザーを制御します。
-----------	--

事前定義済のアプリケーション・ロールの削除またはデフォルトのメンバーシップの除去はできません。

アプリケーション・ロールには、メンバーとしてユーザー、グループまたは他のアプリケーション・ロールを設定できます。つまり、1つのアプリケーション・ロールのメンバーであるユーザーは、間接的に他のアプリケーション・ロールのメンバーである場合があります。

権限について

権限によって、Oracle Analytics Cloud で特定のアクションを実行できます。管理者は、アプリケーション・ロールに特定の権限を付与できます。

Oracle Analytics Cloud の権限

この表は、Oracle Analytics Cloud の権限を示しています。

カテゴリ	リソース・タイプ	権限	説明	事前定義済アプリケーション・ロール
カタログ	接続	接続の作成および編集	接続を作成および編集します。	DV コンテンツ作成者
		リソース・プリンシパルを使用した OCI Data Science への接続の作成および編集	リソース・プリンシパルを使用して Oracle Cloud Infrastructure Data Science への接続を作成および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
		リソース・プリンシパルを使用した OCI Document Understanding への接続の作成および編集	リソース・プリンシパルを使用して Oracle Cloud Infrastructure Document Understanding への接続を作成および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
		リソース・プリンシパルを使用した OCI 関数への接続の作成および編集	リソース・プリンシパルを使用して Oracle Cloud Infrastructure 関数への接続を作成および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者

カテゴリ	リソース・タイプ	権限	説明	事前定義済アプリケーション・ロール
		リソース・プリンシパルを使用した OCI Language への接続の作成および編集	リソース・プリンシパルを使用して Oracle Cloud Infrastructure Language への接続を作成および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
		リソース・プリンシパルを使用した OCI Vision への接続の作成および編集	リソース・プリンシパルを使用して Oracle Cloud Infrastructure Vision への接続を作成および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
	データ・フロー	データ・フローの作成および編集	データ・フローを作成および編集します。	DV コンテンツ作成者
		順序の作成および編集	順序を作成および編集します。	DV コンテンツ作成者
	データセット	データセットの作成および編集	データセットを作成および編集します。	DV コンテンツ作成者
	ワークブック	ウォッチリストの作成および編集	ウォッチリストを作成および編集します。	DV コンテンツ作成者
		ワークブックの作成および編集	ワークブックを作成および編集します。	DV コンテンツ作成者
		ドキュメントへのワークブックのエクスポート	ワークブックを PDF などのドキュメントにエクスポートします。	BI コンシューマ
		ワークブックのスケジュール	ワークブックのスケジュールを設定および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
		バースティングを使用したワークブックのスケジュール	バースティングを使用したワークブックのスケジュールを設定および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
		RunAs ユーザーを使用したワークブックのスケジュール	RunAs ユーザーを使用したワークブックのスケジュールを設定および編集します。 Oracle Analytics Server では使用されていません。	BI サービス管理者
		ナビゲーション・メニューの表示	ダッシュボードおよびワークブックのキュレートされたリストを表示します	BI コンシューマ

ユーザーが参照および実行できる内容の構成

管理者は、他のユーザーが Oracle Analytics Cloud で参照および実行できる内容を決定するためのアプリケーション・ロールを割り当てます。

トピック:

- [アプリケーション・ロールの概要](#)
- [アプリケーション・ロールへのメンバーの追加](#)

- 管理者アプリケーション・ロールが重要なのはなぜですか。
- ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当て
- グループへのアプリケーション・ロールの割当て
- 独自のアプリケーション・ロールの追加
- 既存のユーザー定義のアプリケーション・ロールへの権限のコピー
- アプリケーション・ロールに付与された権限の表示
- アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し
- アプリケーション・ロールの削除
- 1つの事前定義済アプリケーション・ロールを別に追加(上級)
- 詳細メンバーシップ・データの表示およびエクスポート
- サンプル・シナリオ: ユーザー定義のアプリケーション・ロール

アプリケーション・ロールの概要

管理者は、コンソールの「ユーザーとロール」ページで、ユーザーが Oracle Analytics Cloud で参照および実行する内容を構成します。このページには、ユーザー情報が4つの異なるビュー(ユーザー、グループ、アプリケーション・ロール、権限)で表示されます。

ユーザーとロール・ページ 説明

「ユーザー」タブ

Oracle Analytics インスタンスに関連付けられたアイデンティティ・ドメインのユーザーがリストされます。

「ユーザー」タブから、次を行えます:

- 各ユーザーが直接属しているグループおよびアプリケーション・ロールを検出します。
- ユーザーに直接付与された権限を検出します。
- ユーザーに割り当てられたアプリケーション・ロールを追加または除去します。
- ユーザーに直接付与された権限を削除します。
- 直接的または間接的にユーザーに割り当てられているグループまたはアプリケーション・ロールをリストするレポートを生成します。

「ユーザー」タブではユーザー・アカウントを追加および除去できません。アイデンティティ管理システムを使用して、ユーザー・アカウントを管理します。

ベスト・プラクティスは、アプリケーション・ロールに権限を割り当てることです。ユーザーに権限を付与することはできません。ただし、ユーザーにすでに権限が付与されている場合(たとえば、オンプレミス環境からの移行などで)、そのユーザーからこれらの権限付与を削除できます。

ユーザーとロール・ページ 説明

「グループ」タブ

Oracle Analytics インスタンスに関連付けられたアイデンティティ・ドメインのユーザー・グループがリストされます。

「グループ」タブから、次を行えます:

- 各グループに直接割り当てられているメンバー(ユーザーまたはグループ)を検出します。
- グループが直接割り当てられるアプリケーション・ロールまたはその他のグループを検出します。
- グループに割り当てられたアプリケーション・ロールを追加または除去します。

「グループ」タブではユーザー・グループを追加および除去できません。アイデンティティ管理システムを使用して、ユーザー・グループを管理します。

「アプリケーション・ロール」タブ

Oracle Analytics の事前定義済アプリケーション・ロールと、追加したユーザー定義のアプリケーション・ロールをリストします。

「アプリケーション・ロール」タブから、次を行えます:

- 独自のアプリケーション・ロールを作成します。
 - 各アプリケーション・ロールに直接割り当てられているメンバー(ユーザー、グループ、アプリケーション・ロール)を検出します。
 - 各アプリケーション・ロールに直接付与された権限を検出します。
 -
 - メンバーを追加するか、各アプリケーション・ロールからメンバーを除去します。
 - アプリケーション・ロールが他のアプリケーション・ロールのメンバーであるかどうかを検出します。
 - 各アプリケーション・ロールのメンバーを追加または除去します。
 - ユーザー定義のアプリケーション・ロールに権限を付与します。
 - ユーザー定義のアプリケーション・ロールから権限を削除します。
 - 直接的または間接的にアプリケーション・ロールに割り当てられているユーザーをリストするレポートを生成します。
 - 直接的または間接的にアプリケーション・ロールに割り当てられているグループ(または **IDCS** アプリケーション・ロール)をリストするレポートを生成します。
 - 直接的または間接的にアプリケーション・ロールに割り当てられている他のアプリケーション・ロールをリストするレポートを生成します。
 - 直接的または間接的にアプリケーション・ロールが割り当てられている他のアプリケーション・ロールをリストするレポートを生成します。
-

「権限」タブ

Oracle Analytics で使用可能な権限をリストします。

「権限」タブから次のことができます:

- 権限の検索および権限リストのフィルタ。
 - 権限が直接割り当てられるアプリケーション・ロールの検出。
 - 権限が直接割り当てられるユーザーの検出。
-

アプリケーション・ロールへのメンバーの追加

アプリケーション・ロールによって、**Oracle Analytics Cloud** でユーザーが参照および実行できる内容が決まります。適切なアプリケーション・ロールをすべてのユーザーに割り当て、各アプリケーション・ロールの権限を管理するのは、管理者の仕事です。

注意:

- メンバー(ユーザー、グループおよびその他のアプリケーション・ロール)は、アプリケーション・ロールに付与された権限を取得します。
- アプリケーション・ロールは、他のアプリケーション・ロールに付与された権限を取得できます。たとえば、DV コンテンツ作成者は、BI コンテンツ作成者、DV コンシューマおよび BI コンシューマに付与された権限を取得します。

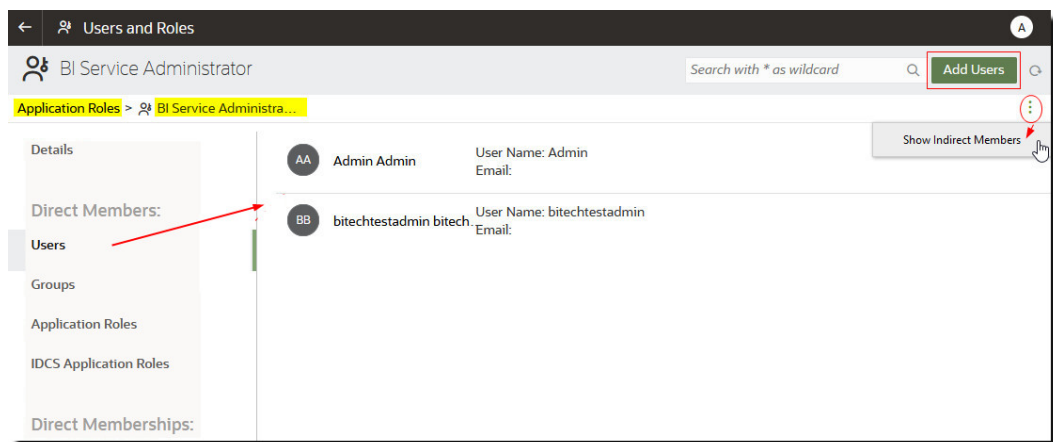
コンソールで「ユーザーとロール」ページを使用して、アプリケーション・ロールへのメンバーの割当てを行えます。


1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「ユーザーとロール」をクリックします。
3. 「アプリケーション・ロール」をクリックします。

すべての事前定義済アプリケーション・ロールが、追加したユーザー定義のアプリケーション・ロールとともに表示されます。

4. 詳細はアプリケーション・ロールの名前を選択し、その現在のメンバーを確認します。
5. 「直接メンバー」で、「ユーザー」、「グループ」または「アプリケーション・ロール」をクリックし、各カテゴリの現在の直接メンバーを表示します。

たとえば、「ユーザー」をクリックすると、アプリケーション・ロールに直接割り当てられているユーザーのリストが表示されます。



6. アプリケーション・ロールに(直接的および間接的に)割り当てられている選択済のカテゴリのすべてのメンバーのリストを表示するには、メニュー・アイコンをクリックして「間接メンバーの表示」を選択します。
7. 新規メンバー(ユーザー、グループ、アプリケーション・ロール、IDCS アプリケーション・ロール)をアプリケーション・ロールに追加するには、「ユーザーの追加」、「グループの追加」または「アプリケーション・ロールの追加」をクリックして、1つ以上のメンバーを選択し「追加」をクリックします。
8. アプリケーション・ロールからメンバーを除去するには、メンバーの名前の横にある「削除」アイコンをクリックします。

管理者アプリケーション・ロールが重要なのはなぜですか。

コンソール内の管理オプションにアクセスするには、BI サービス管理者アプリケーション・ロールが必要です。

組織内の少なくとも1人のユーザーに **BI サービス管理者** アプリケーション・ロールを付与する必要があります。これにより、他のユーザーに権限を委任できるユーザーが常にいる状態になります。**BI サービス管理者** ロールから自分自身を除去する場合、警告メッセージが表示されます。

Oracle Analytics Cloud への管理アクセス権を誰も持っていない場合は、アイデンティティ・ドメイン管理者に、ユーザーを **ServiceAdministrator** IDCS アプリケーション・ロールに追加するよう依頼します。**ServiceAdministrator** はアイデンティティ管理システムを通じて割り当てられ、通常の Oracle Analytics Cloud サービス・インスタンスの **BI サービス管理者** アプリケーション・ロールに常に割り当てられます。

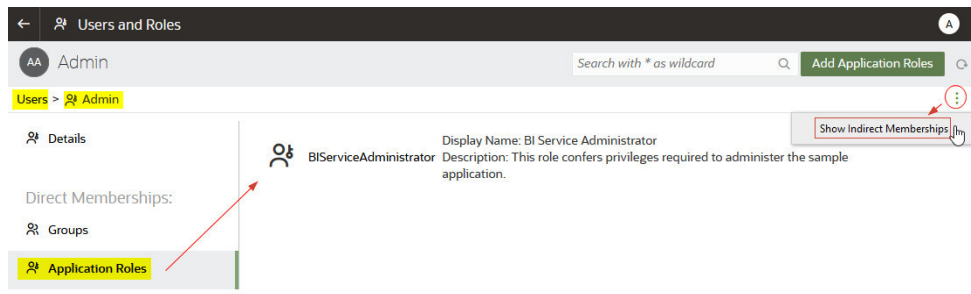
ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当て


「ユーザー」ページには、Oracle Analytics Cloud インスタンスに関連付けられたアイデンティティ・ドメインからのユーザーがリストされます。管理者として、これらのユーザーを適切なアプリケーション・ロールに割り当てできます。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**ユーザーとロール**」をクリックします。
3. 「**ユーザー**」をクリックします。
4. 「ユーザー」ページで、ユーザーの名前をクリックします。

名前をリストをフィルタするには、「**検索**」フィルタにユーザー名の全体または一部を入力し、[Enter]キーを押します。名前の一部を入力したら、*をワイルドカードとして使用します。検索では大小文字は区別されず、名前と表示名の両方が検索されます。たとえば、*admin*と入力して、文字 admin を含むユーザーを検索できます。

5. ユーザーの「**詳細**」ページで、「**アプリケーション・ロール**」をクリックして、このユーザーに直接割り当てられているアプリケーション・ロールのリストを表示します。



6. メニュー・アイコンをクリックして、「**間接メンバーシップの表示**」を選択し、ユーザーに割り当てられているすべての(つまり直接的および間接的に割り当てられている)アプリケーション・ロールのリストを表示します。
7. ユーザーを追加のアプリケーション・ロールに割り当てるには、「**アプリケーション・ロールの追加**」をクリックします。
8. 「**ユーザーをアプリケーション・ロールに追加**」で、リストから1つ以上のアプリケーション・ロールをクリックし、「**追加**」をクリックします。
9. ユーザーからアプリケーション・ロールを除去するには、削除するアプリケーション・ロールの名前の横にある「**削除**」アイコンをクリックします。

グループへのアプリケーション・ロールの割当て

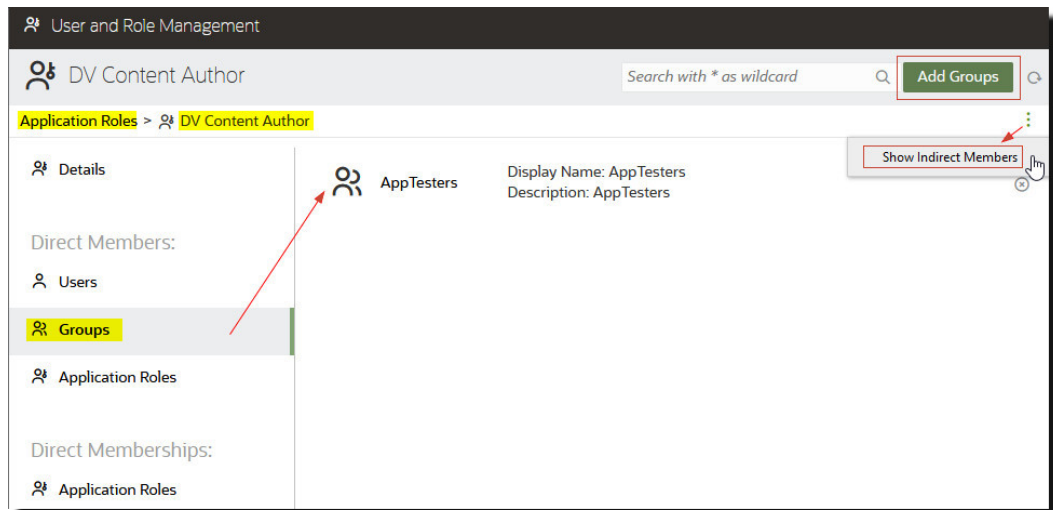
「グループ」ページには、Oracle Analytics Cloud インスタンスに関連付けられたアイデンティティ・ドメインからのユーザー・グループがリストされます。ベスト・プラクティスは、アプリケーション・ロールをユーザーではなくグループに割り当てることです。


1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「ユーザーとロール」をクリックします。
3. 「アプリケーション・ロール」をクリックします。

すべての事前定義済アプリケーション・ロールが、追加したアプリケーション・ロールとともに表示されます。

4. グループに割り当てるアプリケーション・ロールの名前を選択します。
5. 「直接メンバー」で、「グループ」をクリックして、このアプリケーション・ロールに現在割り当てられているグループを表示します。

たとえば、DV コンテンツ作成者アプリケーション・ロールに直接割り当てられる AppTesters と呼ばれるグループがあります。



6. アプリケーション・ロールに(直接的および間接的に)割り当てられているすべてのグループのリストを表示するには、メニュー・アイコンをクリックして「間接メンバーの表示」を選択します。
7. ユーザーの新規グループをアプリケーション・ロールに割り当てるには、「グループの追加」をクリックし、1つ以上のグループを選択し、次に「追加」をクリックします。
8. アプリケーション・ロールからグループを除去するには、グループの名前の横にある「削除」アイコンをクリックします。

独自のアプリケーション・ロールの追加

Oracle Analytics Cloud には、一連の事前定義済アプリケーション・ロールがあります。要件に応じたユーザー定義のアプリケーション・ロールを作成することもできます。たとえば、選択したグループのユーザーのみが特定のフォルダまたはワークブックを表示できるような

アプリケーション・ロールを作成できます。または、特定の権限が割り当てられたアプリケーション・ロールを作成することもできます。

次の2つの方法で、アプリケーション・ロールを作成できます:

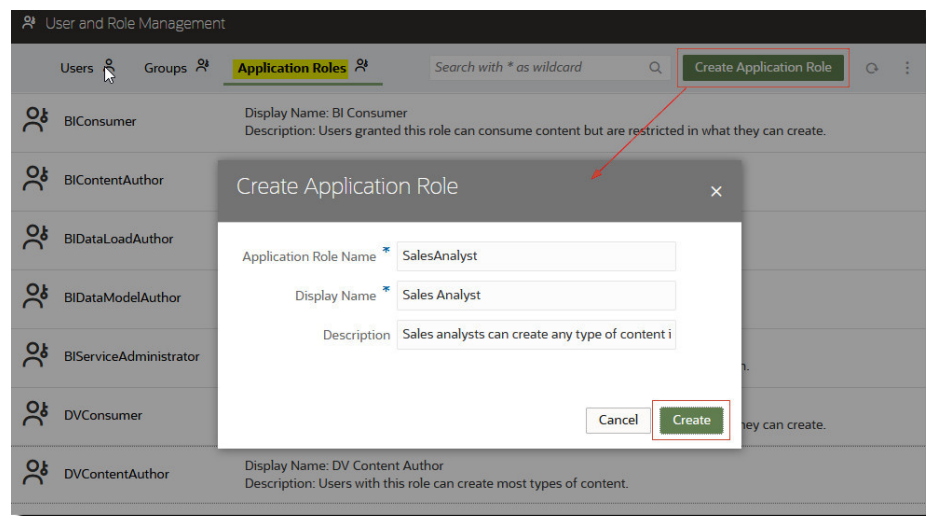
- アプリケーション・ロールを最初から作成(権限なし)。
- 事前定義済アプリケーション・ロールの1つと同じ権限を持つアプリケーション・ロールを作成。

アプリケーション・ロールを作成したら、権限を付与し、メンバー(ユーザー、グループまたは他のアプリケーション・ロール)を追加できます。

1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「ユーザーとロール」をクリックします。
3. 「アプリケーション・ロール」をクリックします。
4. 次のいずれかを行います:

アプリケーション・ロールを最初から作成(権限なし):

- 「アプリケーション・ロールの作成」をクリックします。



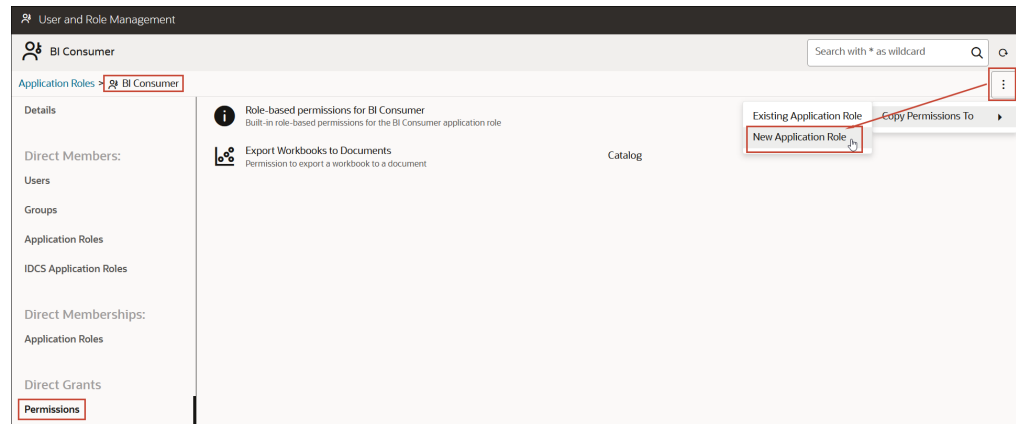
事前定義済アプリケーション・ロールからユーザー定義のアプリケーション・ロールへの権限のコピー:

ノート:

このステップでは、選択した事前定義済アプリケーション・ロールの権限付与をコピーします。アプリケーション・ロールのメンバーまたはメンバーシップはコピーしません。

- コピーするアプリケーション・ロールの名前をクリックします。たとえば、BIConsumer です。
- 「権限」をクリックします。

- アクション・メニューをクリックし、「**権限のコピー先**」、「**新規アプリケーション・ロール**」の順に選択します。



5. 「**アプリケーション・ロール名**」、「**表示名**」および「**説明**」に適切な値を入力します。
「**アプリケーション・ロール名**」には、英数字(ASCII または Unicode)とその他の印字可能文字(アンダースコアや大カッコなど)を含めることができます。「**アプリケーション・ロール名**」に空白を含めることはできません。
6. 「**作成**」をクリックします。
アプリケーション・ロールを最初から作成する場合、そのロールはメンバーや権限がない状態で開始します。事前定義済アプリケーション・ロールの 1 つから権限をコピーすると、アプリケーション・ロールはコピーしたロールと同じ権限で開始します。
7. アプリケーション・ロールに権限を付与します。
 - a. 「**直接付与**」で、「**権限**」を選択します。
 - b. 「**権限の追加**」をクリックします。
このオプションは、ユーザー定義のアプリケーション・ロールでのみ使用できます。
 - c. 1 つ以上の権限を選択し、「**追加**」をクリックします。
8. メンバー(ユーザー、グループまたはアプリケーション・ロール)を新しいアプリケーション・ロールに追加します。
 - a. 「**直接メンバー**」で、追加するメンバーのタイプを選択します: 「**ユーザー**」、「**グループ**」または「**アプリケーション・ロール**」。
 - b. 「**ユーザーの追加**」、「**グループの追加**」または「**アプリケーション・ロールの追加**」をクリックします。
 - c. 1 つ以上のメンバーを選択して、「**追加**」をクリックします。
9. オプション: 他のアプリケーション・ロール間の階層関係を作成します。
 - a. 「**直接メンバーシップ**」で、「**アプリケーション・ロールに追加**」をクリックします。
 - b. このアプリケーション・ロールで権限を継承するすべてのアプリケーション・ロールを選択し、「**追加**」をクリックします。

既存のユーザー定義のアプリケーション・ロールへの権限のコピー

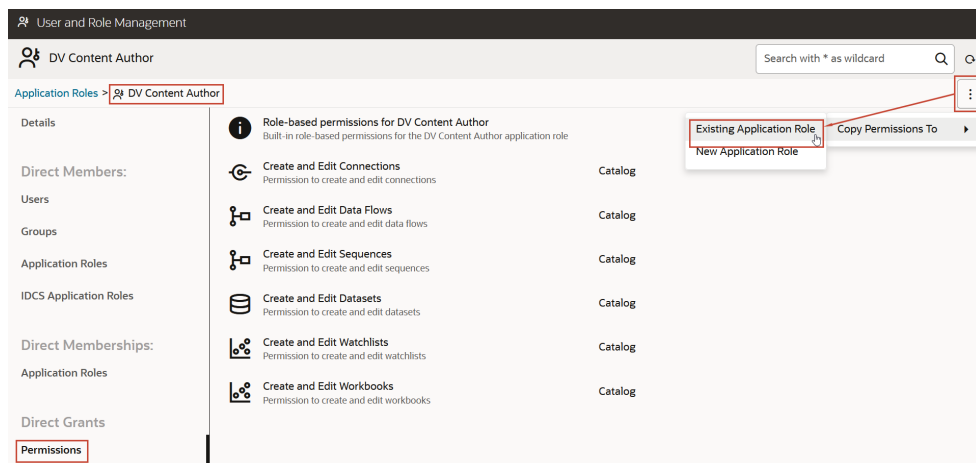
事前定義済アプリケーション・ロールに直接付与された権限を、ユーザー定義のアプリケーション・ロールにコピーできます。

権限を既存のロールにコピーした後、追加の権限を付与したり、コピーした権限を取り消すことができます。[アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し](#)を参照してください。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**ユーザーとロール**」をクリックします。
3. 「**アプリケーション・ロール**」をクリックします。
4. 事前定義済アプリケーション・ロールの名前をクリックします。

名前でもリストをフィルタするには、「**検索**」フィルタに名前の全体または一部を入力し、[Enter]キーを押します。名前の一部を入力したら、*をワイルド・カードとして使用します。検索では大/小文字は区別されず、名前と表示名の両方が検索されます。たとえば、*admin*と入力して、文字 admin を含むユーザーを検索できます。

5. 「**権限**」をクリックして、事前定義済アプリケーション・ロールに付与された権限を確認します。
6. アクション・メニューをクリックし、「**権限のコピー先**」、「**既存のアプリケーション・ロール**」の順に選択します。



7. 既存のアプリケーション・ロールを選択し、「**コピー**」をクリックします。

アプリケーション・ロールに付与された権限の表示

各ユーザー定義のアプリケーション・ロールに付与された権限と、事前定義済アプリケーション・ロールに付与された権限のリストは、「アプリケーション・ロール」ページから確認できます。

ユーザー定義のアプリケーション・ロールの権限は、表示、追加および削除できますが、各事前定義済アプリケーション・ロールには、変更できない固定の権限セットが含まれています。具体的には、各事前定義済アプリケーション・ロールには、個別にリストされていないロールベースの権限セットが組み込まれており、さらに、個別にリストされているが削除できない0個以上の通常の権限があります。たとえば、事前定義済アプリケーション・ロール **BI コンシューマ**には、組み込みでロールベースの権限に加えて、**ドキュメントへのワークブックのエクスポート**権限があります。

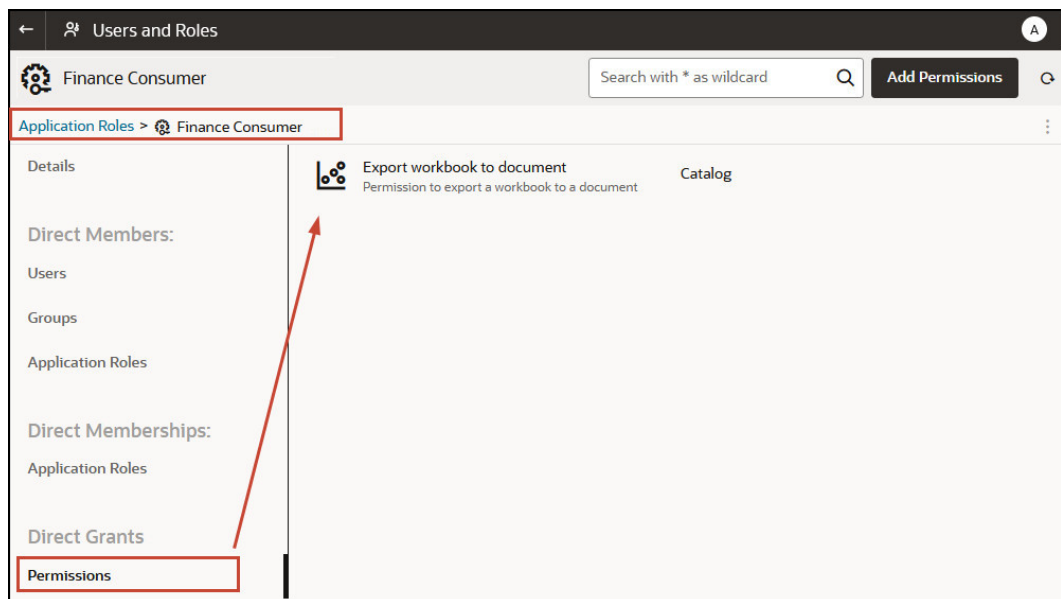
1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**ユーザーとロール**」をクリックします。
3. 「**アプリケーション・ロール**」をクリックします。
4. アプリケーション・ロールの名前をクリックします。

名前でもリストをフィルタするには、「**検索**」フィルタに名前の全体または一部を入力し、[Enter]キーを押します。名前の一部を入力したら、*をワイルド・カードとして使用します。検索では大小文字は区別されず、名前と表示名の両方が検索されます。たとえば、*admin*と入力して、文字 admin を含むアプリケーション・ロールを検索できます。

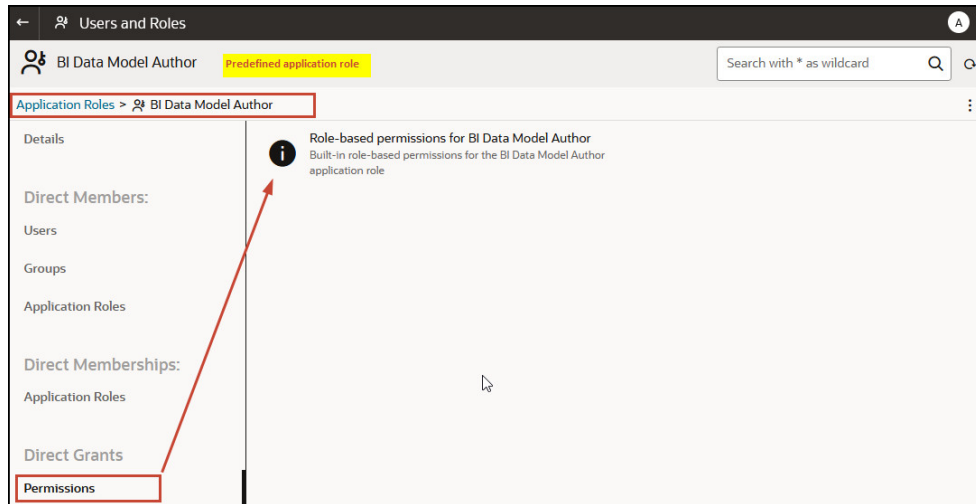
5. 「**権限**」をクリックして、アプリケーション・ロールに直接付与された権限のリストを確認します。

最初から作成したアプリケーション・ロールを選択すると、そのロールに付与された権限のリストが右側に表示されます。この例では、作成したアプリケーション・ロール(**財務コンシューマ**)に対して、1つの権限(**ドキュメントへのワークブックのエクスポート**)のみが付与されています。

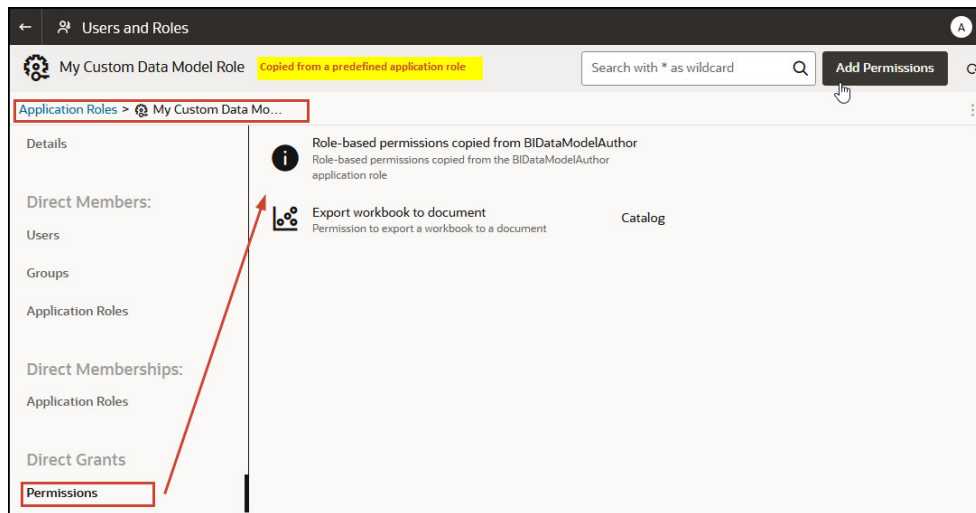
必要に応じて、権限を追加および削除できます。



BI データ・モデル作成者など、事前定義済アプリケーション・ロールの1つを選択すると、そのロールに組み込みでロールベースの権限セットが含まれていることを示すメッセージが表示されます。事前定義済アプリケーション・ロールに付与された権限は変更できません。



BI データ・モデル作成者など、事前定義済アプリケーション・ロールの1つからコピーされた権限を含むユーザー定義のアプリケーション・ロールを選択すると、そのロールに組み込みでロールベースの権限セット、さらに事前定義済アプリケーション・ロールに割り当てられた追加の権限、およびそのロールに付与した権限が含まれていることを示すメッセージが表示されます。

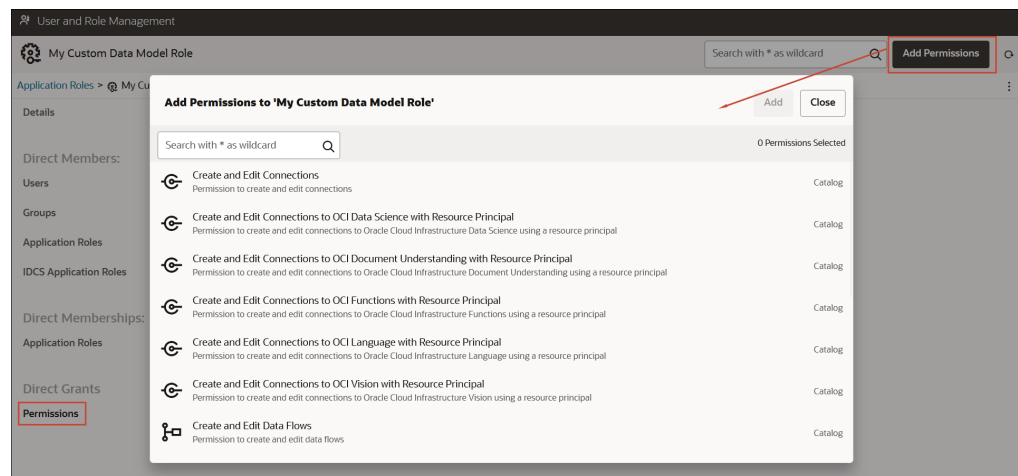


アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し

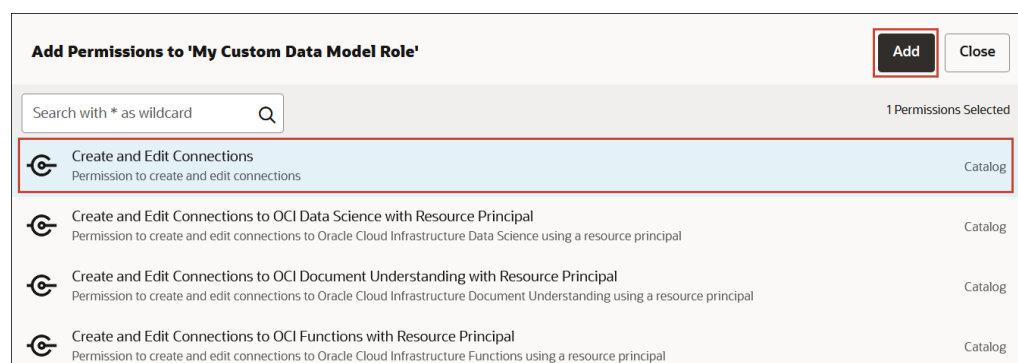
ユーザー定義のアプリケーション・ロールに個別の権限を付与したり、不要になった権限を取り消すことができます。たとえば、ドキュメントへのワークブックのエクスポート権限を付与することで、ユーザーがワークブックをPDFにエクスポートできるアプリケーション・ロールを提供します。

1. 「コンソール」をクリックします。

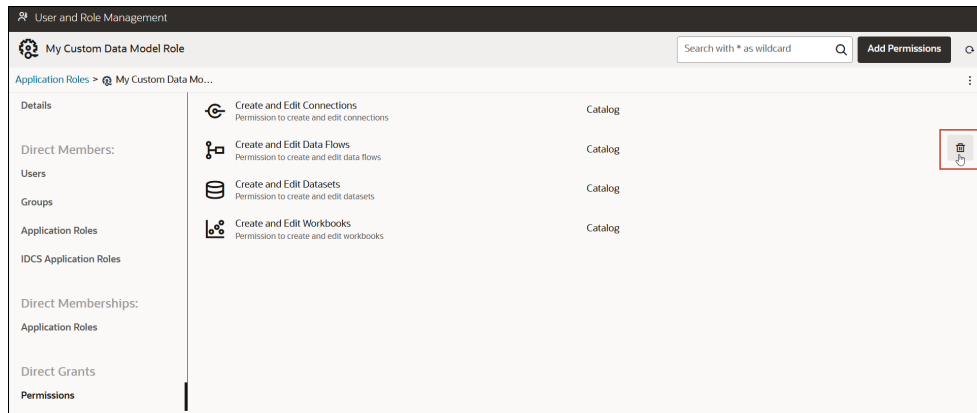
2. 「ユーザーとロール」をクリックします。
3. 「アプリケーション・ロール」をクリックします。
4. ユーザー定義のアプリケーション・ロールの名前をクリックします。
名前でもリストをフィルタするには、「検索」フィルタに名前の全体または一部を入力し、[Enter]キーを押します。名前の一部を入力したら、*をワイルド・カードとして使用します。検索では大小文字は区別されず、名前と表示名の両方が検索されます。たとえば、*admin*と入力して、文字 admin を含むユーザーを検索できます。
5. 「権限」をクリックして、ユーザー定義のアプリケーション・ロールに付与された権限を確認します。
6. ユーザー定義のアプリケーション・ロールに権限を付与するには
 - a. 「権限の追加」をクリックします。



- b. 必要な権限を選択し、「追加」をクリックします。




7. アプリケーション・ロールから権限を取り消すには
 - a. 取り消す権限に移動します。
 - b. 「権限の削除」アイコンをクリックします。
 - c. 確認するには、「削除」をクリックします。



アプリケーション・ロールの削除

必要がなくなったユーザー定義のアプリケーション・ロールを削除できます。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**ユーザーとロール**」をクリックします。
3. 「**アプリケーション・ロール**」をクリックします。
4. 削除するユーザー定義のアプリケーション・ロールに移動します。
5. 削除するアプリケーション・ロールの名前の横にある「**削除**」アイコン  をクリックして、次に「**削除**」をクリックして確認します。

1つの事前定義済アプリケーション・ロールを別に追加(上級)

Oracle Analytics Cloud には、BI サービス管理者、BI データ・モデル作成者、BI データロード作成者、BI コンテンツ作成者、DV コンテンツ作成者、DV コンシューマ、BI コンシューマなど複数の事前定義済ロールが用意されています。ごくわずかな上級者向けユースケースで、1つの事前定義済アプリケーション・ロールを別に**永続的に**含める場合があります。

事前定義済アプリケーション・ロールに加える変更は永続的であるため、確実に必要である場合以外、このタスクを実行しないでください。

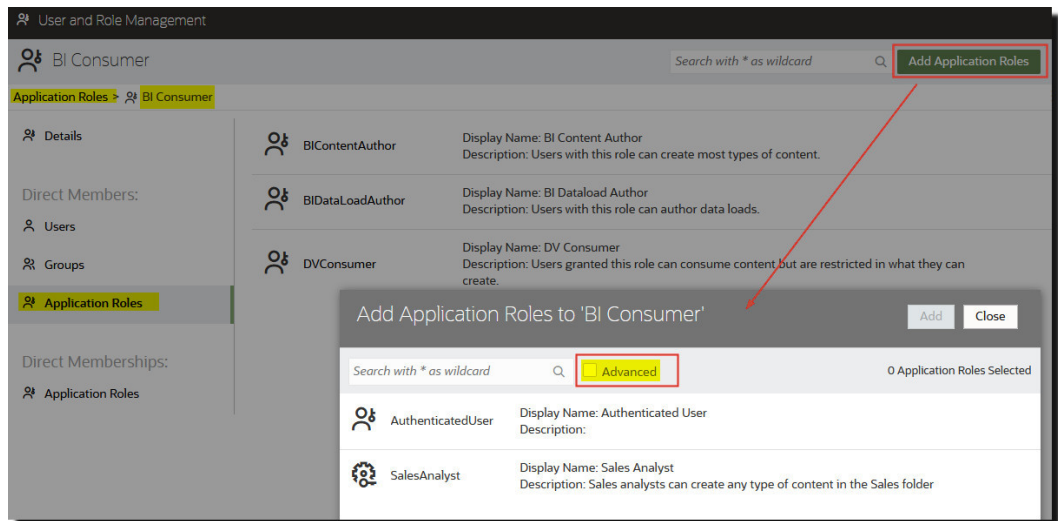
1. 事前定義済アプリケーション・ロールを変更する前に、システムのスナップショットを作成してください。

事前定義済アプリケーション・ロールの変更を元に戻す唯一の方法は、変更前で作成したスナップショットからサービスを復元することであるため、開始する前に、スナップショットを常に作成することをお勧めします。

- a. 「**コンソール**」をクリックします。
 - b. 「**スナップショット**」をクリックします。
 - c. 「**スナップショットの作成**」をクリックします。
2. コンソールで、「**ユーザーとロール**」をクリックします。

3. 「アプリケーション・ロール」をクリックします。
4. 変更する事前定義済アプリケーション・ロールの名前をクリックします。
5. 「直接メンバーで、「アプリケーション・ロール」をクリックして、選択したアプリケーション・ロールが現在メンバーであるアプリケーション・ロールを表示します。
6. 「アプリケーション・ロールの追加」をクリックします。

デフォルトでは、事前定義済アプリケーション・ロールは使用可能ではありません。



7. 事前定義済アプリケーション・ロールを追加するには、「拡張」をクリックします。

警告:

警告が表示されます。この情報を慎重に読んでから続行してください。ある事前定義済アプリケーション・ロールを別のものに追加すると、その変更は永続的になります。事前定義済アプリケーション・ロールの変更を元に戻す唯一の方法は、変更前に作成したスナップショットを復元することです。

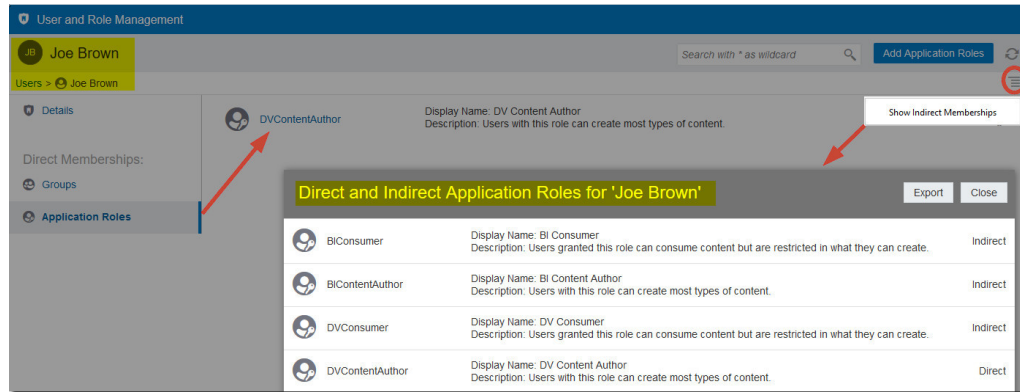
8. 「OK」をクリックして、スナップショットを作成して、選択した事前定義済アプリケーション・ロールを永続的に変更することを確認します。
9. リストからアプリケーション・ロールを1つ以上選択し、「追加」をクリックします。
10. スナップショットを作成して事前定義済アプリケーション・ロールを永続的に変更することを再確認するには、「OK」します。

詳細メンバーシップ・データの表示およびエクスポート

Oracle Analytics Cloud のそれぞれのアプリケーション・ロールは、直接メンバーを持つことができますが、1つ以上の間接メンバーまたはメンバーシップを持つ場合もあります。

たとえば、Joe Brown には、DV コンテンツ作成者のアプリケーション・ロールが付与されています。Joe は、DV コンテンツ作成者のロールの直接メンバーで、かつ BI コンシューマ、BI コンテンツ作成者、DV コンシューマの間接メンバーです。「ユーザーとロールの管理」ページで直接および間接メンバーシップの詳細を表示でき、この情報を CSV ファイルにエクス

ポートできます。



1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「ユーザーとロール」をクリックします。
3. ユーザーの直接および間接メンバーシップ・データを表示するには:
 - a. 「ユーザー」タブをクリックします。
 - b. メンバーシップの詳細を表示するユーザーの名前を選択します。
 - c. 「直接メンバーシップ」で、「アプリケーション・ロール」をクリックすると、選択したユーザーが直接割り当てられたすべてのアプリケーション・ロールのリストが表示されます。
 - d. メニュー・アイコンをクリックして、「間接メンバーシップの表示」を選択すると、このユーザーが直接および間接的に割り当てられたすべてのアプリケーション・ロールのリストが表示されます。
4. アプリケーション・ロールの直接および間接メンバーシップ・データを表示するには:
 - a. 「アプリケーション・ロール」タブをクリックします。
 - b. メンバーシップの詳細を表示するアプリケーション・ロールの名前を選択します。
 - c. 「直接メンバー」(または「直接メンバーシップ」)で、「ユーザー」、「グループ」または「アプリケーション・ロール」をクリックすると、選択したアプリケーション・ロールが直接メンバーである(または直接割り当てられた)すべてのユーザー、グループまたはアプリケーション・ロールのリストが表示されます。
 - d. メニュー・アイコンをクリックして、「間接メンバーの表示」(または「間接メンバーシップの表示」)を選択すると、このグループが直接および間接的にメンバーである(または割り当てられた)すべてのユーザー、グループまたはアプリケーション・ロールのリストが表示されます。
5. 直接と間接の両方のメンバーシップ・データを CSV ファイルにエクスポートするには、「エクスポート」をクリックします。

メンバーシップ・データのダウンロード

Oracle Analytics Cloud 内のユーザー、グループまたはアプリケーション・ロールの直接および間接メンバーのリストを表示した後、レポートをカンマ区切り値ファイル(.csv)にダウンロードできます。

1. **直接と間接のユーザー、グループまたはアプリケーション・ロール**のビューから、「**エクスポート**」をクリックします。
選択したユーザー、グループまたはアプリケーション・ロールの直接および間接メンバーは、RoleReport.csv というファイルにエクスポートされます。
2. 次のいずれかを行います:
 - 「**開く**」をクリックして、選択したアプリケーションで CSV ファイルを開きます。
 - 「**保存**」をクリックして、選択した場所に CSV ファイルを保存します。

サンプル・シナリオ: ユーザー定義のアプリケーション・ロール

次に、独自のアプリケーション・ロールを作成するための一般的なシナリオをいくつか示します。

トピック:

- ユーザーに対する PDF へのワークブックのエクスポートの許可
- BI コンシューマ・ロールを持つユーザーがワークブックを PDF にエクスポートできないようにする
- ユーザーに対するデータセットおよびワークブックの作成の許可
- DV コンテンツ作成者ロールを持つユーザーが特定のオブジェクト・タイプを作成または変更できないようにする

ユーザーに対する PDF へのワークブックのエクスポートの許可

Oracle Analytics で特定のアクションを実行する権限をユーザーに付与できます。たとえば、ドキュメントへのワークブックのエクスポート権限を含むアプリケーション・ロールを通じて、ユーザーがワークブックを PDF にエクスポートできるようにすることができます。

ノート:

事前定義済アプリケーション・ロール **BI コンシューマ**には、ドキュメントへのワークブックのエクスポート権限が含まれています。これは、**BI コンシューマ**のメンバーであるすべてのユーザーが(直接的または間接的に)この権限を自動的に持つことを意味します。

1. **ドキュメント・エクスポートの許可**という新しいアプリケーション・ロールを作成します(または同様の名前を使用します)。
[独自のアプリケーション・ロールの追加](#)を参照してください。
2. **ドキュメントへのワークブックのエクスポート**権限を追加します。
[アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し](#)を参照してください。
3. 新しいアプリケーション・ロール **ドキュメント・エクスポートの許可**をユーザーまたはグループに割り当てます。

ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当てまたはグループへのアプリケーション・ロールの割当てを参照してください。

4. **ドキュメント・エクスポートの許可**アプリケーション・ロールを持つユーザーに、1つ以上のワークブックへのアクセス権を付与します。

これらのユーザーは、ワークブックにアクセスし、コンテンツを PDF にエクスポートできます。

ワークブック権限の追加または更新を参照してください。

BI コンシューマ・ロールを持つユーザーがワークブックを PDF にエクスポートできないようにする

ユーザーが Oracle Analytics で特定のアクションを実行できないようにすることができます。たとえば、ドキュメントへのワークブックのエクスポート権限を削除することで、**BI コンシューマ・ロール**を持つユーザーがワークブックを PDF にエクスポートできないようにするアプリケーション・ロールを提供します。

1. **BI コンシューマ**アプリケーション・ロールをコピーし、コピーに **BI コンシューマ(エクスポートを防止)**という名前を付けます(または同様の名前を使用します)。
 - a. 「**新規アプリケーション・ロールへの権限のコピー**」オプションを使用して、**BI コンシューマ**と同じ権限セットを持つアプリケーション・ロールを作成します。
 - b. 新しいロールに適した名前および説明を指定します。たとえば、**BI コンシューマ(エクスポートを防止)**です。

独自のアプリケーション・ロールの追加を参照してください。

2. **ドキュメントへのワークブックのエクスポート**権限を削除します。
アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消しを参照してください。
3. 新しいアプリケーション・ロール **BI コンシューマ(エクスポートを防止)**をユーザーまたはグループに割り当てます。

ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当てまたはグループへのアプリケーション・ロールの割当てを参照してください。

4. 事前定義済アプリケーション・ロール **BI コンシューマ**をユーザーまたはグループから削除します。
5. **BI コンシューマ(エクスポートを防止)**アプリケーション・ロールを持つユーザーに、1つ以上のワークブックへのアクセス権、およびワークブックが保存されているフォルダへのアクセス権を付与します。

BI コンシューマ(エクスポートを防止)アプリケーション・ロールにワークブックへのアクセス権を付与する場合、ワークブックで使用されるデータセットへのアクセス権をカスケードするオプションを受け入れる必要があります。つまり、ワークブック権限への変更を保存するときに表示される「**関連アーティファクトの共有**」ダイアログで、「**関連アーティファクトを共有して、ワークブックを使用できるようにする**」オプションを選択します。ワークブック権限の追加または更新を参照してください。

これらのユーザーは、ワークブックにアクセスすることはできますが、コンテンツを PDF にエクスポートすることはできません。

ワークブック権限の追加または更新を参照してください。

ユーザーに対するデータセットおよびワークブックの作成の許可

Oracle Analytics で特定のアクションを実行する権限をユーザーに付与できます。たとえば、データセットの作成および編集権限とワークブックの作成および編集権限を含むアプリケーション・ロールを通じて、ユーザーがデータセットおよびワークブックを作成したり、データセットおよびワークブックにアクセスして変更できるようにすることができます。

ノート:

事前定義済アプリケーション・ロール **DV コンテンツ作成者**には、データセットの作成および編集権限とワークブックの作成および編集権限が含まれています。これは、**DV コンテンツ作成者**のメンバーであるすべてのユーザーが(直接的または間接的に)これらの権限を自動的に持つことを意味します。

1. **データセットおよびワークブックの作成の許可**という新しいアプリケーション・ロールを作成します(または同様の名前を使用します)。

[独自のアプリケーション・ロールの追加](#)を参照してください。

2. **データセットの作成および編集権限**と**ワークブックの作成および編集権限**を追加します。
[アプリケーション・ロールに対する権限の付与および取消し](#)を参照してください。

3. 新しいアプリケーション・ロール**データセットおよびワークブックの作成の許可**をユーザーまたはグループに割り当てます。

[ユーザーへのアプリケーション・ロールの割り当て](#)または[グループへのアプリケーション・ロールの割り当て](#)を参照してください。

4. **データセットおよびワークブックの作成の許可**アプリケーション・ロールを持つユーザーに、1つ以上のデータセットおよび1つ以上のワークブックへのアクセス権を付与します。

これらのユーザーは、データセットおよびワークブックにアクセスして編集し、データセットおよびワークブックを作成できます。

[ワークブック権限の追加または更新](#)を参照してください。

DV コンテンツ作成者ロールを持つユーザーが特定のオブジェクト・タイプを作成または変更できないようにする

ユーザーが Oracle Analytics で特定のアクションを実行できないようにすることができます。たとえば、**DV コンテンツ作成者**ロールを持つユーザーが接続、データ・フロー、順序、ウォッチリストを作成および変更できないようにするアプリケーション・ロールを提供します。

1. **DV コンテンツ作成者**アプリケーション・ロールをコピーし、コピーに**DV コンテンツ作成者(作成と変更を制限)**という名前を付けます(または同様の名前を使用します)。

- a. 「**新規アプリケーション・ロールへの権限のコピー**」オプションを使用して、**DV コンテンツ作成者**と同じ権限セットを持つアプリケーション・ロールを作成します。

- b. 新しいロールに適した名前および説明を指定します。たとえば、**DV コンテンツ作成者(作成と変更を制限)**です。

[独自のアプリケーション・ロールの追加](#)を参照してください。

2. 接続の作成および編集、データ・フローの作成および編集、順序の作成および編集およびウォッチリストの作成および編集権限を削除します。

アプリケーション・ルールに対する権限の付与および取消しを参照してください。

3. 新しいアプリケーション・ルール **DV コンテンツ作成者(作成と変更を制限)** をユーザーまたはグループに割り当てます。

ユーザーへのアプリケーション・ルールの割当てまたはグループへのアプリケーション・ルールの割当てを参照してください。

4. 事前定義済アプリケーション・ルール **DV コンテンツ作成者** をユーザーまたはグループから削除します。

5. **DV コンテンツ作成者(作成と変更を制限)** アプリケーション・ルールを持つユーザーに、1つ以上のワークブックとデータセットへのアクセス権、およびワークブックとデータセットが保存されているフォルダへのアクセス権を付与します。

DV コンテンツ作成者(作成と変更を制限) アプリケーション・ルールにワークブックへのアクセス権を付与する場合、ワークブックで使用されるアーティファクトへのアクセス権をカスケードするオプションを受け入れる必要があります。つまり、ワークブック権限への変更を保存するときに表示される「**関連アーティファクトの共有**」ダイアログで、「**関連アーティファクトを共有して、ワークブックを使用できるようにする**」オプションを選択します。ワークブック権限の追加または更新を参照してください。

これらのユーザーは、データセットとワークブックへのアクセス、作成および変更はできますが、接続、データ・フロー、順序およびウォッチリストの作成と変更はできません。

ワークブック権限の追加または更新を参照してください。

3

スナップショットの作成および復元

このトピックでは、スナップショットというファイルを使用してアプリケーション・コンテンツをバックアップおよび復元する方法について説明します。

📺 ビデオ

トピック:

- [スナップショットを作成および復元するための一般的なワークフロー](#)
- [スナップショットについて](#)
- [スナップショットの作成および情報の復元](#)
- [スナップショットのエクスポートおよびインポート](#)
- [スナップショットを使用した Oracle Analytics Cloud の移行](#)
- [REST API を使用したスナップショットの管理](#)

スナップショットを作成および復元するための一般的なワークフロー

ここでは、コンソールを使用し、スナップショットでコンテンツをバックアップおよび復元するための一般的なタスクを示します。

✎ ノート:

REST API を使用して、スナップショットを管理することもできます。Oracle Analytics Cloud コンソールの「スナップショット」ページには、コンソールを使用して作成したスナップショットがリストされます。REST API を使用して作成および登録したスナップショットは、「スナップショット」ページには表示されません。[REST API を使用したスナップショットの管理](#)を参照してください。

タスク	説明	詳細情報
スナップショットの作成	ある時点の環境のコンテンツおよび設定を取得します。	スナップショットの作成
定期的なスナップショット(バックアップ)のスケジュール	データの損失を最小限にするために、ビジネス継続性計画の一環として、定期的にスナップショットを取得します。	定期的なスナップショット(バックアップ)のスケジュール
スナップショットからの復元	以前の動作状態にシステムを復元します。	スナップショットからの復元
スナップショットの削除	不要なスナップショットを削除します。	スナップショットの削除

タスク	説明	詳細情報
スナップショットのダウンロード	スナップショットをローカル・ファイル・システムに保存します。	スナップショットのエクスポート
スナップショットのアップロード	ローカル・ファイル・システムに格納されたスナップショットのコンテンツをアップロードします。	スナップショットのインポート
スナップショットを使用したコンテンツの移行	コンテンツを別の環境に移行します。	スナップショットを使用した Oracle Analytics Cloud の移行

スナップショットについて

スナップショットはある特定の時点の環境の状態を取り込んだものです。スナップショットには、外部データ・ソースでホストされるデータは含まれていません。

バックアップと復元

何か問題が発生しても環境を復元できるように、ユーザーがシステムを開始する前と、その後一定の間隔で環境のスナップショットを作成します。スナップショットをローカル・ファイル・システムまたはクラウド・ストレージにエクスポートして保存しておき、コンテンツの復元が必要になったときにそれらをシステムにインポートにできます。ダウンロードするスナップショット・ファイルは、圧縮されたアーカイブ・ファイル(BAR ファイル)です。

オンラインで保持できるスナップショットは最大 **40** で、必要なだけオフライン・ストレージにエクスポートできます。スナップショットのエクスポートを参照してください。

Oracle Analytics Cloud では、ユーザーがセマンティック・モデルに変更を公開するとスナップショットが自動的に作成され、旧モデル・バージョンに戻す必要が予期せずに生じた場合に備えて、最新の **5** つのスナップショットを保持します。自動的にスナップショットが生成される最小間隔は、**1** 時間です。

ノート:

コンソールまたは REST API を使用して、スナップショットを作成および復元できます。コンソールの「スナップショット」ページには、コンソールを使用して作成したスナップショットがリストされます。[スナップショットの作成および情報の復元](#)を参照してください。REST API を使用して作成および登録したスナップショットは、「スナップショット」ページには表示されません。[REST API を使用したスナップショットの管理](#)を参照してください。

コンテンツ移行

スナップショットは、コンテンツを別の環境に移行する場合にも役立ちます。たとえば、次を行うとします:

- 開発環境またはテスト環境で作成したコンテンツを本番環境に移行します。
- 別の Oracle 製品で作成し、スナップショット(BAR ファイル)にエクスポートしたコンテンツを移行します。

複数の Oracle 製品から BAR ファイルを生成して移行できます。

- Oracle Analytics Cloud
- Oracle Analytics Server
- Oracle Business Intelligence Cloud Service
- Oracle Data Visualization Cloud Service
- Oracle BI Enterprise Edition

別の環境で作成したスナップショットをリストアする時:

- スナップショットは、ターゲット環境と同じバージョン(またはそれより前のバージョン)の環境で作成されている必要があります。
たとえば、2022年5月の更新を含む Oracle Analytics 環境のスナップショットを作成した場合、2022年5月以降の更新(2022年7月など)を含む他の Oracle Analytics 環境にそれをリストアできます。このスナップショットを、それより前の更新(2022年3月など)を含む Oracle Analytics 環境にリストアすることはできません。
- ターゲット環境でサポートされないカタログ・オブジェクトは移行されません。
- ほとんどの場合、データセットに関連付けられているデータをターゲット環境にアップロードする必要があります。

除外

スナップショットに含まれない項目がいくつかあります:

- データ・ファイル - データセットを作成するためにユーザーがアップロードする XLSX、XLS、CSV または TXT ファイル。実際のファイルではなくデータ・ファイルの参照を含めることができます。
- マップ・レイヤーと背景 - ビジュアライゼーションやレポートを拡張するためにユーザーがアップロードするカスタム・マップ・レイヤーおよびマップ背景。
- スナップショット・リスト - 「スナップショット」ページに表示されるスナップショットのリスト。

スナップショットの作成時のオプション

スナップショットを作成するとき、スナップショットに含めるコンテンツを選択します。環境全体のスナップショット(すべて)を作成したり、バックアップまたは移行する特定のコンテンツのみ(カスタム)を指定できます。

- **すべて** - 環境全体をスナップショットに保存します。このオプションは、次の場合に役立ちます:
 - 障害が発生した場合に、すべてをバックアップします。
 - 新しい環境にすべてを移行します。
 - 既存の環境をクローニングします。
- **カスタム** - スナップショットに保存するコンテンツを選択します。コンテンツ・タイプによって、常に含まれる場合と、オプションの場合があります。

スナップショット・オプション	説明	オプションか
データ	ユーザーが作成するデータ・ビジュアライゼーション・コンテンツ(「データ」タブ)。	
- データセット	データ・ビジュアライゼーションおよびデータ・フロー用にユーザーが作成するデータセット。	常に含む
- ファイルベース・データ	データセットを作成するためにユーザーがアップロードするファイルベース・データ。 例: スプレッドシートからアップロードされたデータ。このオプションはデータ・ファイルの参照をキャプチャしません。実際のデータ・ファイルはスナップショットには含まれません。	オプション
- 接続	ユーザーがデータをビジュアライゼーションに接続できるように作成するデータ接続。	常に含む
- データ・フロー	データ・ビジュアライゼーション用にユーザーが作成するデータ・フロー。	常に含む
- シーケンス	データ・ビジュアライゼーション用にユーザーが作成する順序。	常に含む
- データ・レプリケーション	データ・ビジュアライゼーション用にユーザーが作成するデータ・レプリケーション。	オプション
- セマンティック・モデルとサブジェクト領域	ユーザーが開発するセマンティック・モデル(SMML)とユーザーがデプロイする(RPDs)。	常に含む
機械学習	ユーザーがデータ・フローから作成する機械学習モデル。	常に含む
ジョブ	データ・フロー、順序、データ・レプリケーションおよびピクセルパーフェクト・レポートに対してユーザーがスケジューリングするジョブ。	オプション
プラグインと拡張機能	カスタム・ビジュアライゼーションおよびカスタム・マップを実装するためにユーザーがアップロードする拡張機能。	オプション
構成と設定	コンソールを使用して構成されたサービス構成と設定。 例: メール設定、データベース接続、安全ドメイン、データ接続構成など。 ノート: システム設定はスナップショットには含まれません。	オプション

スナップショット・オプション	説明	オプションか
Day By Day	自分用フィード、リマインダ、コメント、共有カードなどの Day by Day コンテンツ。	オプション
アプリケーション・ロール	<ul style="list-style-type: none"> - コンソールを使用して管理者が作成したユーザー定義のアプリケーション・ロール。 - 各アプリケーション・ロールのメンバーシップ詳細(ユーザー、グループ、各アプリケーション・ロールに割り当てられているその他のアプリケーション・ロール)。 	常に含む
資格証明	<ul style="list-style-type: none"> - データ接続: 資格証明およびホスト、ポート、ユーザー名、パスワードなどの他の接続パラメータ。資格証明を除外した場合は、スナップショットを復元した後に接続詳細を再構成する必要があります。 - クラウド・ストレージ: ユーザーがアップロードするファイルベースのデータが格納されているクラウド・ストレージにアクセスするために必要な資格証明。スナップショットにファイルベースのデータを含めるときに、コンテンツを別の環境に移行する予定である場合、ストレージの資格証明を含めます。資格証明を除外する場合、データ移行ユーティリティを使用して、データ・ファイルを個別にダウンロードしてからアップロードできます。 	オプション
クラシック・コンテンツ	Oracle Analytics Cloud にユーザーが作成するコンテンツ(ワークブック、分析、ダッシュボード、ピクセルパーフェクト・レポートなど)。	常に含む
- カタログ・コンテンツ	将来使用するためにユーザーが作成して保存するコンテンツが含まれたカタログ(ワークブック、分析、ダッシュボード、レポート、配信、エージェントなど)。	常に含む

スナップショット・オプション	説明	オプションか
- 共有フォルダ(ワークブックを含む)	共有されるコンテンツ、つまり、アクセス権がある全ユーザーが表示できるコンテンツ。 これには、共有フォルダに保存されたすべてのワークブックが含まれます。	常に含む
- ユーザー・フォルダとパーソナライズ(ワークブックを含む)	ユーザー・フォルダに保存されたコンテンツ。ユーザーが個人的に使用するために作成して保存するコンテンツ。 これには、ユーザーがプライベート・フォルダに保存したすべてのワークブックと、これらのワークブックに対して行ったすべてのパーソナライズが含まれます。	オプション

スナップショットの復元時のオプション

スナップショットからコンテンツを復元するとき、いくつかのオプションがあります。スナップショット内にあるコンテンツのみの復元、環境内のすべての復元、またはスナップショット内の特定の項目セットの復元(カスタム)を実行できます。

- **スナップショット・コンテンツのみの置換** - 環境でサポートされているスナップショット内のすべてのものが復元されます。スナップショットから除外されたコンテンツ・タイプは、変更されずに環境内に保持されます。
- **すべての置換** - スナップショット内の情報を使用して、環境全体を置換します。スナップショットから除外されたコンテンツ・タイプは、デフォルト状態(つまり、コンテンツなし)に復元されます。たとえば、スナップショットにジョブを含めないことにした場合、スナップショットを復元すると、システムに存在するジョブはすべて削除され、ジョブの機能はデフォルト設定で復元されます。例外として、スナップショットにファイルベース・データセット、プラグインまたは拡張機能を含めない場合、これらの項目は変更されずに保持されます。

このオプションは、次の場合に役立ちます:

- 障害が発生した後に、すべてを置換するとき。
- 別のサービスから移行するとき。
- 既存のサービスをクローニングするとき。
- **カスタム** - 復元するコンテンツを選択します。特定のコンテンツ・タイプを復元しない場合は、復元する前にそれらを除外します。
ほとんどの場合、復元に関するオプションは、スナップショット作成時のオプションと同じです。コンテンツ・タイプによって、常に復元される場合と、オプションの場合があります。

ノート:


スナップショットから **カタログ・コンテンツ** を復元する際、配信スケジュールは自動的に復元またはアクティブ化されません。このため、都合のよいときに、配信を復元してアクティブ化できます。[配信スケジュールの復元および有効化](#) を参照してください。

スナップショットに、環境でサポートされない項目が含まれている場合は、「この環境ではサポートされません。」というメッセージが表示されます。

別の製品で作成したスナップショットの復元

複数の Oracle 製品でスナップショットを作成できます: Oracle BI Enterprise Edition 12c、Oracle Analytics Cloud および Oracle Analytics Server。

• サポートされていないコンテンツ

ある製品でスナップショットを作成し、別の Oracle 製品でそれをリストアする場合、スナップショットに、ターゲット環境ではサポートされていない項目が含まれている場合があります。サポートされないコンテンツが **Oracle Analytics** によって検出された場合、「カスタム」ページに警告アイコンが表示され、リストアされないスナップショット内のサポートされない項目が強調表示されます。  **Not supported in this environment.**

たとえば、**Oracle Analytics Cloud** でスナップショットを作成し、データ・レプリケーション、ファイルベースのデータセット、プラグインおよび拡張機能をスナップショットに含めるとします。そのスナップショットを **Oracle Analytics Server** でリストアした場合、これらの項目が「サポートされていません」とマークされていることがわかります。**Oracle Analytics Server** では、データ・レプリケーション、ファイルベースのデータセット、プラグインおよび拡張機能を **Oracle Analytics Server** スナップショットに含めたり、他の製品で作成したスナップショットからインポートすることを許可していません。

スナップショットの作成および情報の復元

システムのスナップショットは、コンソールを使用していつでも作成できます。

トピック:

ノート:

REST API を使用して、スナップショットを管理することもできます。**Oracle Analytics Cloud** コンソールの「スナップショット」ページには、コンソールを使用して作成したスナップショットがリストされます。**REST API** を使用して作成および登録したスナップショットは、「スナップショット」ページには表示されません。[REST API を使用したスナップショットの管理](#) を参照してください。

- [スナップショットの作成](#)
- [スナップショットからの復元](#)
- [復元者、復元内容および復元時期のトラッキング](#)

- [スナップショットの説明の編集](#)
- [スナップショットの削除](#)
- [定期的なスナップショット\(バックアップ\)のスケジュール](#)

スナップショットの作成

管理者は、システムのスナップショットをいつでも作成できます。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. 「**スナップショットの作成**」をクリックします。
4. スナップショットを作成した理由を後で思い出すのに役立つように、スナップショットの短い説明を入力します。
たとえば、スナップショットの作成理由およびその内容です。
5. 含めるコンテンツとして、「**すべて**」または「**カスタム**」を選択します。
 - **すべて** - 環境に関するすべてをスナップショットに含めます。
 - **カスタム** - スナップショットに保存するコンテンツ・タイプのみを選択します。含めない項目の選択を解除します。
6. 「**作成**」をクリックします。

最新のコンテンツがスナップショットに保存されます。

スナップショットからの復元

何か問題が発生した場合は、スナップショットを使用してコンテンツを以前の作業状態に簡単に復元できます。また、環境間でコンテンツを移行する場合もスナップショットを復元します。

開始する前に、スナップショットのリストアに関するこれらのヒントをお読みください。


- スナップショットの復元を開始すると、現在サインインしているユーザーのセッションは終了します。
- スナップショットから復元した後、復元したコンテンツがリフレッシュするまで待機してください(たとえば、大規模なスナップショットの場合は約 15 分から 30 分)。
- スナップショットから **カタログ**・コンテンツを復元する際、配信スケジュールは自動的に復元またはアクティブ化されません。このため、都合のよいときに、配信を復元してアクティブ化できます。「[配信スケジュールの復元および有効化](#)」を参照してください。
- ターゲット環境と同じバージョン(またはそれより前のバージョン)で作成されたスナップショットを復元できます。たとえば、2022 年 5 月の更新を含む Oracle Analytics 環境のスナップショットを作成した場合、2022 年 5 月以降の更新(2022 年 7 月など)を含む他の Oracle Analytics 環境にそれをリストアできます。

Oracle Analytics のより新しい更新から取得したスナップショットからリストアしようとした場合、予期しない結果が発生することがあります。たとえば、2022 年

9月の更新を含む Oracle Analytics 環境のスナップショットを作成した場合は、より古い更新(2022年6月など)を含む Oracle Analytics 環境にこのスナップショットをリストアしないでください。

- 別の環境から作成したスナップショットを復元する場合は、ファイルベースのデータセットに関連付けられているデータをターゲット環境にアップロードする必要があります。
- コンソールまたは REST API を使用して、スナップショットを作成および復元できます。コンソールの「スナップショット」ページには、コンソールを使用して作成したスナップショットがリストされます。REST API を使用して作成および登録したスナップショットは、「スナップショット」ページには表示されません。REST API を使用したスナップショットの管理を参照してください。

スナップショットを復元するには:

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. システムの復元に使用するスナップショットを選択します。
4. 「**スナップショット・アクション**」  をクリックします。
5. システムをこのスナップショットが作成された時点の状態に戻すには、「**リストア**」をクリックします。
6. 「スナップショットのリストア」ダイアログで、復元する要素のみを選択します。

たとえば、本番前環境から作成したスナップショットを本番環境に復元する場合に、アプリケーション・ロールを含めないようにする場合があります。本番前のロールは通常、本番環境とはメンバーが異なります。その場合は、復元する前に、「**カスタム**」を選択し、「**アプリケーション・ロール**」の選択を解除します。

a. 必要な「**復元**」オプションを選択します。


- **スナップショット・コンテンツのみの置換** - スナップショットに含まれるすべてのコンテンツ・タイプ(説明フィールドにリストされる)をスナップショット内のコンテンツに置換します。
復元プロセスでは、ターゲットのコンテンツ・タイプ全体が置換されます。たとえば、ターゲットにワークブック A と B が含まれていて、スナップショットにワークブック A が含まれている場合、スナップショットの復元後、ターゲットに存在するのはワークブック A のみです。

ターゲットに存在する他のコンテンツ・タイプを置換または除去しない場合、すなわち、スナップショット内のコンテンツ・タイプのみを置換する場合に、このオプションを選択します。

- **すべての置換** - 既存のすべてのコンテンツを上書きします。既存のコンテンツを、このスナップショットに含まれるコンテンツ(説明フィールドにリストされる)に置換します。

スナップショットに含まれないコンテンツ・タイプ(ファイルベース・データセット、プラグインおよび拡張機能を除く)は削除され、デフォルト設定に復元されません。

- **カスタム** - 復元するコンテンツ・タイプのみを選択します。スナップショット内に保存されたコンテンツで復元したり、コンテンツがスナップショットから欠落している場合はデフォルト設定にコンテンツを復元できます。
 - スナップショット内に保存されたコンテンツは、説明フィールドにリストされます。

- スナップショットに含まれないコンテンツは、警告アイコン  でマークされます。このようなコンテンツをデフォルト設定で復元する場合は、警告アイコンでマークされたコンテンツのみを復元します。

すべてを復元しない場合は、保持するすべての項目の選択を解除します。

b. 「カスタム」を選択した場合は、復元する項目のみを選択します。

7. 監査のために、復元する理由を入力します。

復元理由を入力することをお勧めします。後で復元履歴を分析するとき、スナップショットを復元した理由を思い出すのにこの情報が役立ちます。

8. 「リストア」をクリックします。

スナップショットの復元は非常に破壊的な場合があるため、警告メッセージが表示されます。

9. 選択したスナップショットを復元する場合は「はい」をクリックし、復元を中止する場合は「いいえ」をクリックします。


10. 復元が完了するまで待機し、復元されたコンテンツがシステム全体でリフレッシュするためにさらに数分間待機します。

システムの復元にかかる時間は、スナップショットのサイズによって異なります。大きなスナップショットの場合、約 **15–30** 分まで許容されます。

11. サインアウトしてからサインインしなおして、復元されたコンテンツを表示し、新しく復元されたアプリケーション・ロールを継承します(ある場合)。


復元者、復元内容および復元時期のトラッキング

復元履歴を確認すると、復元されたコンテンツと復元時期を正確に調べることができ、復元プロセス中のエラーを確認できます。これは、スナップショットの復元中または復元後に問題が発生した場合に役立ちます。

1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「スナップショット」をクリックします。
3. 「ページ・メニュー」  をクリックし、「リストア履歴の表示」を選択します。


スナップショットの説明の編集

スナップショットに対する説明を追加または更新できます。

1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「スナップショット」をクリックします。
3. 編集するスナップショットを選択します。
4. **スナップショット・アクション**  をクリックします。
5. 「名前の編集」をクリックします。
6. 説明を更新し、「OK」をクリックします。

スナップショットの削除

不要なスナップショットは随時削除します。

1. 「コンソール」をクリックします。
2. 「スナップショット」をクリックします。
3. 削除するスナップショットを選択します。
4. **スナップショット・アクション**  をクリックします。
5. 「削除」をクリックして、スナップショットの削除を確認します。

定期的なスナップショット(バックアップ)のスケジュール

データの損失を最小限にするために、組織のビジネス継続性計画の一環として、定期的なスナップショットを取得する必要があります。コンテンツまたはサービスに問題が発生した場合は、最近スナップショットに保存したユーザー・コンテンツに戻すことができます。ユーザー・コンテンツとは、たとえば、レポート、ダッシュボード、データ・ビジュアライゼーション・ワークブック、ピクセルパーフェクト・レポート、データセット、データ・フロー、セマンティック・モデル、セキュリティ・ロール、システム設定などです。

頻度の高いバックアップ

スナップショットは、コンテンツまたは環境に大きな変更を加える前など、重要なチェックポイントで作成することをお勧めします。また、定期的な週次スナップショットを作成するか、環境の変更率やロールバック要件に基づいて独自に定義した頻度で作成することをお勧めします。オンラインで保持できるスナップショットは最大 40 で、必要なだけオフライン・ストレージ(ローカル・ファイル・システム、またはお客様ご自身の Oracle Cloud ストレージ)にエクスポートできます。[スナップショットの作成およびスナップショットのエクスポート](#)を参照してください。

Oracle Cloud へのバックアップの格納

オフライン・ストレージへのスナップショットの定期的なエクスポートを習慣付けることをお勧めします。サイズの大きなスナップショット(5GB を超えるものや、ご使用のブラウザのダウンロード制限を超えるもの)を定期的にエクスポートする場合は、Oracle Cloud にストレージ・バケットを設定し、スナップショットをクラウド・ストレージに保存することをお勧めします。この方法では、スナップショットをローカル・ファイル・システムにエクスポートする際に発生することがある、サイズ制限やタイムアウトが原因のエクスポート・エラーを回避できます。[スナップショット用の Oracle Cloud Storage Bucket バケットの設定](#)を参照してください。

REST API を使用した自動バックアップ

REST API を使用すると、Oracle Cloud ストレージでのスナップショットの作成、復元、管理をプログラムで実行できます。たとえば、定期的にバックアップ(スナップショット)を行うスクリプトを作成できます。[REST API を使用したスナップショットの管理](#)を参照してください。

ディザスタ・リカバリ

不測の障害が発生した場合、ビジネス継続性計画が適切に設計されていれば、可能なかぎり速やかに復旧し、Oracle Analytics Cloud ユーザーに継続してサービスを提供できます。スナ

ップショットの定期的な取得は、ユーザーの混乱を最小限にとどめるために役立つ方法の1つです。

受動バックアップ Oracle Analytics Cloud 環境を別のリージョンにデプロイして、リージョン全体のイベントのリスクを緩和することも可能です。詳細およびベスト・プラクティスは、「[Oracle Analytics Cloud のディザスタ・リカバリ構成](#)」を参照してください。

スナップショットのエクスポートおよびインポート

スナップショットをローカル・ファイル・システムまたはクラウド・ストレージに保存して、クラウドに再びアップロードできます。スナップショットをエクスポートおよびインポートすると、コンテンツのバックアップと復元や、開発環境、テスト環境および本番環境間でのコンテンツの移行を行えるようになります。

トピック:

- [スナップショットのエクスポート](#)
- [スナップショットのインポート](#)

スナップショットのエクスポート

スナップショットをローカル・ファイル・システムまたは Oracle Cloud Infrastructure のストレージ・バケットに保存するには、「エクスポート」オプションを使用します。エクスポートにより、システムで取得されるスナップショットを保存して管理できます。

スナップショットはアーカイブ・ファイル(.bar)としてエクスポートされます。スナップショットのエクスポートにかかる時間は、.bar ファイルのサイズによって異なります。

ノート:

サイズの大きなスナップショット(5GB を超えるものや、ご使用のブラウザのダウンロード制限を超えるもの)を定期的にエクスポートする場合は、Oracle Cloud Infrastructure にストレージ・バケットを設定し、スナップショットをクラウド・ストレージに保存する必要があります。この方法では、サイズの大きなスナップショットをローカル・ファイル・システムに保存する際に発生することがある、サイズ制限やタイムアウトが原因のエクスポート・エラーを回避できます。スナップショット用の Oracle Cloud Storage Bucket バケットの設定を参照してください。

スナップショットをまだ作成していない場合は、最初に作成する必要があります。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. エクスポートするスナップショットを選択します。

4. 「スナップショット・アクション」 をクリックします。
5. 「エクスポート」 をクリックします。
6. スナップショットのエクスポート先を選択します。
 - **ローカル・ファイル・ストレージ**: スナップショットをブラウザのダウンロード・フォルダにエクスポートします。
 - **Oracle Cloud ストレージ**: スナップショットを Oracle Cloud Infrastructure の既存のストレージ・バケットにエクスポートします。「**ストレージの詳細**」 をクリックして、ストレージ・バケットの接続の詳細を指定します。ストレージ・バケットを作成する必要がある場合は、[スナップショット用の Oracle Cloud Storage Bucket バケットの設定](#)を参照してください。
7. **Oracle Cloud ストレージ**を選択した場合は、接続の詳細、スナップショットの名前、および使用するフォルダを指定します。
 - a. 「**ストレージ・コンテナの詳細**」 で、スナップショットのストレージ・バケットを、Oracle Cloud Infrastructure Object Storage のバケットにアクセスするために必要なセキュリティ・キーおよび Oracle Cloud ID (OCID)とともに指定し、「**次**」 をクリックします。

この情報を生成または取得するには、Oracle Cloud Infrastructure コンソールにアクセスする必要があります。アクセス権限がない場合は、管理者に連絡してください。

- **バケット名**: バケットの名前。たとえば、My_OAC_Snapshot_StorageBucket などです
- **OCI リージョン**: バケットが配置されているリージョンのリージョン識別子。たとえば、us-phoenix-1 などです
- **OCI テナンス ID**: バケットをホストしているテナンスの OCID。
たとえば、ocid1.tenancy.oc1..*<unique_ID>*などです
[テナンスの OCID を取得する場所](#)を参照してください。
- **OCI ユーザー ID**: バケットへのアクセスに必要な署名キー・ペアを作成し、アップロードしたユーザーの OCID。
たとえば、ocid1.user.oc1..*<unique_ID>*などです
[ユーザーの OCID を取得する場所](#)を参照してください。「[公開キーをアップロードする方法](#)」も参照してください。
- **キー・フィンガープリント**: バケットにアクセスするために必要な秘密キーのフィンガープリント。
フィンガープリントは次のようになります:
99:34:56:78:90:ab:cd:ef:12:34:56:78:90:ab:cd:ef
[キーのフィンガープリントを取得する方法](#)を参照してください。
- **秘密キー**: PEM 形式のユーザーの秘密キー・ファイルの名前と場所。
たとえば、oci_private_key.pem などです
[署名キーを生成する方法](#)を参照してください。
- b. オプション: 「スナップショットに名前を付けて保存」で、「**ファイル名**」フィールドを使用して、スナップショットの.bar ファイルの名前を変更するか、スナップショット用に別のフォルダを選択します。

デフォルトでは、スナップショットはバケットのルート・フォルダに保存され、<timestamp>.bar という名前が付けられます。たとえば、20210824140137.bar などです。

- 別の名前を使用するには、「**ファイル名**」フィールドにスナップショットの新しい名前を入力します。たとえば、24August2021.bar などです
- 特定のフォルダを選択するには、必要なフォルダに移動するか、「**ファイル名**」フィールドにフォルダ名を入力します。たとえば、MyDaily_Snapshots/August/24August2021.bar などです

「**データのリフレッシュ**」アイコンをクリックすると、デフォルトのファイル名と場所に戻ります。

ノート:

「**スナップショットに名前を付けて保存**」ダイアログでは、ストレージ・バケット内のすべてのファイルおよびフォルダが表示されるわけではありません。スナップショット(BAR ファイル)と、スナップショットを含むフォルダのみが表示されます。

- c. 「**OK**」をクリックして、この名前と場所でスナップショットを保存することを確認します。
8. 「**スナップショットのパスワード**」で、スナップショットのパスワードを入力して確認します。

パスワードの長さは 8 から 50 文字とし、数字、大文字および小文字をそれぞれ 1 文字以上含める必要があります。

このパスワードを忘れないでください。このパスワードは、将来ファイルをインポートするときに必要になります。たとえば、スナップショットに保存されているコンテンツを復元または移行する場合です。

9. 「**エクスポート**」をクリックします。

エクスポートにかかる時間は、ファイルのサイズによって異なります。

スナップショットのインポート

以前にローカル・ファイル・システムまたは Oracle Cloud Infrastructure のストレージ・バケットに保存したスナップショットをインポートできます。スナップショットのインポートにかかる時間は、スナップショットの .bar ファイルのサイズによって異なります。

スナップショットをインポートすると、ファイル自体はシステムにアップロードされますが、スナップショット内に格納されたアーティファクトはご使用の環境ですぐに使用可能になりません。インポートしたスナップショットは、スナップショット・リストに表示されます。これを実行する準備ができれば、スナップショットを復元することによって、カタログなどの現在のアーティファクトを上書きできます。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。

3. ページ・アクション・メニュー  をクリックし、「スナップショットのインポート」を選択します。
4. スナップショットのインポート元を選択します。
 - **ローカル・ファイル・ストレージ**: スナップショットをローカル・ファイル・システムからインポートします。
 - **Oracle Cloud ストレージ**: Oracle Cloud Infrastructure のストレージ・バケットにあるスナップショットをインポートします。「**ストレージの詳細**」をクリックして、ストレージ・バケットの接続の詳細を指定します。
5. **ローカル・ファイル・ストレージ**を選択した場合は、「**選択**」をクリックして、アップロードするスナップショットを見つけます。

スナップショットを含むスナップショット・ファイル(.bar)を選択します。Oracle Analytics Cloud、Oracle Analytics Server、Oracle Business Intelligence Cloud Service、Oracle Data Visualization Cloud Service および Oracle BI Enterprise Edition 12c から取得したスナップショットをアップロードできます。

6. **Oracle Cloud ストレージ**を選択した場合は、接続の詳細を指定し、インポートするスナップショットを選択します。
 - a. 「**ストレージ・コンテナの詳細**」で、スナップショットを含むストレージ・バケットを、Oracle Cloud Infrastructure Object Storage のバケットにアクセスするために必要なセキュリティ・キーおよび Oracle Cloud ID (OCID)とともに指定し、「**次**」をクリックします。

この情報を取得するには、Oracle Cloud Infrastructure コンソールにアクセスする必要があります。アクセス権限がない場合は、管理者に連絡してください。

- **バケット名**: バケットの名前。たとえば、My_OAC_Snapshot_StorageBucket などです
- **OCI リージョン**: バケットが配置されているリージョンのリージョン識別子。たとえば、us-phoenix-1 などです
- **OCI テナンス ID**: バケットをホストしているテナンスの OCID。
たとえば、ocid1.tenancy.oc1..<unique_ID>などです
[テナンスの OCID を取得する場所](#)を参照してください。
- **OCI ユーザー ID**: バケットへのアクセスに必要な署名キー・ペアを作成し、アップロードしたユーザーの OCID。
たとえば、ocid1.user.oc1..<unique_ID>などです
[ユーザーの OCID を取得する場所](#)を参照してください。[公開キーをアップロードする方法](#)も参照してください。
- **キー・フィンガープリント**: バケットにアクセスするために必要な秘密キーのフィンガープリント。
フィンガープリントは次のようになります:
99:34:56:78:90:ab:cd:ef:12:34:56:78:90:ab:cd:ef
[キーのフィンガープリントを取得する方法](#)を参照してください。
- **秘密キー**: PEM 形式のユーザーの秘密キー・ファイルの名前と場所。
たとえば、oci_private_key.pem などです
[署名キーを生成する方法](#)を参照してください。

- b. 「スナップショットの選択」で、インポートするスナップショットに移動します。

または、「**ファイル名**」フィールドにスナップショットのフォルダ・パスと名前を入力します。たとえば、MyDaily_Snapshots/August/24August2021.bar などです

「**データのリフレッシュ**」アイコンをクリックすると、選択内容がクリアされ、再度やり直すことができます。

 **ノート:**

「**スナップショットの選択**」ダイアログでは、ストレージ・バケット内のすべてのファイルおよびフォルダが表示されるわけではありません。スナップショット(BAR ファイル)と、スナップショットを含むフォルダのみが表示されます。

- c. 「**OK**」をクリックして、選択したスナップショットをインポートすることを確認します。
7. スナップショットのパスワードを入力します。
これは、ローカル・ファイル・システムまたはクラウド・ストレージにスナップショットをエクスポートするたびに指定するパスワードです。
8. 「**インポート**」をクリックします。

スナップショット用の Oracle Cloud Storage Bucket バケットの設定

Oracle Analytics Cloud のスナップショットを Oracle Cloud に保存する場合、ユーザー(または管理者)はいくつかの設定ステップを完了する必要があります。使用する予定のストレージ・バケットを作成し、自分(または別のユーザー)が Oracle Analytics Cloud からバケットにアクセスすることを許可する API 署名キーを生成する必要があります。

1. Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、バケットを作成して接続する権限を持つユーザーを IAM に作成します。

ユーザーが存在する場合は、このステップをスキップできます。[ユーザーの追加](#)を参照してください。

2. このユーザーの API 署名キー・ペアを生成します。

[API 署名キーを生成する方法](#)を参照してください。

コンソールを使用して API 署名キー・ペアを追加すると、次の情報を含む構成ファイルのプレビュー・スニペットが生成されます。

- user - キー・ペアが追加されるユーザーの OCID。
- fingerprint - 追加されたばかりのキーのフィンガープリント。
- tenancy - テナンスの OCID。
- region - コンソールで現在選択されているリージョン。

- `key_file`- ダウンロードした秘密キー・ファイルへのパス。この値は、秘密キー・ファイルを保存したファイル・システム上のパスに更新する必要があります。
3. スニペットに表示されている情報をメモします。Oracle Analytics Cloud から Oracle Cloud ストレージにスナップショットをエクスポートする(または Oracle Cloud に保存されているスナップショットをインポートする)場合、次を指定するよう求められます:

OCI ユーザー ID: user

キー・フィンガープリント: fingerprint

秘密キー: key_file

OCI テナンス ID: tenancy

OCI リージョン: region

4. スナップショット用のストレージ・バケットを作成します。

バケットが存在する場合は、このステップをスキップできます。[バケットの作成](#)を参照してください。

署名キーを作成したユーザーは、ストレージ・バケットへの読取り/書込みアクセス権を持っている必要があります。特に、このユーザーには、スナップショットが格納されるストレージ・バケットに対する次の権限が必要です:

- OBJECT_CREATE
- OBJECT_OVERWRITE

スナップショットを使用した Oracle Analytics Cloud の移行

ダウンロードおよびアップロード機能を使用すると、スナップショットをローカル・ファイル・システムに保存して、クラウドに再びアップロードできます。これらの機能を使用して、2つの異なるサービス間でコンテンツを移行し、開発、テスト、本番環境間で移行し、Oracle Cloud Infrastructure Classic でデプロイしたサービスを Oracle Cloud Infrastructure に移行します。

トピック:

- [Oracle Analytics Cloud の移行について](#)
- [Oracle Analytics Cloud への移行の一般的なワークフロー](#)
- [ファイルベース・データの移行](#)

Oracle Analytics Cloud の移行について

コンテンツと設定は、スナップショットを使用して1つの Oracle Analytics Cloud 環境から別の環境に簡単に移行できます。すべてのものを移行したり、特定タイプのコンテンツを移行できます。

移行の前提条件

スナップショットを使用してユーザー・コンテンツを移行する前に、ソース環境とターゲット環境を検証します。

- ソース環境とターゲット環境の両方で **Oracle Analytics Cloud 5.1.x** 以降が使用されていることを確認します。以前のバージョンから作成したスナップショットでは、環境全体を取得できません。
よくわからない場合、オラクル社の担当に問い合わせてください。
- まだ **Oracle Cloud Infrastructure** 上でターゲット・サービスを作成していない場合は、作成します。
Oracle Cloud Infrastructure での **Oracle Analytics Cloud の管理(Gen 2)**の **Oracle Analytics Cloud** によるサービスの作成に関する項を参照してください。
- ファイルベースのデータを移行する必要がある場合は、ソース環境とターゲット環境が稼働中であり、有効なストレージ資格証明を使用して構成されていることを確認します。
ストレージ・アクセスの問題によって、スナップショットを使用してデータ・ファイルを移行できない場合があります。そのような場合は、データ移行ユーティリティを使用して、別々にデータ・ファイルをダウンロードしてからアップロードできます。

移行されない項目

一部の **Oracle Analytics Cloud** アーティファクトはスナップショットに含まれていません。**Oracle Analytics Cloud** 以外のアーティファクトも含まれていません。

移行されない項目	詳細情報
ウイルス・スキャナ構成	ソース環境で使用されているウイルス・スキャナ構成を記録し、同じ情報を使用してウイルス・スキャナをターゲット環境に構成します。 ウイルス・スキャナの構成 を参照してください。
メール・サーバー構成	ソース環境で使用されている SMTP メール・サーバー構成を記録し、その情報を使用してメール・サーバーをターゲットに構成します。 レポート配信のための電子メール・サーバーの設定 を参照してください。
ソース環境のその他の保存済スナップショット	必要に応じて、移行する個々のスナップショットをダウンロードし、ターゲットにアップロードします。 スナップショットのインポート を参照してください。

移行されない項目	詳細情報
ユーザー(およびグループ)	<p>Oracle Cloud Infrastructure Identity and Access Management (IAM)アイデンティティ・ドメインからの移行</p> <p>Oracle Cloud Infrastructure コンソールのエクスポートおよびインポート機能を使用して、アイデンティティ・ドメイン間でユーザーおよびグループを移行します。Oracle Cloud Infrastructure ドキュメントの データの転送 を参照してください。</p> <p>Oracle Identity Cloud Service からの移行</p> <p>Oracle Identity Cloud Service コンソールのエクスポートおよびインポート機能を使用して、アイデンティティ・ドメイン間でユーザーおよびグループを移行します。Oracle Identity Cloud Service ユーザーの管理および Oracle Identity Cloud Service グループの管理を参照してください。</p> <p>組込み WebLogic LDAP Server からの移行</p> <p>スクリプト <code>wls_ldap_csv_exporter</code> を使用して、ターゲット Oracle Identity Cloud Service にインポートできる CSV ファイルにユーザーおよびグループをエクスポートします。組込み WebLogic LDAP Server からのユーザーおよびグループのエクスポートを参照してください。</p>
アイデンティティ 管理構成	ターゲット環境で Oracle Cloud Infrastructure コンソールを使用して、ソース環境で構成したユーザー(またはグループ)アプリケーション・ロール割当てを再構成し、シングル・サインオン(SSO)などを再構成します。
ネットワーク構成	必要に応じて、ターゲット環境にネットワーク要件を設定します。

Oracle Analytics Cloud への移行の一般的なワークフロー

スナップショットを使用して、Oracle Analytics Cloud を他の環境に移行します。次に、必要な作業を示します。

タスク	説明	詳細情報
スナップショットを使用した移行方法の理解	スナップショットで移行できる内容と移行できない内容、および前提条件を理解します。	Oracle Analytics Cloud の移行について
ターゲット・サービスの作成	Oracle Cloud Infrastructure に新しいサービスをデプロイするには、Oracle Cloud Infrastructure コンソールを使用します。	Oracle Analytics Cloud によるサービスの作成

タスク	説明	詳細情報
ユーザーおよびグループの移行	<p>Oracle Cloud Infrastructure コンソールのエクスポートおよびインポート機能を使用して、アイデンティティ・ドメイン間でユーザーおよびグループを移行します。Oracle Analytics Cloud のユーザーを移行する方法は、アイデンティティ・ドメインが自分のクラウド・アカウントで使用可能かどうかによって異なります。不明な場合、ユーザーおよびグループの設定についてを参照してください。</p> <p>ソース・システムでアイデンティティ 管理に組み込み WebLogic LDAP Server を使用している場合は、wls_ldap_csv_exporter スクリプトを使用して、ユーザーおよびグループを CSV ファイルにエクスポートします。</p>	<p>データの転送(IAM ユーザー)</p> <p>Oracle Identity Cloud Service ユーザーの管理</p> <p>組み込み WebLogic LDAP Server からのユーザーおよびグループのエクスポート</p>
ソースでのスナップショットの作成	移行するコンテンツをソース・システムで取得します。	スナップショットの作成
スナップショットのエクスポート	ローカル・ファイル・システムまたは Oracle Cloud Infrastructure のストレージ・バケットに移行するスナップショットをダウンロードします。	スナップショットのエクスポート
ターゲットへのスナップショットのアップロード	ターゲット・システムにサインインし、スナップショットをアップロードします。	スナップショットのインポート
スナップショット・コンテンツの復元	保存済スナップショットのリストから新しくアップロードしたスナップショットを選択し、スナップショットのコンテンツを復元します。	スナップショットからの復元
データ・ファイルの移行	<p>データ移行ユーティリティを使用して、データ・ファイルを環境間で移行します。</p> <p>次の場合のみ必要です:</p> <ul style="list-style-type: none"> 別のリージョンに移行する。 Gen 1 の Oracle Analytics Cloud または Oracle Cloud Infrastructure Classic から Gen 2 の Oracle Analytics Cloud に移行する。 復元プロセスが、ネットワーク接続またはストレージ・アクセスの問題により失敗した。 	ファイルベース・データの移行
ウィルス・スキャナの再構成	ソース環境のウィルス・スキャナ構成を記録し、それを使用してウィルス・スキャナをターゲット環境に構成します。	ウィルス・スキャナの構成
メール・サーバーの再構成	ソース環境の SMTP メーター・サーバー構成を記録し、それを使用してメーター・サーバーをターゲット環境に構成します。	レポート配信のための電子メール・サーバーの設定
(オプション)他のスナップショットの移行	必要に応じて、移行する個々のスナップショットをダウンロードし、ターゲット環境にアップロードします。	<p>スナップショットのエクスポート</p> <p>スナップショットのインポート</p>

タスク	説明	詳細情報
アイデンティティ管理構成の移行	ターゲット環境で Oracle Cloud Infrastructure コンソールを使用して、ソース環境で構成したユーザー(またはグループ)アプリケーション・ロール割当てを再構成し、シングル・サインオン(SSO)などを再構成します。	

ファイルベース・データの移行

ユーザーは、スプレッドシートなどのデータ・ファイルを **Oracle Analytics Cloud** にアップロードしてデータセットを作成します。新しい **Oracle Analytics Cloud** 環境に移行するとき、このファイルベースのデータを取得できます。場合によっては、ネットワークの接続性またはストレージ・アクセスの問題により、スナップショットのデータ・ファイルを移行できないことがあります。そのような場合のために、**Oracle Analytics Cloud** には、新しい場所へのデータ・ファイルの移動を可能にする **CLI ユーティリティ** (コマンドライン・インタフェース)が用意されています。スナップショット **CLI ユーティリティ** で、データ・ビジュアライゼーション用にユーザーがアップロードする可能性のあるマップ関連のプラグインおよび拡張ファイルも移行されます。

データ・ファイルを含むスナップショットを復元するときに、Restore succeeded with errors - data restore failed(または類似の)メッセージが表示された場合に、データ移行 **CLI ユーティリティ** を実行します。これは、次の場合に発生します:

- コンテンツを別のリージョンから移行する。
- **Gen 1** の **Oracle Analytics Cloud** または **Oracle Cloud Infrastructure Classic** から **Gen 2** の **Oracle Analytics Cloud** にコンテンツを移行する。
- 復元プロセスが、一部のその他のネットワーク接続またはストレージ・アクセスの問題により失敗した。

CLI ユーティリティ を使用すると、1回のステップでデータ・ファイルを環境間で移行できます。または、2回のステップで、ファイルベース・データを **ZIP** ファイルにダウンロードし、選択した環境にデータ・ファイルをアップロードすることもできます。

1. 環境の詳細を確認します。

- ソースとターゲットの両方のシステムで、**Oracle Analytics Cloud 5.3** 以降を使用していることを確認します。以前のバージョンでは **CLI ユーティリティ** を使用できません。
よくわからない場合、オラクル社の担当に問い合わせてください。
- ソースとターゲットの両方のシステムが稼働中であり、**Oracle Analytics Cloud** が有効なストレージ資格証明を使用して構成されていることを確認します。
- ローカル環境を確認します。**CLI ユーティリティ** を実行するには、**Java 1.8** 以上が必要です。
- **CLI ユーティリティ** を実行する予定のローカル環境から、ソース環境およびターゲットの **Oracle Analytics Cloud** にアクセスできることを確認します。
- ファイルベースのデータが含まれている、以前にダウンロードしたスナップショットの名前および場所を確認します。たとえば、/tmp/20190307095216.bar などです。

2. **CLI ユーティリティ** をダウンロードします。

- a. ターゲットの Oracle Analytics Cloud で、「コンソール」、「スナップショット」の順にクリックします。
- b. 「ページ・メニュー」 をクリックし、「移行」、「データ移行ユーティリティのダウンロード」の順に選択します。
指示に従って migrate-oac-data.zip ファイルをローカルに保存します。

3. migrate-oac-data.zip を解凍します。

ZIP ファイルには次の 3 つのファイルが含まれます:

- migrate-oac-data.jar
- config.properties
- readme

4. 1 回のステップで、ソース環境に保存されているデータ・ファイルをターゲットに直接移行する場合は、config.properties の[MigrateData]セクションを構成します。

```
[MigrateData]
# Migrate data files from a source Oracle Analytics Cloud
environment (OAC) to a target Oracle Analytics Cloud environment.
  # Specify the source environment as Oracle Analytics Cloud.
  SOURCE_ENVIRONMENT=OAC
  # Source Oracle Analytics Cloud URL. For example: https://
sourcehost.com:443 or http://sourcehost.com:9704
  SOURCE_URL=http(s)://<Source Oracle Analytics Cloud
Host>:<Source Port>

  # Name of a user with Administrator permissions in the source
environment. For example: SourceAdmin
  SOURCE_USERNAME=<Source Administrator User Name>
  # Location of the source snapshot (.bar file). For
example: /tmp/20190307095216.bar
  BAR_PATH=<Path to Source Snapshot>
  # Target Oracle Analytics Cloud URL. For example: https://
targethost.com:443 or http://targethost.com:9704
  TARGET_URL=http(s)://<Target Oracle Analytics Cloud
Host>:<Target Port>

  # Name of a user with Administrator permissions in the target
environment. For example: TargetAdmin
  TARGET_USERNAME=<Target Administrator User Name>
```

5. 最初にソースの Oracle Analytics Cloud からローカル環境にデータ・ファイルをダウンロードし、次にターゲットの Oracle Analytics Cloud 環境にデータ・ファイルをアップロードする場合は、config.properties の[DownloadDataFiles]および[UploadDataFragments]セクションを構成します。

```
[DownloadDataFiles]
#Download Data Files: Download data files from Oracle Analytics
Cloud storage to a local repository
  # Specify the source environment as Oracle Analytics Cloud.
```

```

SOURCE_ENVIRONMENT=OAC
# Source Oracle Analytics Cloud URL. For example: https://
sourcehost.com:443 or http://sourcehost.com:9704
SOURCE_URL=http(s)://<Source Oracle Analytics Cloud Host>:<Source
Port>

# Name of a user with Administrator permissions in the source
environment. For example: SourceAdmin
SOURCE_USERNAME=<Source Administrator User Name>
# Location of the source snapshot (.bar file). For example: /tmp/
20190307095216.bar
BAR_PATH=<Path to Source Snapshot>
# Local data file directory. Make sure you have enough space to
download the data files to this directory. For example: /tmp/
mydatafiledir
DATA_FRAGMENTS_DIRECTORY=<Data Files Directory>
# Data fragment size. Data files are downloaded in fragments.
Default fragment size is 500MB.
MAX_DATA_FRAGMENT_SIZE_IN_MB=500

[UploadDataFiles]
#Upload data files: Upload data files to the target Oracle Analytics
Cloud.
# Target Oracle Analytics Cloud URL. For example: https://
targethost.com:443 or http://targethost.com:9704
TARGET_URL=http(s)://<Target Oracle Analytics Cloud Host>:<Target
Port>
# Name of a user with Administrator permissions in the target
environment. For example: TargetAdmin
TARGET_USERNAME=<Target Administrator User Name>
# Local directory containing the data files you want to upload. For
example: /tmp/mydatafiledir
DATA_FRAGMENTS_DIRECTORY=<Data Files Directory>
# Location of the source snapshot (.bar file). For example: /tmp/
20190307095216.bar
BAR_PATH=<Path to Source Snapshot>

```

6. ローカル環境で migrate-oac-data.jar ファイルを実行します。

構文:

```
migrate-oac-data.jar [-config configfile] [-d] [-help] [-m] [-u]
```

ここで:

- -config *configfile*: config.properties ファイルの名前
- -d: config.properties の情報を使用して、データをローカルにダウンロードします
- -help: ヘルプを表示します
- -m: config.properties ファイルのソースおよびターゲット情報を使用してデータを移行します

- `-u: config.properties` ファイルの情報を使用してデータをアップロードします

たとえば、1回のステップでデータ・ファイルを移行するには、次のように指定します。

```
java -jar migrate-oac-data.jar -m -config config.properties
```

たとえば、データ・ファイルをローカルにダウンロードするには、次のように指定します。

```
java -jar migrate-oac-data.jar -d -config config.properties
```

たとえば、データ・ファイルをアップロードするには、次のように指定します。

```
java -jar migrate-oac-data.jar -u -config config.properties
```

7. ターゲットの **Oracle Analytics Cloud** にサインインします。
8. **Oracle Analytics Cloud** でデータ・ファイルを公開するには、2回目の残りのコンテンツの移行で使用したスナップショットをリストアする必要があります。今回は、「**カスタム**」復元オプションを選択する必要があります。
 - a. コンソールを開き、「**スナップショットの管理**」をクリックします。
 - b. データ・ファイルが含まれるスナップショットを選択します。
 - c. 「**カスタム**」復元オプションを選択し、「**ファイルベース・データ**」オプションを選択します。
他のすべてのオプションを選択解除します。
 - d. 「**リストア**」をクリックします。
9. データ・ファイルが使用可能であることを確認します。

REST API を使用したスナップショットの管理

Oracle Analytics Cloud の REST API を使用して、Oracle Cloud Infrastructure (OCI) ストレージでのスナップショット (BAR ファイル) の作成、復元および管理をプログラムで実行できます。たとえば、定期的にバックアップ (スナップショット) を作成するスクリプトを作成できます。

ノート:

Oracle Analytics Cloud コンソールの「スナップショット」ページには、コンソールを使用して作成したスナップショットがリストされます。REST API を使用して作成および登録したスナップショットは、「スナップショット」ページには表示されません。

次に、REST API を使用した一般的なタスクの一部を示します。

タスク	説明	REST API のドキュメント
前提条件の把握	<p>前提条件の複数のタスクを把握して実行します。</p> <p>REST API を使用してスナップショットを管理するには、Oracle Analytics Cloud の管理者(BI サービス管理者)権限が必要です。</p> <p>また、Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Object Storage へのアクセス権と、スナップショットを格納するバケットの作成権限も必要です。具体的には、スナップショットを格納するストレージ・バケットに対して、次の権限が必要です： OBJECT_CREATE および OBJECT_OVERWRITE。さらに、OCI Object Storage への REST コールの実行を許可する API 署名キー。</p>	前提条件
OAuth 2.0 トークン認証の把握	<p>Oracle Analytics Cloud での認証と認可は、Oracle Identity Cloud Service で管理されています。Oracle Analytics Cloud の REST API にアクセスするには、認可に使用する OAuth 2.0 アクセス・トークンが必要です。</p>	OAuth 2.0 トークン認証
スナップショットの作成	<p>ある時点でのシステムのコンテンツと設定をスナップショット(BAR ファイル)に取得し、そのスナップショットをクラウド・ストレージに保存して、Oracle Analytics Cloud に登録します。</p>	スナップショットの作成(type=CREATE)
既存のスナップショットの登録	<p>クラウド・ストレージに保存されている既存のスナップショットを、Oracle Analytics Cloud に登録します。</p>	スナップショットの作成(type=REGISTER)
スナップショットからの復元	<p>クラウド・ストレージのスナップショットを使用して、機能していた以前の状態にシステムを復元します。</p>	スナップショットの復元
スナップショットの削除	<p>不要なスナップショットをクラウド・ストレージから削除します。</p>	スナップショットの削除
スナップショットの詳細の取得	<p>クラウド・ストレージの 1 つまたはすべてのスナップショットの詳細を取得します。</p>	スナップショットの取得 すべてのスナップショットの取得
スナップショットの作業リクエストのステータスの取得	<p>REST 作業リクエストのステータスをモニターします。</p>	作業リクエスト・アイテムの取得

4

一般的な構成タスクの実行

このトピックでは、Oracle Analytics Cloud を管理する管理者によって実行される一般的な構成タスクについて説明します。

トピック:

- [共通の管理タスクを実行するための一般的なワークフロー](#)
- [ウィルス・スキャナの構成](#)
- [安全ドメインの登録](#)
- [ビジュアライゼーションの共有のためのソーシャル・チャンネルの設定](#)
- [ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテナの設定](#)
- [レポート配信のための電子メール・サーバーの設定](#)
- [エージェントによるコンテンツ配信の有効化およびカスタマイズ](#)
- [レポートの電子メール送信と配信のトラッキング](#)
- [コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理](#)
- [分析対象のマップ情報の管理](#)
- [別の言語への切替え](#)
- [クラウド・ストレージ・パスワードの更新](#)
- [プレビュー機能を使用可能にする方法](#)

共通の管理タスクを実行するための一般的なワークフロー

次に、データ・ビジュアライゼーションおよびエンタープライズ・モデリング・サービスを管理する Oracle Analytics Cloud 管理者の一般的なタスクを示します。

タスク	説明	詳細情報
ユーザーが参照および実行する内容の管理	コンソールのアプリケーション・ロール・ページを使用して、ユーザーが Oracle Analytics Cloud で参照および実行できる内容を構成します。	ユーザーが参照および実行できる内容の管理
コンテンツのバックアップと復元	スナップショットというファイルを使用して、セマンティック・モデル、カタログ・コンテンツおよびアプリケーション・ロールをバックアップおよび復元します。	スナップショットの作成および復元
ウィルス・スキャンの設定	ウィルス・スキャン・サーバーに接続します。	ウィルス・スキャナの構成

タスク	説明	詳細情報
安全ドメインの登録	安全なドメインへのアクセスを許可します。	安全ドメインの登録
コンテンツ共有のためのソーシャル・チャンネルの設定	ユーザーが Twitter 、 Slack 、 Oracle Cloud Storage および Oracle Content Management でコンテンツを共有できるようにします。	ビジュアライゼーションの共有のためのソーシャル・チャンネルの設定 ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテンツの設定
電子メール配信の設定	電子メール・サーバーに接続します。	レポート配信のための電子メール・サーバーの設定 電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング
エージェントによるコンテンツ配信の有効化	ユーザーはエージェントを使用してコンテンツを配信できます。	エージェントによるコンテンツ配信の有効化およびカスタマイズ 配信の一時停止および再開 配信スケジュールの復元および有効化
コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理	組織のデバイスを構成します。	コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理
マップの管理	マップ・レイヤーおよび背景マップを管理します	分析対象のマップ情報の管理
別の言語への切替え	Oracle Analytics Cloud で別の言語をどのようにサポートしているかおよび言語間での切替え方法を理解します。	別の言語への切替え
クラウド・ストレージ・パスワードの更新	クラウド・ストレージ・コンテンツへのアクセスに必要な資格証明が変更されているか、有効期限が切れている場合、クラウド・ストレージのパスワードを更新します。	クラウド・ストレージ・パスワードの更新

ウィルス・スキャナの構成

Oracle Analytics をウィルスのない状態に維持するには、組織で使用されているウィルス・スキャン・サーバーを設定し、**Oracle Analytics** にアップロードされるすべてのファイルをスキャンすることをお勧めします。設定すると、すべてのファイルがチェックされます。これには、ユーザーが分析用にアップロードするデータ・ファイル、コンテンツの復元用または他の環境からのコンテンツの移行用にアップロードするスナップショットが含まれます。

ノート:

Oracle では、通信に **Internet Content Adaptation Protocol (ICAP)** プロトコルを使用するウィルス・スキャナがサポートされます。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「ウイルス・スキャナ」をクリックします。
3. ウィルス・スキャン・サーバーのホストおよびポートを入力します。
例: my.virus.scanning.serverexample.com。
4. 「保存」をクリックします。
5. 現在のウイルス・スキャナ構成を削除するには、「削除」をクリックします。

安全ドメインの登録

セキュリティ上の理由により、管理者が安全であると見なさないかぎり、外部コンテンツをレポートに追加したり、レポートを他のアプリケーションに埋め込んだり、データ・ソース (Dropbox や Google Drive など) に接続したりすることはできません。安全ドメインを登録できるのは管理者のみです。

ドメインを安全と登録したら、そのソースのコンテンツにアクセスするには、ユーザーはサインアウトして、再びサインインする必要があります。

コンテンツにアクセスできるのは、許可ユーザーのみです。サービスがシングル・サインオン (SSO) を使用するように設定されている場合を除き、ユーザーがこれらの安全なドメインのコンテンツにアクセスするときは、サインインを求めるプロンプトが表示されます。

ノート:

安全なドメインの数およびブラウザ・リクエストに含めることができる個別の設定に制限があります。この制限に達したり超過したりしないようにするには、必要なドメインのみを追加し、必要なオプションのみを選択します。可能な場合、ワイルドカードを活用して複数のエントリを回避します。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「安全ドメイン」をクリックします。
3. 「ドメインの追加」をクリックして安全なドメインを登録します。
4. 安全なドメインの名前を入力します。次の形式を使用します。
 - www.example.com
 - *.example.com
 - https:
5. 各ドメインに許可するリソースのタイプを指定します。
 - イメージやスクリプトなど、許可するリソースのタイプを選択します。
 - 安全とはみなさないリソース・タイプは選択解除してブロックします。
6. ドメインに存在する外部コンテンツにユーザーがビジュアライゼーション、レポートおよびダッシュボードを埋め込むことを許可する場合、「埋込み」を選択します。

Domain Name	Image	Allow Frames	Script	Font	Style	Media	Connect	Form Action	Embedding	Delete
All domains	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="data.fixer.io"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="*.googleusercontent.com"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="www.googleapis.com"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="*.dropboxapi.com"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="login.live.com"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="apis.live.net"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="login.microsoftonline.com"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="api.mapbox.com"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="text" value="api.dropboxapi.com"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

- ドメインを除去するには、ドメインを選択して「削除」アイコンをクリックします。

REST API を使用した安全ドメインの管理

Oracle Analytics Cloud の REST API を使用すると、安全ドメインをプログラムで表示および管理することが可能です。たとえば、テストと本番の両方の Oracle Analytics Cloud 環境に、同じ安全ドメインのセットを登録(または変更)するスクリプトを作成するような場合です。

- 安全ドメインの REST API を使用するための一般的なワークフロー
- 安全ドメインの REST API の例

安全ドメインの REST API を使用するための一般的なワークフロー

ここでは、Oracle Analytics Cloud の REST API を使用して、プログラムによる安全ドメインの表示および管理を開始するための一般的な作業を示します。安全ドメインの REST API を初めて使用する場合は、次の作業をガイドにして進めてください。

タスク	説明	REST API のドキュメント
前提条件の把握	前提条件の複数のタスクを把握して実行します。 REST API を使用して安全ドメインを管理するには、Oracle Analytics Cloud の管理者(BI サービス管理者)権限が必要です。	前提条件
OAuth 2.0 トークン認証の把握	Oracle Analytics Cloud での認証と認可は、Oracle Identity Cloud Service で管理されています。Oracle Analytics Cloud の REST API にアクセスするには、認可に使用する OAuth 2.0 アクセス・トークンが必要です。	OAuth 2.0 トークン認証
すべての安全ドメインの取得	Oracle Analytics Cloud に構成されているすべての安全ドメインのリストを返します。	すべての安全ドメインの取得

タスク	説明	REST API のドキュメント
安全ドメインの登録または更新	新しい安全ドメインを登録するか既存の構成を更新します。	安全ドメインの作成または更新
安全ドメインの削除	安全ドメインを削除します。	安全ドメインの作成または更新

安全ドメインの REST API の例

Oracle Analytics Cloud REST API には、安全ドメインの REST API の使用方法を説明する例がいくつか記載されています。

- [すべての安全ドメインの取得 - 例](#)
- [安全ドメインの作成または更新 - 例](#)
- [安全ドメインの削除 - 例](#)

ビジュアライゼーションの共有のためのソーシャル・チャンネルの設定

Slack、X、LinkedIn などのソーシャル・チャンネルを設定すると、コンテンツ作成者は、データ・ビジュアライゼーションを他のユーザーと簡単に共有できます。

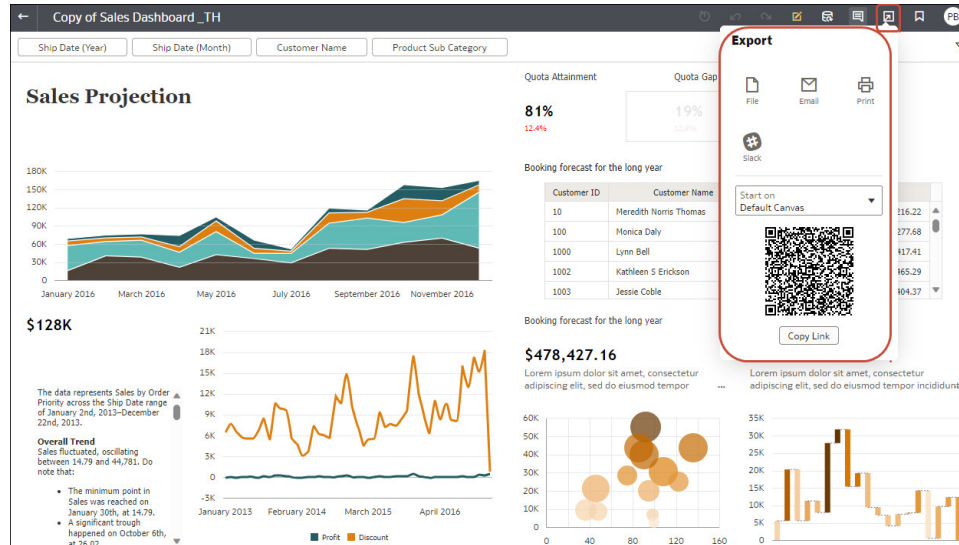
トピック:

- [ソーシャル・チャンネルでのコンテンツの共有について](#)
- [ワークブック・ユーザーによる LinkedIn でのビジュアライゼーションの共有の有効化](#)
- [ワークブック・ユーザーによる Slack でのビジュアライゼーションの共有の有効化](#)
- [ワークブック・ユーザーによる X \(旧 Twitter\)でのビジュアライゼーションの共有の有効化](#)

ソーシャル・チャンネルでのコンテンツの共有について

管理者は、様々なソーシャル・チャンネルを設定できるため、コンテンツ作成者は、LinkedIn、Slack、X (旧 Twitter)などのソーシャル・プラットフォームでデータ・ビジュアライゼーションを共有できます。

設定すると、ビジュアライゼーションの「**エクスポート**」ダイアログに、ソーシャル・チャンネルが表示されます。たとえば、Slack を構成してアクティブ化した場合、ユーザーが「**エクスポート**」アイコンをクリックすると、ビジュアライゼーションを Slack にエクスポートするオプションが表示されます。



LinkedIn のような一部のソーシャル・チャネルでは、パブリック Web ストレージも設定する必要があります。

ソーシャル・チャネル	パブリック Web ストレージが必要かどうか
LinkedIn	はい
パブリック Web ストア	はい
Slack	いいえ
Teams (Microsoft)	いいえ
X (旧 Twitter) - App	いいえ
X (旧 Twitter) - Web	はい
Intent	

パブリック Web ストアや Slack など、デフォルトで非アクティブ・モードで表示されるソーシャル・チャネルもあれば、デフォルトで非表示のものもあります。ソーシャル・チャネルを設定するときに、次のいずれかのステータスを設定できます：

ステータス	説明
アクティブ	ソーシャル・メディア・オプションが「エクスポート」ダイアログに表示されます。たとえば、Slack や LinkedIn を表示できます。
非アクティブ	ソーシャル・メディア・オプション(Slack や LinkedIn など)が「エクスポート」ダイアログに表示されますが、ユーザーがコンテンツを共有するために使用することはできません。ユーザーが非アクティブ・オプションを選択すると、管理者に連絡することを薦めるメッセージが表示されます。
非表示	構成されているかどうかにかかわらず、ソーシャル・メディア・オプションが「エクスポート」ダイアログに表示されません。たとえば、ロールアウトに備えて構成し、将来の日付まで非表示にしておくことができます。

ワークブック・ユーザーによる LinkedIn でのビジュアライゼーションの共有の有効化

管理者は、Oracle Analytics に LinkedIn チャンネルを設定できるため、コンテンツ作成者は、組織の LinkedIn のフィードでデータ・ビジュアライゼーションを共有できます。

1. データ・ビジュアライゼーションの共有に使用する LinkedIn アプリケーションのクライアント ID とクライアント・シークレットの値を取得します。
 - a. LinkedIn 開発者ポータル([linkedin.com/developers/apps](https://developer.linkedin.com/apps))を開きます。
 - b. 使用するアプリケーションをクリックします。
 - c. 「Authentication」ページで、「Client ID」と「Client Secret」の値を取得します。
2. Oracle Analytics で LinkedIn チャンネルを構成します。
 - a. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックして「ソーシャル」をクリックします。
 - b. 「サービス」で、「LinkedIn」を選択します。
 - c. 「ステータス」を「アクティブ」に変更します。
 - d. 「アプリケーション名」に、LinkedIn 開発者ポータルで設定したアプリケーションの名前を入力します。
 - e. 「クライアント ID」と「クライアント・シークレット」に、LinkedIn 開発者ポータルで取得した値を入力します(ステップ 1)。
 - f. 「更新」をクリックします。
 - g. 「クリップボードにコピー」をクリックして、Oracle Analytics のリダイレクト URL をコピーします。
3. LinkedIn 開発者ポータルで、Oracle Analytics のリダイレクト URL を構成します。
 - a. 使用するアプリケーションを選択します。
 - b. 「App Details」タブで、「Edit」をクリックして、クリップボードのコンテンツを「Authorized Redirect URLs」フィールドに貼り付けます。
 - c. 「保存」をクリックします。
4. まだ実行していない場合は、Oracle Cloud 上に、Oracle Analytics が LinkedIn でビジュアライゼーションの共有に使用できるパブリック Web ストレージ・コンテナを構成します。

[ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテナの設定](#)を参照してください。
5. LinkedIn チャンネルでビジュアライゼーションを共有できることを確認します。
 - a. Oracle Analytics でワークブックを開きます。
 - b. 「ビジュアル化」または「解説」キャンバスで、「エクスポート」アイコンをクリックします。
 - c. 「LinkedIn」をクリックします。

チャンネルを正常に設定してアクティブ化すると、「エクスポート」メニューに、「LinkedIn」がオプションとして表示されます。

ワークブック・ユーザーによる Slack でのビジュアライゼーションの共有の有効化

管理者は、Oracle Analytics に Slack チャネルを設定できるため、コンテンツ作成者は、組織の Slack アプリケーションでデータ・ビジュアライゼーションを共有できます。

1. データ・ビジュアライゼーションの共有に使用する Slack アプリケーションのクライアント ID とクライアント・シークレットの値を取得します。
 - a. Slack で「Your Apps」ページ(<https://api.slack.com/apps>)を開きます。
 - b. 使用するアプリケーションを選択するか、新しく作成します。
 - c. 「Basic Information」タブで、「App Credential」セクションに移動し、「Client ID」と「Client Secret」の値を取得します。
2. Oracle Analytics で Slack アプリケーションを構成します。
 - a. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックして「ソーシャル」をクリックします。
 - b. 「サービス」で、「Slack」を選択します。
 - c. 「ステータス」を「アクティブ」に変更します。
 - d. 「アプリケーション名」に、Slack で設定したアプリケーションの名前を入力します。
 - e. 「クライアント ID」と「クライアント・シークレット」に、Slack で取得した値を入力します(ステップ 1)。
 - f. 「更新」をクリックします。
 - g. 「クリップボードにコピー」をクリックして、Oracle Analytics のリダイレクト URL をコピーします。
3. Slack で、Oracle Analytics のコールバック URL を構成します。
 - a. Slack で「Your Apps」ページを開きます。
 - b. 使用するアプリケーションを選択します。
 - c. 「Basic Information」タブで、「OAuth and Permissions」をクリックします。
 - d. 「Add New Redirect URL」をクリックし、クリップボードのコンテンツを「Redirect URL」フィールドに貼り付けて、「Add」をクリックします。
 - e. 「Save URLs」をクリックします。
4. Slack チャネルでビジュアライゼーションを共有できることを確認します。
 - a. Oracle Analytics でワークブックを開きます。
 - b. 「ビジュアル化」または「解説」キャンバスで、「エクスポート」アイコンをクリックします。
 - c. 「Slack」をクリックします。

チャネルを正常に設定してアクティブ化すると、「エクスポート」メニューに、「Slack」がオプションとして表示されます。

ワークブック・ユーザーによる X (旧 Twitter)でのビジュアライゼーションの共有の有効化

管理者は、Oracle Analytics に X (旧 Twitter)チャンネルを設定できるため、コンテンツ作成者は、組織の X のフィードでのツイートとしてデータ・ビジュアライゼーションを共有できます。

X を使用したコンテンツの共有は、2 つの方法で設定できます:

- **X アプリケーション** - このトピックで説明するように、事前に定義した X アプリケーションを使用してコンテンツを共有します。このアプローチをお勧めします。
- **Web Intent** - パブリック Web リンクを使用して、X でコンテンツを共有します。このモードで統合する場合は、パブリック Web ストレージを設定および構成する必要があります。[ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテナの設定](#)を参照してください。

組織の X アプリケーションを使用し、Oracle Analytics でデータ・ビジュアライゼーション・ワークブックを共有できるようにするには:

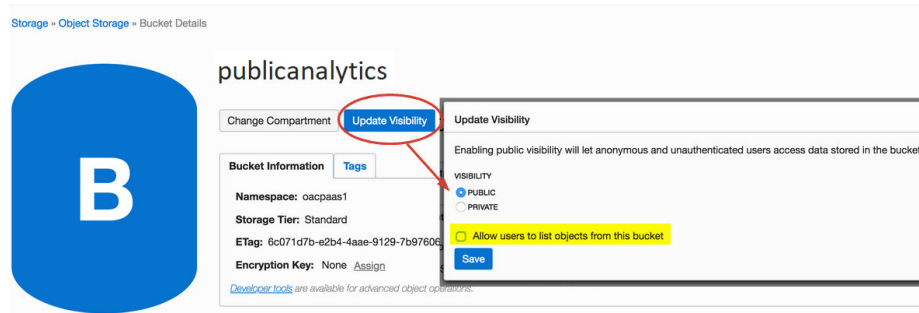
1. データ・ビジュアライゼーションの共有に使用する X アプリケーションのクライアント ID とクライアント・シークレットの値を取得します。
 - a. X Application Manager (たとえば developer.twitter.com)を開きます。
 - b. ツイートに使用するアプリケーションをクリックします。
 - c. **キーとトークン** タブで、**コンシューマ・キー**および**コンシューマ秘密キー**の値を取得します。
 - d. **「Permissions」** タブで、**「Read, write, and direct messages」** を選択します。
2. Oracle Analytics で X チャンネルを構成します。
 - a. Oracle Analytics のホーム・ページで、**「ナビゲータ」** をクリックし、**「コンソール」** をクリックして **「ソーシャル」** をクリックします。
 - b. **「サービス」** で、**「Twitter」** を選択します。
 - c. **「ステータス」** を **「アクティブ」** に変更します。
 - d. **「アプリケーション名」** に、X Application Manager で設定したアプリケーションの名前を入力します。
 - e. **「クライアント ID」** と **「クライアント・シークレット」** に、X Application Manager で取得したコンシューマ・キーとコンシューマ・シークレットの値を入力します(ステップ 1)。
 - f. **「更新」** をクリックします。
 - g. **「クリップボードにコピー」** をクリックして、Oracle Analytics のリダイレクト URL をコピーします。
3. X Application Manager で、Oracle Analytics のコールバック URL を構成します。
 - a. X Application Manager で、ツイートに使用するアプリケーションをクリックします。
 - b. **「App Details」** タブで、**「Edit」** をクリックして、クリップボードのコンテンツを **「Callback URL」** フィールドに貼り付けます。

- c. 「保存」をクリックします。
 - 4. Xチャンネルでビジュアライゼーションを共有できることを確認します。
 - a. Oracle Analytics でワークブックを開きます。
 - b. 「ビジュアル化」または「解説」キャンバスで、「エクスポート」アイコンをクリックします。
 - c. 「Twitter」をクリックします。
- チャンネルを正常に設定してアクティブ化すると、「エクスポート」メニューに、「Twitter」がオプションとして表示されます。

ビジュアライゼーションを共有するためのパブリック・コンテナの設定

管理者は、Oracle Cloud にパブリック Web ストレージ・コンテナを設定できるため、コンテンツ作成者は、データ・ビジュアライゼーションを他のユーザーと共有できません。

1. Oracle Cloud にパブリック・コンテナを作成します。
 - a. Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、「オブジェクト・ストレージ」に移動します。
 - b. 「オブジェクト・ストレージ」タブで、「バケットの作成」をクリックし、publicanalytics など、適切な名前のコンテナを作成します。
 - c. バケットを選択し、「表示の更新」をクリックします。
 - d. 「パブリック」を選択して、「ユーザーにこのバケットのオブジェクトのリスト表示を許可」が選択されていないことを確認します。



- e. 「保存」をクリックします。
2. Oracle Analytics で、パブリック Web ストアを構成します。
 - a. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックして「ソーシャル」をクリックします。
 - b. 「サービス」で、「パブリック Web ストア」を選択します。
 - c. 最初にパブリック・コンテナを指定するか、または既存のコンテナを変更するには、「編集」をクリックします。
 - d. ストレージ・コンテナ URL を入力します。
REST エンドポイント URL の書式を使用します。

`https://swiftobjectstorage.region.oraclecloud.com/v1/object-storage-namespace/public-bucket-name`

例: `https://swiftobjectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/v1/oacpaas1/publicanalytics`

Oracle Cloud Infrastructure ドキュメントの[オブジェクト・ストレージへのアクセス方法](#)に関する項を参照してください。

- e. 「**ストレージ・ユーザー**」と「**ストレージ・パスワード**」に、パブリック・コンテナへの読取りアクセス権と書き込みアクセス権があるユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。
- f. 「**保存**」をクリックします。

将来、別のパブリック・コンテナの使用を決定した場合は、既存のパブリック・コンテナを介してユーザーがすでに共有しているコンテンツへのリンクはその後も使用できますが、更新することはできません。新たに共有するコンテンツは、新しい場所に保存されます。

- g. 「**ステータス**」を「**アクティブ**」に変更します。

チャンネルを設定してアクティブ化すると、「エクスポート」メニューに、**パブリック Web ストレージ**がオプションとして表示されます。

レポート配信のための電子メール・サーバーの設定

組織のメール・サーバーに接続して、アナリストが Oracle Analytics からレポートおよびデータ・ビジュアライゼーションを電子メールで直接送信できるようにします。SMTP メール・サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスする必要があります。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックし、「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**メール設定**」をクリックします。
3. 電子メールの配信に使用する「**SMTP サーバー**」の名前を入力します。

たとえば、`mymail.example.com` のようになります。

SMTP サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスする必要があります。電子メール・サーバーにパブリック IP アドレスがある場合は、サーバー名のかわりにパブリック IP アドレスをここに入力できます。

4. 「**ポート**」番号を入力します。
一般的な SMTP ポートには次が含まれます。
 - 25 (**接続セキュリティ = None**)
 - 465 (**接続セキュリティ = SSL/TLS**)
 - 587 (**接続セキュリティ = STARTTLS**)
5. レポートを配信する電子メールの「送信元」フィールドに表示する名前および電子メール・アドレスを入力します(「**送信者の表示名**」および「**送信者の電子メール・アドレス**」)。

たとえば、Joe Brown および `joseph.brown@example.com` のようになります。

6. 「**テスト**」をクリックして接続を確認します。

接続をテストする場合、セキュリティ設定を構成する前に行う必要があります。

 ノート:

「削除」をクリックすれば、いつでもメール・サーバーの設定をすべてクリアし、再び開始することができます。

7. オプション: メール・サーバーで認証が必要な場合:
 - a. 「**認証済**」を選択します。
 - b. メール・サーバーに対するアクセス権を持つユーザーの「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を入力します。
8. オプション: セキュアなメール・サーバーを設定するには:
 - a. 「**接続セキュリティ**」をクリックし、メール・サーバーに適切なセキュリティ・プロトコルを選択します。
 - **SSL/TLS**: メール・サーバーが SSL と TLS のいずれを使用しているかを選択します。ポート値のデフォルトは **465** です。
 - **STARTTLS**: STARTTLS では、既存のセキュアでない接続を取得し、これを SSL または TLS を使用したセキュアな接続にアップグレードできます。ポート値のデフォルトは **587** です。


「**TLS 証明書**」では、「**デフォルトの証明書**」が選択されています。デフォルトの証明書は、暗号化されたメール・サーバー通信に対応しています。Office 365 など、ほとんどのメール・サーバーはデフォルトの証明書を使用できるため、ほとんどの場合、互換証明書を提供する必要はありません。
 - b. オプション: カスタムの TLS 証明書をアップロードします。「**TLS 証明書**」で、「**カスタム証明書**」を選択して、「**選択**」をクリックして証明書ファイル(.pem)に移動します。

ウィルス・スキャナを構成していない場合、ここで構成するか、ウィルス・スキャナなしで続行するかを尋ねるプロンプトが表示されます。
9. 「**保存**」をクリックします。

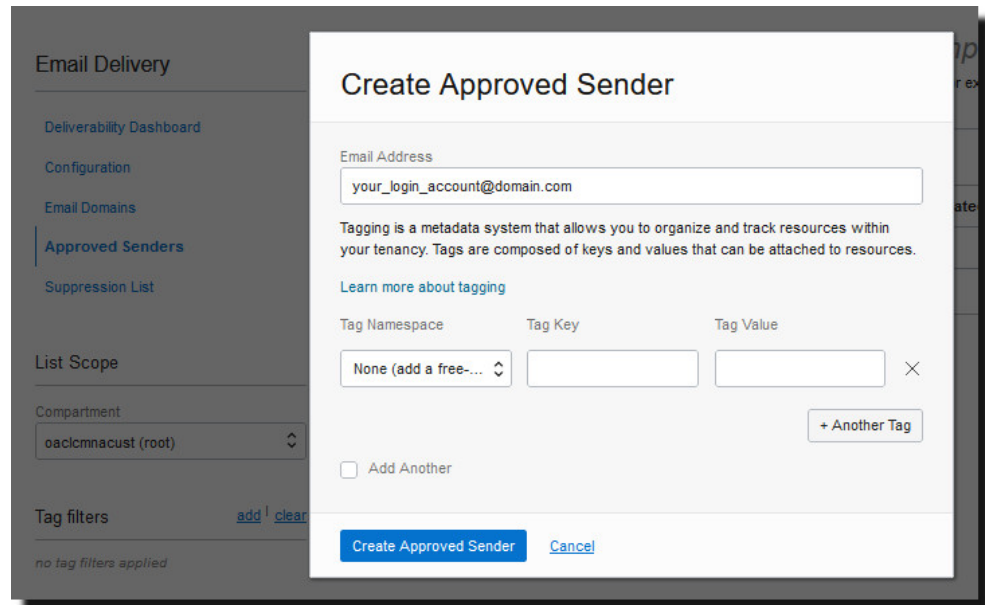
変更が適用されてシステムがリフレッシュされ、電子メール・メニュー・オプションが表示されるまで待機します。

電子メール配信のための Oracle Cloud Infrastructure の SMTP メール・サーバーの使用

Oracle Cloud Infrastructure で使用可能な SMTP メール・サーバーを使用して、Oracle Analytics Cloud から電子メールを送信できます。

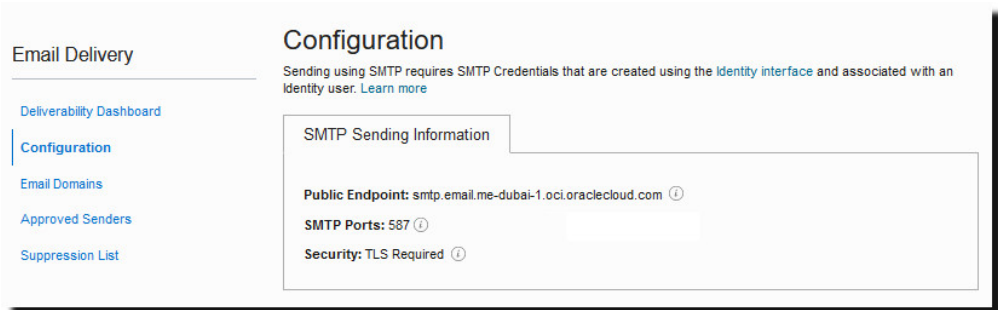
1. Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、電子メール配信を構成します。
 - a. 「電子メール配信」を構成する権限を使用して Oracle Cloud アカウントにサインインします。
 - b. Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、左上隅にある  をクリックします。
 - c. 「**開発者サービス**」をクリックします。「**アプリケーション統合**」で、「**電子メール配信**」をクリックします。

- d. オプション: 使用する予定の電子メール・ドメインを設定します。
これは、承認された送信者の電子メール・アドレスに使用する予定のドメインであり、**gmail.com** や **hotmail.com** などのパブリック・メールボックス・プロバイダ・ドメインにすることはできません。
- e. 「承認済送信者」をクリックします。
- f. 「承認済送信者の作成」 ページで、メール・サーバー経由で電子メールを送信する際に使用する送信者電子メール・アドレスの承認済送信者を設定します。



詳細は、Oracle Cloud Infrastructure のドキュメントを参照してください。 [承認済送信者の管理](#)を参照してください。

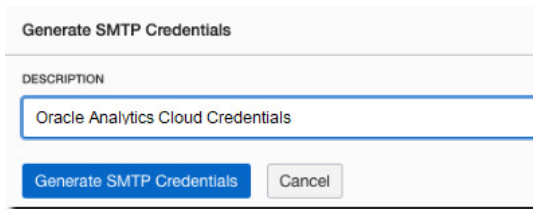
- g. 「構成」をクリックし、**パブリック・エンドポイント**、**ポート(587)**、および接続で使用されている **Transport Layer Security (TLS)**をメモします。



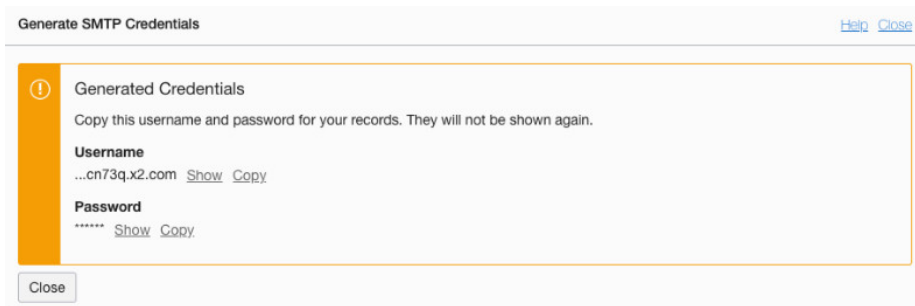
詳細は、Oracle Cloud Infrastructure のドキュメントを参照してください。 [SMTP 接続の構成](#)を参照してください。

- h. まだ行っていない場合は、**アイデンティティ・インタフェース**のリンクをクリックしてアイデンティティ・ページに移動し、**SMTP 資格証明の生成**をクリックして、自分自身または電子メールの管理権限を持つ別のユーザーに **SMTP 資格証明**を生成します。

「Oracle Analytics Cloud の資格証明」などの説明を入力し、「**SMTP 資格証明の生成**」をクリックします。



自分のレコードの「ユーザー名」および「パスワード」をコピーします。



詳細は、Oracle Cloud Infrastructure のドキュメントを参照してください。ユーザーの SMTP 資格証明の生成を参照してください。

2. Oracle Analytics Cloud で、電子メール・サーバーに SMTP 設定を構成します。
 - a. 「コンソール」をクリックします。
 - b. 「メール・サーバー」をクリックしてメール・サーバーに SMTP 設定を構成します。
 - c. 「SMTP サーバー」で、電子メール・サーバーの名前を指定します。たとえば、smtp.email.me-dubai-1.oci.oraclecloud.com です。
 - d. 「ポート」で、587 と指定します。
 - e. 「送信者の表示名」で、電子メールの差出人フィールドに表示する名前を指定します。たとえば、Oracle Analytics です。
 - f. 「送信者の電子メール・アドレス」で、電子メール配信用に構成した承認済み送信者の電子メール・アドレスを指定します。例:
your_login_account@yourdomain.com。
 - g. 「認証済」で、このオプションを選択します。
 - h. 「ユーザー名」で、メール・サーバーの SMTP 資格証明の生成後に書き留めたユーザー名を指定します。例: ocid1.user.oc1.aaaaaaalgtwnjkell...
 - i. 「パスワード」で、このユーザーに対して生成されたパスワードを指定します。
 - j. 「接続セキュリティ」で、STARTTLS と指定します。
 - k. 「TLS 証明書」で、Default Certificate と指定します。
 - l. 「保存」をクリックします。

変更が適用されてシステムがリフレッシュされ、電子メール・メニュー・オプションが表示されるまで待機します。

3. メール・サーバー設定をテストするには、電子メールによるレポートの送信またはレポートを配信するエージェントの作成を試行します。

1 回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信またはコンテンツを配信するエージェントの作成を参照してください。

電子メール・アカウントを使用して配信されたテスト電子メールを受信した場合、メール・サーバーは正常に構成されています。

エージェントによるコンテンツ配信の有効化およびカスタマイズ

エージェントを使用してコンテンツを配信できます。この機能は自動的に使用可能になりません。クラシック・ホーム・ページに「**エージェントの作成**」リンクを表示するには、「**デリバリーのフル UX の表示**」権限を BI コンテンツ作成者アプリケーション・ロールに付与します。

ノート:

デリバリーのフル UX 権限をサポートしない Oracle Analytics Cloud の以前の更新から取得したスナップショットをインポートする場合は、この機能を有効にする必要があります。

必要に応じて、エージェントから送信される電子メールにいくつかの制限を設定できます。たとえば、電子メール・サイズ、電子メール・ドメインおよび受信者数に制限を設定できます。デフォルトでは、制限はありません。TO と BCC のどちらかを使用して電子メールを送信するか、および MIME 電子メール・パラメータをエンコードする方法をカスタマイズすることもできます。

1. エージェントがコンテンツを電子メールで配信できるようにします。
 - a. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロファイル・アイコン、「**管理**」の順にクリックします。
 - b. 「**権限の管理**」をクリックします。
 - c. 「**デリバリー**」セクションに移動し、「**デリバリーのフル UX の表示**」を BI コンテンツ作成者に付与します。

これで、BI コンテンツ作成者アプリケーション・ロールがあるユーザーに対して、クラシック・ホーム・ページに「**エージェントの作成**」リンクが表示されます。

2. エージェント配信をカスタマイズします。
 - a. Oracle Analytics のホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックし、「**コンソール**」をクリックします。
 - b. 「**システム設定**」をクリックします。
 - c. **エージェントによって配信される電子メール**をクリックします。
 - d. 最大電子メール・サイズ、最大受信者数、電子メール・ドメインの制限、BCC を使用するかどうか、MIME 電子メール・パラメータのエンコード方法などを設定することで、エージェントが電子メールを配信する方法を組織に合わせてカスタマイズします。

[エージェントによって配信される電子メールのオプション](#)を参照してください。

レポートの電子メール送信と配信のトラッキング

組織の内部または外部のユーザーにレポートを電子メール送信したり、エージェントを使用して他の様々なデバイスにレポートを送信します。定期的な日次または週次のレポートにより、すべてのユーザーを最新の状態に保持します。

トピック

- 1回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信
- 電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング
- 配信スケジュールの復元および有効化
- 配信の所有者またはタイム・ゾーンの変更
- 電子メール・セキュリティ・アラート

1回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信

1人以上の受信者に、レポートをカタログから直接電子メール送信します。レポートをこのように配布する方法は簡単であり、レポートをダウンロードして電子メール・クライアントから電子メール送信するよりも迅速です。すべてのユーザーを最新の状態に保持するために、日次または週次の電子メールをスケジュールします。

電子メールの制限および電子メール配信を最適化する方法については、電子メール配信の制限は何ですか。を参照してください

1. クラシック・ホーム・ページで、次のいずれかを行います：
 - 電子メール送信する項目に移動して、「編集」をクリックして、「結果」タブで、「電子メール」をクリックします。
 - 「カタログ」をクリックし、電子メール送信する項目に移動して、「詳細」アクション・メニューをクリックし、「電子メール」を選択します。
2. 1人以上の受信者の電子メール・アドレスを入力します。

複数の電子メール・アドレスはカンマで区切ります。たとえば、`jane.white@abc.com, steve.brown@abc.com`のようにします。
3. 「件名」行をカスタマイズします。
4. 電子メールを**今すぐ**送信するか、または「後で」をクリックして将来の日時を設定します。
5. レポート更新を日次または週次ベースで電子メール送信するには、「繰返し」をクリックしてから、「毎日」または「毎週」を選択します。

コンソールから、電子メール配信のステータスを確認できます。

電子メール・セキュリティ・アラート

電子メールで送信するコンテンツは、暗号化されません。送信するあらゆる機密データを保護するのは、自分の責任です。

電子メールによるレポートの送信と配信のトラッキングを参照してください。

電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング

コンソールで、ユーザーに電子メールで送信することを選択したレポートをトラッキングします。レポートの送信時期や保留中(将来実行するようにスケジュールされている)の項目が迅速に表示されます。同じページで、(スケジュール済または完了済)配信を確認、変更または削除します。

コンソールには、コンテンツを配信するように設定したエージェントも表示されます。このように、すべての配信情報が1箇所にまとめられています。

ステータス別に配信をフィルタすると、最も重要な配信をトラッキングできます。ここで、様々なステータス・メッセージについて説明します。

配信ステータス	説明
取消済	配信が取り消されました。 ユーザーは自分の配信はすべて取り消すことができます。
完了	配信は正常に実行されました。
無効	ユーザーは、カタログ経由で所有している配信またはエージェントを一時的に無効にできます。 たとえば、レポートを編集するか、レポートを表示するユーザーを変更する場合、定義済スケジュールで実行中のジョブを停止します。
失敗	スケジュールに従って配信が実行されましたが、正常に完了しませんでした。 エラー・アイコン(❌)の後の 詳細の表示... をクリックし、問題のある箇所を特定して修正します。
未スケジュール	配信のスケジュールが設定されていないか、スケジュール済実行日が(将来の日付ではなく)過去の日付です。
実行中	配信は進行中です。
一時停止	管理者は他のユーザーが設定した配信を一時的に停止できます。 たとえば、テスト環境から本番環境に移行する前に、管理者はテスト環境で配信を一時停止して、本番環境で再開します。
タイム・アウト	完了に時間がかかりすぎたため、配信がタイムアウトしました。
再度実行	問題が発生しました。もう一度配信の実行を試してください。
警告	スケジュールに従って配信が実行されましたが、 100% 正常終了ではありませんでした。 たとえば、配信では 10 人の受信者を指定しますが、電子メール・アドレスの 1 つが正しくなかったため、 9 人しか受信しませんでした。 警告アイコン(⚠️)の後の 詳細の表示... をクリックし、詳細を特定します。

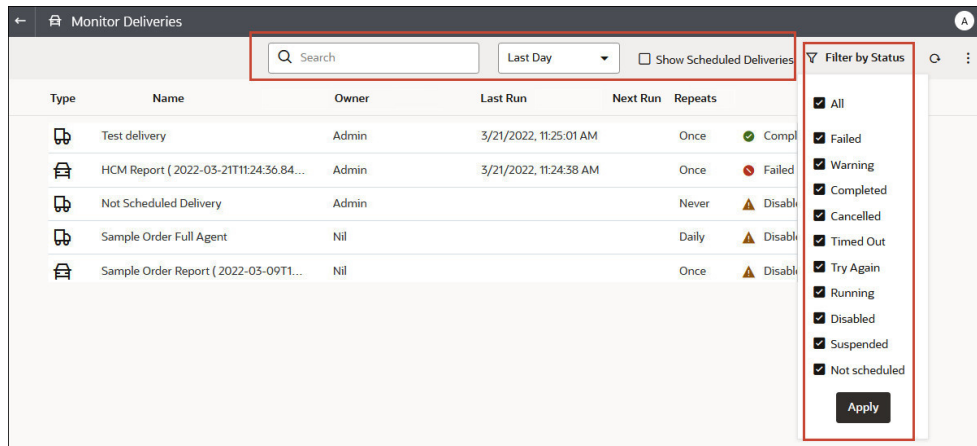
コンソールから配信をトラッキングするには:

1. ホーム・ページに移動し、「ナビゲータ」をクリックして、「コンソール」をクリックします。
2. **配信のモニター**をクリックします。

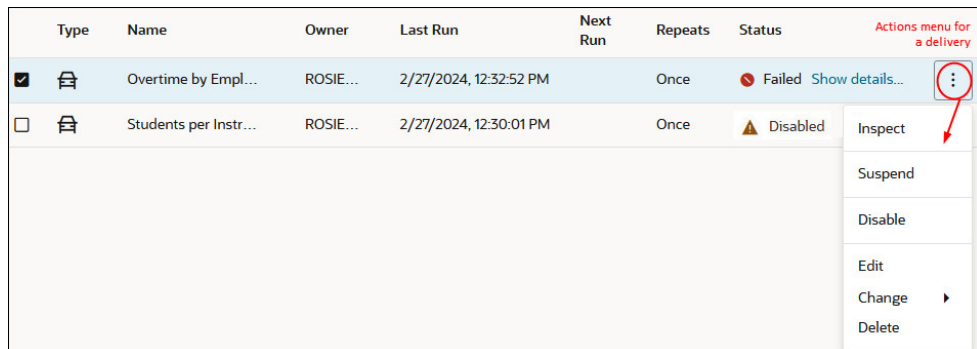
配信は実行日別にリストされ、最新の配信が最初に表示されます。最初は、過去**24**時間(「最終日」)に送信された配信のみが表示されます。先週の配布またはすべての配布を表示するには、「過去**7**日間」または「すべての時間」を選択します。

「スケジュール済配信の表示」をクリックして、将来実行するようにスケジュールされている配信を表示します。たとえば、明日の午前9時に実行するように配信をスケジュールするとします。前夜または午前8時に「配信」ページを見ると、配信がまだ実行されていないため、「スケジュール済配信の表示」を選択した場合にのみ配信が表示されます。

3. 配信のリストを名前、時間またはステータスでフィルタ処理します。
 - **名前:** 名前でフィルタ処理するには、検索ボックスに検索する配信の名前を入力し、[Enter]を押します。
 - **時間:** 時間でフィルタ処理するには、時間フィルタをクリックします。「最終日」、「過去7日間」、「すべての時間」から選択します。
 - **ステータス:** ステータスでフィルタ処理するには、「ステータスによるフィルタ」をクリックします。「失敗」、「警告」、「完了」、「取消済」、「タイムアウト」、「再度試行」、「実行中」、「無効」、「一時停止」、「未スケジュール」から1つ以上を選択し、「適用」をクリックします。



4. 配信の「アクション」メニューをクリックして、単一の配信を確認または管理します。



5. コンテンツをプレビューするには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「レポートの表示」を選択します。

このオプションは、エージェントによって配信が生成されている場合は使用できません。

6. 前回または次の実行の日付、配信頻度、履歴など、配信の詳細を表示するには、配信の「アクション」メニューをクリックして「検査」を選択します。

これまでのジョブ実行を表示したり検索したりするには、「履歴」をクリックします。名前や時間、ステータスのフィルタを使用すると、必要な配信を見つけやすくなります。

7. 配信を編集するには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「編集」を選択します。
 - 電子メール配信 - 電子メール・オプションを更新します。
 - エージェント配信 - 配信に関連付けられているエージェントを編集します。
8. 失敗した、または警告ありで完了した配信をトラブルシューティングするには、「詳細の表示...」をクリックします。
 - ❌ 失敗 - **詳細の表示...**をクリックして、問題のある箇所を特定して修正します。
 - ⚠️ 警告 - **詳細の表示...**をクリックして、詳細を参照します。
9. 配信を無効にするには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「無効化」を選択します。

配信を後で有効にする場合は、配信の「アクション」メニューをクリックし、「有効化」を選択します。
10. 配信および今後予定されているすべての配信を削除するには、「削除」、「OK」の順に選択します。
11. 複数の配信を削除、再開または一時停止するには、[Ctrl]を押しながら対象の配信をクリックして選択し、右クリックして、実行するアクション(「削除」、「再開」、「一時停止」)を選択します。

配信の一時停止および再開

管理者はいつでも配信を一時的に停止できます。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. **配信のモニター**をクリックします。
3. 自分の配信に加えて全員の配信にアクセスするには、ページの「アクション」メニューをクリックし、「管理ビュー」を選択します。
4. 配信を一時停止するには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「一時停止」を選択します。

一度に複数の配信を一時停止するには、[Shift]を押しながらクリック、または[Ctrl]を押しながらクリックして一時停止するすべての配信を選択し、右クリックして「一時停止」を選択します。
5. 配信を再開するには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「再開」を選択します。
6. 複数の配信を再開または一時停止するには、[Ctrl]を押しながら対象の配信をクリックして選択し、右クリックして、実行するアクション(「再開」または「一時停止」)を選択します。


配信の所有者またはタイム・ゾーンの変更

管理者であれば、1つ以上の配信の所有者またはタイム・ゾーンを変更できます。自分自身を新しい所有者にするか、別のユーザーを選択できます。これは、元の所有者が変わったり組織から離れたりした場合、または異なる環境から移行した後に便利です。タイム・ゾーンの

変更オプションは、複数の配信でタイム・ゾーンを変更する必要がある場合にも役立ちます。また、特に便利なのは、異なるタイム・ゾーンの異なる環境から配信を移行する場合です。

たとえば、タイム・ゾーンがローカルの米国時間に正しく設定されているオンプレミスの Oracle Analytics Server 環境から、異なるタイム・ゾーンの環境に配信を移行するとします。タイム・ゾーンが UTC に変更される Oracle Analytics Cloud に移行した場合、配信の到着が早くなりすぎます。このシナリオでは、すべての配信でタイム・ゾーンを更新する簡単な方法が必要です。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 配信のモニターをクリックします。

Type	Name	Owner	Last Run	Next Run	Repeats	Status	Change action menu for a delivery
<input checked="" type="checkbox"/>	📧 Overtime by Empl...	ROSIE...	2/27/2024, 12:32:52 PM		Once	Failed	Show details... 
<input type="checkbox"/>	📧 Students per Instr...	ROSIE...	2/27/2024, 12:30:01 PM		Once	Disabled	Inspect Suspend Disable Edit Change Delete

「変更」メニューは管理者のみが使用できます。必要な権限を持っていない場合、管理者に依頼して変更してもらってください。

3. 配信の所有者を変更するには、配信の「アクション」メニューをクリックして、「変更」、「所有者」の順に選択します。

一度に複数の配信を変更するには、[Shift]を押しながらクリック、または[Ctrl]を押しながらクリックして必要なすべての配信を選択し、右クリックして「変更」、「所有者」の順に選択します。

- a. 新しい所有者の名前の入力を開始してユーザーを検索します。ワイルドカードとして*を使用します。

または、「自分に割当て」をクリックして自分自身を新しい所有者にします。

Change Owner

Change the owner for the selected delivery.

Change owner to

[Assign to me](#)

- b. 「所有者の変更」をクリックします。
- c. 現在の所有者と配信の RunAs ユーザーが同じである場合、新しい所有者が新しい RunAs ユーザーになります。「OK」をクリックして確認し、必要に応じて RunAs ユーザーの変更を許可します。

RunAs ユーザーが変更される場合、新しい RunAs ユーザーのデータおよびオブジェクト・セキュリティをよく確認して、必要なアクセス・レベルが適用されるようにしてください。

4. 配信のタイム・ゾーンを変更するには、配信の「アクション」メニューをクリックして、「**変更**」、「**タイム・ゾーン**」の順に選択します。

一度に複数の配信を変更するには、**[Shift]**を押しながらクリック、または**[Ctrl]**を押しながらクリックして必要なすべての配信を選択し、右クリックして「**変更**」、「**タイム・ゾーン**」の順に選択します。

- a. 選択した配信の新しいタイム・ゾーンを選択します。
- b. 特定のタイム・ゾーンのみを変更するには、「**選択した配信のうち、特定のタイムゾーンの配信のみを変更**」を選択し、変更するタイム・ゾーンを選択します。

すべての配信で新しいタイム・ゾーンを使用する場合は、チェック・ボックスを選択しないでください。

- c. 「**タイムゾーンの変更**」をクリックします。

配信スケジュールの復元および有効化

コンテンツをスナップショットから復元する、またはコンテンツを異なる環境から移行すると、スナップショット内のエージェント、分析およびダッシュボードに対して定義された配信スケジュールは、すぐには復元またはアクティブ化されません。システムで配信を復元する準備ができたなら、システムで配信スケジュールを有効にするか無効にするかを決定できます。これは、コンテンツの配信をすぐに開始したくない場合に便利です。

たとえば、本番環境を復元する場合、おそくできるだけ早く配信を再開したいでしょう。一方、テスト環境では、復元後に配信を無効にし、後日アクティブ化することもできます。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックし、「**コンソール**」をクリックします。
2. **配信のモニター**をクリックします。
3. 配信を復元するには、ページの「**アクション**」メニューをクリックし、「**配信のリストア**」を選択します。
4. 配信を復元してアクティブ化するか、配信を復元のみするかを選択します。次のいずれかを選択します:

- **配信スケジュール・ステータスの維持**

すべての配信スケジュールはステータス(有効または無効)を維持します。

- 既存の配信スケジュールに変更はありません。
- 復元プロセス中に作成された新しい配信スケジュールは、対応するエージェント、分析またはダッシュボードで定義されたスケジュール・ステータスを継承します。

たとえば、このオプションは、配信をただちにアクティブにする本番環境で配信を復元する場合に便利です。

- **新規配信の配信スケジュールの無効化**

エージェント、分析およびダッシュボードの復元プロセス中に作成された配信スケジュールは、無効になります。既存の配信スケジュールに変更はありません。

たとえば、このオプションは、配信をただちにアクティブにする必要がないテスト環境で配信を復元する場合に便利です。

- **すべての配信スケジュールの無効化およびすべての履歴の削除(非推奨)**

復元プロセス中にすべての配信スケジュールは無効になり、配信履歴はすべて削除されます。

- 既存の配信スケジュールは無効になります。
- 復元プロセス中にエージェント、分析およびダッシュボードに対して作成された新しい配信スケジュールは、無効になります。
- 配信の履歴の詳細は使用できなくなります。

このオプションはお薦めしません。このオプションを選択した場合、すべてのエージェント、分析およびダッシュボードの配信スケジュールを、手動で有効にする必要があります。

5. 「**リストア**」をクリックします。
6. 配信をアクティブ化するには、配信の「**アクション**」メニューをクリックし、「**有効化**」を選択します。

一度に複数の配信をアクティブにするには、**[Shift]**を押しながらクリック、または**[Ctrl]**を押しながらクリックしてアクティブにするすべての配信を選択し、右クリックして「**有効化**」を選択します。

必要な場合、「**編集**」をクリックして、配信スケジュールを再定義します。

コンテンツを配信するデバイスのタイプの管理

Oracle Analytics Cloud は、様々なデバイスにコンテンツを配信できます。ユーザーがコンテンツの受信を希望しているデバイスがリストにない場合は、組織にデバイスをさらに追加できます。AT&T Wireless など、デフォルトのデバイスを編集または削除することはできません。

1. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロフィール・アイコン、「**管理**」の順にクリックします。
2. 「**デバイス・タイプの管理**」をクリックします。
3. 新しいデバイスのタイプを定義するには:
 - a. 「**新規デバイス・タイプの作成**」をクリックします。
 - b. デバイスに関する情報を入力し、「**OK**」をクリックします。

4. 追加したデバイスを編集するには:
 - a. 「編集」をクリックします。
 - b. 変更を追加し、「OK」をクリックします。
5. 追加したデバイスを削除するには:
 - a. 「削除」をクリックします。
 - b. 「OK」をクリックして続行します。

分析対象のマップ情報の管理

この章では、ユーザーが複数のマップ全体のデータをビジュアル化して対話できるように、ダッシュボードおよび分析のマップ情報を設定する方法を説明します。

トピック:

- [ダッシュボードおよび分析のマップの設定](#)
- [ダッシュボードおよび分析の背景マップの編集](#)

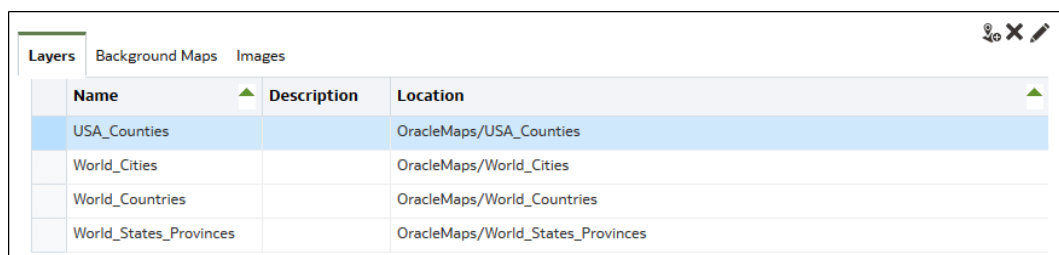
ダッシュボードおよび分析のマップの設定

管理者として、モデリングしたデータ列のマップにおける表示方法を定義します。マップ・データを構成した後、ユーザーはマップ・ビューでデータを分析できます。

マップ・ビューを使用すると、ユーザーは、マップ上のデータを異なるフォーマットで表示し、データと対話できます。管理者として、ビジネス・インテリジェンス・データと空間データとのマッピングを定義するメタデータを構成する必要があります。

形状定義などの空間機能は、インスタンスのデータベース管理者によって管理されます。特定の列値について形状ジオメトリ定義が存在しない場合、形状はマップに表示できず、マップのユーザー相互作用に影響を及ぼす場合があります。

1. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロファイル・アイコン、「管理」、「マップ・データの管理」の順にクリックします。
2. 「レイヤー」タブでツールバーから「レイヤーのインポート」をクリアします。



Name	Description	Location
USA_Counties		OracleMaps/USA_Counties
World_Cities		OracleMaps/World_Cities
World_Countries		OracleMaps/World_Countries
World_States_Provinces		OracleMaps/World_States_Provinces

3. 「レイヤーのインポート」ダイアログで、使用するレイヤーを選択して「OK」をクリックします。
4. 「レイヤー」タブに戻ってレイヤーを選択し、「レイヤーの編集」ボタンをクリックします。
5. 「レイヤーの編集」ダイアログで、ユーザーがマップ・ビューでデータを表示できるようにレイヤーを列に関連付けます。

- a. 「名前」で、マップ・ビューを使用するユーザーに表示するレイヤー名を指定します。
- b. 「場所」で、レイヤーの基となる背景マップを指定します。別のレイヤーを選択するには、「場所」をクリックします。
- c. 「説明」で、ユーザーが「マップ・フォーマット」領域でレイヤー名にカーソルを合せたときに表示される情報を指定します。
- d. 「レイヤー・キー」で、データに関連付けることができる空間データの列を指定します。各列の値は、背景マップに基づく形状に対応しています。たとえば、MY_CITIES レイヤーに CITY というレイヤー・キーが使用される場合があります。デフォルト値は最も妥当な値です。リストから適切な列を選択します。

メキシコなどの国がマップ上に白いエリアとして描画される理由は様々です。

- 列にメキシコの値として null 値が含まれているが、空間列にはメキシコの形状が存在する。
 - 列にメキシコの値が含まれているが、空間列にはメキシコの形状が存在しない。
 - 列にメキシコの値が含まれており、空間列にメキシコの形状が存在するが、名前が一致しない。たとえば、データ列の値が MEX で空間列の値が MXC の場合など。
- e. 「BI キー区切り」で、キーを形成するデータ列の結合用デリミタとして機能する単一の ASCII 文字(カンマまたはアンダースコアなど)を確認します。この値は、1つのキーに対して複数の列が指定されている場合のみ使用できます。
 - f. 「ジオメトリ・タイプ」で、レイヤーが多角形レイヤー、ポイント・レイヤーまたは線ジオメトリ・レイヤーのいずれであるかを指定します。選択したタイプは、ユーザーがレイヤーに適用できる書式設定に影響します。
 - g. 「BI キー列」領域で、レイヤーに関連付ける必要があるデータの列を指定します。単一のレイヤーに複数の列に関連付けることができます。1つのサブジェクト領域または複数のサブジェクト領域から、複数の列を選択できます。選択した列およびデリミタは、「レイヤー・キー」値の名前と完全に一致する必要があります。たとえば、「レイヤー・キー」値が STATE_CITY であるとします。BI データ列の STATE および CITY を選択し、「BI キー区切り」フィールドでアンダースコアを指定する必要があります。

この領域では次の様々なオプションを使用できます。

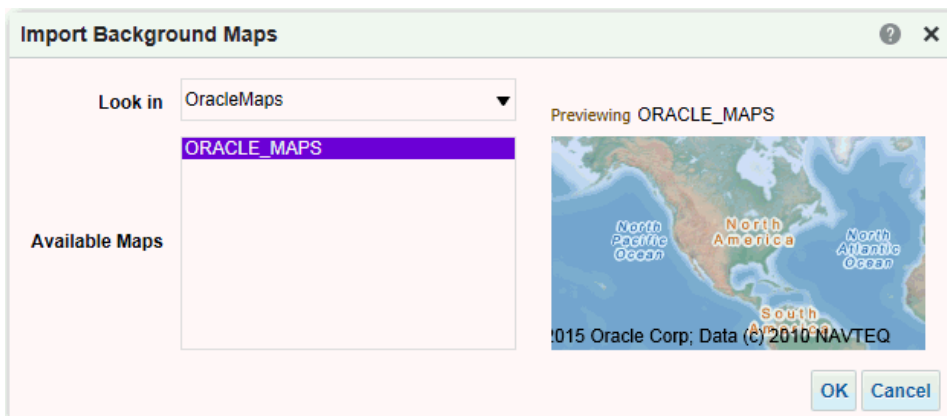
- **追加** - 使用可能なサブジェクト領域のリストが表示されます。サブジェクト領域を選択し、レイヤーに関連付ける必要があるすべてのデータ列を選択します。
- **削除** - 選択したキー列が削除されます。
- **編集** - レイヤーに関連付けられたデータ列を編集できます。

コンテンツ設計者によってマップ・ビューが作成されると、マップ・ビューの基礎としてデフォルトのメイン・マップが選択されます。メイン・マップに関連付けられているレイヤーに分析のデータ列が1つでも関連付けられている場合、メイン・マップがデフォルトで選択されます。

- h. 「修飾名の表示」で、「BI キー列」領域に列の完全修飾名を表示するか、単純に列名を表示するかを指定します。
6. 「OK」をクリックし、ダイアログを閉じます。

- 「背景マップ」タブをクリックしてから、「**背景マップのインポート**」ボタンをクリックします。
- 「背景マップのインポート」ダイアログで、「**対象**」フィールドの接続および使用するメイン・マップを選択し、「**OK**」をクリックします。

メイン・マップに対して選択する接続は、レイヤーまたはイメージの接続とは別でも構いません。



- 背景マップを準備するために必要なステップは、[背景マップの編集](#)を参照してください。

背景マップおよびマップ・レイヤーを追加した後、その情報を使用してマップの静的イメージを作成できます。静的イメージは、コンテンツ・デザイナーおよびマップ・ビューを操作するユーザーに対して表示されます。

ダッシュボードおよび分析の背景マップの編集

ダッシュボードおよび分析のマップ・ビューで、ユーザーがシームレスな操作性を得られるように、背景マップを編集します。

背景マップは非インタラクティブ・マップで、マップ・ビューの基礎として機能します。衛星イメージまたは道路地図が表示される場合があります。背景マップにより、マップ・ビューでのレイヤーの順序が指定されます。

マップ・レイヤーの順序付けは非常に重要です。ユーザーがマップ上を移動(ドリルおよびズーム)する際にシームレスな操作性が得られるよう、細心の注意を払う必要があります。「背景マップの編集」ダイアログで、各レイヤーに最小および最大ズーム範囲を割り当てます。マップのズーム・スライダを下から上へ垂直方向にのみスライドできる場合、ズーム・レベルが最小のレイヤーはスライダの一番下に置かれます。ズーム・レベルが最小のレイヤーをリストの一番下に置くようにするため、このダイアログの「インタラクティブな BI レイヤー」セクションのレイヤー・グリッドが類似パターンに従っていることを確認します。

レイヤーのズーム範囲がスケール上で交差していない場合、レイヤーの順序付けは重要でなくなります。レイヤーの最小および最大ズーム範囲が共通している場合、順序付けは非常に重要となります。ドリルまたはズーム操作中に詳細レイヤーが集計レイヤーの陰に隠れないように注意してください。

- クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロフィール・アイコン、「**管理**」、「**マップ・データの管理**」の順にクリックします。
- 「**背景マップ**」タブをクリックしてマップを選択してから、「**背景マップの編集**」ボタンをクリックして「背景マップの編集」ダイアログを表示します。

3. マップの名前および説明を指定します。これは、マップ・ビューの編集時にリストからマップを選択したときに、マップのツールチップとして表示されます。
4. 「場所」フィールドに、データ・ソースにある背景マップの場所が表示されます。別のマップに変更するには、「場所」ボタンをクリックします。含まれるズーム・レベルの数が異なる背景マップを選択すると、マップに関連付けられているレイヤーにあわせて範囲が自動的にスケーリングされて調整されます。
5. 「**レイヤーの追加**」ボタンをクリックして、インポートされたレイヤーのリストを「レイヤー」タブに表示し、マップに追加するレイヤーを選択します。「レイヤー」タブのすべてのレイヤーが背景マップに追加されている場合、このボタンは使用できません。

マップ定義の一部であるレイヤーを追加した場合、レイヤーはデフォルトのズーム・レベルで表示されます。レイヤーがマップ定義に含まれない場合は、ズーム・レベルを指定します。

レイヤーは、マップへの適用順序に基づいて下から上へリストされます。たとえば、国、州、市区町村という順序になります。通常、下位レイヤーの方がズーム・レベルが低くなります。たとえば、州レイヤーと市区町村レイヤーでは、州のズーム・レベルが市区町村より低くなります。

Interactive BI Layers and Feature Layers
For each layer, select the zoom levels at which it can be displayed.

	Zoom Level																		
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
World_Cities																			
World_States_Provinces																			
World_Countries																			
USA_Counties																			

BI Layer Feature Layer

6. 「**ズーム・レベルによるレイヤーのソート**」ボタンをクリックして、マップの表示モードに基づいてレイヤーを昇順または降順にリストします。レイヤーが適切な順序でリストされている場合、このボタンは使用できません。

ここで指定したソート順は、マップでのレイヤーの適用順序には影響しません。ただし、ズーム・レベルに影響します。たとえば、州レイヤーのズーム・レベルが 1 から 3 で、市区町村レイヤーが 4 から 9 のようになります。下位レイヤーの方が、ズーム・レベルの数値が低くなります。指定したズーム・レベルは、マップのズーム・スライダに表示される目盛マークに対応します。

レイヤーの編集ダイアログを使用して列に関連付けられたレイヤーと、関連付けられていないレイヤーの両方を含めることができます。BI レイヤーは、非 BI レイヤーより必ず上位の順序にしてください。非 BI レイヤーが BI レイヤーより上位の順序になっていると、マップでは、下位の BI レイヤーの上に非 BI レイヤーが表示されるので、BI レイヤーがインタラクティブでなくなります。

7. 「**レイヤー表示をオンにする**」または「**レイヤー表示をオフにする**」ボタンをクリックして、マップでのレイヤーの表示モードを制御します。これらのボタンを使用して、このダイアログの「プレビュー」マップのみでレイヤーを表示するかどうか

を指定します。マップ・ビューではレイヤーは表示されます。表示モードをオフに設定しても、レイヤーのズーム・レベルを変更できます。

8. レイヤーのズーム・レベルの下にあるセルをクリックすると、ズーム・レベルに次のように影響します。
 - 青いセルの間にある青いセルをクリックし、「**次より前をクリア**」および「**次より後をクリア**」ボタンを使用してポップアップ・メニューを表示すると、どちらかの方向のズーム・レベルを変更できます。たとえば、ズーム・レベル 4 のセルをクリックして右の消しゴムをクリックすると、そのズーム・レベルに関して、右にあるすべてのセルがクリアされます。
 - 一連の青いセルの端にあるセルをクリックすると、そのセルが白に変わり、ズーム・レベルの一部ではなくなったことを示します。
 - 白いセルをクリックすると、既存の青いセルの片側で、ズーム・レベルが増加します。たとえば、4 から 6 のセルがズーム・レベルを反映する青色であるとします。ここで 2 のセルをクリックすると、ズーム・レベルは 2 から 6 になります。

レイヤーに対してズーム・レベルを設定しない場合、レイヤーはマップに表示されません。

9. レイヤー名の横にある「アクション」アイコンをクリックして表示されるメニューでは、次の様々な選択が可能です。
 - **削除** - この背景マップからレイヤーを除去します。削除したレイヤーは「レイヤー」タブでは引き続き使用可能なため、この領域に追加できます。
 - 「**上に移動**」または「**下に移動**」 - レイヤーを上下に移動して、マップへのレイヤーの適用順序を指定できます。
 - **デフォルト表示にリセット** - このレイヤーの現在の表示範囲を、基礎となるマップ定義で定義されたとおりにリセットします。レイヤーがネイティブにマップに関連付けられていない場合、このオプションはそのレイヤーに対して無効になります。
10. ズーム・レベルのボックス列を囲む黄色の境界を使用して、マップ領域に現在表示されているズーム・レベルを判別します。
11. パンおよびズーム・コントロールを使用して、ユーザーに対するマップの表示方法を指定します。ズーム・スライダにカーソルを移動すると、そのズーム・レベルに現在関連付けられているレイヤーの名前を示す、ツールチップが表示されます。
12. 「OK」をクリックします。

別の言語への切替え

Oracle Analytics では、様々な言語がサポートされています。

- Oracle Analytics では、どのような言語がサポートされていますか。
- 何が翻訳されていますか。
- 翻訳されていないものは何ですか。
- 自分の言語はどのようにして選択しますか。
- 自分の言語のドキュメントはどのようにして検索しますか。

Oracle Analytics では、どのような言語がサポートされていますか。

Oracle Analytics では、28 の言語がサポートされています。

アラビア語、中国語(簡体字)、中国語(繁体字)、クロアチア語、チェコ語、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、フランス語(カナダ)、ドイツ語、ギリシャ語、ヘブライ語、ハンガリー語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語(ブークモール)、ポーランド語。ポルトガル語。ポルトガル語(ブラジル)、ルーマニア語、ロシア語、スロバキア語、スロベニア語、スペイン語、スウェーデン語、タイ語、トルコ語。

何が翻訳されていますか。

- **ユーザー・インターフェース:** Oracle Analytics では、メニューやボタン、メッセージ、ユーザー・インターフェースのその他の要素のテキストが翻訳されています。
- **自動生成テキスト:** ユーザーが作成したコンテンツの自動生成テキストも、一部翻訳されます。たとえば、ビジュアライゼーションや分析、ダッシュボード、ピクセルパーフェクト・レポートなどに表示される自動的に生成されたタイトルやフィルタです。
- **ユーザー・ガイド:** いくつかのユーザー・ガイドが翻訳されています。

翻訳されていないものは何ですか。

英語でしか使用できない機能がいくつかあります。

- 分析、ダッシュボードおよびピクセルパーフェクト・レポート:
 - ワークブックのユーザー定義のタイトルやテキスト(翻訳することを選択していない場合)。[カタログ・キャプションのローカライズ](#)を参照してください。
 - データ・ソースが基になっている列名(セマンティック・モデルで、列名の翻訳を設定していない場合)。
- データ・ビジュアライゼーション・ワークブック:
 - ワークブックのユーザー定義のタイトルやテキスト。
 - 「収益」など、データ・ソースが基になっている列名。ワークブックがサブジェクト領域に基づいておらず、セマンティック・モデルで、列名の翻訳を設定していない場合。
 - 言語の説明ビジュアライゼーション用に生成されるテキストは、英語またはフランス語でのみ使用可能です。Oracle Analytics では、フランスのロケール(fr および fr-CA)をフランス語にマップし、他のすべてのロケールを英語にマップします。
 - ワークブックのデフォルト名。選択した言語が英語の場合、ワークブックのデフォルトの名前は *Untitled* です。イタリア語など、別の言語を使用する場合、ワークブックを保存する際のデフォルト名は、*Untitled* に相当するイタリア語です。ただし、ワークブックを保存した後に、名前をその言語で修正します。別の言語でサインインしても、ワークブック名は変更されません。
- データセット:
 - ユーザーがアップロードした Microsoft Excel のスプレッドシートの列名。
 - データ・ソースが基になっている列名。

自分の言語はどのようにして選択しますか。

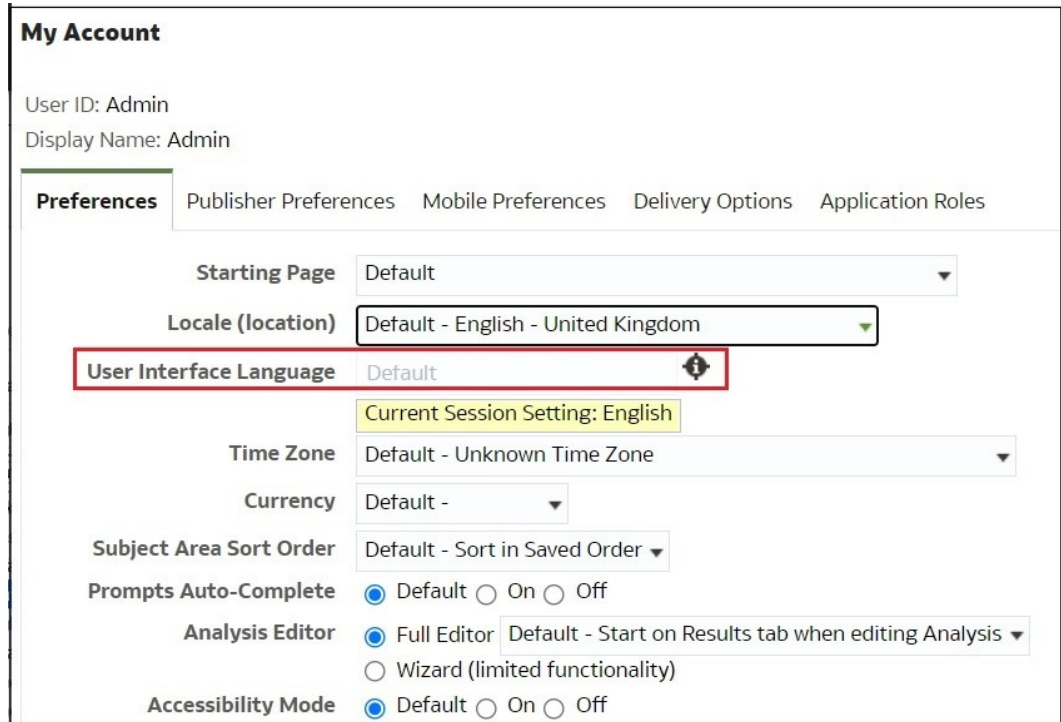
いくつかの方法があります:

- ブラウザの設定で言語を選択します。

ブラウザのドキュメントを参照してください。

- (クラシック・ページのみ)クラシック・ホーム・ページからアクセス可能な、「マイ・アカウント」の「プリファレンス」タブで言語を選択します。

プリファレンスの設定を参照してください。




My Account

User ID: Admin
Display Name: Admin

Preferences Publisher Preferences Mobile Preferences Delivery Options Application Roles

Starting Page Default

Locale (location) Default - English - United Kingdom

User Interface Language Default 

Current Session Setting: English

Time Zone Default - Unknown Time Zone

Currency Default -

Subject Area Sort Order Default - Sort in Saved Order

Prompts Auto-Complete Default On Off

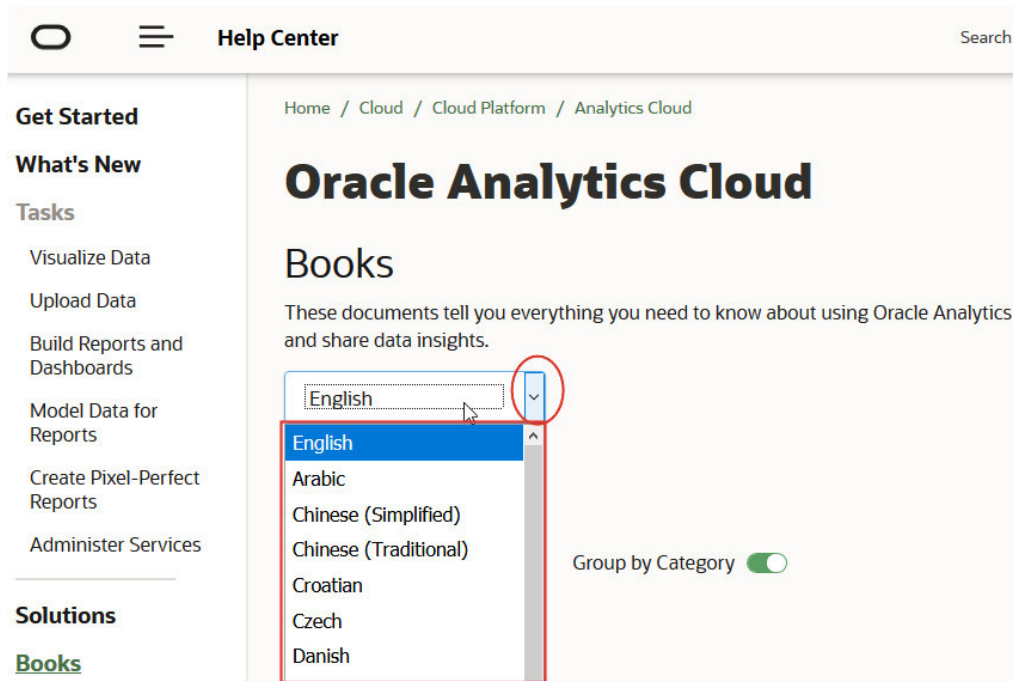
Analysis Editor Full Editor Default - Start on Results tab when editing Analysis Wizard (limited functionality)

Accessibility Mode Default On Off

自分の言語のドキュメントはどのようにして検索しますか。

ほとんどの場合、Oracle Analytics で「ヘルプ」をクリックすると、ユーザー・インタフェースと同じ言語でユーザー支援が表示されます。たとえば、フランス語で作業している場合、ヘルプはフランス語で表示されます。

Oracle Analytics のいくつかのユーザー・ガイドは、ユーザー・インタフェースと同じ 28 言語に翻訳されています。お客様の言語に翻訳されているドキュメントを検索するには、[Oracle Help Center](#) で使用している Oracle Analytics 製品に移動し、「ブック」タブを選択して言語を選びます。



クラウド・ストレージ・パスワードの更新

Oracle Analytics Cloud では、分析データセットおよびバックアップをクラウド・ストレージに格納します。クラウド・ストレージ・コンテナへのアクセスに必要な資格証明が変更されたり有効期限が切れた場合、ユーザーに対してストレージ・サービスへの接続に失敗しました。ユーザーおよびパスワードが正しいことを確認してくださいというメッセージが表示されます。このような場合、管理者はストレージ・パスワードを更新できます。これを行う方法は、Oracle Analytics Cloud サービスを Oracle が管理しているか顧客が管理しているかによって異なります。

トピック:

- [Oracle が管理するサービスのクラウド・ストレージ・パスワードの更新](#)
- [顧客が管理するサービスのクラウド・ストレージ・パスワードの更新](#)

Oracle が管理するサービスのクラウド・ストレージ・パスワードの更新

使用している Oracle Analytics Cloud が Oracle によって管理されている場合は、コンソールからクラウド・ストレージ・パスワードを更新できます。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**接続**」をクリックします。
3. 「**クラウド・ストレージ・パスワードの更新**」をクリックします。
4. **ストレージ・パスワード**を入力します。
5. 「**保存**」をクリックします。

顧客が管理するサービスのクラウド・ストレージ・パスワードの更新

Oracle Analytics Cloud が顧客が管理するサービスの場合は、Oracle Cloud Infrastructure コンソールにサインインして、クラウド・ストレージ資格証明を更新し、サービスを再起動する必要があります。必要な権限を持っていない場合は、サービス管理者に問い合わせてください。

Oracle Analytics Cloud - Classic の管理の資格証明の管理を参照してください。

プレビュー機能を使用可能にする方法

プレビュー機能を使用すると、組織では、新しい機能が標準機能として提供される前に、探索して試すことができます。プレビュー機能は、デフォルトで無効にする(「システム設定」ページ)ことも、プレビューであると明示することもできます。管理者は、コンソール(「システム設定」)に移動し、他のユーザーが使用できるように個々のプレビュー機能をオンに切り替えることができます。

デフォルトで無効になっている機能について「システム設定」ページで確認するには、[プレビュー・オプション](#)を参照してください。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「システム設定」をクリックします。
3. 「プレビュー」をクリックします。
4. これらの機能を組織で使用できるようにする場合は、プレビュー・オプションを有効にします。
5. 必要に応じて、「適用」をクリックします。

この変更が有効になるまで、最大 10 分待ちます。プレビュー機能を有効にした後、ユーザーがそれを使用するには、サインアウトしてサインインする必要があります。

5

コンテンツの管理および使用状況のモニター

このトピックでは、Oracle Analytics Cloud をモニターしコンテンツを管理する管理者によって実行されるタスクについて説明します。

トピック:

- [コンテンツを管理して使用状況をモニターするための一般的なワークフロー](#)
- [コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理](#)
- [使用されていないデータセットの削除](#)
- [Oracle BI Enterprise Edition 12c からのコンテンツの移行](#)
- [ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター](#)
- [テスト SQL 問合せの実行](#)
- [コンテンツの管理](#)

コンテンツを管理して使用状況をモニターするための一般的なワークフロー

次に、コンテンツおよび使用状況を管理する Oracle Analytics Cloud 管理者の一般的なタスクを示します。

タスク	説明	詳細情報
コンテンツのバックアップと復元	スナップショットというファイルを使用して、セマンティック・モデル、カタログ・コンテンツおよびアプリケーション・ロールをバックアップおよび復元します。	スナップショットの作成および復元
コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理	ユーザーが検索時に常に最新情報を検索できるように、コンテンツの索引付けおよびクローリングの方法を設定します。	コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理
記憶域スペースの解放	他のユーザーにかわってデータ・ソースを削除して記憶域スペースを解放します。	使用されていないデータセットの削除
Oracle BI Cloud Service からの移行	Oracle BI Cloud Service からコンテンツを移行します。	Oracle Business Intelligence Cloud Service からのコンテンツの移行
Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 12c からの移行	レポート・ダッシュボードと分析、セマンティック・モデルおよびアプリケーション・ロールを移行します。	Oracle BI Enterprise Edition 12c からのコンテンツの移行
Oracle Analytics Server からのセマンティック・モデルのアップロード	Oracle Analytics Server からセマンティック・モデルをアップロードおよび編集します	Oracle Analytics Server からのセマンティック・モデルのアップロード クラウドでのセマンティック・モデルの編集

タスク	説明	詳細情報
ユーザー・セッション情報の管理	SQL 問合せおよびログの分析によって、サインインしているユーザーをモニターしたり、分析に関する問題をトラブルシューティングします。	ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター

コンテンツの索引付けおよび検索の方法の管理

ユーザーがホーム・ページで検索バーから検索を実行したとき、またはビジュアライゼーションを作成するときに最新のコンテンツが見つかるように、管理者はカタログ・コンテンツの索引付けおよびクロール方法を設定できます。

トピック

- [検索索引付けの構成](#)
- [定期的なコンテンツ・クロールのスケジュール](#)
- [検索クロール・ジョブのモニター](#)
- [ユーザーがホーム・ページからデータセットを検索できるようにするためのデータセットの認証](#)

検索索引付けの構成

ユーザーがホーム・ページの検索バーからデータを検索またはビジュアル化する際に、コンテンツを簡単に検出できるように、カタログおよびセマンティック・モデルがクロールされます。

「検索索引」ページの「**データ・モデル**」ペインは、どのサブジェクト領域に索引付けするかを制御します。アップロードされたファイルベースのデータセットの索引付けは、「検査」ダイアログで制御されます。ファイルベース・データセットの索引付けを参照してください。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「検索索引」をクリックします。
3. サブジェクト領域列を検索する際にユーザーが最新情報を参照するには、「データ・モデル」ペインで、「データ・モデル・クロールの有効化」を選択し、「索引付け対象データ・モデルの選択」および「クロール・ステータス」列を使用して、索引付けの対象のサブジェクト領域およびディメンションを参照し、指定します。有用な検索結果の作成に必要な項目のみを選択します。すべての項目に索引付けすると、類似した検索結果が数多く生成されます。
 - ディメンションおよびメジャーの名前だけに索引付けするには、「**メタデータのみ索引付け**」を選択します。これはデフォルト設定です。
 - ディメンション名、メジャー名および値に索引付けするには、「**索引付け**」を選択します。値の索引付けでは、ホーム・ページの検索バーからデータ値をビジュアル化するユーザーに対して追加機能が提供されます。このオプションを選択すると、セマンティック・モデルのすべてのサブジェクト領域のすべての列の値に索引付けされるため負荷がかかる場合があることに注意してください。

4. ホーム・ページを使用してカタログ・コンテンツ(ワークブック、分析、ダッシュボードおよびレポート)を検索する際にユーザーが最新情報を参照するには、「**カタログ**」ペインで、索引付けする対象を指定します。ほとんどの場合、このタブ内の設定を変更する必要はありません。
 - 「**ユーザー・フォルダの索引付け**」フィールドが選択されていることを確認します。このオプションを選択解除しないことをお勧めします。選択解除した場合、カタログ内のフォルダは索引付けされず、ホーム・ページ検索で、非常に限られた結果が返されることや、場合によっては結果が返されないことがあります。
 - 索引付けする、または索引付けしないフォルダ、サブフォルダおよび項目を参照および指定するには、**カタログ・オブジェクト(共有フォルダ)**リストを使用します。有用な検索結果の作成に必要な項目のみを選択します。すべての項目に索引付けすると、類似した検索結果が数多く生成されます。
 - 項目をユーザーに対して非表示にする手段として、「**クロール・ステータス**」フィールドを「**索引付けしない**」に設定することはお勧めしません。項目は検索結果またはホーム・ページ上に表示されませんが、項目にアクセスすることはできます。かわりに、権限を使用して適切なセキュリティを項目に適用します。

定期的なコンテンツ・クロールのスケジュール

管理者は、クロールの対象にするフォルダの選択とコンテンツのクロール時間および頻度のスケジュールを行います。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックし、「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**検索索引**」をクリックします。
3. 「**データ・モデル**」または「**カタログ**」を選択します。
4. 「**スケジュール**」オプションを使用してクロールの実行日時および頻度を指定します。

ユーザーがカタログ・コンテンツを追加または変更すると、索引が自動的に更新されません。

デフォルトでは、セマンティック・モデル・クロールは、毎日 1 回実行され、カタログ・クロールは毎週 1 回実行されます。

通常、このデフォルトを変更する必要はありません。ただし、場合によっては必要に応じてクロールをスケジュールすることがあります(BAR ファイルのインポート後、または自動索引付けが実行されなかったなど)。

5. 「**言語**」で、索引付けの対象にするすべての言語を選択します。

クロールの結果は、指定した言語の索引に追加されます。たとえば、会社の本社が米国にあり自分の事務所がイタリアにある場合、英語とイタリア語を選択し、英語とイタリア語の両方の索引を作成できます。
6. 「**保存**」アイコンをクリックして、変更内容を保存します。

検索クローल・ジョブのモニター

管理者は、コンテンツに最後に索引付けされた時間を確認して、クローल・ジョブをモニターできます。実行中のクローल・ジョブを停止したり、次にスケジュールされているクローल・ジョブを開始する前に取り消したり、失敗したクロールを再実行したりできます。

ユーザーから検索の問題が報告された場合、クロールのステータスをチェックしてそれが現在のものであることを確認してください。クロールの完了後、状況によっては、最新のコンテンツを検索できるようになるまで数分間待機する必要があります。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「検索索引」をクリックします。
3. 「クロールのモニター」をクリックします。


クロール・ジョブ・ステータス・ページに、過去、現在および次にスケジュールされているクロールに関する情報が表示されます。「進行状況」列の XSA はデータセットを示します。

4. 「ステータス」列を見て、コンテンツが最後にクロールされた時間および次にクロールされる時間を確認します。
5. 実行中またはスケジュール済のクロール・ジョブを停止するには、「取消」をクリックします。
6. ステータスが「終了」または進行状況の合計がゼロのクロールを再実行するには:
 - a. 「クロールの構成」リンクをクリックします。
 - b. 「データ・モデル」タブで、「データ・モデル・クロールの有効化」チェックボックスを選択解除し、再度選択します。
 - c. 「保存」をクリックします。
 - d. 「クロールのモニター」リンクをクリックし、スケジュール済のジョブを見つけます。修正されたクロールが数分以内に実行されます。

ユーザーがホーム・ページからデータセットを検索できるようにするためのデータセットの認証

ユーザーがアップロードしたデータセットを、他のユーザーがホーム・ページから検索バーを使用して検索できるように認証します。

データセットの索引付けはシステム・パフォーマンスに影響を及ぼす可能性があるため、管理者は、認証を使用してその計算に要する時間を制御します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックして、「データ」をクリックし、「データセット」をクリックします。
2. 認証するデータセットにカーソルを合せ、「オプション」、「検査」の順にクリックします。

「オプション」が表示されない場合は、ブラウザのサイズを大きくするか、デバイス画面の右側にスクロールします。

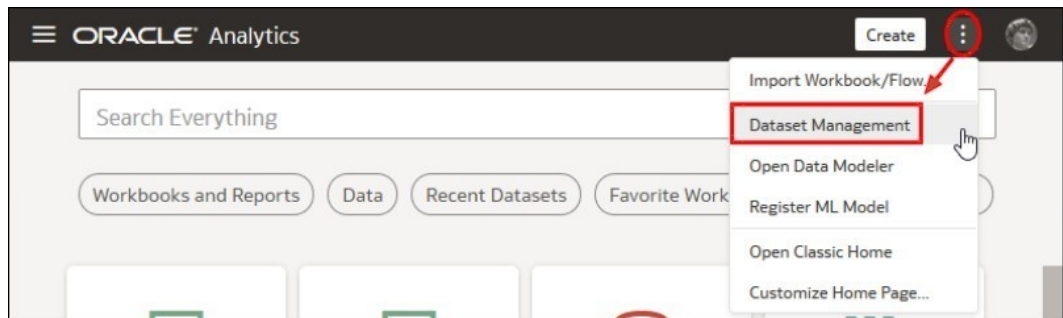
3. 「一般」タブで、「認証」をクリックします。

- 「検索」タブで、「**検索用のインデックス・データ・セット**」をクリックして索引付けのレベルを選択します。
- 「検索」タブの他のオプションを使用して、言語および索引付け頻度を指定します。

使用されていないデータセットの削除

データ・ファイル用の記憶域の固定割当て容量がサービスに含まれています。管理者はときどき他のユーザーにかわってデータセットを削除して記憶域スペースを解放し、サービスが正しく機能するようになる必要がある場合があります。たとえば、ユーザーがデータ・ファイルをアップロードした後、退職したためにアカウントが無効になる場合があります。

- ホーム・ページの「ページ」メニューをクリックし、「**データセット管理**」を選択します。



- スペースを解放するには、削除するファイルがあるユーザーの「**オプション**」メニューをクリックします。

A screenshot of the 'Dataset Management' page in Oracle Analytics. The page shows storage usage information: '104.5MB of 250GB Used'. Below this is a table with columns for 'Users', 'Quota', and 'Usage'. The table lists several users and their respective storage usage. A search bar is visible in the top right corner of the table area.

Users	Quota	Usage
Admin	50GB	96.8MB
john@abc.com	50GB	7.4MB
mary@abc.com	50GB	27.1MB
Sales	50GB	12.8MB

- 次のいずれかのオプションを選択します:
 - 非共有(プライベート)データ・ファイルを削除する場合は、「**プライベートの削除**」。
 - すべてのデータ・ファイルを削除する場合は、「**すべて削除**」。

Oracle BI Enterprise Edition 12c からのコンテンツの移行

BAR ファイルを使用して、Oracle BI Enterprise Edition 12c からセマンティック・モデル、ダッシュボード、分析およびアプリケーション・ロールを移行します。

移行プロセス全体を理解するには、移行ガイド *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の Oracle Analytics Cloud への移行* を参照してください。

WLST コマンド `exportarchive` を使用して移行するコンテンツを BAR ファイルに取得する方法の手順は、このガイドに記載されています。Oracle BI EE 12c からのコンテンツのエクスポートを参照してください。

他のカタログへのコンテンツの移行

管理者は、カタログ・アーカイブおよびアンアーカイブのオプションを使用して、カタログ・コンテンツをある環境から別の環境にコピーできます。アーカイブすると、コンテンツがローカル・ファイル・システム上の `.catalog` ファイルに保存されます。アンアーカイブすると、カタログ・ファイルから別のカタログ保存場所にコンテンツがアップロードされます。

トピック

- [カタログ・アーカイブへのコンテンツの保存](#)
- [カタログ・アーカイブからのコンテンツのアップロード](#)
- [カタログ・アンアーカイブ・タスクの進行状況のトラッキング](#)

カタログ・アーカイブへのコンテンツの保存

管理者は、カタログ・アーカイブ/アンアーカイブ機能を使用して、ある環境で作成したコンテンツを別の環境にコピーまたは移動できます。アーカイブすると、複数オブジェクトを含む 1 つ以上のオブジェクトまたはフォルダがローカル・ファイル・システム上の `.catalog` ファイルに保存されます。

異なる場所で、`.catalog` ファイルをアップロードできます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. 別のカタログにコピーまたは移動するフォルダやオブジェクトにナビゲートします。

フォルダを選択した場合は、そのフォルダ内のすべてのコンテンツが、サブフォルダも含めてカタログ・アーカイブ内に含まれます。

複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押したまま必要なオブジェクトをクリックします。

3. 「**詳細**」を選択し、次に「**アーカイブ**」を選択します。
4. 権限が存在する場合は、「**権限の保持**」を選択して権限設定を保存します。

このオプションを選択しない場合、権限は除外されます。これは、テスト環境からコンテンツを移行しており、テスト・ユーザーに割り当てた権限が本番システムで 1 つも必要ない場合に役立つ可能性があります。アンアーカイブ時には、コンテンツはターゲット・システム上の親フォルダから権限を継承します。

5. 「**タイムスタンプの保持**」を選択して、作成時間、最終変更時間および最終アクセス時間などの情報を保存します。

アンアーカイブ時には、タイムスタンプ情報は保持され、カタログ・アーカイブ内の項目よりも古い項目のみを上書きすることを選択できます。

「**タイムスタンプの保持**」を選択しない場合は、コンテンツのアンアーカイブ時にコンテンツの元の時間は保存されないか考慮されません。

6. 「**OK**」をクリックします。

7. 「**ファイルの保存**」を選択します。
必要に応じて、カタログ・ファイルの名前を変更します。
8. フォルダを選択して、「**保存**」をクリックします。

カタログ・アーカイブからのコンテンツのアップロード

管理者は、Oracle Analytics および Oracle BI Enterprise Edition 11.1.1.9.0 以降からコンテンツをアップロードできます。コンテンツの移動先となるカスタム・カタログ・フォルダを選択すると、BI コンシューマ権限がある場合には、「**アンアーカイブ**」オプションが表示されます。カタログ・アーカイブ(有効な任意の.catalog ファイル)を指して、そのコンテンツをこのフォルダにコピーします。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. ファイルのコンテンツのアンアーカイブ先となるカスタム・フォルダにナビゲートします。
3. 「**アンアーカイブ**」で「**参照**」をクリックしてアーカイブ・ファイルを選択します。
4. 「**置換**」で、オプションを選択します:
 - 「**なし**」: 既存コンテンツが上書きされることはありません。これはデフォルト設定です。
 - 「**すべて**」: 読取り専用マークされているコンテンツを除き、既存コンテンツは上書きされます。
 - 「**古い**」: 既存コンテンツは、ファイル内のコンテンツよりも古い場合に上書きされます。
 - 「**強制**」: すべてのコンテンツは上書きされます(新しいコンテンツや読取り専用マークされているコンテンツでも上書き)。
5. 「**ACL**」で、オプションを選択します。
6. 「**OK**」をクリックします。

レポートが機能するには、必要なすべての表およびデータが Oracle Analytics で使用できるようになっている必要があります。データをロードするか、Oracle Cloud データベースに格納されている場合は、データに接続します。

カタログ・アンアーカイブ・タスクの進行状況のトラッキング

管理者は、「**アンアーカイブ・タスク**」タブから開始したカタログ・アンアーカイブ操作の進行状況および現在のステータスをトラッキングできます。

大規模なカタログの場合、多少処理に時間がかかる可能性があります。このタブの情報を参照して、タスクの開始日時と完了日時を確認し、発生した可能性のあるエラーをトラブルシューティングしてください。

1. クラシック・ホーム・ページに移動します。
2. 「**マイ・プロファイル**」をクリックし、「**バックグラウンド・タスク**」を選択します。
3. 「**アンアーカイブ・タスク**」をクリックします。
タブが表示されない場合は、ブラウザのキャッシュをクリアします。

Submit Time	Archive File	Catalog Path	Status	Last Updated Time	# Objects Processed
3/4/2024 12:05:29 PM	Reports.catalog	/users/admin	Completed	3/4/2024 12:05:34 PM	23
3/4/2024 12:05:56 PM	04. Maps and Spot...	/shared/06. Advan...	Completed	3/4/2024 12:06:50 PM	197
3/4/2024 12:07:52 PM	admin(5).catalog	/shared/10. Lifec...	Failed	3/4/2024 12:07:52 PM	
3/6/2024 2:47:30 AM	shared_chrome_loc...	/users/admin	Completed	3/6/2024 2:52:43 AM	1577
3/7/2024 3:45:19 AM	chrome_full.catalog	/users/admin	Completed	3/7/2024 3:49:20 AM	2132
3/7/2024 3:55:48 AM	safari-2.catalog	/users/admin/Reports	Completed	3/7/2024 4:07:50 AM	3825

- ステータスを確認して、アンアーカイブ操作が完了したか、現在も進行中か、まだ開始されていないか(送信済)、なんらかの理由で失敗したかを参照します。

ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター

セッションの管理ページから、現在サインインしているユーザーに関する情報を表示して、レポート問合せをトラブルシューティングできます。

トピック:

- サインインするユーザーのモニター
- SQL 問合せおよびログの分析

サインインするユーザーのモニター

セッションの管理ページから、サービスにサインインしているユーザー数を確認したり、各ユーザーの詳細情報を表示できます。

- ユーザー ID:** ユーザーがサインインするときに入力した名前。
 - ブラウザ情報:** サインインに使用されたブラウザの情報。
 - ログオン:** ユーザーがサインインした時刻。
 - 最終アクセス:** このユーザーの最後のアクティビティのタイムスタンプ。別のページへの切替えなど、あらゆるアクティビティが対象です。
- Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
 - セッションおよび問合せキャッシュをクリックします。
 - 「セッション」セクションを探します。

ページ上部にある「セッション」セクションには、現在サインインしているユーザー数(セッションの合計数)、およびそのユーザーに関する詳細情報が表示されます。

- 特定のユーザーをモニターするには、「**セッション別にカーソルをフィルタ**」を選択します。
このユーザーに関する情報が「カーソル・キャッシュ」表に表示されます。
すべてのユーザーに関する情報を表示するには、「**フィルタのクリア**」をクリックします。
- 特定のユーザーに関するメッセージのログ方法を変更するには、リストから「**ログ・レベル**」を選択します。
デフォルトでは、ロギングは無効です。

SQL 問合せおよびログの分析

管理者は、個人がサービスを使用する際に実行した、基礎となる SQL 問合せリクエストを確認できます。

- ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**コンソール**」をクリックします。
- 「**セッションおよび問合せキャッシュ**」をクリックします。
- 「**カーソル・キャッシュ**」セクションを見つけ、そこに記録されている問合せ情報を確認します。[カーソル・キャッシュ表に記録される問合せ情報](#)を参照してください。
- オプション: 「**すべてのカーソルを閉じる**」をクリックして、カーソル・キャッシュ表の情報を削除します。
- オプション: 分析に対して実行しているすべてのリクエストを取り消すには、「**実行中のリクエストの取消し**」をクリックします。

カーソル・キャッシュ表に記録される問合せ情報

管理者は、個人がサービスを使用する際に実行した、基礎となる SQL 問合せリクエストを確認できます。

これらのオプションは分析およびダッシュボードにのみ適用されます。データ・ビジュアライゼーションには適用されません。

フィールド	説明
ID	各エントリに割り当てられる一意の内部識別子。
ユーザー	分析を実行して最後にキャッシュに配置したユーザーの名前。
参照	キャッシュに配置されてからこのエントリが参照された回数。
ステータス	このキャッシュ・エントリを使用する分析のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> 起動中 - 分析は実行を開始中です。 親を待機中 — 分析内のビューは、問合せのデータが返されるのを待機しています。 実行中 - 分析は現在実行中です。 終了 - 分析は終了しました。 キュー待機 - システムは、分析を処理できるように、スレッドが使用可能になるのを待機しています。 取消中 - アプリケーションは、分析の取消しを処理しています。 エラー — 分析の処理中または実行中にエラーが発生しました。エラーの詳細は、「文」列を参照してください。
時間	分析の処理および実行にかかった時間(1 秒刻みで表示)。値 0s (ゼロ秒)は、分析が完了するのに 1 秒かからなかったことを示します。

フィールド	説明
アクション	<p>クリックして分析を操作できるリンク。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 取消 - 分析を終了します。処理中の分析に対して表示されます。分析を実行しているユーザーは、分析が管理者によって取り消されたことを示す情報メッセージを受信します。 • 閉じる - この分析に関連付けられているキャッシュ・エントリをクリアします。完了した分析に対して表示されます。 • ログの表示 — この分析に対して実行された問合せのログが表示されます。 • 診断 — Oracle カスタマ・サポートと共有できる診断情報の HTML ページが表示されます。
最終アクセス	分析の要件を満たすためにこの分析のキャッシュ・エントリが最後に使用された時間のタイムスタンプ。
文	分析に対して実行された論理 SQL 文、または分析がエラーになった場合のエラーの性質に関する情報。
情報	使用状況トラッキング情報(例: 問合せを含む分析)。
レコード	結果セットに含まれるレコードのうち、表示されたレコードの数(たとえば、50+は、50 のレコードが表示されたが未フェッチの追加のレコードが存在することを示しており、75 は、75 のレコードが表示され未フェッチのレコードは存在しないことを示します)。

テスト SQL 問合せの実行

管理者は、基礎となるデータ・ソースに SQL 文を直接入力できます。この機能は、テストおよびデバッグの場合に便利です。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「SQL の発行」をクリックします。
3. SQL 文を入力します。例:

```
SELECT
    XSA('weblogic'. 'SalesTargets'). "Columns". "E1 Sales Rep Name" s_1
FROM XSA('weblogic'. 'SalesTargets')
```

4. 必要に応じて、「ロギング・レベル」を変更します。
5. Oracle Analytics プレゼンテーション・サービス・キャッシュの使用を選択します。
6. 「SQL の発行」をクリックします。

コンテンツの管理

管理者は、Oracle Analytics コンテンツをコンソールから管理できます。たとえば、従業員が組織から離れると、そのワークブックおよび機械学習モデルの所有権を別の従業員に割当てできます。

トピック

- [コンテンツ管理の概要](#)

- [コンテンツの所有権の変更](#)
- [ユーザーのプライベート・フォルダ内のコンテンツの所有権の変更](#)
- [コンテンツ管理に関するよくある質問](#)

コンテンツ管理の概要

Oracle Analytics により、Oracle Analytics コンテンツを表示、管理できます。たとえば、従業員が組織から離れると、そのワークブックおよび機械学習モデルを別の従業員に再割当てできます。

管理者として、「コンテンツ管理」ページを使用して、すべてのコンテンツ・タイプの所有権を表示、管理および変更できます。

Object Type	Type	Name	Object ID	Owner
<input type="checkbox"/> Workbook		My Dashboard	/@Catalog/users/weblogic/_portal	weblogic
<input type="checkbox"/> Dashboard		_portal - page 1	/@Catalog/users/weblogic/_portal/page 1	weblogic
<input type="checkbox"/> Analysis		Sessions Track by Hour	/@Catalog/shared/10. Lifecycle and Admin/Usage Tracking/Session Analsi...	prodney
<input type="checkbox"/> Report		Order Status Calculated Sum	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Scorecards/Related Documents/Orde...	prodney
<input type="checkbox"/> Folder		PT4_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT4_A	prodney
<input type="checkbox"/> Connection		PT3_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT3_A	prodney
<input type="checkbox"/> Dataset		PT2_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT2_A	prodney
<input type="checkbox"/> Data Flow		PT1_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT1_A	prodney
<input type="checkbox"/> Replication		2.32 Google Visuals - G. Sparklines	/@Catalog/shared/02. Visualizations/_portal/2.32 Google Visuals/G. Sparkl...	prodney

各アイテムの「アクション」メニューから、「クラシック・カタログで開く」オプションを使用して、アイテムが格納されたカタログ・フォルダを表示することもできます。これにより、アイテムのプロパティや権限を変更するなど、他の構成変更を行うことができます。アイテムにカーソルを合せ、右端にある「アクション」メニュー をクリックし、「クラシック・カタログで開く」をクリックします。ノート: 「クラシック・カタログで開く」オプションを表示するには、アイテムを所有している必要があります。

コンテンツ所有権について

管理者として、所有権を次に変更できます:

- 自分自身(管理者として)。
- 別のユーザー。
- 特定のアプリケーション・ロールを持つすべてのユーザー (適用される制限があります。[コンテンツ管理に関するよくある質問](#)を参照)。

コンテンツを所有している場合、次の権限があります:

- オブジェクト ID の接頭辞が/@Catalog/であるオブジェクトを所有している場合、そのオブジェクトのプロパティを確認し、それについて他の権限がない場合でも権限を変更できます。
- オブジェクト ID の接頭辞が/@default/のオブジェクトを所有している場合、常にそのオブジェクトのすべての権限を持ちます。

コンテンツの所有権の変更

Oracle Analytics コンテンツの所有権は、コンソールから変更できます。たとえば、ある従業員が組織を離れた場合、その従業員のワークブックおよび機械学習モデルを別の従業員が使用できるように、別の従業員に再割当てすることができます。

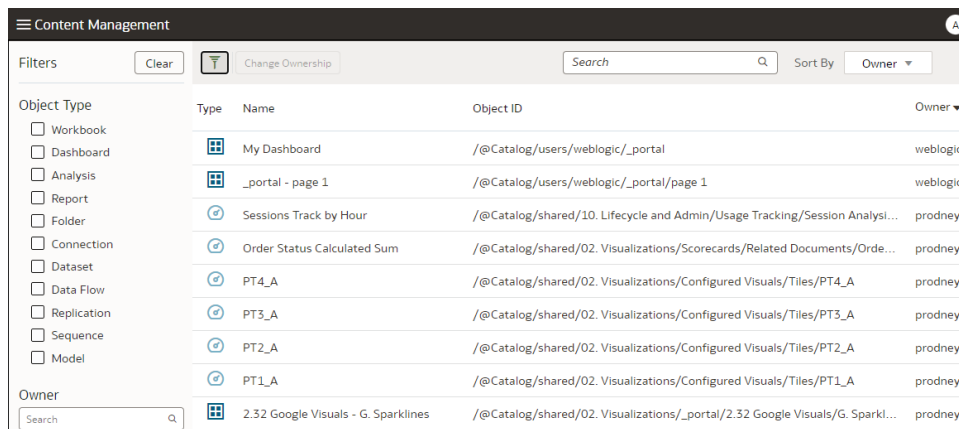
元のコンテンツ作成者が組織を離れた場合、所有権を変更すると、分析コンテンツを再利用できます。また、分析ユーザーに分析コンテンツへのアクセス権をすばやく付与できます。

オブジェクトに応じて、所有権を自分自身、別のユーザーまたはロールに割当てできます:

- オブジェクト ID が `/@default/` で始まるオブジェクトを選択した場合、別のユーザーに割当てできます。
- オブジェクト ID が `/@Catalog/` で始まるオブジェクトを選択した場合、別のユーザーまたはアプリケーション・ロールに割当てできます。
- 複数のオブジェクトをアプリケーション・ロールに割り当てる場合、オブジェクト ID が `/@Catalog/` で始まるオブジェクトのみを選択していることを確認してください。

ユーザーのプライベート・フォルダ内のコンテンツの所有権を変更するには、「[ユーザーのプライベート・フォルダ内のコンテンツの所有権の変更](#)」を参照してください。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「コンテンツ」をクリックして、「コンテンツ管理」ページを表示します。

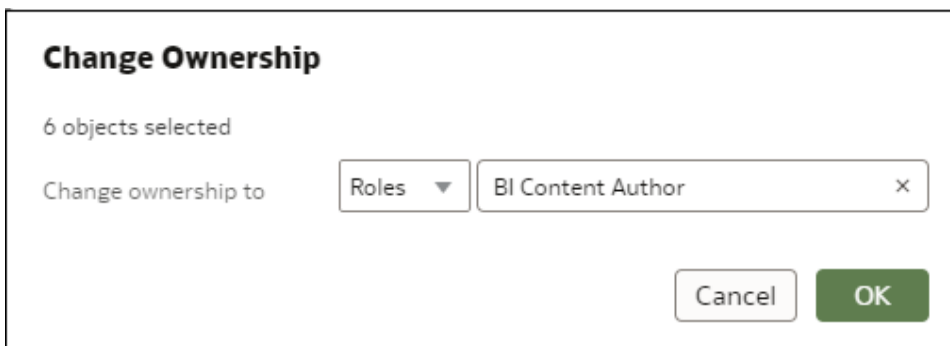


Object Type	Type	Name	Object ID	Owner
<input type="checkbox"/> Workbook	<input checked="" type="checkbox"/>	My Dashboard	/@Catalog/users/weblogic/_portal	weblogic
<input type="checkbox"/> Dashboard	<input checked="" type="checkbox"/>	_portal - page 1	/@Catalog/users/weblogic/_portal/page 1	weblogic
<input type="checkbox"/> Analysis	<input checked="" type="checkbox"/>	Sessions Track by Hour	/@Catalog/shared/10. Lifecycle and Admin/Usage Tracking/Session Analysi...	prodney
<input type="checkbox"/> Report	<input checked="" type="checkbox"/>	Order Status Calculated Sum	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Scorecards/Related Documents/Orde...	prodney
<input type="checkbox"/> Folder	<input checked="" type="checkbox"/>	PT4_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT4_A	prodney
<input type="checkbox"/> Connection	<input checked="" type="checkbox"/>	PT3_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT3_A	prodney
<input type="checkbox"/> Dataset	<input checked="" type="checkbox"/>	PT2_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT2_A	prodney
<input type="checkbox"/> Data Flow	<input checked="" type="checkbox"/>	PT1_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals/Tiles/PT1_A	prodney
<input type="checkbox"/> Replication	<input checked="" type="checkbox"/>	2.32 Google Visuals - G. Sparklines	/@Catalog/shared/02. Visualizations/_portal/2.32 Google Visuals/G. Sparkli...	prodney

3. 所有権を再割当てする項目を見つけます:

- ユーザーに属するすべてのオブジェクトを表示するには、「フィルタ」をクリックして、「所有者」フィールドにユーザーのユーザー名を入力します。「オブジェクト・タイプ」オプションを使用して、選択肢を絞り込むことができます。
- 「オブジェクト・タイプ」オプションを使用して、リストを特定のタイプに制限します(「フィルタ」をクリックして表示)。

- 「検索」ボックスを使用して、「名前」フィールドでテキストを検索します。たとえば、'cluster'を入力して、名前に cluster を含むオブジェクトを表示します。
- 1つのアイテムを選択する場合はクリックし、複数のアイテムを選択する場合は[Ctrl]を使用してクリックします。
 - 「所有権の変更」をクリックします。

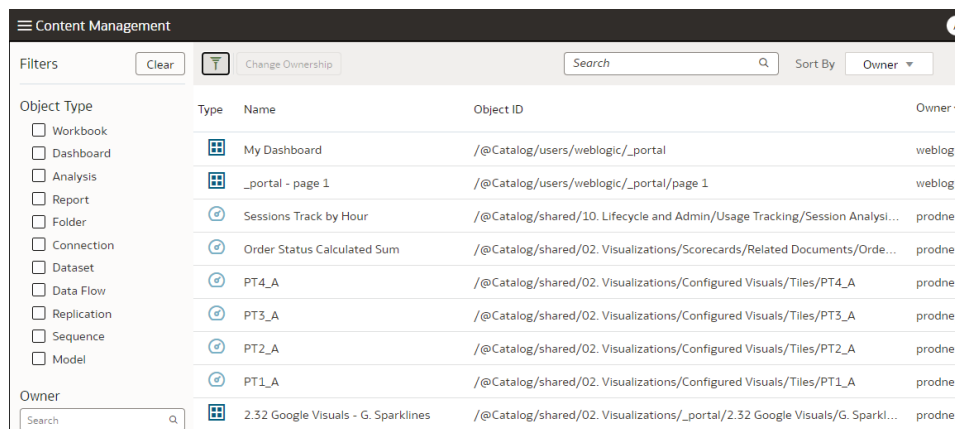


- 「所有権の変更先」オプションを使用して、オブジェクトの新しい所有者を指定します。
- 「OK」をクリックします。

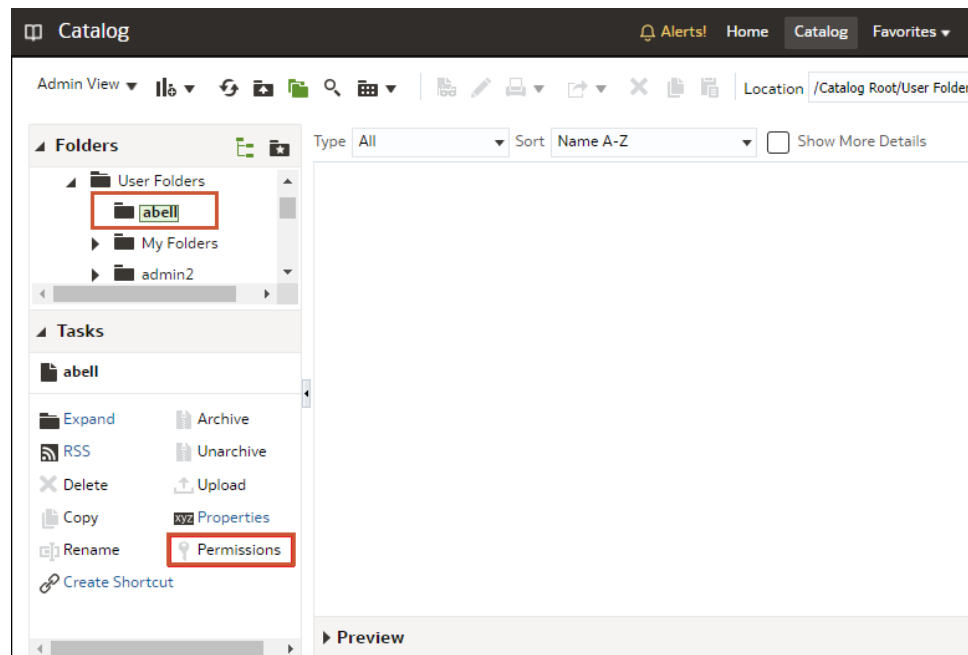
ユーザーのプライベート・フォルダ内のコンテンツの所有権の変更

ユーザーがプライベート・フォルダに保存したコンテンツの所有権は譲渡できます。たとえば、ある従業員が組織を離れた場合、その従業員のプライベート・ワークブックおよび機械学習モデルを\User Folders\

- コンソールで、プライベート・フォルダの所有権を管理者に変更します:
 - Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
 - 「コンテンツ」をクリックして、「コンテンツ管理」ページを表示します。



- c. 「**フィルタ**」をクリックして、「**所有者**」フィールドにユーザーの名前を入力します。
そのユーザーによって所有されているすべてのコンテンツが表示されます。プライベート・オブジェクトには、「**オブジェクト ID**」に/@Catalog/users/<username>/の接頭辞が付きます。たとえば、ユーザー名が"john.smith"である個人に所有されているプライベート・コンテンツには、/@Catalog/users/john.smith/の接頭辞が付きます。
 - d. ユーザーによって所有されているプライベート・オブジェクトを1つ以上選択します。
 - e. 「**所有権の変更**」をクリックして、「所有権の変更」ダイアログを表示します。
 - f. 「**所有権の変更先**」で、「**ユーザー**」をクリックし、自分のユーザー名またはAdminを入力して、「**OK**」をクリックします。
2. 「カタログ」で、プライベート・オブジェクトの権限を変更して、それらを新規フォルダに移動します:
- a. 「**ナビゲータ**」をクリックして、「**ホーム**」をクリックし、「**ページ・メニュー**」ページから「**クラシック・ホームを開く**」を選択します。
 - b. 「**カタログ**」をクリックして、左上隅の「**管理ビュー**」をクリックします。
 - c. 「**ユーザー・フォルダ**」で、「**マイ・フォルダ**」をクリックし、ユーザーのプライベート・フォルダを選択します。
 - d. 「**タスク**」パネルで、「**権限**」をクリックし、フォルダおよびそのコンテンツの制御を別のユーザーに割り当てます。



- e. ユーザーのプライベート・フォルダのコンテンツを他のユーザーがアクセスできる別のフォルダに移動します。
ソース・フォルダで、移動するオブジェクトを選択して、「**コピー**」をクリックします。次に、ターゲット・フォルダで「**貼付け**」をクリックします。

たとえば、\User Folders\USER1\にあるワークブックおよび機械学習モデルを\User Folders\USER2\に移動するか、複数のユーザーがアクセスできる共有フォルダに移動します。

コンテンツ管理に関するよくある質問

Oracle Analytics でのコンテンツ管理に関する一般的な質問の回答を探します。

所有権をロールに再割当てする際にどのような制限がありますか。

- オブジェクト ID の接頭辞が/@Catalog/であるオブジェクトは、ユーザーまたはロールに割り当てることができます。
- オブジェクト ID の接頭辞が/@default/であるオブジェクトは、ユーザーにのみ割り当てることができます。

複数の項目をロールに再割当てする場合、まずオブジェクト ID の接頭辞が/@default/である項目の選択を解除します。

オブジェクト ID の接頭辞を確認するには、コンテンツ管理ページの「オブジェクト ID」列を調べます。

The screenshot shows the 'Content Management' interface. On the left, there is a 'Filters' sidebar with various object types like Workbook, Dashboard, Analysis, Report, Folder, Connection, Dataset, Data Flow, Replication, Sequence, and Model. The main area displays a table with columns for 'Type', 'Name', and 'Object ID'. The 'Object ID' column is highlighted with a red box, showing paths like '/@Catalog/users/weblogic/_portal' and '/@Catalog/shared/02. Visualizations/Scorecards/Related'.

Type	Name	Object ID
Dashboard	My Dashboard	/@Catalog/users/weblogic/_portal
Dashboard	_portal - page 1	/@Catalog/users/weblogic/_portal/page 1
Report	Sessions Track by Hour	/@Catalog/shared/10. Lifecycle and Admin/Usage Tracking
Report	Order Status Calculated Sum	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Scorecards/Related
Report	PT4_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals
Report	PT3_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals
Report	PT2_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals
Report	PT1_A	/@Catalog/shared/02. Visualizations/Configured Visuals

オブジェクト ID の@default 接頭辞または@Catalog 接頭辞は何を意味しますか。

@Catalog 接頭辞は、ワークブック、接続、データセット、データ・フロー、レプリケーション、シーケンスまたはモデルを示します。@default 接頭辞は、分析、ダッシュボード、レポートまたはフォルダを示します。

6

公開オプションの管理

このトピックでは、ピクセルパーフェクトの公開を管理する管理者によって実行されるタスクについて説明します。

トピック:

- [ピクセルパーフェクト・レポートの管理について](#)
- [システム・メンテナンス・プロパティの構成](#)
- [配信先の設定](#)
- [ランタイム構成の管理](#)
- [セキュアなレポート](#)
- [Publisher カタログ・オブジェクトの監査データ](#)
- [カタログおよびレポートの翻訳の追加](#)

ピクセルパーフェクト・レポートの管理について

管理者は、ピクセルパーフェクト・レポートに必要なコンポーネントを構成します。

BI サービス管理者ロールのある管理者は、ユーザーがピクセルパーフェクト・レポートの作成を開始する前に、「クラシック管理」ページの「**パブリッシャの管理**」オプションを使用して、いくつかのコンポーネントを設定および構成できます。

ピクセルパーフェクト・レポート・タスクの実行に必要なロール

ピクセルパーフェクト・レポート・タスクの実行に必要なアプリケーション・ロールを理解します。

アプリケーション・ロール	タスク
BI サービス管理者	データ・ソース接続を設定して、次の場所からレポート用のデータを取得します。 <ul style="list-style-type: none">• JDBC 接続• JNDI 接続• OLAP 接続• Web サービス接続• HTTP 接続• コンテンツ・サーバー 次のデータ・ソースも使用できます。 <ul style="list-style-type: none">• Oracle BI 分析• Oracle BI サーバーのサブジェクト領域

アプリケーション・ロール	タスク
BI サービス管理者	<p>配信サーバーへの接続を構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> プリンタ FAX 電子メール HTTP FTP コンテンツ・サーバー CUPS (Common UNIX Printing System)サーバー Oracle Content and Experience サーバー <p>スケジューラ・プロセッサを構成します</p>
BI サービス管理者	<p>次の処理を実行するシステム実行時プロパティを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な出力タイプの処理の制御 デジタル署名の有効化 スケーラビリティおよびパフォーマンスの調整 フォント・マッピングの定義
BI サービス管理者	<p>キャッシュ指定、データベース・フェイルオーバー・プロパティおよびデータベース・フェッチ・サイズなどのサーバー・プロパティを構成します。</p>
BI コンテンツ作成者	<p>レポートで使用するデータをフェッチおよび構築します。</p>
BI コンシューマ	<ul style="list-style-type: none"> レポートの表示 レポート・ジョブのスケジュール レポート・ジョブの管理
BI コンテンツ作成者	<ul style="list-style-type: none"> レポート定義の作成 レイアウトの設計

ピクセルパーフェクト・レポートの管理ページへの移動

管理者は、ピクセルパーフェクト・レポートの管理ページで **Publisher** レポートのオプションを設定します。

1. Oracle Analytics Cloud にサインインします。
2. ホーム・ページの「ページ」メニューをクリックし、「クラシック・ホームを開く」を選択します。
3. 「管理」をクリックします。
4. 「Publisher の管理」をクリックします。
5. Publisher 管理ページで必要なオプションを選択します。

システム・メンテナンス・プロパティの構成

このトピックでは、Publisher プロパティの構成方法について説明します。

トピック:

- [スケジューラの構成について](#)
- [レポート・ビューア・プロパティの設定](#)

- [サーバー・キャッシュのレポート・オブジェクトのクリア](#)
- [サブジェクト領域メタデータ・キャッシュのクリア](#)
- [診断の有効化](#)
- [ジョブ診断ログのページ](#)
- [ジョブ履歴のページ](#)
- [構成固有のファイルのアップロードと管理](#)

サーバー・キャッシュ指定の設定

管理者はサーバー・レベルでキャッシュを構成できます。これにより、Publisher がレポートを処理する際に、データおよびレポート・ドキュメントはキャッシュに保存されます。

レポート設計者は、レポート・プロパティを設定して、データセットのレポート固有のキャッシュを構成できます。

1. サーバー構成ページで、次のプロパティを設定します。
 - **キャッシュ有効期限** — キャッシュの有効期間を分単位で入力します。デフォルトは 30 です。
 - **キャッシュ・サイズ制限** — 保持されるキャッシュ・アイテムの最大数を、アイテムのサイズとは関係なく入力します。デフォルトは 1000 です。
 - **最大キャッシュ・レポート定義** — キャッシュに保持するレポート定義の最大数を入力します。デフォルトは 50 です。
2. このキャッシュを手動でページするには、「キャッシュの管理」タブで「**オブジェクト・キャッシュのクリア**」をクリックします。

データベース・フェイルオーバー用の再試行プロパティの設定

管理者は、データ・ソースに接続する際の再試行回数を構成できます。

Publisher が定義済 JDBC または JNDI 接続を介したデータ・ソースへの接続に失敗した場合、Publisher はバックアップ・データベースに切り替えます。

次のプロパティは、データベースへのバックアップ接続に切り替える前に試行される回数を制御します。

- **再試行回数**
デフォルト値は 6 です。バックアップ・データベースに切り替える前に接続を試行する回数を入力します。
- **再試行間隔(秒)**
デフォルト値は 10 秒です。接続を再試行する前に待機する秒数を入力します。

スケジューラを理解

このトピックでは、スケジューラの構成と診断について説明します。

トピック:

- [スケジューラの構成について](#)
- [スケジューラ診断の確認](#)

スケジューラの構成について

スケジューラの構成は、「システム・メンテナンス」ページで確認できます。

サービスに選択したコンピュータ・サイズ(OCPU)により、ピクセルパーフェクト・レポートを生成するためのレポート処理制限が決まります。「スケジューラ構成」タブでは、設定を編集できません。使用可能なサイズ変更オプションを参照してください

スケジューラ診断の確認

「スケジューラ診断」ページには、スケジューラの実行時ステータスが表示されます。

この診断ページには、JMS キューが受信したスケジュール済レポート・リクエストの数、そのうちの失敗したレポートの数および実行中のレポートの数が表示されます。JMS ステータスはクラスタ・インスタンス・レベルで表示でき、これにより、これら 1 つ以上の JMS プロセッサごとにインスタンスをさらに追加してスケール・アップするかどうかを決定できます。

たとえば、1 つのインスタンスの電子メール・プロセッサにおいてキュー待機中のリクエストが多すぎる場合、別のインスタンスを追加および有効化して電子メール処理に対応することを検討できます。同様に、処理中のレポートが非常に大きく、レポート・プロセス・キューにおいてレポート処理中の状態で表示されている場合、別のインスタンスを追加してレポート・プロセス機能をスケール・アップできます。

また、「スケジューラ診断」ページには各コンポーネントのステータスが反映され、ダウンしているコンポーネントがあるかどうかが表示されます。データベースへの接続文字列または JNDI 名、どのクラスタ・インスタンスがどの管理対象サーバー・インスタンスに関連付けられているか、Toplink 接続プール構成などを確認できます。

インスタンスに失敗ステータスが表示されている場合、インスタンスをリカバリでき、クラスタで設定されている JMS のフェイルオーバー・メカニズムにより、発行されたジョブが失われることはありません。サーバー・インスタンスが復旧すると、クラスタでサービスのために即時に使用できるようになります。インスタンスの除去と追加は動的に診断ページに反映されます。

インスタンスがクラスタに追加されると、「スケジューラ診断」ページでは即時に新しいインスタンスが認識され、新しいインスタンスとそのインスタンスで実行されているすべてのスレッドのステータスが表示されます。これにより管理者は、スケジューラのあらゆるインスタンスまたはコンポーネントの問題をトレースして解決するための強力なモニタリング機能を利用できるようになります。

「スケジューラ診断」ページには、次のコンポーネントの情報が表示されます。

- JMS
- Cluster

- データベース
- スケジューラ・エンジン

「JMS」セクションには、次の情報が表示されます。

- **JMS Cluster Config:** このセクションには JMS 設定の構成情報が表示されます。
 - プロバイダ・タイプ(Weblogic / ActiveMQ)
 - WebLogic バージョン
 - WebLogic JNDI ファクトリ
 - JMS の JNDI URL
 - キュー名
 - 一時ディレクトリ
- **JMS Runtime:** ここには、すべての JMS キューおよびトピックのランタイム・ステータスが表示されます。

「Cluster」セクションには、クラスタ・インスタンスの詳細が表示されます。この情報は、各プロセッサの負荷を理解するために使用します。

「Database」セクションには、これらのコンポーネントの情報が表示されます。

- Database Config — 接続タイプや JNDI 名、接続文字列
- Toplink Config — 接続プーリング、ロギング・レベル
- Database Schema

「Quartz」セクションには、次の図に示すように、これらのコンポーネントの情報が表示されます。

- Quartz Configuration
- Quartz Initialization

レポート・ビューア・プロパティの設定

管理者は、「システム・メンテナンス」ページの「レポート・ビューア構成」タブでレポート・ビューアのプロパティを設定できます。

「**適用** ボタンの表示」が True に設定されている場合、パラメータ・オプションが設定されたレポートではレポート・ビューアに「**適用**」ボタンが表示されます。パラメータ値を変更した場合、「**適用**」をクリックして新しい値でレポートを表示する必要があります。

「**適用** ボタンの表示」が False に設定されている場合、レポート・ビューアでは「**適用**」ボタンが表示されません。新しいパラメータ値を入力した場合、新しい値の選択または入力後に、Publisher では自動的にレポートが表示されます。

このプロパティをレポート・レベルで設定して、システム設定をオーバーライドします。

サーバー・キャッシュのレポート・オブジェクトのクリア

キャッシュの管理ページを使用して、サーバー・キャッシュをクリアします。

サーバー・キャッシュは、レポート定義、レポート・データおよびレポート出力ドキュメントを格納します。手動でこのキャッシュをパージする必要がある場合(たとえば、パッチ適用後など)、キャッシュの管理ページを使用します。

サーバー・キャッシュからレポート・オブジェクトをクリアするには:

1. 管理ページから「**キャッシュの管理**」を選択します。
2. キャッシュの管理ページで「**オブジェクト・キャッシュのクリア**」をクリックします。

サブジェクト領域メタデータ・キャッシュのクリア

サブジェクト領域メタデータ・キャッシュをクリアできます。

ディメンションやメジャー名などの BI サブジェクト領域メタデータは、レポート・デザイナーでレポートをすばやく開くために、サーバーでキャッシュされます。BI サブジェクト領域がバイナリ・セマンティック・モデル(.rpd)ファイルを介して更新された場合に、手動でこのキャッシュをクリアできます。

サブジェクト領域メタデータ・キャッシュをクリアするには:

1. 管理ページから「**キャッシュの管理**」を選択します。
2. キャッシュの管理ページのサブジェクト領域メタデータ・キャッシュのクリア・セクションで、「**メタデータ・キャッシュのクリア**」をクリックします。

ジョブ診断ログのパージ

古い診断ログをパージして、システムの使用可能スペースを増やすことができます。

デフォルトでは、ジョブ診断ログの保持期間は **30** 日です。診断ログを頻繁に有効にすると、これらの診断ログによりデータベース内の領域が使用され、古い診断ログにより使用されている領域の定期的な解放が必要となる場合があります。保持期間より古いジョブ診断ログを手動でパージできます。

ジョブ診断ログをパージするには:

1. 管理ページの「システム・メンテナンス」で、「**ジョブ診断ログの管理**」を選択します。
2. 「**保持期間を超えたログのパージ**」をクリックします。

ジョブ履歴のパージ

ジョブ診断ログの管理ページを使用して古いジョブ履歴をパージします。

ジョブ履歴の保持期間は、デフォルトで **180** 日に設定されています。保持期間より古いジョブ履歴を手動でパージできます。古いジョブ履歴をパージすると、保存済出力、保存済 XML、ジョブ配信情報および古いジョブのジョブ・ステータス詳細は削除されます。

古いジョブ履歴をパージするには:

1. 管理ページの「システム・メンテナンス」で、「**ジョブ診断ログの管理**」を選択します。
2. **スケジューラ・メタデータのパージ**をクリックします。

構成固有のファイルのアップロードと管理

「アップロード・センター」を使用して、フォント、デジタル署名、ICC プロファイル、SSH 秘密キー、SSL 証明書および JDBC クライアント証明書に関する構成固有のファイルをアップロードおよび管理します。

構成固有のファイルをアップロードおよび管理するには:

1. 管理ページの「システム・メンテナンス」で、「**アップロード・センター**」を選択します。
2. 「**参照**」をクリックして、アップロードするファイルを選択します。
3. 構成ファイル・タイプを選択します。
4. 既存のファイルを新しいファイルで上書きする場合は、「**上書き**」を選択します。
5. 「**アップロード**」をクリックします。
6. アップロードしたファイルを管理するには、「**タイプによるフィルタ**」フィールドを使用して表内のファイルをフィルタします。

診断の有効化

管理者および BI 作成者は、診断ログを有効にすることができます。

スケジュールされたジョブおよびオンライン・レポートの診断を有効化およびダウンロードできます。

スケジューラ・ジョブの診断の有効化

レポート・ジョブのスケジュール ページのスケジューラ・ジョブの診断を有効にしたり、「**レポート・ジョブ履歴**」から診断ログをダウンロードできます。

レポート・ジョブのスケジュール ページの**診断**タブにアクセスするには、BI 管理者または BI データ・モデル開発者権限が必要です。診断を有効にするには、次のステップを実行します。

スケジューラ・ジョブの診断を有効化およびダウンロードするには:

1. 「**新規**」メニューから「**レポート・ジョブ**」を選択します。
2. スケジュールするレポートを選択し、**診断**タブをクリックします。
3. 必要な診断を選択して有効にします。
 - 「**SQL 実行計画の有効化**」を選択し、実行計画/SQL モニター・レポート情報で診断ログを生成します。
 - 「**データ・エンジン診断の有効化**」を選択し、データ・プロセッサ・ログを生成します。
 - 「**レポート・プロセッサ診断の有効化**」を選択し、FO(書式設定オプション)およびサーバー関連ログ情報を生成します。

- 「**統合ジョブ診断の有効化**」を選択し、スケジューラ・ログ、データ・プロセッサ・ログ、FO およびサーバー・ログ詳細を含む完全ログを生成します。
- 4. レポートを送信します。
- 5. レポート・ジョブの実行後、レポート・ジョブ履歴ページでレポートを選択して詳細を表示します。
- 6. 「出力および配信」で「**診断ログ**」をクリックし、ジョブ診断ログをダウンロードして詳細を表示します。
ジョブ診断ログの管理ページを使用して、古いジョブ診断ログをパージします。

オンライン・レポートの診断の有効化

レポート・ビューアで、オンライン・レポート用に診断を有効にできます。

管理者および BI 作成者は、オンライン・レポートの実行前に診断を有効にすると、レポート終了後に診断ログをダウンロードできます。診断は、デフォルトでは無効になっています。

インタラクティブな出力でオンライン・レポートの診断を有効にすると、次のことが可能になります。

- .zip ファイルで次の診断ログをダウンロードします。
 - SQL ログ
 - データ・エンジン・ログ
 - レポート・プロセッサ・ログ
- 診断ログに次の詳細を表示します。
 - 例外
 - メモリー・ガード制限
 - SQL 問合せ

オンライン・レポート用に診断を有効にして診断ログをダウンロードするには:

1. レポートを実行している場合、「**取消**」をクリックしてレポートの処理を停止します。
2. レポート・ビューアで「**アクション**」をクリックします。
3. **オンライン診断**オプションから**診断の有効化**を選択します。
4. レポートを送信します。
5. レポート実行後に診断ログをダウンロードするには:
 - a. レポート・ビューアで「**アクション**」をクリックします。
 - b. **オンライン診断**オプションから**診断のダウンロード**を選択します。

配信先の設定

ここでは、レポートを配信するために必要な設定について説明します。また、HTTP 通知サーバーの設定方法についても説明します。

 ノート:

電子メール、FTP、プリンタ、FAX およびコンテンツ管理のホストは、パブリック・インターネットからアクセスできる必要があります。

トピック:

- [配信オプションの構成](#)
- [プリンタおよび FAX サーバーの構成の理解](#)
- [プリンタの追加](#)
- [FAX サーバーの追加](#)
- [電子メール・サーバーの追加](#)
- [HTTP または HTTPS サーバーの追加](#)
- [FTP または SFTP サーバーの追加](#)
- [コンテンツ・サーバーの追加](#)
- [オブジェクト・ストレージの追加](#)
- [Common UNIX Printing System \(CUPS\)サーバーの追加](#)
- [Oracle Content and Experience サーバーの追加](#)

配信オプションの構成

電子メールの配信および通知のために、SSL 証明書ファイルを定義して一般プロパティを設定できます。

1. 管理ページから「**配信構成**」を選択します。
2. 自己署名された証明書を使用するには、「**SSL 証明書ファイル**」からファイルを選択します。
3. 電子メール・レポート配信に表示する送信者アドレスを入力します。デフォルト値は `bipublisher-report@oracle.com` です。
4. 通知配信に表示する送信者アドレスを入力します。デフォルト値は `bipublisher-notification@oracle.com` です。
5. レポート・ステータスが「成功」、「警告」、「失敗」または「スキップ済」の場合に、電子メール通知のための件名テキストを入力します。
6. 「許可されている電子メール受信者ドメイン」フィールドで、電子メール配信を許可するドメインを入力します。電子メール・ドメインはカンマで区切ります。デフォルトで、* はすべてのドメインを許可します。

レポート配信の電子メール配信制約を無視する場合、そのレポートの**電子メール・ドメインの制約の無視**プロパティを選択することに注意してください。

7. ジョブ出力を電子メールに添付するのではなく、ジョブ出力にアクセスするための URL を電子メールで送信する場合は、**出力を URL として電子メールで送信**を選択します。

電子メールの受信者がジョブ出力を表示するには、Publisher レポートへのアクセスに必要な有効な資格証明でログインする必要があります。受信者は、Publisher へのアクセス

権を持っている必要があります。プライベート・ジョブの出力が、管理者アクセス権のないユーザーに送信された場合、ジョブは成功し、受信者は URL が記載された電子メールを受信しますが、ジョブ出力は表示できません。

8. 配信マネージャが Java ランタイム環境からプロキシ・サーバー設定を検索する必要がある場合、「**システムのプロキシ設定の使用**」を選択します。
 - SSL が使用されない場合、プリンタ、FAX、WebDAV、HTTP および CUPS サーバーでは、HTTP プロトコルのプロキシ設定が使用されます。SSL が使用される場合、HTTPS プロキシ設定が使用されます。
 - FTP および SFTP では、FTP のプロキシ設定が使用されます。
 - コンテンツ・サーバーと電子メール・サーバーでは、この設定にかかわらずプロキシ経由の接続はサポートされません。

配信サーバーごとにプロキシ設定をオーバーライドするには、個々のサーバーの設定ページにあるプロキシ構成フィールドを使用します。配信サーバー用にプロキシ・サーバーおよびポートが構成されている場合、配信マネージャは、Java ランタイム環境で定義されたものではなく、そのサーバー用に構成されたプロキシ・サーバーおよびポートを使用します。クラウド・インストールでは、「**システムのプロキシ設定の使用**」が常に選択され、個々のサーバー設定でオフにしたりオーバーライドすることはできません。

Publisher は、電子メール・サーバーへの接続で問題が発生した場合、30 秒間隔で電子メールの再送信を 3 回試行します。

プリンタおよび FAX サーバーの構成の理解

プリンタまたは FAX サーバーを設定する前に、プリンタ・タイプについて理解してください。

オペレーティング・システムとは関係なく、プリンタの宛先は任意の IPP サーバーにすることができます。プリンタ自体を IPP サーバーにできますが、プリンタが IPP をネイティブにサポートしていない場合は、IPP をサポートする印刷サーバー(CUPS など)を設定して、印刷サーバーをプリンタに接続できます。

FAX を送信するには、Common Unix Printing Service (CUPS)および fax4CUPS 拡張を設定する必要があります。CUPS または Windows IPP 印刷サーバーの設定と、これらにネットワーク・プリンタを接続する方法の詳細は、CUPS または Windows IPP ソフトウェア・ベンダーのドキュメントを参照してください。

PDF は、ビジネス・レポート用として一般的な出力形式です。ただし、一部のレポートは、レポート・サーバーから直接印刷する必要があります。たとえば、給料支払小切手および請求書は、通常、スケジュールされたバッチ・ジョブとして印刷されます。PostScript Level 3 準拠のラスター画像処理に対応したプリンタには、PDF ドキュメントをネイティブにサポートできるものもありますが、PDF ドキュメントを直接印刷できない PostScript Level 2 のみをサポートするビジネス用のプリンタも数多くあります。

プリンタまたは印刷サーバーが PDF の印刷をサポートしていない場合に、PDF ドキュメントを直接印刷するには;

- フィルタを選択します(「PDF から PostScript」または「PDF から PCL」)。
- カスタム・フィルタまたはサードパーティ・フィルタを構成します。

フィルタにより、変換ユーティリティを呼び出して、PDF を特定のプリンタ・タイプでサポートされているファイル形式に変換できます。印刷の確認用にフォントの選択が必要な場合にのみ、PDF から PCL への変換を使用できます。一般的な印刷要件の場合、「PDF から PostScript」のレベル 2 フィルタを使用します。

「PDF から PCL」フィルタを選択すると、自動的に「フィルタ・コマンド」フィールドに移入されます。チェックでルーティングおよびアカウント番号用にプリンタにインストールされたフォントを使用する場合など、PCL コマンドを RTF テンプレートに埋め込んで、PCL ページの特定の位置で PCL コマンドを呼び出すことができます。

オペレーティング・システム・コマンドを使用して、カスタム・フィルタを呼び出すこともできます。

カスタム・フィルタを指定するには、入力ファイルと出力ファイル名({infile}と{outfile})用の 2 つのプレースホルダを指定して、ネイティブ OS コマンド文字列を渡します。

これは、IPP プリンタを直接呼び出す場合や、Microsoft Internet Information Service (IIS) で IPP プリンタを呼び出す場合に、特に役立ちます。CUPS とは異なり、これらの印刷サーバーは、プリンタが認識できる形式に印刷ファイルを変換しません。フィルタ機能によりネイティブ OS コマンドを呼び出して、ターゲット・プリンタが認識できる形式にドキュメントを変換します。

たとえば、PDF ドキュメントを PostScript 形式に変換するには、PDF から PS に変換する次のコマンドを「フィルタ・コマンド」フィールドに入力します：

```
pdftops {infile} {outfile}
```

Linux から HP LaserJet プリンタの設定を Microsoft IIS 上に呼び出すには、Ghostscript をフィルタとして設定し、HP LaserJet が認識できる形式に PDF ドキュメントを変換します。これを実行するには、次の Ghostscript コマンドを「フィルタ・コマンド」フィールドに入力します：

```
gs -q -dNOPAUSE -dBATCH -sDEVICE=laserjet -sOutputFile={outfile} {infile}
```

FAX サーバーの場合、フィルタを使用してファイルを Tag Image File Format (TIFF) に変換できます。

プリンタの追加

プリンタを設定してレポートを印刷できます。

プリンタ・サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスできる必要があります。

1. 「管理」ページの「配信」で、「プリンタ」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. プリンタのサーバー名および URI を入力します。
3. オプション: 使用しているプリンタまたは印刷サーバーが PDF の印刷をサポートしていない場合、フィルタを入力して変換ユーティリティを呼び出し、PDF を特定のプリンタ・タイプでサポートされているファイル形式に変換します。
 - PDF から PostScript
 - PDF から PCL

「PDF から PCL」フィルタは、埋込み PCL コマンドを使用した印刷の確認用にフォントの選択が必要な場合にのみ使用します。一般的な印刷要件の場合、「PDF から PostScript」フィルタを使用します。

4. オプション: ユーザー名、パスワード、認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)および暗号化タイプ(なし、SSL)を入力します。
5. オプション: プロキシ・サーバーのホスト、ポート、ユーザー名、パスワードおよび認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)を入力します。
6. オプション: 「アクセス制御」セクションで、「パブリック」を選択解除します。
7. 「使用可能なロール」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを1つ以上選択し、「移動」をクリックして、「許可ロール」リストに追加します。
8. 「適用」をクリックします。

FAX サーバーの追加

FAX を送信する場合、Common Unix Printing Service (CUPS) および fax4CUPS 拡張を設定する必要があります。

FAX サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスできる必要があります。

1. 「管理」ページの「配信」で、「FAX」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. FAX サーバーのサーバー名および URI (Uniform Resource Identifier) を入力します。
3. オプション: 使用している FAX サーバーが PDF の印刷をサポートしていない場合、フィルタを入力して変換ユーティリティを呼び出し、PDF を特定の FAX サーバーでサポートされているファイル形式に変換します。
4. オプション: FAX サーバーのユーザー名、パスワード、認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)および暗号化タイプ(なし、SSL)を入力します。
5. オプション: プロキシ・サーバーのホスト、ポート、ユーザー名、パスワードおよび認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)を入力します。
6. オプション: 「アクセス制御」セクションで、「パブリック」を選択解除します。
7. 「使用可能なロール」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを1つ以上選択し、「移動」をクリックして、「許可ロール」リストに追加します。
8. 「適用」をクリックします。

電子メール・サーバーの追加

電子メールによるレポート配信のための電子メール・サーバーを追加できます。

電子メール・サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスできる必要があります。


1. 「管理」ページの「配信」で、「電子メール」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. 電子メール・サーバーの「サーバー名」および「ホスト」を入力します。

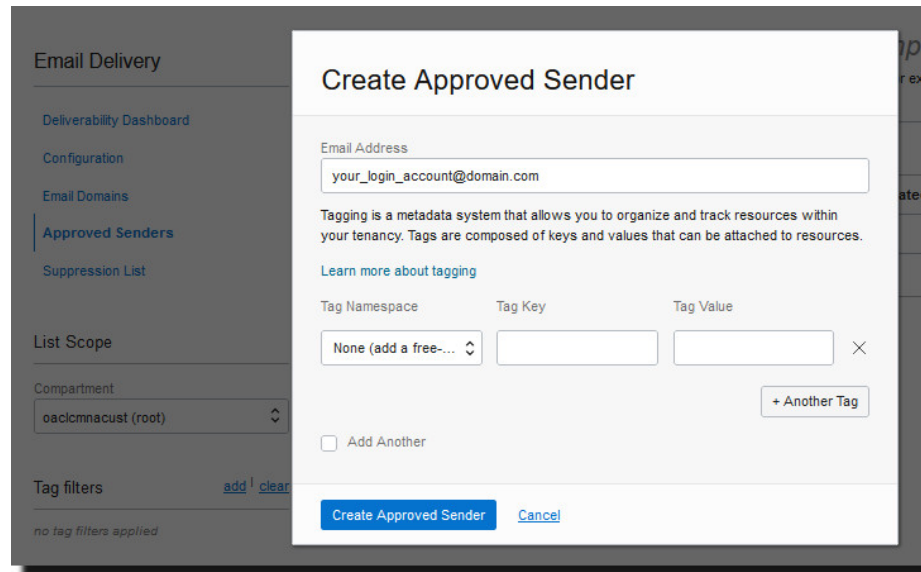
3. オプション: 電子メール・サーバーとの接続に使用する「**セキュアな接続**」方法を選択します。
サーバーで TLS プロトコルがサポートされている場合にそれを使用します。レスポンスでは SSL が受け入れられます。
4. オプション: ポート番号、ユーザー名およびパスワードを入力します。
5. 「アクセス制御」セクションで、「**パブリック**」を選択解除します。
6. 「**使用可能なロール**」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを 1 つ以上選択し、「**移動**」をクリックして、「**許可ロール**」リストに追加します。
7. 「**接続のテスト**」をクリックします。
8. 「**適用**」をクリックします。

Oracle Cloud Infrastructure での電子メール配信サービスを使用したレポートの配信

Oracle Cloud Infrastructure で電子メール配信サービスを使用して、レポートを配信できます。

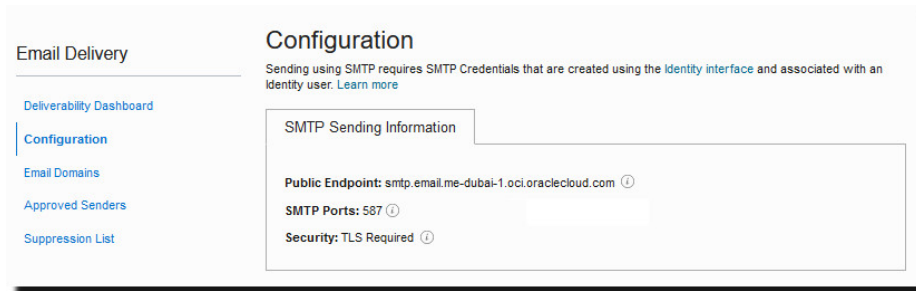
Oracle Cloud Infrastructure コンソールにアクセスできない場合、Oracle Cloud Infrastructure 管理者にアクセス権の付与について問い合わせてください。

1. Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、電子メール配信を構成します。
 - a. 「電子メール配信」を構成する権限を使用して Oracle Cloud アカウントにサインインします。
 - b. Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、左上隅にある  をクリックします。
 - c. 「**開発者サービス**」をクリックします。「**アプリケーション統合**」で、「**電子メール配信**」をクリックします。
 - d. オプション: 使用する予定の電子メール・ドメインを設定します。
これは、承認された送信者の電子メール・アドレスに使用する予定のドメインであり、gmail.com や hotmail.com などのパブリック・メールボックス・プロバイダ・ドメインにすることはできません。
 - e. 「**承認済送信者**」をクリックします。
 - f. 「**承認済送信者の作成**」ページで、メール・サーバー経由で電子メールを送信する際に使用する送信者電子メール・アドレスの承認済送信者を設定します。



詳細は、Oracle Cloud Infrastructure のドキュメントを参照してください。承認済送信者の管理を参照してください。

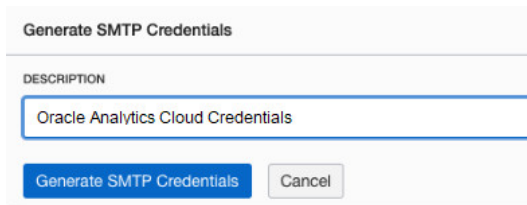
- g. 「構成」をクリックし、パブリック・エンドポイント、ポート(587)、および接続で使用されている **Transport Layer Security (TLS)**をメモします。



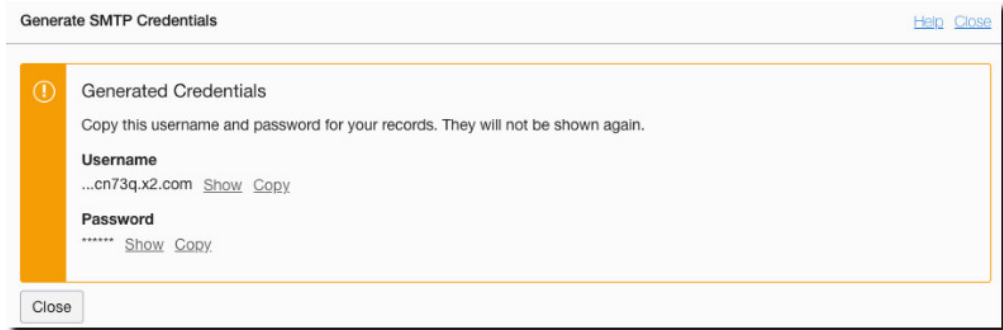
詳細は、Oracle Cloud Infrastructure のドキュメントを参照してください。
SMTP 接続の構成を参照してください。

- h. まだ行っていない場合は、**アイデンティティ・インタフェース**のリンクをクリックしてアイデンティティ・ページに移動し、**SMTP 資格証明の生成**をクリックして、自分自身または電子メールの管理権限を持つ別のユーザーに SMTP 資格証明を生成します。

「Oracle Analytics Cloud の資格証明」などの説明を入力し、「SMTP 資格証明の生成」をクリックします。



自分のレコードの「ユーザー名」および「パスワード」をコピーします。



詳細は、Oracle Cloud Infrastructure のドキュメントを参照してください。[ユーザーの SMTP 資格証明の生成](#)を参照してください。

2. Oracle Analytics Cloud で、電子メール・サーバーに接続を追加します。
 - a. 「管理」ページの「配信」で、「電子メール」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
 - b. 電子メール・サーバーの名前(電子メール配信サービスのホスト名)を入力します。
 - c. ポート番号および SMTP 資格証明(ユーザー名とパスワード).を入力します
 - d. セキュアな接続方法を選択します。
 - e. 「アクセス制御」セクションで、「パブリック」を選択解除します。
 - f. 「使用可能なロール」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを1つ以上選択し、「移動」をクリックして、「許可ロール」リストに追加します。
 - g. 「接続のテスト」をクリックします。
 - h. 「適用」をクリックします。
3. 配信通知を設定します。
 - a. 「管理」ページの「配信」で、「配信構成」を選択します。
 - b. 「電子メール送信者アドレス」および「配信通知電子メール送信者のアドレス」の値を入力します。
 - c. オプション: 「成功通知の件名」、「警告通知の件名」、「失敗通知の件名」および「スキップされた通知の件名」の値を入力します。
完了したジョブでは、ジョブのステータスに応じて適切な通知の件名が使用されます。
 - d. 「システムのプロキシ設定の使用」を選択解除します。
4. 電子メール・サーバーを使用してレポートを配信するようにバースティング・ジョブを構成します。
バースティング問合せを更新して配信チャンネルとして DEL_CHANNEL に「電子メール」を指定し、PARAMETER3 に「送信元」アドレスを指定します。
5. レポート配信をテストします。
 - a. 電子メール・サーバーを使用してレポートを送信するようにジョブをスケジュールします。
 - b. ジョブ履歴の詳細ページで、ジョブのステータスを確認します。

HTTP または HTTPS サーバーの追加

管理者は、HTTP または HTTPS サーバーを追加して、レポートの完了後に通知リクエストを送信できます。

アプリケーション URL や後処理 HTTP または HTTPS URL を HTTP サーバーとして登録できます。

Publisher により送信された HTTP 通知により、ジョブ ID、レポート URL およびジョブ・ステータスのフォーム・データが HTTP サーバー URL ページにポストされます。

1. 「管理」ページの「配信」で、「HTTP」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. サーバーのサーバー名および URL を入力します。
3. オプション: サーバーのホスト、ポート、ユーザー名、パスワード、認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)および暗号化タイプ(なし、SSL)を入力します。
4. オプション: プロキシ・サーバーを介して通知が送信される場合、ユーザー名、パスワードおよび認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)を入力します。
5. 「アクセス制御」セクションで、「パブリック」を選択解除します。
6. 「使用可能なロール」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを1つ以上選択し、「移動」をクリックして、「許可ロール」リストに追加します。
7. 「適用」をクリックします。

FTP または SFTP サーバーの追加

Publisher の配信チャンネルとして FTP サーバーまたは SFTP サーバーを追加できます。

スケジューラに指定された宛先ファイル名に非 ASCII 文字が含まれている場合、このファイル名を宛先 FTP サーバーに指定するために UTF-8 エンコーディングが使用されます。FTP サーバーは UTF-8 エンコーディングをサポートしている必要があります。そうでない場合は、ジョブ配信が失敗し、「配信に失敗しました」というエラー・メッセージが表示されます。

FTP サーバーまたは SFTP サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスできる必要があります。

Publisher では、FTP over TLS/SSL (FTPS)はサポートされていません。配信に FTP over TLS/SSL を使用することはできません。セキュア・ファイル転送には SFTP を使用します。

1. 「管理」ページの「配信」で、「FTP」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. FTP または SFTP サーバーのサーバー名、ホスト名およびポート番号を入力します。
FTP のデフォルト・ポートは 21 です。セキュア FTP (SFTP)のデフォルト・ポートは 22 です。
3. セキュア FTP (SFTP)を有効にするには、「セキュア FTP の使用」を選択します。

4. FTP サーバーがファイアウォールの背後にある場合、「**パッシブ・モードの使用**」を選択します。
5. オプション: 「**フィルタ・コマンド**」フィールドで、カスタム・フィルタを指定して暗号化などのファイル変換を適用します。

カスタム・フィルタを指定するには、入力ファイルと出力ファイル名({infile}と{outfile})用の 2 つのプレースホルダを指定して、ネイティブのオペレーティング・システム・コマンド文字列を渡します。

たとえば、フィルタ・コマンドを使用してファイルの暗号化を設定するには、次のように入力します:

```
gpg -e -r myKey -o {outfile} {infile}
```

説明:

myKey は、GPG キーの ID です(実際の名前、電子メール・アドレス、フィンガープリントなど)。

「フィルタ・コマンド」フィールドでは、引用符はサポートされません。そのため、スペースを含む特定の有効な GPG 形式を使用することはできません("myname <myemail@example.com>"など)。スペースなしの単一の文字列で ID を指定する必要があります。

6. 「**コピーの処理中に Part 拡張子を持つファイルを作成**」を選択し、ファイルの転送中に .part 拡張子の付いたファイルを FTP サーバー上で作成します。

ファイル転送が完了すると、そのファイルは .part 拡張子のない名前に変更されます。ファイル転送が完了しないと、.part 拡張子の付いたファイルがサーバーに残ります。
7. オプション: セキュリティ情報を入力します。
 - a. サーバーがパスワードで保護されている場合は、ユーザー名とパスワードを入力します。
 - b. 「**認証タイプ**」として、「**秘密キー**」または「**パスワード**」を選択します。
 - c. 選択した認証タイプに応じて、秘密キー・ファイルを選択するか、秘密のパスワードを指定します。

認証タイプとして「**秘密キー**」を選択した場合は、SSH 秘密キー・ファイルを「**アップロード・センター**」にアップロードしたことを確認します。
8. オプション: プロキシ・サーバーのホスト、ポート、ユーザー名、パスワードおよび認証タイプ(なし、基本、ダイジェスト)を入力します。
9. オプション: PGP 暗号化ドキュメントを FTP サーバーに配信するには:
 - a. 「**PGP キー**」リストから、セキュリティ・センターでアップロード済の PGP キーを選択します。

このステップにより、「**フィルタ・コマンド**」フィールドのフィルタ・コマンドが更新されます。
 - b. 暗号化されたドキュメントに署名するには、「**署名出力**」を選択します。

このステップにより、「**フィルタ・コマンド**」フィールドの既存のフィルタ・コマンドに -s パラメータが追加されます。
 - c. PGP 暗号化ドキュメントを ASCII armor 形式で配信する場合、「**ASCII Armor での出力**」を選択します。

このステップにより、「**フィルタ・コマンド**」フィールドの既存のフィルタ・コマンドに -a パラメータが追加されます。

10. 「アクセス制御」セクションで、「パブリック」を選択解除します。
11. 「使用可能なロール」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを 1 つ以上選択し、「移動」をクリックして、「許可ロール」リストに追加します。
12. 「接続のテスト」をクリックします。
 接続テストが成功すると、「ホスト・キー・フィンガープリント」フィールドに値が入力されます。「ホスト・キー・フィンガープリント」フィールドに値が入力されない場合は、サーバー構成を保存できません。
 パブリッシャにより、SFTP サーバーにジョブが配信されると、サーバー構成とともに保存された「ホスト・キー・フィンガープリント」の値が、SFTP サーバーによって返されたホスト・キーのフィンガープリントと比較されます。SFTP サーバーのホスト・キーのフィンガープリントが、サーバー接続構成に保存されているフィンガープリントと一致しない場合は、接続が拒否されます。
13. 「適用」をクリックします。

SFTP の SSH オプション

セキュア・ファイル転送プロトコル(SFTP)はセキュア・シェル(SSH)技術に基づいています。Publisher では、SFTP 配信用に次の SSH オプションをサポートしています。

キー交換方法(Diffie-Hellman)	サーバー公開キー	暗号化(暗号スイート)	メッセージ認証コード(MAC)
<ul style="list-style-type: none"> • diffie-hellman-group14-sha1 • diffie-hellman-group-exchange-sha256 • diffie-hellman-group-exchange-sha1 • diffie-hellman-group1-sha1 • diffie-hellman-group14-sha256 • diffie-hellman-group16-sha512 • diffie-hellman-group18-sha512 	<ul style="list-style-type: none"> • ssh-rsa (最大 2048 ビット) • ssh-dss (1024 ビット) • rsa-sha2-256 • rsa-sha2-512 	<ul style="list-style-type: none"> • aes128-ctr • aes192-ctr • aes256-ctr • aes128-cbc • 3des-cbc • blowfish-cbc 	<ul style="list-style-type: none"> • hmac-sha1 • hmac-sha2-256 • hmac-sha2-512

次のアルゴリズムを使用できるのは、Java Cryptography Extension (JCE)の無制限強度の管轄ポリシー・ファイルがインストールされている JVM で Publisher が実行されている場合のみです:

- diffie-hellman-group-exchange-sha256
- diffie-hellman-group14-sha256
- diffie-hellman-group16-sha512
- diffie-hellman-group18-sha512
- rsa-sha2-256
- rsa-sha2-512
- aes192-ctr
- aes256-ctr

- hmac-sha2-256
- hmac-sha2-512

コンテンツ・サーバーの追加

Oracle WebCenter Content にドキュメントを配信できます。

コンテンツ・サーバーは、パブリック・インターネットからアクセスできる必要があります。

コンテンツ・サーバーを配信先として使用する場合:

- 実行時に、レポート・コンシューマはレポートをセキュリティ・グループおよびアカウント・メタデータ(該当する場合)にタグ付けして、配信時に適切なアクセス権がドキュメントに適用されるようにします。
- 特定のカスタム・メタデータ・フィールド(請求書番号、顧客名、オーダー日など)が必要なドキュメントの場合、レポート作成者は、コンテンツ・プロファイル・ルール・セットで定義されたカスタム・メタデータ・フィールドをデータ・モデル内のデータ・フィールドにマップできます。

Publisher は、Remote Intradoc Client (RIDC)を使用して Oracle WebCenter Content Server と通信します。したがって、接続プロトコルは RIDC で必要な標準に従います。サポートされるプロトコルは次のとおりです。

- **Intradoc:** Intradoc プロトコルは、Intradoc ソケット・ポート(通常は 4444)を介してコンテンツ・サーバーと通信します。このプロトコルにはクライアントとコンテンツ・サーバー間に信頼できる接続が必要であり、パスワード検証は実行されません。このプロトコルを使用するクライアントは、RIDC コールを実行する前に、必要な認証を自分で実行する必要があります。SSL を介して実行するように、Intradoc 通信を構成することもできます。
- **HTTP および HTTPS:** HTTP プロトコル接続には、リクエストごと有効なユーザー名とパスワード認証の資格証明が必要です。**Publisher** 管理ページでリクエストに使用する資格証明を指定します。
- **JAX-WS:** JAX-WS プロトコルは、コンテンツ・サーバー・インスタンスが適切に構成され、RIDC クライアントがインストールされた Oracle WebCenter Content 11g でのみサポートされています。JAX-WS は、この環境の外部ではサポートされません。

コンテンツ・サーバーを配信先として設定するには:

1. 「管理」ページの「配信」で、「コンテンツ・サーバー」を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. 「サーバー名」に「contentserver01」などを入力します。
3. コンテンツ・サーバー用の接続「URI」を入力します。URI には、次のサポートされているプロトコルからいずれかを選択できます。
 - HTTP/HTTPS — コンテンツ・サーバーの CGI パスの URL を指定します。
例:
 - http://localhost:16200/cs/idcplg
 - https://localhost:16200/cs/idcplg
 - Intradoc — Intradoc プロトコルは、Intradoc ソケット・ポート(通常は 4444)を介してコンテンツ・サーバーと通信します。IDC プロトコルは SSL を介した通信もサポートしています。例:

- idc://host:4444
- idcs://host:4443
- JAX-WS — JAX-WS プロトコルを使用してコンテンツ・サーバーに接続します。
 - 例:
 - http://wlsserver:16200/idcnativews
- 4. オプション: コンテンツ・サーバーのユーザー名およびパスワードを入力します。
- 5. オプション: コンテンツ・サーバーに配信されるレポート・ドキュメントにカスタム・メタデータを含めるには、「**カスタム・メタデータの有効化**」を選択します。
- 6. オプション: PGP 暗号化ドキュメントをコンテンツ・サーバーに配信するには:
 - a. 「**PGP キー**」リストから、セキュリティ・センターでアップロード済の PGP キーを選択します。
このステップにより、「**フィルタ・コマンド**」フィールドのフィルタ・コマンドが更新されます。
 - b. 暗号化されたドキュメントに署名するには、「**署名出力**」を選択します。
このステップにより、「**フィルタ・コマンド**」フィールドの既存のフィルタ・コマンドに-s パラメータが追加されます。
 - c. PGP 暗号化ドキュメントを ASCII armor 形式で配信する場合、「**ASCII Armor での出力**」を選択します。
このステップにより、「**フィルタ・コマンド**」フィールドの既存のフィルタ・コマンドに-a パラメータが追加されます。
- 7. 「アクセス制御」セクションで、「**パブリック**」を選択解除します。
- 8. 「**使用可能なロール**」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを 1 つ以上選択し、「**移動**」をクリックして、「**許可ロール**」リストに追加します。
- 9. 「**接続のテスト**」をクリックします。
- 10. 「**適用**」をクリックします。

オブジェクト・ストレージの追加

レポートを配信および格納するために 1 つ以上のオブジェクト・ストレージを使用できます。

オブジェクト・ストレージを配信チャンネルとして構成し、レポートをオブジェクト・ストレージに配信するジョブをスケジュールできます。

バケットを作成してレポートを編成できる Oracle Cloud Infrastructure Object Storage のコンパートメントへのアクセス権があることを確認します。

オブジェクト・ストレージへの管理者アクセスを保有していても、接続を構成し、レポートをオブジェクト・ストレージに配信する権限を持っている必要があります。組織の管理者は、IAM ポリシーを使用して Oracle Cloud Infrastructure で権限を設定し、Publisher からオブジェクト・ストレージにファイルを配信できるようにする必要があります。[ポリシーの開始](#)および[ポリシー参照](#)を参照してください。

- テナントに必要な権限:

- COMPARTMENT_INSPECT
- OBJECTSTORAGE_NAMESPACE_READ
- コンパートメント管理に必要な権限:
 - BUCKET_READ
 - BUCKET_INSPECT
 - OBJECT_READ OBJECT_OVERWRITE
 - OBJECT_CREATE
 - OBJECT_DELETE
 - OBJECT_INSPECT
- 1. **Oracle Cloud Infrastructure** コンソールを使用して、オブジェクト・ストレージにバケットを作成してから、認証用の **API** キーを設定します。

ユーザーの詳細、テナンシの詳細、および **SSH** キーの「公開キー・フィンガープリント」の値を収集し、**Publisher** でオブジェクト・ストレージを構成できるようにしてください。詳細なステップは、**Oracle Cloud Infrastructure** のドキュメントを参照してください。
- 2. **Publisher** で、オブジェクト・ストレージの秘密キー・ファイルをサーバーにアップロードしてオブジェクト・ストレージを配信チャンネルとして追加します。
 - a. 「管理」ページの「システム・メンテナンス」で、「**アップロード・センター**」を選択して秘密キー・ファイルを選択し、「**SSH 秘密キー**」をファイル・タイプとして選択してから「**アップロード**」をクリックします。
 - b. 「管理」ページの「配信」で、「**オブジェクト・ストレージ**」を選択してから「**サーバーの追加**」をクリックします。
 - i. 「**サーバー名**」フィールドで、サーバーの名前を入力します。たとえば、objectstorage1 などとなります。
 - ii. 「**URI**」フィールドで、オブジェクト・ストレージの **URL** を入力します。たとえば、https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com です。
 - iii. 「**テナンシ OCID**」および「**ユーザー OCID**」フィールドで、オブジェクト・ストレージにアクセスするための資格証明を指定します。
 - iv. **Oracle Cloud Infrastructure** コンソールから、オブジェクト・ストレージの公開キーのフィンガープリント値をコピーし、「**公開キー・フィンガープリント**」フィールドに貼り付けます。
 - v. 秘密キー・ファイルを指定して、秘密キーのパスワードを入力します。
 - vi. テナンシ用に提供したコンパートメント、およびレポートを配信するコンパートメントに関連付けられたバケットを指定します。
 - vii. 「アクセス制御」セクションで、「**パブリック**」を選択解除します。
 - viii. 「**使用可能なロール**」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを 1 つ以上選択し、「**移動**」をクリックして、「**許可ロール**」リストに追加します。
 - ix. 「**接続のテスト**」をクリックします。
 - x. 「**適用**」をクリックします。

例 6-1 ポリシー構成

グループ *g* にテナンシのコンパートメントの検査を許可するポリシー構成のサンプル:

```
Allow group <g> to inspect compartments in tenancy
```

グループ *g* にテナンシのオブジェクト・ストレージの管理を許可するポリシー構成のサンプル:

```
Allow group <g> to manage objectstorage-namespaces in tenancy
```

グループ *g* にコンパートメント *c* の管理およびコンパートメント内のリクエストされた操作の実行を許可するポリシー構成のサンプル:

```
Allow group <g> to manage object-family in compartment <c> where any {
request.operation='ListBuckets',
request.operation='ListObjects',
request.operation='PutObject',
request.operation='GetObject',
request.operation='CreateMultipartUpload',
request.operation='UploadPart',
request.operation='CommitMultipartUpload',
request.operation='AbortMultipartUpload',
request.operation='ListMultipartUploads',
request.operation='ListMultipartUploadParts',
request.operation='HeadObject',
request.operation='DeleteObject' }
```

Common UNIX Printing System (CUPS)サーバーの追加

CUPS サーバーの追加は「管理」ページで行います。

FAX 送信用に Common Unix Printing Service (CUPS)を構成し、IPP をネイティブにサポートしていないプリンタを使用した印刷を有効化できます。

CUPS サーバーを追加するには:

1. 「管理」ページで、**CUPS** を選択して追加済のサーバーのリストを表示します。
2. 「サーバーの追加」を選択します。
3. CUPS サーバーの「サーバー名」および「ホスト」ならびに「ポート」を入力します。

Oracle Content and Experience サーバーの追加

レポートを Oracle Content and Experience サーバーに配信し、クラウド上でレポートに簡単にアクセスして共有できます。

Oracle Content and Experience サーバーを追加するには:

1. 「管理」ページの「配信」で、**Content and Experience** を選択してから「サーバーの追加」をクリックします。
2. 「サーバー名」フィールドに、クラウドベースのコンテンツ・ハブにレポートを配信するために使用するサーバーの名前を入力します。
3. 「URI」フィールドで、Oracle Content and Experience サーバーの URI を入力します。たとえば、`https://host.oraclecloud.com` などです。

4. 「**ユーザー名**」および「**パスワード**」フィールドに、Oracle Content and Experience サーバーにアクセスする資格証明を指定します。
5. 「アクセス制御」セクションで、「**パブリック**」を選択解除します。
6. 「**使用可能なロール**」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを 1 つ以上選択し、「**移動**」をクリックして、「**許可ロール**」リストに追加します。
7. 「**接続のテスト**」をクリックします。
8. 「**適用**」をクリックします。

ランタイム構成の管理

このトピックでは、PDF ドキュメント・セキュリティ、FO 処理、PDF アクセシビリティおよび各出力タイプの固有のプロパティについて説明します。

トピック:

- [実行時プロパティの設定](#)
- [PDF 出力のプロパティ](#)
- [PDF デジタル署名のプロパティ](#)
- [PDF アクセシビリティ・プロパティ](#)
- [PDF/A 出力のプロパティ](#)
- [PDF/X 出力のプロパティ](#)
- [DOCX 出力のプロパティ](#)
- [RTF 出力のプロパティ](#)
- [PPTX 出力のプロパティ](#)
- [HTML 出力プロパティ](#)
- [FO 処理のプロパティ](#)
- [RTF テンプレートのプロパティ](#)
- [XPT テンプレートのプロパティ](#)
- [PDF テンプレートのプロパティ](#)
- [Excel テンプレートのプロパティ](#)
- [CSV 出力プロパティ](#)
- [Excel 出力のプロパティ](#)
- [eText 出力のプロパティ](#)
- [すべての出力プロパティ](#)
- [メモリー・ガードのプロパティ](#)
- [データ・モデル・プロパティ](#)
- [レポート配信プロパティ](#)
- [フォント・マッピングの定義](#)
- [通貨書式の定義](#)

実行時プロパティの設定

ランタイム構成ページにより、ランタイム・プロパティをサーバー・レベルで設定できます。

レポート・エディタの「プロパティ」ダイアログから、これらの同様のプロパティをレポート・レベルで設定することもできます。各レベルでプロパティに異なる値が設定されている場合、レポート・レベルが優先されます。

PDF 出力のプロパティ

PDF 出力のプロパティを設定して、必要な PDF ファイルのタイプを生成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
圧縮 PDF 出力	出力 PDF ファイルの圧縮を制御するために true または false を指定します。	true
PDF ビューア・メニュー・バーの非表示	ドキュメントがアクティブになっているときにビューア・アプリケーションのメニュー・バーを非表示にするには、 true を指定します。メニュー・バー・オプションは、「エクスポート」ボタンを使用して出力をブラウザ外部のスタンドアロン Acrobat Reader アプリケーションで表示する場合にのみ有効です。	false
PDF ビューア・ツール・バーの非表示	ドキュメントがアクティブになっているときにビューア・アプリケーションのツールバーを非表示にするには、 true を指定します。	false
スマート引用符の置換	PDF 出力でカーリー引用符をストレート引用符で置き換えない場合は、 false を指定します。	true
DVT チャートの不透明度およびグラデーション・シェーディング無効化	PDF 出力に不透明度およびグラデーション・シェーディングが不要な場合は、 true を指定します。これによって、 PostScript ファイルのサイズが小さくなります。	false
PDF セキュリティ有効化	PDF 出力を暗号化する場合は、 true を指定します。その後、次のプロパティも指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ドキュメント・パスワードを開く 権限パスワードの変更 暗号化レベル 	false
ドキュメント・パスワードを開く	このパスワードは、ドキュメントを開くために必要です。ユーザーはこれでドキュメントを開くのみができます。このプロパティは、「PDF セキュリティ有効化」を true に設定した場合にのみ有効です。 暗号化レベルを低、中または高に設定した場合、パスワードは、 Latin-1 文字のみが含まれ、長さが 32 バイト以下になる必要があります。 暗号化レベルを最高に設定した場合に、パスワードが 127 バイトを超えると、パスワードの最初の 127 バイトのみが認証に使用されます。	N/A

プロパティ名	説明	デフォルト
権限パスワードの変更	<p>ユーザーは、このパスワードを使用してセキュリティ設定をオーバーライドできます。このプロパティは、「PDF セキュリティ有効化」を true に設定した場合にのみ有効です。</p> <p>暗号化レベルを低、中または高に設定した場合、パスワードは、Latin-1 文字のみが含まれ、長さが 32 バイト以下になる必要があります。</p> <p>暗号化レベルを最高に設定した場合に、パスワードが 127 バイトを超えると、パスワードの最初の 127 バイトのみが認証に使用されます。</p> <p>pdf-permissions-password プロパティにパスワードを設定せずに pdf-open-password プロパティにパスワードを設定した場合、または pdf-open-password と pdf-permissions-password の両方のプロパティに同じパスワードを設定した場合、ユーザーはドキュメントとその機能への完全アクセス権を付与され、「印刷無効化」などの権限設定はバイパスまたは無視されます。</p>	N/A
暗号化レベル	<p>出力 PDF ファイルの暗号化レベルを指定します。使用可能な値は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> 0: 低(40 ビット RC4、Acrobat 3.0 以上) 1: 中(128 ビット RC4、Acrobat 5.0 以上) 2: 高(128 ビット AES、Acrobat 7.0 以上) 2: 最高(256 ビット AES、Acrobat X (10)以上) <p>このプロパティは、「PDF セキュリティ有効化」を true に設定した場合にのみ有効です。「暗号化レベル」を 0 に設定した場合は、次のプロパティも設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 印刷無効化 ドキュメント変更無効化 コンテキストのコピー、抽出およびアクセシビリティ無効化 コメントとフォーム・フィールドの追加および変更無効化 <p>「暗号化レベル」を 1 以上に設定した場合は、次のプロパティを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> スクリーン・リーダー用のテキスト・アクセス有効化 テキストやイメージ、その他のコンテンツのコピー有効化 許可された変更レベル 許可された印刷レベル 	2 - 高
ドキュメント変更無効化	<p>この権限は、「暗号化レベル」を 0 に設定した場合に使用できます。true に設定すると、PDF ファイルを編集できなくなります。</p>	false
印刷無効化	<p>この権限は、「暗号化レベル」を 0 に設定した場合に使用できます。true に設定すると、PDF ファイルの印刷が無効になります。</p>	false

プロパティ名	説明	デフォルト
コメントとフォーム・フィールドの追加および変更無効化	この権限は、「暗号化レベル」を 0 に設定した場合に使用できます。 true に設定すると、コメントおよびフォーム・フィールドの追加または変更機能が無効になります。	false
コンテキストのコピー、抽出およびアクセシビリティ無効化	この権限は、「暗号化レベル」を 0 に設定した場合に使用できます。 true に設定すると、コンテキストのコピー、抽出およびアクセシビリティの機能が無効になります。	false
スクリーン・リーダー用のテキスト・アクセス有効化	この権限は、「暗号化レベル」を 1 以上に設定した場合に使用できます。 true に設定すると、スクリーン・リーダー・デバイスのテキスト・アクセスが有効になります。	true
テキストやイメージ、その他のコンテンツのコピー有効化	この権限は、「暗号化レベル」を 1 以上に設定した場合に使用できます。 true に設定すると、テキスト、イメージおよびその他のコンテンツのコピーが有効になります。	false
許可された変更レベル	この権限は、「暗号化レベル」を 1 以上に設定した場合に使用できます。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 0: なし 1: ページの挿入、削除および回転を許可 2: フォーム・フィールドへの入力および署名を許可 3: コメント、フォーム・フィールドへの入力および署名を許可 4: ページの抽出以外のすべての変更を許可 	0
許可された印刷レベル	この権限は、「暗号化レベル」を 1 以上に設定した場合に使用できます。有効な値は次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> 0: なし 1: 低解像度(150 dpi) 2: 高解像度 	0

プロパティ名	説明	デフォルト
すべてのページで 1 つの共有リソース・オブジェクトのみを使用	<p>デフォルト・モードの Publisher では、PDF ファイルのすべてのページ用に 1 つの共有リソース・オブジェクトが作成されます。このモードには、作成されるファイルの全体的なサイズが小さくなるというメリットがあります。ただし、次のようなデメリットがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 多数の SVG オブジェクトが含まれた大きいファイルの表示には、時間がかかる場合があります。 • 部分的に抽出または削除するために、Adobe Acrobat を使用してファイルを分割すると、抽出された各部分とともに単一の共有リソース・オブジェクト(ファイル全体の SVG オブジェクトをすべて含む)が含まれるため、編集後の PDF ファイルのサイズが大きくなります。 <p>このプロパティを false に設定すると、ページごとにリソース・オブジェクトが作成されます。ファイル・サイズは大きくなりますが、PDF の表示は速くなり、PDF をより小さいファイルに分割することが容易になります。</p>	true
PDF ナビゲーション・パネルの初期表示	<p>ユーザーが PDF レポートを初めて開いたときに表示されるナビゲーション・パネル・ビューを制御します。次のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パネル縮小 - ナビゲーション・パネルを縮小した状態で PDF ドキュメントを表示します。 • ブックマークを開く(デフォルト) - 簡易ナビゲーション用のブックマーク・リンクを表示します。 • ページを開く - PDF の各ページについてクリック可能なサムネイル・ビューを表示します。 	ブックマークを開く

PDF デジタル署名のプロパティ

プロパティを設定して、**PDF** レポートのデジタル署名を有効にし、出力 **PDF** レポート内の署名の場所を定義します。

インスタンス・レベルまたはレポート・レベルで、**PDF** レポートのデジタル署名を有効化するプロパティを設定できます。インスタンスまたはレポートで使用するデジタル署名を選択できるよう、まず、デジタル署名を少なくとも 1 つ登録する必要があります。**PDF** レイアウト・テンプレートまたは **RTF** レイアウト・テンプレートに基づいてレポートのデジタル署名を実装するには、レポートの「**デジタル署名の有効化**」プロパティを **true** に設定します。

出力レポートの目的の場所にデジタル署名を配置するには、適切なプロパティを設定する必要があります。デジタル署名の配置場所の選択肢は、テンプレート・タイプによって異なります。次のポリシーを選択できます。

- (PDF のみ)「**既存の署名フィールド名**」プロパティを設定することによって、特定のフィールドにデジタル署名を配置します。

- (RTF および PDF) 「署名フィールドの場所」 プロパティを設定することによって、ページの一般的な場所(左上、上部中央または右上)にデジタル署名を配置します。
- (RTF および PDF) 「署名フィールドの X 座標」 プロパティおよび 「署名フィールドの Y 座標」 プロパティを設定することによって、x 座標と y 座標で指定された特定の場所にデジタル署名を配置します。

このオプションを選択すると、ドキュメント内のフィールドのサイズを定義する「署名フィールドの幅」 および 「署名フィールドの高さ」 を設定することもできます。

プロパティ名	説明	デフォルト
デジタル署名の有効化	PDF レポートのデジタル署名を有効にするには、true に設定します。	false
デジタル署名の名前	登録したデジタル署名ファイルを選択します。	N/A
既存の署名フィールド名	このプロパティは、PDF レイアウト・テンプレートにのみ適用されます。レポートが PDF テンプレートに基づく場合は、デジタル署名を配置する PDF テンプレートのフィールドを入力できます。	N/A
署名フィールドの場所	このプロパティは、RTF レイアウト・テンプレートまたは PDF レイアウト・テンプレートに適用できます。このプロパティには、「左上」、「上部中央」、「右上」の値を含むリストがあります。これらの一般的な場所のいずれかを選択すると、Publisher によってデジタル署名が適切なサイズと位置に調整されて出力ドキュメントに挿入されます。このプロパティを設定する場合は、X 座標と Y 座標のプロパティまたは幅と高さのプロパティは入力しないでください。	N/A
署名フィールドの X 座標	このプロパティは、RTF レイアウト・テンプレートまたは PDF レイアウト・テンプレートに適用できます。ドキュメントの左端を X 軸の原点として使用し、その左端からのポイント値でデジタル署名の配置場所を入力します。たとえば、デジタル署名を 8.5 インチ x11 インチ (つまり、幅が 612 ポイントで高さが 792 ポイント)のドキュメントの中央に水平方向に配置する場合は、306 と入力します。	0
署名フィールドの Y 座標	このプロパティは、RTF レイアウト・テンプレートまたは PDF レイアウト・テンプレートに適用できます。ドキュメントの下端を Y 軸の原点として使用し、その下端からのポイント値でデジタル署名の配置場所を入力します。たとえば、デジタル署名を 8.5 インチ x11 インチ (つまり、幅が 612 ポイントで高さが 792 ポイント)のドキュメントの中央に垂直方向に配置する場合は、396 と入力します。	0
署名フィールドの幅	挿入するデジタル署名フィールドに必要な幅をポイント単位(72 ポイントで 1 インチ)で入力します。これは、「署名フィールドの X 座標」プロパティおよび 「署名フィールドの Y 座標」プロパティも設定している場合にのみ適用されます。	0

プロパティ名	説明	デフォルト
署名フィールドの高さ	挿入するデジタル署名フィールドに必要な高さをポイント単位(72 ポイントで 1 インチ)で入力します。これは、「署名フィールドの X 座標」プロパティおよび「署名フィールドの Y 座標」プロパティも設定している場合にのみ適用されます。	0

PDF アクセシビリティ・プロパティ

次の表に示されているプロパティを設定して PDF アクセシビリティを構成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
PDF 出力のアクセス可能化	"true"に設定して、PDF 出力にアクセスできるようにします。アクセス可能な PDF 出力には、ドキュメント・タイトルおよび PDF タグが含まれています。	False
アクセス可能な PDF 出力に PDF/UA 形式を使用	"true"に設定して、アクセス可能な PDF 出力に PDF/UA 形式を使用します。	False

PDF/A 出力のプロパティ

PDF/A 出力を構成するには、次の表で説明されているプロパティを設定します。

プロパティ名	説明	デフォルト
PDF/A バージョン	PDF/A バージョンを設定します。	PDF/A-1B
PDF/A ICC プロファイル・データ	ICC プロファイル・データ・ファイルの名前。例: CoatedFOGRA27.icc ICC (International Color Consortium)プロファイルは、この PDF/A ファイルが表示される環境の色特性を説明するバイナリ・ファイルです。 選択する ICC プロファイルはメジャー・バージョンが 4 以下である必要があります。 JVM のデフォルト設定以外の特定のプロファイル・データ・ファイルを使用するには、ファイルを取得して<bi publisher repository>/Admin/Configuration に配置します。このプロパティを設定する場合、PDF/A ICC プロファイル情報(pdfa-icc-profile-info)の値も設定する必要があります。	JVM により提供されるデフォルトのプロファイル・データ
PDF/A ICC プロファイル情報	ICC プロファイル情報(pdfa-icc-profile-data が指定されている場合に必須)	sRGB IEC61966-2.1
PDF/A ファイル識別子	メタデータ・ディクショナリの xmpMM:Identifier フィールドで設定された 1 つ以上の有効なファイル識別子です。複数の識別子を指定する場合は、値をカンマで区切ります。	自動的に生成されたファイル識別子
PDF/A ドキュメント ID	有効なドキュメント ID です。この値は、メタデータ・ディクショナリの xmpMM:DocumentID フィールドで設定されます。	なし

プロパティ名	説明	デフォルト
PDF/A バージョン ID	有効なバージョン ID です。この値は、メタデータ・ディクショナリの <code>xmpMM:VersionID</code> フィールドで設定されます。	なし
PDF/A レンディション・クラス	有効なレンディション・クラスです。この値は、メタデータ・ディクショナリの <code>xmpMM:RenditionClass</code> フィールドで設定されます。	なし

PDF/X 出力のプロパティ

次に説明するようにプロパティを設定することによって PDF/X 出力を構成します。これらのプロパティに設定する値は印刷デバイスによって異なります。

その他の PDF プロパティについては、次の制限事項に留意してください。

- `pdf-version - PDF/X-1a` 出力に対して 1.4 より大きい値を設定することはできません。
- `pdf-security - false` に設定する必要があります。
- `pdf-encryption-level - 0` に設定する必要があります。
- `pdf-font-embedding - true` に設定する必要があります。

プロパティ名	説明	デフォルト
PDF/X ICC プロファイル・データ	(必須) ICC プロファイル・データ・ファイルの名前(例: <code>CoatedFOGRA27.icc</code>)。 ICC (International Color Consortium) プロファイルは、対象の出力デバイスの色特性を表すバイナリ・ファイルです。本番環境における色プロファイルは、印刷ベンダーか、生成された PDF/X ファイルの印刷を受け持つ印刷会社によって提供されることもあります。ファイルは <code><publisher リポジトリ>/Admin/Configuration</code> に配置する必要があります。 プロファイル・データは、Adobe サポートまたは colormangement.org から提供されることもあります。	なし
PDF/X 出力条件識別子	(必須) ICC (International Color Consortium) に登録されている標準印刷条件のいずれかの名前。このプロパティには、有効な参照名を値として入力します(例: <code>FOGRA43</code>)。 対象の印刷環境に適した値を選択します。この名前は、PDF/X ドキュメントのコンシューマによるファイルの自動処理制御やインタラクティブ・アプリケーションでのデフォルト設定の通知によく使用されます。	なし
PDF/X 出力条件	対象の印刷条件を交換ファイルの受取り側サイトの作業員にとって意味のある形式で表した文字列。値は <code>OutputIntents</code> ディクショナリの <code>OutputCondition</code> フィールドに設定されています。	なし

プロパティ名	説明	デフォルト
PDF/X レジストリ名	レジストリ名。このプロパティは、ICC レジストリ以外のレジストリに登録されている特性名を pdfx-output-condition-identifier に設定した場合に設定します。	http://www.color.org
PDF/X バージョン	Info ディクショナリの GTS_PDFXVersion および GTS_PDFXConformance フィールドに設定されている PDF/X バージョン。現在サポートされている値は PDF/X-1a:2003 のみです。	PDF/X-1a:2003

DOCX 出力のプロパティ

次の表では、DOCX 出力ファイルを制御するプロパティについて説明します。

プロパティ名	説明	デフォルト
変更トラッキング有効化	出力ドキュメントの変更トラッキングを有効にするには、 true に設定します。	false
トラッキング済変更のためのドキュメントの保護	トラッキングされている変更に対してドキュメントを保護するには、 true に設定します。	false
デフォルト・フォント	このプロパティを使用して、他のフォントが定義されていない場合に出力で使用されるフォント・スタイルとサイズを定義します。このことは、特に、生成されたレポート内の空の表セルのサイズを制御するために役立ちます。フォント名とサイズは、 Arial:12 のように <FontName>:<size> という書式で入力します。選択したフォントは実行時に処理エンジンで使用できる必要があります。	Arial:12
パスワードを開く	このプロパティでは、レポート・ユーザーが DOCX NA レポートを開くときに入力する必要があるパスワードを指定します。	

RTF 出力のプロパティ

次の表に示されたプロパティを設定して、RTF 出力ファイルを構成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
変更トラッキング有効化	"true"に設定すると、出力 RTF ドキュメントで変更のトラッキングが可能になります。	false
トラッキング済変更のためのドキュメントの保護	トラッキングされている変更に対してドキュメントを保護するには、 true に設定します。	false

プロパティ名	説明	デフォルト
デフォルト・フォント	他のフォントが定義されていない場合に、このプロパティを使用して RTF 出力のフォント・スタイルおよびサイズを定義します。このことは、特に、生成されたレポート内の空の表セルのサイズを制御するために役立ちます。フォント名とサイズは、Arial:12 のように<FontName>:<size>という書式で入力します。選択したフォントは実行時に処理エンジンで使用できる必要があります。フォントのインストールの詳細および事前定義済フォントのリストは、 フォント・マッピングの定義 を参照してください。	Arial:12
孤立行処理の有効化	"true"に設定すると、ドキュメント内に孤立行を含む段落がないように調整します。ページ内の最後の段落に孤立行が含まれ、段落の残りの行は次のページに続いているとします。この設定を有効にすると、段落の開始行が次のページに移動して段落のすべての行が一緒になるため、読みやすさが向上します。	false

PPTX 出力のプロパティ

次の表では、PPTX 出力ファイルを制御するプロパティについて説明します。

プロパティ名	説明	デフォルト
パスワードを開く	このプロパティでは、レポート・ユーザーが PPTX レポートを開くときに入力する必要があるパスワードを指定します。	NA

HTML 出力プロパティ

次の表では、HTML 出力ファイルを制御するプロパティについて説明します。

プロパティ名	説明	デフォルト
ヘッダーの表示	"false"に設定して、HTML 出力のテンプレート・ヘッダーを抑制します。	true
フッターの表示	"false"に設定して、HTML 出力のテンプレート・フッターを抑制します。	true
スマート引用符の置換	HTML 出力でカーリー引用符をストレート引用符で置き換えない場合は、"false"に設定します。	true
文字セット	出力 HTML 文字セットを指定します。	UTF-8
HTML 出力のアクセス可能化	"true"に設定すると、HTML 出力にアクセスできるようになります。	false
表の列への幅の割合の使用	"true"に設定すると、表の合計幅の割合の値(ポイント値ではなく)に従って表列が表示されます。ブラウザが非常に広い幅の列を含む表を表示する場合に、このプロパティは特に便利です。このプロセスを true に設定して、表の読みやすさを改善します。	true

プロパティ名	説明	デフォルト
ページ区切りで表示	<p>このプロパティを true に設定すると、HTML 出力はページ区切り機能を持つレポート・ビューアで表示されます。次の機能が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 目次の生成 ページの上部と下部のナビゲーション・リンク HTML ドキュメント内の特定のページにスキップする機能 ブラウザの検索機能を使用した、HTML ドキュメント内の文字列の検索 ブラウザのズーム機能を使用した、HTML ドキュメントのズーム・インおよびズーム・アウト <p>これらの機能は、レポート・ビューアを使用したオンライン表示の場合のみサポートされていることに注意してください。</p>	false
表セルのパディングの削減	<p>このプロパティを true に設定すると、HTML 表のセルがパディングなしで表示され、テキスト用のページ・スペースが最大限に確保されます。</p>	false
オフライン表示用にイメージおよびチャートを HTML に埋込み	<p>このプロパティを false に設定すると、チャートやイメージが HTML 出力に埋め込まれますが、これはオフラインでの表示に適していません。</p>	true
チャートに SVG を使用	<p>このプロパティを true に設定すると、チャートが SVG (スケーラブル・ベクトル・グラフィックス) として表示され、HTML 出力の解像度が高まります。このプロパティを false に設定すると、チャートはラスター画像として表示されます。</p>	true
元の表の幅を保持	<p>このプロパティを true に設定すると、表内の列が削除された場合に表の元の幅が保持されます。</p>	true
HTML 表に対して水平スクロールバーを自動的に有効化	<p>このプロパティを true に設定すると、ブラウザ・ウィンドウの現在のサイズに収まらない表に水平スクロール・バーが追加されます。</p>	false
HTML 表の列サイズ自動調整を有効化	<p>このプロパティを true に設定すると、表の列幅がブラウザ・ウィンドウのサイズに自動的に調整されます。</p>	false
空の段落にゼロの高さを設定	<p>このプロパティを true に設定すると、出力が HTML の場合に、空の段落(テキストがない段落)の高さが 0 ポイントに設定されます。</p>	true

FO 処理のプロパティ

次の表では、FO 処理を制御するプロパティについて説明します。

プロパティ名	説明	デフォルト
BI Publisher の XSLT プロセッサの使用	<p>パーサーの使用を制御します。false に設定すると、パッケージ化されていない XDK パーサーが使用されます。true に設定すると、Publisher でパッケージ化された 11g パーサーが使用されます。12c に設定すると、Publisher でパッケージ化された 12c パーサーが使用されます。</p> <p>このプロパティは、サーバー・レベルまたはレポート・レベルで設定できます。</p> <p>データ・サイズが 2GB を超える場合は、12c に設定します。</p> <p>このプロパティをレポート・レベルで 12c に設定する場合は、「XSLT プロセッサで ACCESS_MODE を FORWARD_READ に設定」を、サーバー・レベルでは false に、レポート・レベルでは true に設定するようにしてください。</p>	true
XSLT プロセッサのスケラブル機能有効化	<p>XDO パーサーのスケラブル機能を制御します。このプロパティを有効にするには、プロパティ「BI Publisher の XSLT プロセッサの使用」を true または 12c に設定する必要があります。</p> <p>このプロパティの値は、サーバー・レベルとレポート・レベルの両方で true にしてください。false に設定すると、FO プロセッサで、ディスクではなくメモリー(ヒープ)が使用され、メモリー不足の問題の原因となる可能性があります。</p>	false
XSLT ランタイム最適化の有効化	<p>"true"に設定すると、FO プロセッサの全体のパフォーマンスが向上し、temp ディレクトリに生成される FO の一時ファイルのサイズがかなり小さくなります。小さいサイズのレポート(1-2 ページなど)の場合、パフォーマンスの向上は著しくないことに注意してください。このプロパティを true に設定したときにさらにパフォーマンスを向上させるには、「属性セットの抽出」プロパティを"false"に設定します。</p>	true
XPATH 最適化の有効化	<p>"true"に設定すると、XML データ・ファイルは要素の頻度に対して分析されます。情報は XSL の XPath を最適化する際に使用されません。</p>	false
処理中にキャッシュされたページ	<p>このプロパティは、(一般プロパティで)一時ディレクトリを指定した場合にのみ有効になります。目次の生成時に、ページ数がこのプロパティに指定した値を超過するまで、FO プロセッサはページをキャッシュします。次に、ページを一時ディレクトリ内のファイルに書き込みます。</p>	50

プロパティ名	説明	デフォルト
Bidi 言語の桁代替タイプ	有効な値は、「なし」および「国別」です。「なし」に設定すると、東ヨーロッパの数値が使用されず、「国別」に設定すると、ヒンディー形式(アラビア-インド桁)が使用されます。この設定は、ロケールがアラビア語の場合にのみ有効です。それ以外の場合は、無視されます。	国別
変数ヘッダー・サポート無効化	true に設定すると、変数ヘッダーはサポートされません。変数ヘッダーのサポートでは、コンテンツにあわせて自動的にヘッダーのサイズが拡張されます。	false
外部参照無効化	true に設定すると、XSL 処理および XML 解析時にサブテンプレートや他の XML ドキュメントなどのセカンダリ・ファイルのインポートは許可されません。これによって、システムのセキュリティが向上します。レポートまたはテンプレートが外部ファイルを呼び出す場合に、これを" false "に設定します。	true
FO 解析バッファ・サイズ	FO プロセッサにバッファのサイズを指定します。バッファがいっぱいの場合、バッファから要素がレポートに表示されます。複合書式設定および計算を必要とする大きなサイズの表またはピボット表を含むレポートでは、レポートでこれらのオブジェクトを適切に表示するために、より大きなサイズのバッファが必要になる場合があります。このようなレポートの場合、バッファのサイズをレポート・レベルで増やします。この値を増やすと、システムのメモリー消費に影響を及ぼすことに注意してください。	1000000
FO 拡張改行	true に設定すると、改行が必要な場合に、句読点、ハイフネーションおよび国際テキストが適切に処理されます。	true
サブテンプレートの XSLT ランタイム最適化の有効化	FO プロセッサで XSL インポートを実行するオプションを指定してから、さらに処理を行うために 1 つの XSL のみを XDK に渡します。これにより、すべてのサブテンプレートをすでに含んでいる主要な XSL テンプレート全体に xslt 最適化を適用できます。 デフォルトは true です。FO プロセッサを直接呼び出す場合、デフォルトは false です。	true
レポート・タイムゾーン	有効な値: ユーザーまたは JVM 。 「ユーザー」に設定すると、 Publisher では、レポートにユーザー・レベルのレポートのタイムゾーン設定を使用します。ユーザーのレポートのタイムゾーンはユーザーのアカウント設定で設定されます。 「 JVM 」に設定すると、 Publisher では、すべてのユーザーのレポートにサーバー JVM のタイムゾーン設定を使用します。したがって、すべてのレポートには、個々のユーザー設定に関係なく、同じ時間が表示されます。この設定は、レポート・レベルで上書きできます。	ユーザー

プロパティ名	説明	デフォルト
XSLT プロセッサで ACCESS_MODE を FORWARD_READ に設定	「BI Publisher の XSLT プロセッサの使用」プロパティをレポート・レベルで 12c に設定する場合は、「XSLT プロセッサで ACCESS_MODE を FORWARD_READ に設定」プロパティが、サーバー・レベルでは false に、レポート・レベルでは true に設定されていることを確認してください。	false
PDF Bidi Unicode バージョン	PDF 出力に BIDI 文字列を表示するのに使用する Unicode バージョン(3.0 または 4.1)を指定します。	4.1

RTF テンプレートのプロパティ

次の表で説明するプロパティを設定することによって、RTF テンプレートを構成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
属性セットの抽出	生成された XSL-FO 内の属性セットが RTF プロセッサによって自動的に抽出されます。抽出されたセットは、参照用に特別な FO ブロックに配置されます。これにより、処理のパフォーマンスが向上し、ファイル・サイズが削減されます。有効な値は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> 有効化 - すべてのテンプレートおよびサブ・テンプレートの属性セットを抽出します。 自動 - テンプレートの属性セットは抽出しますが、サブ・テンプレートの属性セットは抽出しません。 無効化 - 属性セットを抽出しません。 	自動
XPath リライト有効化	RTF テンプレートを XSL-FO に変換すると、RTF プロセッサによって XML タグ名がフル XPath 表記に自動的にリライトされます。この機能を無効にするには、このプロパティを false に設定します。	true
チェックボックスに使用する文字	デフォルトの PDF 出力フォントには、チェックボックスを表現する絵文字が含まれていません。テンプレートにチェック・ボックスが含まれている場合は、このプロパティを使用して、PDF 出力でチェック・ボックスの表現に使用する Unicode フォントを指定します。 fontname;<unicode font number for true value's glyph >;<unicode font number for false value's glyph>という構文を使用して、選択状態の Unicode フォント番号と選択解除状態の Unicode フォント番号を指定する必要があります。 指定するフォントは、実行時に PDF 出力を生成するために使用できる必要があります。 例: Go Noto Current Jp;9745;9744	Go Noto Current Jp;9745;9744

プロパティ名	説明	デフォルト
バーコード・エンコーダ	レポートにバーコードを生成するためのバーコード・エンコーダを選択します。 Libre エンコーダの使用をお勧めします。	Libre

XPT テンプレートのプロパティ

次の表で説明するプロパティを設定することによって、XPT テンプレートを構成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
オフライン・レポートの XPT スケーラブル・モード	このプロパティを true に設定すると、XPT テンプレートを使用するスケジュール済レポートは、データ量が多くてもメモリー不足にならずに実行されます。レポート内の最初の 100,000 行のデータはメモリーに保存され、残りの行はファイル・システムに保存されます。 このプロパティを false に設定すると、XPT テンプレートを使用するスケジュール済レポートはメモリー内で処理されます。データがより少ないレポートの場合は、このプロパティを false に設定してください。	False
オンライン静的出力の XPT スケーラブル・モード	このプロパティを true に設定すると、XPT テンプレートを使用するオンライン・レポートは、データ量が多くてもメモリー不足にならずに実行されます。レポート内の最初の 100,000 行のデータはメモリーに保存され、残りの行はファイル・システムに保存されます。 このプロパティを false に設定すると、XPT テンプレートを使用するオンライン・レポートはメモリー内で処理されます。データがより少ないレポートの場合は、このプロパティを false に設定してください。	False
インタラクティブ出力の非同期モードの有効化	このプロパティを true に設定すると、XPT テンプレートを使用するインタラクティブ・レポートは、 Oracle WebLogic Server への非同期コールを行います。 このプロパティを false に設定すると、XPT テンプレートを使用するインタラクティブ・レポートは、 Oracle WebLogic Server への同期コールを行います。 Oracle WebLogic Server には、同期コールの数に制限があります。スタック・コールの期限は 600 秒です。	True

PDF テンプレートのプロパティ

使用可能な PDF テンプレート・プロパティを設定して、必要な PDF ファイルのタイプを生成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
出力から PDF フィールドを除去	true を指定すると、出力から PDF フィールドが除去されます。PDF フィールドが除去されると、このフィールドに入力されたデータは抽出できません。	false
出力ですべてのフィールドを読み取り専用を設定	デフォルトでは、PDF テンプレートの出力 PDF のすべてのフィールドが読み取り専用です。すべてのフィールドを更新可能に設定する場合は、このプロパティを false に設定します。	true
各フィールドの読み取り専用設定を保持	PDF テンプレートで定義されている各フィールドの読み取り専用設定を保持する場合は、このプロパティを true に設定します。このプロパティは、「出力ですべてのフィールドを読み取り専用を設定」の設定よりも優先されます。	false

Excel テンプレートのプロパティ

次の表で説明するプロパティを設定することによって、Excel テンプレートを構成します。

プロパティ名	説明	デフォルト
スケーラブル・モードの有効化	true に設定すると、Excel テンプレートを使用する大規模レポートは、メモリ不足の問題が発生せずに実行されます。シート内のデータのグループが 65000 行を超えると、データは複数のシートに自動的にオーバーフローします。これによって、1 シートにつき 65000 行という Microsoft Excel の制限を解決できます。 false に設定すると、Excel テンプレートを使用する大規模レポートは、メモリ不足の問題が発生する可能性があります。	false

CSV 出力プロパティ

次の表では、カンマ区切り値の出力を制御するプロパティについて説明します。

プロパティ名	説明	デフォルト
CSV デリミタ	カンマ区切り値の出力でデータを区切るために使用する文字を指定します。その他のオプションは、セミコロン(;)、タブ(\t) およびパイプ()です。	カンマ(,)
先行/後続の空白の除去	"True"を指定すると、データ要素とデリミタ間の先行および後続の空白を除去します。	false
UTF-8 BOM 署名の追加	"False"を指定すると、出力から UTF-8 BOM 署名を除去します。	true

eText 出力のプロパティ

次の表では、eText 出力ファイルを制御するプロパティについて説明します。

プロパティ名	説明	デフォルト
UTF-8 BOM 署名の追加	true に設定すると、eText 出力は BOM 形式の UTF-8 Unicode です。	false
bigdecimal の有効化	true に設定すると、eText 出力の高精度の数値計算が有効になります。	false

Excel 出力のプロパティ

Excel 出力を制御するための特定のプロパティを設定できます。

プロパティ名	説明	デフォルト
グリッド線の表示	Excel の表のグリッド線をレポート出力に表示するには、true に設定します。	false
新規シートとして改ページ	レポート・テンプレートで改ページを指定して Excel ワークブックに新規シートを生成する場合は、"true"に設定します。	true
最小列幅	列幅をポイント単位で設定します。列幅が指定した最小値より小さく、データが含まれていない列は前の列とマージされます。このプロパティの有効な範囲は 0.5 から 20 ポイントです。	3 (ポイント、0.04 インチ)
最小行高	行高をポイント単位で設定します。行高が指定した最小値未満で、データが含まれていない行は除去されます。このプロパティの有効な範囲は 0.001 から 5 ポイントです。	1 (ポイント、0.01 インチ)
値を同一列に保持	列のマージを最小化するには、このプロパティを true に設定します。列幅は、「表の自動レイアウト」プロパティに指定されている値を使用して列コンテンツに基づいて設定されます。出力のレイアウトは、元のレイアウト・アルゴリズムを使用した場合と同様には整わない可能性があります。	False

プロパティ名	説明	デフォルト
表の自動レイアウト	<p>変換率と最大長をそれぞれポイント単位で指定します(例: 6.5,150)。例を参照してください。</p> <p>このプロパティを有効にするには、「値を同一列に保持」プロパティを true に設定する必要があります。</p> <p>このプロパティを指定すると、表の列幅がコンテンツにあわせて拡張されます。列幅は、指定した最大値を上限として、文字数と変換率に基づいて拡張されます。</p> <p>例: 2 列の Excel データで構成されるレポートについて考えます。列 1 には 18 文字のテキスト文字列が含まれ、列 2 は 30 文字の長さです。このプロパティの値を 6.5,150 に設定した場合、次の計算が実行されます。</p> <p>列 1 は 18 文字です。 適用される計算: $18 * 6.5 \text{ pts} = 117 \text{ pts}$ Excel 出力の列幅は 117 pts になります。 列 2 は 30 文字です。 適用される計算: $30 * 6.5 \text{ pts} = 195 \text{ pts}$ 195 pts は指定した最大値 150 を超えるため、Excel 出力の列 2 の幅は 150 pts になります。</p>	N/A
ネストされた表の最大許容行数	<p>ネストされた表の最大許容行数を指定します。指定可能な値の範囲は 15000 から 999,999 です。</p> <p>レポートの処理中に、ネストされた内部表の行を XLSX ライターにフラッシュすることはできないため、これらの行はメモリー内に残り、メモリー消費が増えます。この制限を設定することによって、メモリー不足例外を回避できます。内部表のサイズがこの制限に達した時点で、生成が終了します。不完全な XLSX 出力ファイルが返されます。</p>	20,000
パスワードを開く	<p>このプロパティでは、レポート・ユーザーが XLSX 出力ファイルを開くときに入力する必要があるパスワードを指定します。</p> <p>構成名: <code>xlsx-open-password</code></p>	NA
行分割の有効化	<p>行高が大きく引き伸ばされることを防ぎ、行を複数の行に分割できるようにするには、"true"に設定します。</p>	True

すべての出力プロパティ

次の表内のプロパティはすべての出力に適用されます。

プロパティ名	説明	デフォルト
11.1.1.5 互換モードの使用	<p>予約済。オラクル社から指示されないかぎり、更新しないでください。</p>	False

プロパティ名	説明	デフォルト
カタログ・オブジェクト・パスの大/小文字を区別しない	カタログ・オブジェクトの検索中に、カタログ・オブジェクト・パスの大/小文字を無視するかどうかを指定します。	False
シード済レポートへのフォールバックを許可	カスタム・レポートを実行する権限がないときに、対応するシード済レポート(事前定義済レポート)をフォールバックする、または実行をスキップするかどうかを指定します。 true に設定した場合、ユーザーにカスタム・レポートを実行する権限がないと、対応するシード済レポートが実行されます。 false に設定した場合、カスタム・レポートの実行が失敗するとエラーが発生します。]	True
Web サービス最適化	true に設定すると、 Publisher からレポート定義がキャッシュされ、短い期間に同じレポートが複数回実行された場合に、カタログに何度もリクエストが送信されるのを回避できます。キャッシュは、システム・パフォーマンスの向上に役立ちます。	True

メモリー・ガードのプロパティ

ランタイム構成ページに、メモリー・ガードのプロパティのデフォルト値がリストされます。

メモリー・ガードのプロパティの値は、インスタンスに使用されるコンピュート・シェイプによって異なります。使用可能なサイズ変更オプションを参照してください。

プロパティ	説明	デフォルト値
オンライン・レポート用の最大レポート・データ・サイズ	オンライン・レポートのデータ・サイズを制限します。	300MB
オフライン(スケジュール済)レポート用の最大レポート・データ・サイズ	スケジュール済レポートのデータ・サイズを制限します。	500MB
バースティング・レポート用の最大レポート・データ・サイズ	バースティング・レポートのデータ・サイズを制限します。	オフライン(スケジュール済)レポート用の最大レポート・データ・サイズ
空きメモリーしきい値	最小限使用可能な空きメモリー領域を確認します。	500MB
空きメモリーしきい値未満の最大レポート・データ・サイズ	「空きメモリーしきい値」プロパティが正の値に設定されている場合、レポートのデータ・サイズを制限します。	free_memory_threshold/10
ガベージ・コレクション実行間隔の最小時間範囲	2 つの連続するガベージ・コレクション実行間隔の最小時間範囲(秒)を確認します。	300 (秒)
空きメモリーがしきい値を超えて回復するまでの最大待機時間	JVM 空きメモリーがしきい値を超えるまでレポート実行リクエストが待機する時間(秒)を制限します。このプロパティの値は、空きメモリーしきい値プロパティに正の値を指定する場合にのみ有効です。空きメモリーが指定された時間以降もしきい値を下回っている場合、レポート実行リクエストは拒否されません。	30 (秒)

プロパティ	説明	デフォルト値
オンライン・レポートのタイムアウト	オンライン・レポートの処理用のタイムアウト値を秒単位で指定します(データ抽出およびレポート生成の時間を含む)。	535 (秒)
CSV 出力の最大行数	CSV 形式のレポートの行数を制限します。	1000000

データ・モデル・プロパティ

ランタイム構成ページに、データ・モデルのプロパティの値がリストされます。データ・モデルのプロパティの値は、インスタンスに使用されるコンピュート・シェイプによって異なります。

プロパティ	説明	デフォルト
データ生成の最大データ・サイズ制限	データ・モデルの実行で生成できるデータのサイズを制限します。	500MB
最大サンプル・データ・サイズ制限	データ・モデル・エディタからアップロードできるサンプル・データ・ファイルのサイズを制限します。	1MB
データ・モデル・スケールアップ・モードの有効化	メモリー不足状態を防止します。 true に設定すると、データ・エンジンはデータの処理時にディスク領域を利用します。	True
自動 DB フェッチ・サイズ・モードの有効化	メモリー不足状態は回避されますが、処理時間が大幅に長くなる場合があります。この設定は、数百列の複雑な問合せを頻繁に処理する場合にのみ使用することをお勧めします。 true に設定すると、列の合計数およびデータセット内の問合せ列の合計数に従って、実行時にデータベースのフェッチ・サイズが設定されます。「 DB フェッチ・サイズ 」設定を無視します。このプロパティは、データ・モデル・レベルのデータベース・フェッチ・サイズのプロパティをオーバーライドします。	True
DB フェッチ・サイズ	データ・モデルのデータベース・フェッチ・サイズを制限します。「 自動 DB フェッチ・サイズ・モードの有効化 」が False に設定されている場合のみ、このプロパティ値は有効になります。	20 (行)
SQL 問合せタイムアウト	スケジュール済レポートの SQL 問合せのタイムアウト値を指定します。 この値は、インスタンスのコンピュート・サイズに基づいています。オンライン・レポートの値は 500 秒で、すべての実装で同じです。オンライン・レポートの値を変更することはできません。	600 秒
データ・モデル診断の有効化	true に設定すると、データセット詳細、メモリーおよび SQL 処理時間情報をログ・ファイルに書き込みます。デバッグ目的の場合のみ、このプロパティを true に設定することをお勧めします。このプロパティを有効にすると、処理時間が長くなります。	False

プロパティ	説明	デフォルト
SQL セッション・トレースの有効化	true に設定すると、処理された SQL 問合せごとに、SQL セッション・トレース・ログがデータベースに書き込まれます。データベース管理者が、このログを調査することがあります。	False
SQL プルーニングの有効化	このプロパティを有効化すると、処理時間が短くなり、メモリー使用量が削減されます。標準 SQL を使用する Oracle Database 問合せのみに適用されます。問合せで返される多数の列のうち、1 つのサブセットのみをレポート・テンプレートで使用する場合、SQL プルーニングでは、テンプレートで必要な列のみが返されません。SQL プルーニングは、PDF、Excel および E-text テンプレート・タイプには適用されません。	False
データのチャンク化の有効化	このプロパティを true に設定した場合、個別のデータ・モデル、レポートおよびレポート・ジョブに対して XML データのチャンク化が有効になります。このプロパティを true に設定した場合、サイズが大きく実行時間が長いレポートを処理するには、「 データ・チャンク・サイズ 」プロパティに適切な値を指定します。	False
データ・チャンク・サイズ	各データ・チャンクにデータ・サイズを指定します。「 データのチャンク化の有効化 」プロパティが true に設定されている場合にのみ適用されます。	300MB
DV データ行の上限	データセットから取得できる行数を制限します。	2000000
パラメータ値から先行および後続のスペースを切捨て	データ・モデルのパラメータ値から先行および後続のスペースを切り捨てます。	True
LOB のライン・フィードとキャリッジ・リターンを除外	このプロパティを true に設定すると、データのキャリッジ・リターンおよびライン・フィードが除外されます。	False
Web サービス、HTTP データソースの SSL の有効化	このプロパティを true に設定すると、Web サービスおよび HTTP データ・ソースの SSL 接続がサポートされ、サーバーから自己署名 SSL 証明書が自動的にインポートされます。証明書が自己署名されていない場合、アップロード・センターを使用して SSL 証明書をアップロードし、アップロードされた SSL 証明書を使用して接続を構成します。	False

レポート配信プロパティ

次の表のプロパティは、レポート配信に適用されます。

プロパティ名	説明	デフォルト
FTP/SFTP 配信再試行の有効化	FTP または SFTP 配信チャネルを通じた配信が失敗した場合、 Publisher は最初の試行が失敗した 10 秒後に配信を再試行します。 この設定は、すべての FTP および SFTP 配信リクエストに影響し、個別のサーバーに対しては構成できません。	True

フォント・マッピングの定義

RTF テンプレートまたは PDF テンプレートのベース・フォントを公開ドキュメント用のターゲット・フォントにマップします。

フォント・マッピングは、サイト・レベルまたはレポート・レベルで指定できます。フォント・マッピングは PDF 出力および PowerPoint 出力でのみ実行されます。

フォント・マッピングには 2 つのタイプがあります:

- RTF テンプレート - RTF テンプレートおよび XSL-FO テンプレートのフォントを PDF および PowerPoint 出力フォントにマップします。
- PDF テンプレート - PDF テンプレートのフォントを別の PDF 出力フォントにマップします。

アップロード・センターを使用して、カスタム・フォントをアップロードします。[構成固有のファイルのアップロードと管理](#)を参照してください。

フォントを公開に使用できるようにする

Type1 フォント・セットおよび TrueType フォント・セットは公開で使用できます。これらのセットのフォントは、追加設定なしでターゲット・フォントとして選択できます。

事前定義済みのフォントは、<oracle_home>/oracle_common/internal/fonts にあります。別のフォントにマップするには、そのフォントをこのディレクトリに配置して、実行時に公開で使用できるようにします。環境がクラスタ化されている場合は、そのフォントをすべてのサーバーに配置する必要があります。

サイト・レベルまたはレポート・レベルでのフォント・マッピングの設定

フォント・マッピングはサイト・レベルまたはレポート・レベルで定義できます。

- サイト・レベルでマッピングを設定するには、管理ページから「**フォント・マッピング**」リンクを選択します。
- レポート・レベルでマッピングを設定するには、レポートのプロパティを表示してから「**フォント・マッピング**」タブを選択します。これらの設定は選択したレポートのみに適用されます。

レポート・レベルの設定は、サイト・レベルの設定よりも優先されます。

フォント・マッピングの作成

ベース・フォントとターゲット・フォントを指定します。

1. 管理ページから「ランタイム構成」で「フォント・マッピング」を選択します。
2. 「RTF テンプレート」または「PDF テンプレート」で「フォント・マッピングの追加」をクリックします。
3. ベース・フォントの詳細を指定します。
 - **ベース・フォント:** 新しいフォントにマップするフォント・ファミリーを入力します。
例: Arial
 - **スタイル:** 「標準」または「斜体」(PDF テンプレートのフォント・マッピングには適用されません)
 - **太さ:** 「標準」または「太字」(PDF テンプレートのフォント・マッピングには適用されません)
4. ターゲット・フォントの詳細を指定します。
 - **ターゲット・フォント・タイプ:** 「Type 1」または「Truetype」
 - **ターゲット・フォント:** ターゲット・フォントを選択します。
「Truetype」を選択した場合、コレクション内で特定の番号付きフォントを入力できます。必要なフォントの **TrueType コレクション(TTC)番号**を入力します。

事前定義済みのフォント

次の Type1 フォントは Adobe Acrobat に組み込まれており、デフォルトでこれらのフォントのマッピングは公開用に使用できます。

これらのフォントのいずれかをターゲット・フォントとして選択でき、追加の設定は不要です。

Type1 フォントを次の表に示します。

フォント・ファミリー	スタイル	太さ	フォント名
serif	標準	標準	Time-Roman
serif	標準	太字	Times-Bold
serif	イタリック体	標準	Times-Italic
serif	イタリック体	太字	Times-BoldItalic
sans-serif	標準	標準	Helvetica
sans-serif	標準	太字	Helvetica-Bold
sans-serif	イタリック体	標準	Helvetica-Oblique
sans-serif	イタリック体	太字	Helvetica-BoldOblique
固定幅フォント	標準	標準	Courier
固定幅フォント	標準	太字	Courier-Bold
固定幅フォント	イタリック体	標準	Courier-Oblique
固定幅フォント	イタリック体	太字	Courier-BoldOblique

フォント・ファミリ	スタイル	太さ	フォント名
Courier	標準	標準	Courier
Courier	標準	太字	Courier-Bold
Courier	イタリック体	標準	Courier-Oblique
Courier	イタリック体	太字	Courier-BoldOblique
Helvetica	標準	標準	Helvetica
Helvetica	標準	太字	Helvetica-Bold
Helvetica	イタリック体	標準	Helvetica-Oblique
Helvetica	イタリック体	太字	Helvetica-BoldOblique
Times	標準	標準	Times
Times	標準	太字	Times-Bold
Times	イタリック体	標準	Times-Italic
Times	イタリック体	太字	Times-BoldItalic
Symbol	標準	標準	Symbol
ZapfDingbats	標準	標準	ZapfDingbats

TrueType フォントを次の表に示します。すべての TrueType フォントはサブセットであり、PDF に組み込まれています。

フォント・ファミリ名	スタイル	太さ	実際のフォント	実際のフォント・タイプ
Andale Duospace WT	標準	標準	ADUO.ttf	TrueType (Latin1 のみ、固定幅)
Andale Duospace WT	太字	太字	ADUOB.ttf	TrueType (Latin1 のみ、固定幅)
Andale Duospace WT J	標準	標準	ADUOJ.ttf	TrueType (日本語フレーバ、固定幅)
Andale Duospace WT J	太字	太字	ADUOJB.ttf	TrueType (日本語フレーバ、固定幅)
Andale Duospace WT K	標準	標準	ADUOK.ttf	TrueType (韓国語フレーバ、固定幅)
Andale Duospace WT K	太字	太字	ADUOKB.ttf	TrueType (韓国語フレーバ、固定幅)
Andale Duospace WT SC	標準	標準	ADUOSC.ttf	TrueType (簡体字中国語フレーバ、固定幅)
Andale Duospace WT SC	太字	太字	ADUOSCB.ttf	TrueType (簡体字中国語フレーバ、固定幅)

フォント・ファミリ名	スタイル	太さ	実際のフォント	実際のフォント・タイプ
Andale Duospace WT TC	標準	標準	ADUOTC.ttf	TrueType (繁体字中国語フレーバ、固定幅)
Andale Duospace WT TC	太字	太字	ADUOTCB.ttf	TrueType (繁体字中国語フレーバ、固定幅)
Go Noto Current Jp	標準	標準	GoNotoCurrentJp.ttf	TrueType (日本語フレーバ)
Go Noto Current Kr	標準	標準	GoNotoCurrentKr.ttf	TrueType (韓国語フレーバ)
Go Noto Current Sc	標準	標準	GoNotoCurrentSc.c.ttf	TrueType (簡体字中国語フレーバ)
Go Noto Current Tc	標準	標準	GoNotoCurrentTc.c.ttf	TrueType (繁体字中国語フレーバ)

オープンソースのフォントによるライセンス提供される Monotype フォントの置換え

Oracle Analytics Cloud では、Oracle Analytics Publisher、分析およびダッシュボードの PDF レポートの Monotype フォントがオープンソース・フォントで置き換えられました。

Go Noto フォントが、Oracle Analytics Publisher、分析およびダッシュボードの PDF レポートのデフォルトのフォールバック・フォントです。レポートでオープンソースのフォントをテストし、レポート・テンプレートで書式設定を修正してください。

レポートのフォントに関する注意事項

次の表に、Oracle Analytics Cloud での Monotype フォントの代替フォントを示します。

Monotype フォント	代替フォント
Monotype Albany フォント	Google Noto フォント
Monotype Barcode フォント	Libre Barcode フォント

Oracle Analytics Cloud のレポートでは、PDF レポートで英語以外の言語および英語/西ヨーロッパ言語の一部の特殊文字をサポートするために、Go Noto フォントをフォールバック・フォントとして使用します。PDF 出力の生成時に、デフォルトの PDF フォント (Helvetica、Times Roman、Courier など) やユーザーが指定したフォントではデータに含まれる文字を表示できない場合、フォールバック・フォントが使用されます。

バーコードの生成には Libre Barcode フォントを使用します。

レポートのフォントに関して現在実行できる操作

重要なレポートはすべてレビューして、レポートのフォーマットが適切になるようにレイアウトを編集することをお勧めします。分析レポートやダッシュボードにはピクセルパーフェ

クト・レイアウトが含まれていないため、ライセンス提供される **Monotype** フォントをオープンソース・フォントに置き換えても影響は最小限であると予想されます。

Google Noto フォントと **Monotype Albany** フォントは似ていますが、英語以外の一部の言語では、文字の高さ、幅および太さに若干の違いがあります。場合によっては、これらの違いがピクセルパーフェクトな **PDF** 出力に影響を与える可能性があります。**Google Noto** フォントを使用するには、これらのレポートのレイアウト・テンプレートを編集する必要がある場合があります。

Go Noto フォントは、分析、ダッシュボード、**Publisher** レポートのためのデフォルトのフォールバック・フォントです。

Monotype Barcode フォント	代替フォント
128R00.ttf	LibreBarcode128-Regular.ttf
B39R00.ttf	LibreBarcode39Extended-Regular.ttf
UPCR00.ttf	LibreBarcodeEAN13Text-Regular.ttf

通貨書式の定義

管理ランタイム構成ページで定義されている通貨書式はシステム・レベルで適用されます。通貨書式はレポート・レベルでも適用できます。

レポート・レベルの設定は、ここでのシステム・レベルの設定よりも優先されます。

通貨書式の理解

「通貨書式」タブでは、数値書式マスクを特定の通貨にマッピングして、レポートにおいて複数の通貨をそれぞれ対応する書式で表示できます。通貨書式は **RTF** および **XSL-FO** テンプレートでのみサポートされています。

RTF テンプレートで通貨書式を適用するには、通貨書式設定機能を使用します。

通貨書式を追加するには:

1. 「追加」アイコンをクリックします。
2. ISO 通貨コードを入力します(例: USD、JPY、EUR、GBP、INR)。
3. この通貨に適用する書式マスクを入力します。

書式マスクは **Oracle** 数値書式である必要があります。**Oracle** 数値書式では、書式を作成するのにコンポーネント"**9**"、"**0**"、"**D**"および"**G**"を使用します(例: **9G999D00**)。

説明:

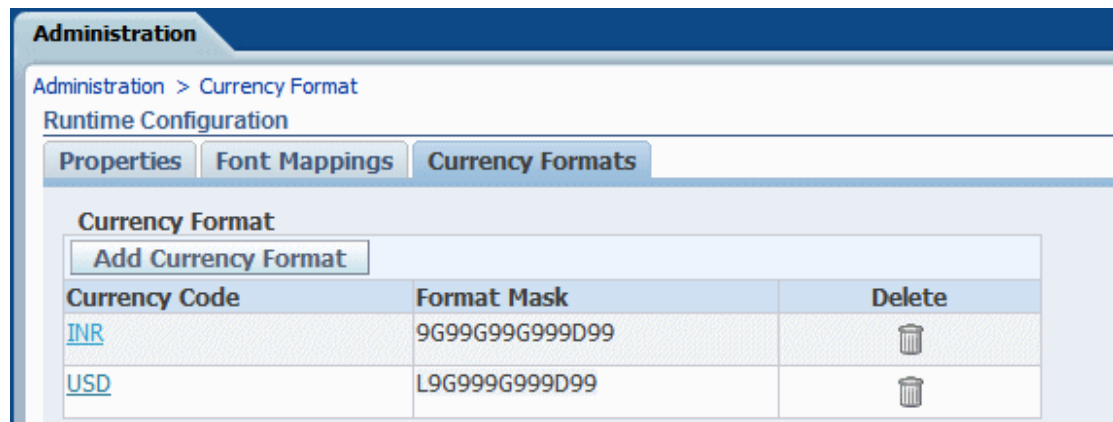
9 はデータ内にある場合にのみ表示される数値を表します

G はグループ区切りを表します

D は小数区切りを表します

0 は入力データに関係なく明示的に表示される数字を表します

次の図は、サンプルの通貨書式を示しています。



セキュアなレポート

このトピックでは、ピクセルパーフェクト・レポートをセキュリティで保護する方法について説明します。

トピック:

- [PDF レポートでのデジタル署名の使用](#)
- [暗号化されたレポート配信での PGP キーの使用](#)
- [PDF ドキュメントの暗号化](#)

PDF レポートでのデジタル署名の使用

PDF レポートにデジタル署名を適用できます。

デジタル署名を使用すると、送受信するドキュメントの信頼性を確認できます。デジタル署名ファイルをセキュアな場所にアップロードし、実行時にデジタル署名を使用して PDF レポートに署名できます。デジタル署名によって、署名者のアイデンティティを確認され、署名後にドキュメントが変更されていないことが確認されます。

追加情報は、Verisign および Adobe の Web サイトを参照してください。

前提条件および制限

Publisher の PDF レポートでデジタル署名を使用する際は、いくつかの制限に注意する必要があります。

デジタル署名は、パブリック認証局、またはプライベート/内部の認証局(内部で使用している場合のみ)から取得されます。

次の制限に注意してください。

- デジタル署名を含めることができるのは、Publisher にスケジュールされているレポートのみです。
- 複数のデジタル署名を登録し、インスタンス・レベルでデジタル署名を有効化できます。レポート・レベルでは、レポートに適用するデジタル署名を選択できます。同じレポートに割り当てられた複数のテンプレートで、デジタル署名プロパティが共有されます。

デジタル証明書の取得

デジタル証明書は、購入するかまたは自己署名方法を使用して取得できます。

- デジタル証明書を取得するには、次のいずれかを実行します:
 - 証明書を認証局から購入して証明書の信頼性を検証し、**Microsoft Internet Explorer 7**以上を使用して、購入した証明書に基づいて**PFX**ファイルを作成します。
 - **PFX**ファイルの一部として**Adobe Acrobat**、**Adobe Reader**、**OpenSSL**、**OSDT**などのソフトウェア・プログラムを使用して自己署名付き証明書を作成し、**PFX**ファイルを使用して**PDF**ドキュメントを**Publisher**に登録して署名します。自己署名付き証明書は誰もが作成できるため、このような証明書を検証および信頼するときには注意してください。

PFX ファイルの作成

デジタル証明書を認証局から取得した場合は、その証明書を使用して**PFX**ファイルを作成できます。

自己署名付き証明書の**PFX**ファイルがすでに存在する場合、**PFX**ファイルの作成は不要です。

Microsoft Windows Explorerを使用して**PFX**ファイルを作成するには:

1. コンピュータにデジタル証明書が保存されていることを確認します。
2. **Microsoft Internet Explorer**を開きます。
3. 「ツール」メニューから、「**インターネット オプション**」、「コンテンツ」タブの順にクリックします。
4. 「証明書」をクリックします。
5. 「証明書」ダイアログで、デジタル証明書を含むタブをクリックし、証明書をクリックします。
6. 「**エクスポート**」をクリックします。
7. 証明書のエクスポート・ウィザードのステップに従います。詳細は、**Microsoft Internet Explorer**に付属するドキュメントを参照してください。
8. プロンプトが表示されたら、エクスポート・ファイル形式として「**Use DER encoded binary X.509**」を選択します。
9. プロンプトが表示されたら、証明書を**PFX**ファイルの一部としてコンピュータ上のアクセス可能な場所に保存します。

PFXファイルを作成した後は、このファイルを使用して**PDF**ドキュメントに署名できます。

デジタル署名の適用

デジタル署名を設定して、**PDF**レポートに署名できます。

複数のデジタル署名をインスタンス・レベルでアップロードして登録し、そのうちの1つのデジタル署名をデフォルトに設定して、**PDF**レポートのデジタル署名を可能に

します。レポート・レベルでは、レポートに適用するデジタル署名を選択することや、レポートのデジタル署名を無効化することができます。

1. デジタル署名ファイルは、アップロード・センターでアップロードします。
2. **Publisher** 管理ページでデジタル署名を登録し、レポートに署名することを許可されたロールを指定します。
3. 複数のデジタル署名を登録した場合は、そのうちの 1 つを、インスタンスのデフォルトの署名として設定します。
 - a. 「管理」ページで「**セキュリティ・センター**」に移動し、「**デジタル署名**」をクリックします。
 - b. 「デジタル署名」タブで、デフォルトに設定するデジタル署名ファイルを選択し、「**デフォルトとして設定**」をクリックします。
 - c. 「ランタイム構成」ページで、「**デジタル署名の有効化**」プロパティを true に設定します。
4. レポートのデジタル署名を構成するには、レポートを選択して、デジタル署名のプロパティを設定します。
 - a. 「レポート・プロパティ」ダイアログで、「書式設定」タブを選択します。
 - b. レポートの「**デジタル署名の有効化**」プロパティを true に設定します。
 - c. レポートのデジタル署名を選択します。
 - d. 表示フィールド名と場所を指定します。
5. 許可ロールを持つユーザーとしてログ・インし、PDF レポートを選択して、**Publisher** スケジューラからレポートを発行します。レポートが完了すると、レポートの指定の場所にデジタル署名を使用して署名されます。

デジタル署名の登録および許可ロールの割当

管理者は、デジタル署名を登録でき、そのデジタル署名を使用してドキュメントに署名する権限を持つロールを割り当てすることができます。

デジタル署名ファイルは、アップロード・センターでアップロードする必要があります。

Publisher は、単一デジタル署名の識別情報をサポートしています。

1. 「管理」タブの「**セキュリティ・センター**」で、「**デジタル署名**」をクリックします。
2. アップロード・センターにアップロードしたデジタル署名ファイルを選択し、デジタル署名のパスワードを入力します。
3. このデジタル署名を使用してドキュメントに署名する権限を持つロールを有効にします。チャトル・ボタンを使用して、「使用可能なロール」を「許可ロール」リストに移動します。
4. 「**適用**」をクリックします。

署名の表示フィールドまたは場所の指定

完了したドキュメントにデジタル署名を表示する場所を指定する必要があります。使用可能な方法は、テンプレート・タイプが PDF か RTF によって異なります。

テンプレートが PDF の場合は、次のいずれかのオプションを使用します。

- PDF テンプレートでデジタル署名用のテンプレート・フィールドを指定します。

- レポート・プロパティでデジタル署名の場所を指定します。
テンプレートが RTF の場合は、レポート・プロパティでデジタル署名の場所を指定します。

PDF テンプレートでのデジタル署名用のテンプレート・フィールドの指定

PDF テンプレートにデジタル署名用のフィールドを含めます。

レポート作成者は、デジタル署名用の PDF テンプレートに新規フィールドを追加することも、既存のフィールドを構成することもできます。デジタル署名用のフィールドの追加または指定を参照してください。

レポートでのデジタル署名の場所の指定

レポートのデジタル署名の場所を指定できます。

ドキュメント内でデジタル署名を配置する場所を指定するとき、一般的な場所(左上、上部中央または右上)を指定するか、またはドキュメント内の x 座標と y 座標を指定できます。

実行時プロパティを使用して、デジタル署名用のフィールドの高さと幅を指定することもできます。デジタル署名を含めるためにテンプレートを変更する必要はありません。

1. カタログで、レポートにナビゲートします。
2. レポートの「編集」リンクをクリックして、編集のためにレポートを開きます。
3. 「プロパティ」、「書式設定」タブの順にクリックします。
4. プロパティの「PDF デジタル署名」グループにスクロールします。
5. 「デジタル署名の有効化」を「True」に設定します。
6. 次のように適切なプロパティを設定して、ドキュメント内でデジタル署名を表示する場所を指定します(署名はドキュメントの最初のページのみ挿入されることに注意してください)。

- **既存の署名フィールド名** - この方法には適用されません。
- **署名フィールドの場所** — 次の値を含むリストが表示されます。

左上、上部中央、右上

これらの一般的な場所のいずれかを選択すると、Publisher によってデジタル署名が適切なサイズと位置に調整されて出力ドキュメントに配置されます。

このプロパティを設定する場合は、X 座標と Y 座標のプロパティまたは幅と高さのプロパティは入力しないでください。

- **署名フィールドの X 座標** — ドキュメントの左端を X 軸の原点として使用し、その左端からのポイント値でデジタル署名の配置場所を入力します。
たとえば、デジタル署名を 8.5 インチ x11 インチ(つまり、幅が 612 ポイントで高さが 792 ポイント)のドキュメントの中央に水平方向に配置するには、306 と入力します。
- **署名フィールドの Y 座標** — ドキュメントの下端を Y 軸の原点として使用し、その下端からのポイント値でデジタル署名の配置場所を入力します。

たとえば、デジタル署名を 8.5 インチ x11 インチ(つまり、幅が 612 ポイントで高さが 792 ポイント)のドキュメントの中央に垂直方向に配置するには、396 と入力します。

- **署名フィールドの幅** — 挿入するデジタル署名フィールドに必要な幅をポイント単位で入力します。これは、X 座標と Y 座標を設定している場合にのみ適用されます。
- **署名フィールドの高さ** — 挿入するデジタル署名フィールドに必要な高さをポイント単位で入力します。これは、X 座標と Y 座標を設定している場合にのみ適用されます。

デジタル署名を使用したレポートの実行と署名

デジタル署名権限を持つロールが割り当てられているユーザーは、生成されたレポートが署名を含めるように構成されている場合に、それに対して署名できます。スケジュール済レポートにのみ署名できます。

デジタル署名を使用してレポートに署名するには:

1. デジタル署名権限を付与されたロールを持つユーザーとしてログインします。
2. カタログで、デジタル署名が有効にされたレポートにナビゲートし、「**スケジュール**」をクリックします。
3. レポート・ジョブのスケジュール・ページのフィールドに入力し、「**PDF 出力**」を選択して、ジョブを発行します。

完了した PDF にデジタル署名が表示されます。

暗号化されたレポート配信での PGP キーの使用

FTP サーバーまたはコンテンツ・サーバーを通じて、PGP の暗号化されたレポートを配信できます。

PGP 公開キーを使用して PGP 暗号化ファイルをバイナリまたは ASCII 形式で配信するように、FTP サーバーおよびコンテンツ・サーバー配信チャンネルを構成できます。

PGP キーをアップロードおよびダウンロードするには、セキュリティ・センターを使用します。"BI Publisher 公開キー"ファイルは、署名済ファイルの署名者を確認します。配信チャンネルを構成して署名済ドキュメントを送信している場合、"BI Publisher 公開キー"ファイル(バイナリまたは ASCII 形式で)ダウンロードし、署名の確認および Publisher から配信されたファイルの復号化に使用される宛先 PGP システムにキーをインポートします。

PGP キーの管理

PGP キーをアップロードおよび削除できます。

1. 管理ページから「**セキュリティ・センター**」で「**PGP キー**」を選択します。
2. PGP キーをキーストアにアップロードするには、「**ファイルの選択**」をクリックして、PGP キー・ファイルを選択し、「**アップロード**」をクリックします。
3. アップロードした PGP キーを削除するには、「PGP キー」表で、PGP キーに対応する削除アイコンをクリックします。
4. 署名検証用の PGP 公開キーをダウンロードするには、公開キー・ファイルに対応するダウンロード・アイコンをクリックします。

PDF ドキュメントの暗号化

PDF ドキュメントを暗号化して、ファイルの内容への許可のないアクセスを防止できます。

「暗号化レベル」の PDF 出力プロパティで設定するセキュリティ・レベルによって、PDF ドキュメントの暗号化に使用される暗号化アルゴリズムが指定されます。サーバー・レベルまたはレポート・レベルで PDF ドキュメントの暗号化を定義します。PDF 出力のプロパティを参照してください。

Publisher は次の AES-256 暗号化をサポートします:

- FOProcessor ユーティリティまたは PDFGenerator ユーティリティを使用して RTF テンプレートおよび XPT テンプレートから生成された PDF ドキュメント。
- FormProcessor ユーティリティを使用して PDF テンプレート(PDF フォーム)から生成された PDF ドキュメント。Publisher では、暗号化されたフォーム入力はサポートされていません。
- 「PDF から PostScript」または「PDF から PCL」の印刷フィルタを使用して印刷された、パスワード保護のない PDF ドキュメント。フィルタを使用しない場合、暗号化された PDF ドキュメントを CUPS プリンタまたは IPP プリンタに送信できません。

Publisher では、ドキュメントの暗号化および復号化に、JCE (Java Cryptography Extension)の AES 実装を使用します。PDF ドキュメントに AES 256 ビットの暗号化を使用する場合は、JCE の無制限強度の管轄ポリシーが、Publisher インストールのあるコンテナを実行する JVM にインストールされている必要がありますが、AES 128 ビットの暗号化の場合はこのポリシーは必要ありません。

Publisher では、暗号化された入力はサポートされていません。

PDF ドキュメントの暗号化アルゴリズム

Publisher では、PDF ドキュメントのセキュリティ設定に基づいて暗号化アルゴリズムが使用されます。

セキュリティ・レベル	暗号化スキーム	PDF バージョン	Acrobat バージョン
低	RC4 (40 ビット)	1.1	3.0
中	RC4 (128 ビット)	1.4	5.0
高	AES (128 ビット)	1.5	7.0
最高	AES (256 ビット)	1.7 (拡張レベル 5)	X

Publisher カタログ・オブジェクトの監査データ

管理者は、Publisher カタログ・オブジェクトの監査データの表示を有効化または無効化し、監査データへの接続を構成し、監査データを表示するためのレポートを作成できます。

トピック:

- [Publisher カタログ・オブジェクトの監査データについて](#)

- [Publisher の監査データの表示の有効化または無効化](#)
- [Publisher の監査データのデータ・ソース接続の指定](#)
- [Publisher の監査データの表示](#)

Publisher カタログ・オブジェクトの監査データについて

サンプル・レポートを使用して、Publisher カタログ・オブジェクトの監査データを表示できます。

レポート、データ・モデル、サブテンプレート、スタイル・テンプレート、フォルダなどの Publisher カタログ・オブジェクトにいつ誰がアクセスしたかを確認できます。

監査データは、次のトラッキングに役立ちます:

- レポートの開始、処理、終了およびダウンロード
- レポート・ジョブの一時停止、再開および取消
- Publisher リソースの作成、変更、コピーおよび削除
- Publisher リソース・アクセス

ノート:

ユーザー・セッション・データ(ユーザー・ログインおよびユーザー・ログアウト・イベント)は監査データに含まれません。`host:port/ui/xmlpserver` の Publisher インタフェース・ページで実行されるレポート・アクティビティのみが、監査データに含まれます。`host:port/ui/analytics` のインタフェース・ページで実行されるレポート・アクティビティは、監査データに含まれません。

Publisher の監査データの表示の有効化または無効化

管理者は、公開アクティビティの監査データの表示を有効または無効にできます。

1. 「サーバー構成」ページに移動します。
2. 監査データの表示を有効にするには、「**モニターと監査の有効化**」を選択し、「**監査レベル**」を「**中**」に設定します。
3. 監査データの表示を無効にするには、「**モニターと監査の有効化**」の選択を解除します。

Publisher の監査データのデータ・ソース接続の指定

監査データのデータ・ソース接続を構成します。

1. 「管理」ページで、**JNDI 接続**をクリックします。
2. 「**データソースの追加**」をクリックします。
3. 「**データ・ソース名**」フィールドに、AuditViewDB と入力します。
4. 「**JNDI 名**」フィールドに、jdbc/AuditViewDataSource と入力します。
5. 「**接続のテスト**」をクリックして、監査データ・ソースへの接続を確認します。

- このデータ・ソース接続のセキュリティを定義します。必要なロールを「**使用可能なロール**」リストから**許可されたロール**・リストに移動します。「**許可ロール**」リストでロールを割り当てられたユーザーのみがこのデータ・ソースからレポートを作成または表示できます。
- 「**適用**」をクリックします。

Publisher の監査データの表示

監査済の情報を表示するために、サンプル・レポートをダウンロードして使用できます。

必ず「サーバー構成」ページで**モニターおよび監査の有効化**を選択して監査データをログに記録してから、AuditViewDB データ・ソースへの JNDI 接続を監査データを表示するように構成します。

サンプル・レポートは、JNDI 接続を使用して監査用のデータ・ソースからデータをフェッチします。レポート・レイアウトおよびデータ・モデルは、サンプル・レポートで事前に設計されています。レポート・レイアウトはカスタマイズできますが、サンプル・レポートのデータ・モデルは変更しないでください。監査データのサイズが大きくなる可能性があるため、サンプル・レポートはスケジュール済ジョブとして実行するように構成されています。監査レポートをオンラインで表示する場合は、**レポートをオンラインで実行**プロパティを選択し、レポートの**自動実行**プロパティは選択しないようにしてください。

- Oracle Analytics Publisher のダウンロード**・ページからサンプル監査レポートをダウンロードします。
- サンプル監査レポートをカタログ内の共有フォルダにアップロードします。
- 表示するサンプル監査レポートをスケジュールします。
 - カタログ内のサンプル監査レポートに移動します。
 - 「**スケジュール**」をクリックします。
 - 「一般」タブで、**開始日**および**終了日**パラメータに日付を指定します。
 - 「出力」タブで、出力形式が PDF であることを確認します。
必要に応じて、配信先を追加できます。
- スケジュール済ジョブが完了したら、「レポート・ジョブ履歴」ページでレポートを表示します。

カタログおよびレポートの翻訳の追加

このトピックでは、カタログおよび個々のレポート・レイアウトの両方に翻訳ファイルをエクスポートおよびインポートする方法について説明します。

トピック:

- [Publisher での翻訳について](#)
- [カタログ翻訳ファイルのエクスポートおよびインポート](#)
- [テンプレートの翻訳](#)
- [ローカライズ済テンプレートの使用](#)

Publisher での翻訳について

Publisher では、カタログ翻訳とテンプレート(レイアウト)翻訳の 2 つのタイプの翻訳をサポートしています。

カタログ翻訳では、選択したカタログ・フォルダに含まれているすべてのオブジェクトの翻訳可能な文字列を単一の翻訳ファイルに抽出できます。このファイルを翻訳して Publisher にアップロードし、適切な言語コードを割り当てることができます。

カタログ翻訳は、レポート・レイアウトの翻訳可能な文字列だけでなく、カタログ・オブジェクトの説明、レポート・パラメータ名やデータ表示名など、ユーザーに表示されるユーザー・インタフェース文字列も抽出します。

カタログを表示しているユーザーには、「マイ・アカウント」プリファレンスで選択した UI 言語に適切な項目の翻訳が表示されます。ユーザーには、「マイ・アカウント」プリファレンスで選択したレポート・ロケールに適切なレポートの翻訳が表示されます。

テンプレート翻訳では、単一の RTF ベースのテンプレート(サブ・テンプレートおよびスタイル・テンプレートを含む)または単一の Publisher レイアウト・テンプレート(.xpt ファイル)の翻訳可能な文字列を抽出できます。翻訳済の最終レポート・ドキュメントのみが必要な場合、このオプションを使用します。たとえば、企業で翻訳済の請求書をドイツや日本の顧客に送信する必要がある場合などです。

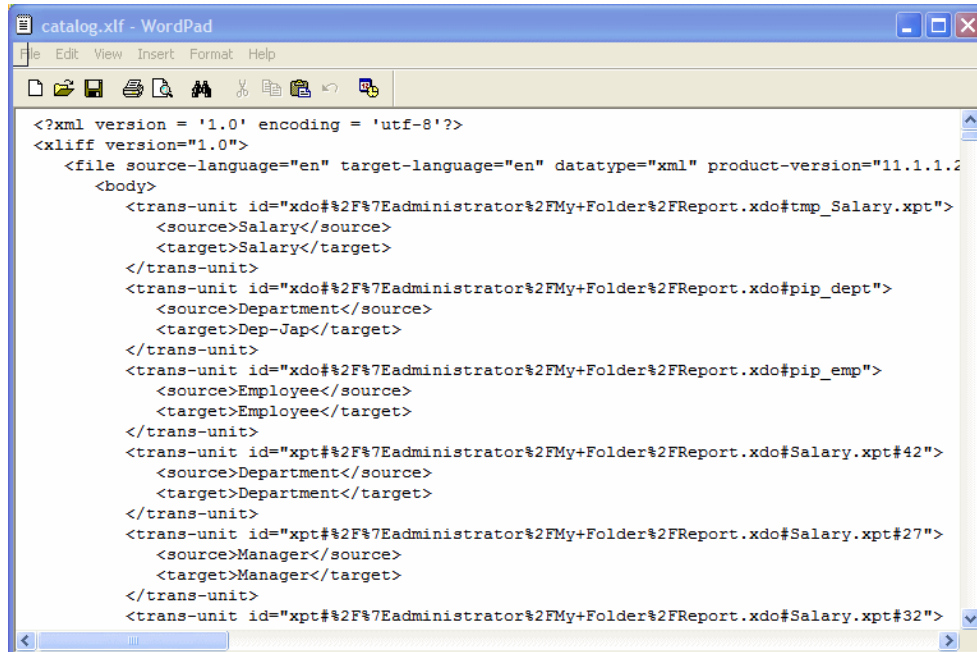
カタログ翻訳の制限

特定のレポート用に XLIFF ファイルの翻訳があり、既存の翻訳が存在するフォルダにカタログ翻訳ファイルをインポートした場合、既存の XLIFF ファイルを上書きします。

カタログ翻訳ファイルのエクスポートおよびインポート

翻訳済ファイルのカタログへのインポートと、XLIFF ファイルのカタログからのエクスポートを実行できるのは管理者のみです。

1. カタログでフォルダを選択し、「翻訳」ツールバー・ボタンをクリックして、それから「XLIFF のエクスポート」をクリックします。
2. XLIFF ファイルをローカル・ディレクトリに保存します。
3. 次の図に示すように、翻訳ファイル(catalog.xlf)を開き、翻訳をボイラープレート・テキストに適用します。



```
<?xml version = '1.0' encoding = 'utf-8'?>
<xliff version="1.0">
  <file source-language="en" target-language="en" datatype="xml" product-version="11.1.1.2">
    <body>
      <trans-unit id="xdo#%2F%7Eadministrator%2FMy+Folder%2FReport.xdo#tmp_Salary.xpt">
        <source>Salary</source>
        <target>Salary</target>
      </trans-unit>
      <trans-unit id="xdo#%2F%7Eadministrator%2FMy+Folder%2FReport.xdo#pip_dept">
        <source>Department</source>
        <target>Dep-Jap</target>
      </trans-unit>
      <trans-unit id="xdo#%2F%7Eadministrator%2FMy+Folder%2FReport.xdo#pip_emp">
        <source>Employee</source>
        <target>Employee</target>
      </trans-unit>
      <trans-unit id="xpt#%2F%7Eadministrator%2FMy+Folder%2FReport.xdo#Salary.xpt#42">
        <source>Department</source>
        <target>Department</target>
      </trans-unit>
      <trans-unit id="xpt#%2F%7Eadministrator%2FMy+Folder%2FReport.xdo#Salary.xpt#27">
        <source>Manager</source>
        <target>Manager</target>
      </trans-unit>
      <trans-unit id="xpt#%2F%7Eadministrator%2FMy+Folder%2FReport.xdo#Salary.xpt#32">
```

4. ファイルを翻訳したら、XLIFF ファイルを Publisher サーバーにアップロードします。「翻訳」ツールバー・ボタンをクリックして、それから「XLIFF のインポート」をクリックしてください。翻訳済 XLIFF をサーバーにアップロードします。
5. 翻訳をテストするには、グローバル・ヘッダーで「次としてサインイン」から「アカウント」を選択します。
6. 「アカウント」ダイアログの「一般」タブで、「レポート・ロケール」および「UI 言語」プリファレンスを適切な言語に変更して「OK」をクリックします。
7. 翻訳済フォルダ内のオブジェクトを表示します。

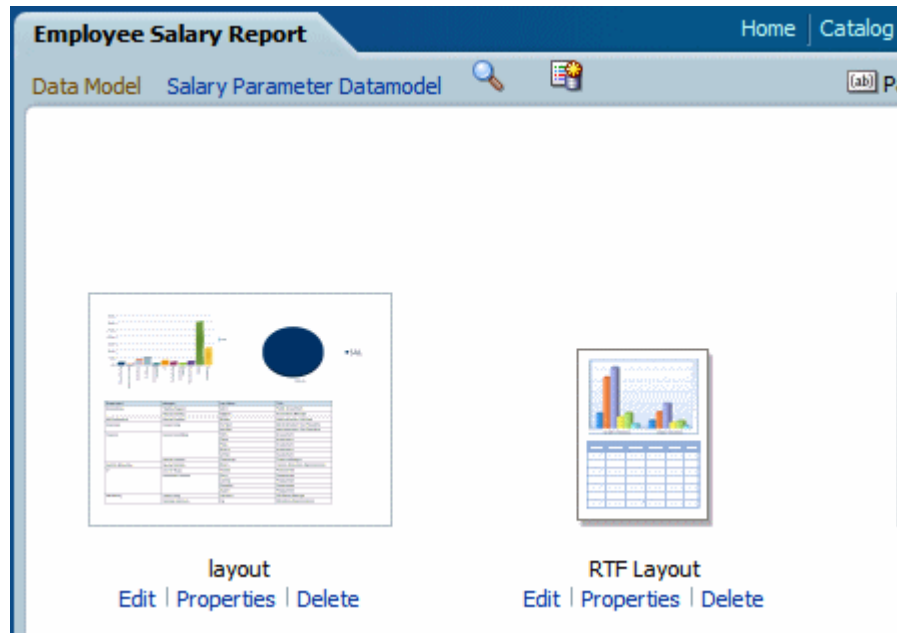
テンプレートの翻訳

RTF テンプレートおよび Publisher テンプレート(.xpt)は、プロパティ・ページで翻訳できます。

テンプレート翻訳には、次のものが含まれます。

- RTF テンプレート
- RTF サブ・テンプレート
- スタイル・テンプレート
- Publisher テンプレート(.xpt)

プロパティ・ページにアクセスするには、次に示すように、レポート・エディタのレイアウトの「プロパティ」リンクをクリックします。



プロパティ・ページから、単一のテンプレートの XLIFF ファイルを生成できます。「**翻訳の抽出**」をクリックして、XLIFF ファイルを生成します。

レイアウト・プロパティ・ページからの XLIFF ファイルの生成

レポート・レイアウト・テンプレート、スタイル・テンプレートおよびサブ・テンプレート用の XLIFF ファイルを生成します。

1. レポート・レイアウト・テンプレート用の XLIFF ファイルを生成するには、これらのステップを実行します。
 - a. カタログ内のレポートにナビゲートし、「**編集**」をクリックして編集対象として開きます。
 - b. レポート・レイアウトのサムネイル・ビューで、レイアウト(RTF または XPT)の「**プロパティ**」リンクをクリックして、レイアウト・プロパティ・ページを開きます。
 - c. 「**翻訳**」領域で、「**翻訳の抽出**」をクリックします。
Publisher によってテンプレートから 翻訳対象文字列が抽出され、XLIFF (.xlf ファイル)にエクスポートされます。
 - d. XLIFF をローカル・ディレクトリに保存します。
2. スタイル・テンプレートおよびサブ・テンプレート用の XLIFF ファイルを生成するには、これらのステップを実行します。
 - a. カタログ内のスタイル・テンプレートまたはサブ・テンプレートにナビゲートし、「**編集**」をクリックしてテンプレート・マネージャを開きます。
 - b. 「**翻訳**」領域で、「**翻訳の抽出**」をクリックします。
Publisher によってテンプレートから 翻訳対象文字列が抽出され、XLIFF (.xlf ファイル)にエクスポートされます。
 - c. XLIFF をローカル・ディレクトリに保存します。

XLIFF ファイルの翻訳

XLIFF ファイルをダウンロードした場合、これを翻訳プロバイダに送信できます。または、テキスト・エディタを使用して、文字列ごとに翻訳を入力することもできます。

"翻訳可能な文字列"とは、表のヘッダーやフィールドのラベルなど、公開されたレポートに表示することを意図した、テンプレート内のテキストです。実行時にデータから提供されるテキストは翻訳できず、Microsoft Word のフォーム・フィールドに入力するテキストでもありません。

テンプレート XLIFF ファイルを必要な分の言語に翻訳し、これらの翻訳を元のテンプレートに関連付けることができます。

翻訳済 XLIFF ファイルの Publisher へのアップロード

テンプレート・マネージャを実行して、翻訳済 XLIFF ファイルを Publisher にアップロードできます。

1. カタログ内のレポート、サブテンプレートまたはスタイル・テンプレートに移動し、「編集」をクリックして開き、編集します。

レポートの場合のみ:

レポート・レイアウトのサムネイル・ビューから、レイアウトの「プロパティ」リンクをクリックしてテンプレート・マネージャを開きます。

2. 「翻訳」リージョンで「アップロード」ツールバー・ボタンをクリックします。
3. 「翻訳ファイルのアップロード」ダイアログで、ローカル・ディレクトリのファイルを特定してこの翻訳の「ロケール」を選択します。
4. 「OK」をクリックし、ファイルをアップロードして「翻訳」表でこれを表示します。

ローカライズ済テンプレートの使用

レポート用にローカライズされたテンプレートを作成できます。

様々なローカライズのために、提示するレポートに異なるレイアウトを設計する必要がある場合、ロケール用に設計および翻訳される新しい RTF ファイルを作成し、このファイルをテンプレート・マネージャにアップロードできます。

XPT テンプレートのローカライズ済テンプレート・オプションはサポートされていません。

ローカライズしたテンプレート・ファイルの設計

基本テンプレート・ファイルの作成に使用したツールと同じものを使用し、ロケールの必要に応じて文字列を翻訳しレイアウトをカスタマイズします。

ローカライズ済テンプレートの Publisher へのアップロード

ローカライズされた rtf 形式のテンプレート・ファイルを Publisher にアップロードします。

1. カタログのレポート、サブテンプレートまたはスタイル・テンプレートにナビゲートし、「**編集**」をクリックして編集用を開きます。

レポートの場合のみ:

レポート・レイアウトのサムネイル・ビューから、レイアウトの「**プロパティ**」リンクをクリックしてテンプレート・マネージャを開きます。

2. 「テンプレート」リージョンで、「**アップロード**」 ツールバー・ボタンをクリックします。
3. 「テンプレート・ファイルのアップロード」ダイアログで、ローカル・ディレクトリのファイルを見つけ、テンプレート・タイプとして「**RTF**」を選択して、このテンプレート・ファイルについて「**ロケール**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックしてファイルをアップロードし、テンプレート表に表示します。

第 III 部

拡張構成

ここでは、拡張構成トピックに関する情報を提供します。

章:

- [拡張オプションのカスタマイズおよび構成](#)
- [データのレプリケート](#)

7

拡張オプションのカスタマイズおよび構成

このトピックでは、Oracle Analytics Cloud を管理する管理者によって実行される高度なカスタマイズおよび構成タスクについて説明します。

トピック:

- [高度なカスタマイズおよび構成のための一般的なワークフロー](#)
- [カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルの適用](#)
- [データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェースのローカライズ](#)
- [カスタム・キャプションのローカライズ](#)
- [アクション用のカスタム JavaScript の有効化](#)
- [ライトバックのデプロイ](#)
- [データ・エンリッチメントのためのカスタム・ナレッジの追加](#)
- [使用状況のトラッキング](#)
- [問合せキャッシュの管理](#)
- [拡張オプションの構成](#)

高度なカスタマイズおよび構成のための一般的なワークフロー

次に、Oracle Analytics Cloud 管理者のより高度なカスタマイズおよび構成タスクを示します。

タスク	説明	詳細情報
デフォルトのレポート・ページおよびダッシュボード・スタイルの変更	デフォルト・ロゴ、ページ・スタイルおよびダッシュボード・スタイルを変更します。	カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルの適用
レポート・ダッシュボードおよび分析のローカライズ	ワークブックおよびカタログ・オブジェクトの名前(キャプションと呼ばれます)を様々な言語にローカライズします。	カスタム・キャプションのローカライズ
アクション用のカスタム JavaScript の設定	ユーザーによる分析およびダッシュボードからのブラウザ・スクリプトの起動を有効にします。	アクション用のカスタム JavaScript の有効化
ライトバックの設定	ユーザーによる分析およびダッシュボードからのデータの更新を有効にします。	ライトバックのデプロイ
データ・エンリッチメントのためのカスタム・ナレッジの追加	カスタム・ナレッジ参照ファイル(CSV形式)を追加してシステム・ナレッジを拡張します。	データ・エンリッチメントのためのカスタム・ナレッジの追加
使用状況のトラッキング	Oracle Analytics Cloud 内のコンテンツに対するユーザー・レベルの問合せをトラッキングします。	使用状況のトラッキング

タスク	説明	詳細情報
キャッシュの管理	問合せを Oracle Analytics Cloud にキャッシュする方法を管理します。	問合せキャッシュの管理
拡張オプションの構成	分析およびダッシュボード用のサービスレベルの拡張オプションを設定します。	拡張オプションの構成

カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルの適用

管理者は、テーマを使用してカスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルを適用します。

トピック:

- [カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルについて](#)
- [分析およびダッシュボードのデフォルト・スタイルの変更](#)
- [テーマの管理](#)
- [クラシック・ホーム・ページのリンクのカスタマイズ](#)

カスタム・ロゴおよびダッシュボード・スタイルについて

管理者として、カスタム・ロゴ、ブランド・テキストおよびページ・スタイルなどを表示するテーマを作成して、レポート環境をカスタマイズできます。

テーマを操作するときは、次の点に注意してください。

- 複数のテーマを作成できますが、同時にアクティブにできるのは 1 つのテーマのみです。
- テーマを非アクティブにした場合、別のテーマを選択しないかぎり、デフォルトの Oracle テーマに戻ります。
- テーマは分析およびダッシュボードが含まれるページに適用されますが、ビジュアライゼーション・ワークブックには適用されません。
- テーマは管理ページの「テーマの管理」領域で作成します。
- テーマをアクティブ化すると、現在サインインしている管理者のブラウザ・セッションおよびサインインしたエンドユーザーのブラウザ・セッションにこれを適用します。
- Oracle Analytics が複数のインスタンスで実行中の場合、インスタンスごとにこれらを複製してアクティブ化します。

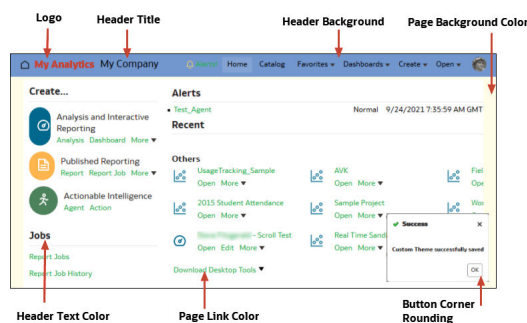
分析およびダッシュボードのデフォルト・スタイルの変更

管理者はテーマを作成することで、分析およびダッシュボードのデフォルトのロゴ、色および見出しのスタイルを変更します。

1. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロフィール・アイコン、「管理」の順にクリックします。

2. 「**テーマの管理**」をクリックします。
3. 既存のダッシュボード・スタイルを適用するには、「**テーマ**」リストからいずれかを選択し、「**アクティブ**」、「**保存**」の順にクリックします。
4. 新しいダッシュボード・スタイルを作成するには、「**テーマ**」リストで「**新規テーマ**」をクリックし、「新規テーマ」ダイアログを表示します。
5. 「**テーマ名**」で指定した名前が「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログの「**スタイル**」リストに表示されます。
6. 「**ロゴ**」で、左上隅に表示するページ・ロゴを指定します。デフォルトの Oracle ロゴを置き換えるには、**ロゴの選択**をクリックし、PNG、JPG または JPEG 形式の別のロゴに移動して選択します。ロゴは幅 136 ピクセル、高さ 28 ピクセルを超えることはできません。
7. 「**ヘッダーのタイトル**」で、左上隅のロゴの隣に表示するブランド情報を指定します。
8. 「**アクティブ**」をクリックし、「**保存**」をクリックすると、現在表示されているテーマが適用されます。「**アクティブ**」をクリックしても、変更を保存せずに「**戻る**」をクリックすると、新しいテーマは適用されません。

この図は、レポート環境の様々な領域に影響するテーマ・オプションを示しています。



テーマの管理

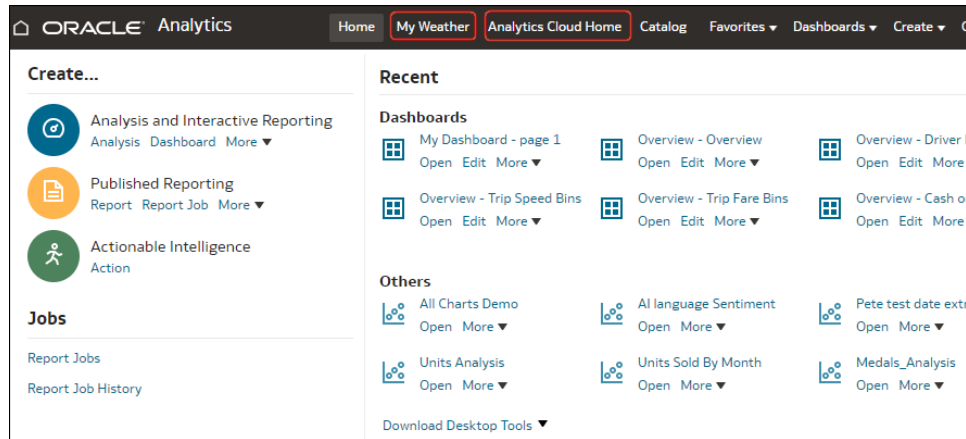
管理者はテーマを管理することで、レポート・ページ、ダッシュボードおよび分析のデフォルトのロゴ、色および見出しのスタイルを変更します。

1. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロファイル・アイコン、「**管理**」の順にクリックします。
2. 「**テーマの管理**」をクリックします。
3. オプション: 以前に作成されたテーマを適用するには、「テーマ」リストからテーマを選択して「**アクティブ**」をクリックし、「**保存**」をクリックして「**戻る**」をクリックします。
4. オプション: デフォルトの Oracle テーマに戻すには、「**アクティブ**」オプションをクリアし、「**保存**」をクリックして「**戻る**」をクリックします。
5. オプション: テーマを完全に削除するには、削除するテーマを選択し、「**削除**」をクリックして「**戻る**」をクリックします。

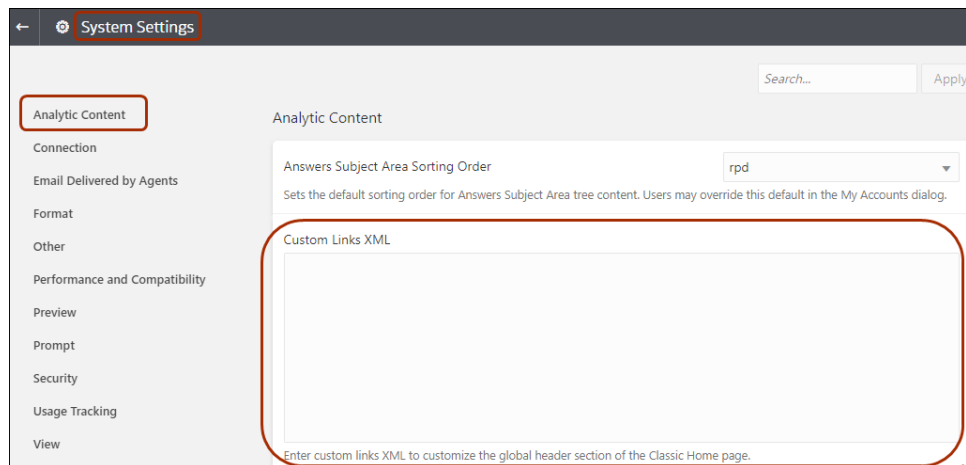
クラシック・ホーム・ページのリンクのカスタマイズ

クラシック・ホーム・ページは、カスタム・リンクを表示するように構成できます。たとえば、地域の天気を表示する Web サイトへのリンクや、Oracle Analytics のホーム・ページへのリンクを追加して、ビジネス・アナリストが、クラシック・ホーム・ページからワークブックやビジュアライゼーションに移動できるようにするとします。

この例では、「My Weather」と「Analytics Cloud Home」のリンクが追加されています。



カスタム・リンクを追加するには、**カスタム・リンク XML** システム設定に XML コードを追加します。「システム設定」ページにアクセスするには、Oracle Analytics ホーム・ページに移動し、「ナビゲータ」、「コンソール」、「システム設定」、**分析内容**の順にクリックします。



XML コードを使用して、次のようなリンクと属性を指定できます:

- リンクのテキスト(ローカリゼーションに使用する静的な文字列またはメッセージ名)。
- ターゲット URL。

- ターゲット・リンクが現在のページで開くか、新しいタブまたはウィンドウで開くか。
- ヘッダー内のリンクの相対的な順序付け。
- リンクに使用するオプションのアイコン。

この例では、クラシック・ホーム・ページのグローバル・ヘッダーにある「Catalog」リンクの左に2つのカスタム・リンクを表示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<customLinks xmlns="com.siebel.analytics.web/customlinks/v1">
  <link id="1" name="My Weather" description="Local weather site"
src="https://www.example.com/weather" target="blank" >
    <locations>
      <location name="header" insertBefore="catalog"/>
    </locations>
  </link>
  <link id="1" name="Analytics Cloud Home" description="OAC Viz Home Page"
src="https://<OAC example URL>.analytics.ocp.oraclecloud.com/ui/dv/?
pageid=home" target="blank" >
    <locations>
      <location name="header" insertBefore="catalog"/>
    </locations>
  </link>
</customLinks>
```

 ノート:

Oracle Analytics のホーム・ページのリンクを取得するには、Oracle Analytics にログインし、URL をコピーして、(XML コードの例に示されているように) `src="<target link>"`要素に貼り付けます。

この表は、カスタム・リンクに指定できる要素と属性について説明しています。

要素または属性	オプションか	データ型	説明
link: accessibility	オプション	ブール	アクセシビリティ・モードでは、アクセシビリティ属性が true に設定されている場合にのみ、リンクを使用可能であることを指定します。値は true と false で、デフォルトは false です。 これまでの更新では、vpat 属性が、アクセシビリティ属性と同じように機能していました。vpat 属性は非推奨になりました。
link: description	オプション	文字列	リンクの(翻訳されていない)説明を指定します。
link: iconSmall	オプション	文字列	グローバル・ヘッダーにリンクと一緒に表示するアイコンのファイル名を指定します。アイコンの表示は fmap 構文で制御します。
link: id	必須	文字列	リンクの位置を指定する一意の ID として使用します。カスタム・リンクの ID を入力すると、デフォルト・リンクを基準にして、カスタム・リンクを配置できます。

要素または属性	オプションか	データ型	説明
link: localizedDesc	オプション	文字列	(翻訳された)リンクのメッセージ ID を指定します (これは、翻訳されていない説明よりも優先されます)。
link: localizedName	オプション	文字列	翻訳されたリンクのメッセージ ID を指定します (これは、翻訳されていない名前よりも優先されます)。
link: name	必須	文字列	翻訳されていないリンクの名前を指定します。
link: privilege	オプション	文字列	ユーザーがリンクを表示するために付与されている必要がある権限の名前を指定します。次の例に示すように、権限は式で示します: privileges.Access['Global Answers']&*&*& privileges.Access['Global Delivers']
link: src	必須	文字列	リンクの URL を指定します。
link: target	オプション	文字列	リンクを開くブラウザ・ウィンドウを指定します。値は次のとおりです: self: Oracle Analytics が実行されているのと同じウィンドウで開きます。 blank: 新しいウィンドウで開きます。 any-name: 指定した名前のウィンドウで開きます。
location: insertBefore	オプション	文字列	カスタム・リンクを左側に追加する既存のリンクの ID を指定します。たとえば、「 Catalog 」リンクの左側にカスタム・リンクを追加するには、 <location name="header" insertBefore="catalog"/>と指定します。 有効な ID: <ul style="list-style-type: none"> • admin • catalog • dashboard • favorites • help • home • logout • new • open • user 間違って無効な ID を指定した場合、リンクはデフォルトの場所に挿入されます。
location: name	必須	文字列	この属性は、locations 親要素を使用する場合に使用します。値は次のとおりです: header: リンクをグローバル・ヘッダーに挿入することを指定します。

要素または属性	オプションか	データ型	説明
locations	オプション	該当しない	親要素として使用し、追加するリンクの場所を指定します。場所を追加しない場合は、デフォルトで、グローバル・ヘッダーの「 Help 」リンクの前で、「 Get Started 」セクションの最後にリンクが挿入されます。

データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェースのローカライズ

データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェースの表示言語と地域のデータ形式をローカライズできます。

言語およびローカル設定の優先順位は次のように適用されます:

- ブラウザの言語プリファレンス(ブラウザの設定)。
- 言語またはロケールのユーザー設定は、ブラウザの言語プリファレンスをオーバーライドします。
- 言語またはロケールの URL 問合せパラメータは、ユーザー設定をオーバーライドします。
- 言語またはロケールのパラメータの埋込みは、URL 問合せパラメータをオーバーライドします。

データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェースの表示言語またはローカル・ベースの地域データ形式をローカライズするとき、ワークブックのカスタム・キャプションは含まれません。ワークブックのカスタム・キャプションは別にローカライズします。[Data Visualization ワークブックのキャプションのローカライズ](#)を参照してください。

トピック:

- [データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェース表示言語のローカライズ](#)
- [データ・ビジュアライゼーションの地域データ形式のローカライズ](#)
- [#unique_251](#)

データ・ビジュアライゼーションのユーザー・インタフェース表示言語のローカライズ

データ・ビジュアライゼーション・ユーザー・インタフェースの文字列を表示するための言語を変更できます。

1. ホーム・ページで、ユーザー・プロファイル・アイコンをクリックします。
2. 「**プロファイル**」をクリックし、「**マイ・プロファイル**」タブをクリックします。
3. 「**言語**」をクリックし、ユーザー・インタフェースで使用する言語を選択します。
選択した言語がブラウザの言語よりも優先されます。
4. Oracle Analytics Cloud からサインアウトしてからサインインすると、選択した言語が表示されます。

データ・ビジュアライゼーションの地域データ形式のローカライズ

ロケールを選択して、データ・ビジュアライゼーションのワークブックでの地域固有の日付や数字の形式を表示できます。

1. ホーム・ページで、ユーザー・プロフィール・アイコンをクリックします。
2. 「プロフィール」をクリックし、「マイ・プロフィール」タブをクリックします。
3. 「ロケール」をクリックして、ロケールを選択します。
選択したロケールがブラウザのロケールよりも優先されます。
4. Oracle Analytics Cloud からサインアウトしてからサインインすると、選択した言語が表示されます。

カスタム・キャプションのローカライズ

クラシック・カタログ・オブジェクトのカスタム・キャプションとデータ・ビジュアライゼーションのワークブック・キャプションをローカライズできます。

トピック:

- [Data Visualization ワークブックのキャプションのローカライズ](#)
- [カタログ・キャプションのローカライズ](#)

Data Visualization ワークブックのキャプションのローカライズ

データ・ビジュアライゼーションのカスタム・ワークブック・キャプションの名前をローカライズできます。たとえば、カスタマイズされたワークブック名をスペイン語とフランス語にローカライズすることができます。

Oracle Analytics では、どのような言語がサポートされていますか。を参照してください

データ・ビジュアライゼーションのワークブック・キャプションの名前をローカライズするには、データ・ビジュアライゼーションのワークブックのキャプションをファイルにエクスポートし、キャプションを翻訳し、翻訳されたキャプションをワークブックにアップロードしなおします。キャプションのエクスポート元と同じ Oracle Analytics 環境に翻訳をアップロードする必要があります。

別の Oracle Analytics 環境にローカライゼーションを移行する場合は、ワークブック・キャプションをスナップショットにエクスポートしてから、スナップショットをターゲット環境にインポートします。キャプションの翻訳はスナップショットに含まれません。

トピック:

- [ワークブック・キャプションのエクスポート](#)
- [ワークブック・キャプションのローカライズ](#)

- ローカライズされたワークブック・キャプションのインポート

ワークブック・キャプションのエクスポート

ワークブックのキャプションをエクスポートして翻訳できます。

- ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「コンソール」をクリックします。
- 「翻訳」をクリックします。
- 「エクスポート」タブをクリックします。
- 「共有フォルダ」を展開し、翻訳するデータ・ビジュアライゼーションのワークブック・キャプション・ファイルを含むフォルダ(\Shared Folders\OAC_DV_SampleWorkbook など)を選択します。
- 「エクスポート」をクリックし、エクスポートされた captions.zip ファイル(ローカライズ対象の JS ファイルを含む)をダウンロードし、ブラウザのダウンロード・フォルダに保存します。

ワークブック・キャプションのローカライズ

データ・ビジュアライゼーションのワークブック・キャプションをエクスポートした後で、サポートされている各言語の言語固有 JS キャプション・ファイルを含む captions.zip ファイルをローカライズ・チームに配布できます。たとえば、フランス語のキャプション・ファイルをローカライズする場合は、更新するファイルの名前が@/Shared/DataVizWorkbookFolderNameExample/WorkbookNameExample/NLS/fr/captions.js のようになります。

あなたとローカライズ・チームは、翻訳済テキスト文字列内のエラーの解決について責任を負います。オブジェクトが追加、削除または変更されるたびにワークブックのコンテンツが更新される点を考慮してください。

- エクスポートしたワークブック・キャプションの ZIP ファイルを参照し、更新しようとする言語固有の JS ファイルを抽出します。
- 抽出した言語固有の JS ファイルを編集のために開きます。
- 翻訳された名前を該当するキャプション要素に入力して、既存のテキスト文字列を置き換えます。

たとえば、Sales performance by product category という名前のビジュアライゼーション・タイトル・キャプションを Canvas 2 に作成していた場合、この英語テキストを編集してフランス語訳 Performance des ventes par categorie de produits で置き換えます。

翻訳前のフランス語 captions.js ファイル:

```

1 define({
2   "cap1702987932895_1" : "Canvas 2",
3   "cap1702987932895_2" : "New Name",
4   "cap1702987932895_3" : "Filter Name",
5   "cap1702987932895_4" : "Sales",
6
7   "cap1702987932895_44" : "Sales performance by product category",
8   "cap1702987932895_45" : "Select * Customer Segment"
9 });

```

翻訳後のフランス語 captions.js ファイル:

```

1 define({
2   "cap1702987932895_1" : "Canvas 2",
3   "cap1702987932895_2" : "New Name",
4   "cap1702987932895_3" : "Filter Name",
5   "cap1702987932895_4" : "Sales",
6
7   "cap1702987932895_44" : "Preference des ventes par categorie de produits",
8   "cap1702987932895_45" : "Select * Customer Segment"
9 });

```

- 更新した言語固有 JS ファイルを保存し、エクスポートした翻訳済キャプションの ZIP ファイルに追加します。
- オプション: この方法を使用して、ローカライズされたクラシック・カタログ・キャプションの XML ファイルをインポートすることもできます。翻訳済の XML ファイルを、エクスポートされた翻訳済キャプションの ZIP ファイルの最上位ディレクトリの下に追加し、インポートできるように一緒に圧縮します。

例:

- ar/_shared_Common_captions.xml
- cs/_shared_Common_captions.xml
- ...
- zh-TW/_shared_Common_captions.xml

ローカライズされたワークブック・キャプションのインポート

Data Visualization ワークブック・キャプションを必要な言語でローカライズした後、翻訳済の ZIP ファイルをワークブック・キャプションのエクスポート元と同じ Oracle Analytics 環境にアップロードすることで、その言語をデプロイします。

- Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
- 「翻訳」をクリックし、「インポート」タブをクリックします。
- 「ファイルを選択するか、ここにドロップします」をクリックし、インポートしようとする翻訳済 JS ファイルを含む ZIP ファイルを参照するか、ドラッグ・アンド・ドロップします。
- 「インポート」をクリックします。

必要な言語に対して正しいキャプション・ファイルを使用するように適切に構成された Oracle Analytics によって、翻訳された言語固有のテキスト文字列がブラウザに表示されます。

カタログ・キャプションのローカライズ

ユーザーがカタログで作成したクラシック・レポート・オブジェクトの名前をローカライズできます。オブジェクト名はキャプションとも呼ばれます。たとえば、ダッシュボードおよび分析の名前をスペイン語およびフランス語にローカライズできます。

Oracle Analytics では、どのような言語がサポートされていますか。を参照してください。

クラシック・コンテンツのキャプションをローカライズするには、カタログからファイルにキャプションをエクスポートし、キャプションを翻訳し、ローカライズされたキャプションをカタログにアップロードしなおします。キャプションのエクスポート元と同じ Oracle Analytics 環境に翻訳をアップロードする必要があります。

別の Oracle Analytics 環境にローカリゼーションを移行する場合は、カタログをスナップショットにエクスポートしてから、スナップショットをターゲット環境にインポートします。キャプションの翻訳はスナップショットに含まれます。

キャプションをカタログからエクスポート

次の手順では、カタログのテキスト文字列をエクスポートする方法について説明します。

1. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロフィール・アイコン、「**管理**」の順にクリックします。
2. 「**カタログ・キャプションの管理**」領域で、「**キャプションのエクスポート**」をクリックします。
3. 「**参照**」をクリックして「**カタログ・ブラウザ**」を表示し、ローカライズするファイルを含むフォルダを選択してから「**OK**」をクリックします。

たとえば、\Shared Folders\Sample Report を選択できます。

4. 「**キャプションのエクスポート**」ダイアログで、「**OK**」をクリックして、ローカル領域に XML ファイルをダウンロードして保存します。

たとえば、ファイル\Shared Folders\Sample Report を選択した場合は、`_shared_Sample Report_captions.xml` というファイルをローカルに保存します。

キャプションのローカライズ

キャプションを XML ファイルにエクスポートした後、この XML ファイルをローカライズ・チームに配信します。たとえば、ダウンロードする際に「カスタム」フォルダを選択した場合は、`_shared_Custom_captions.xml` というファイルを配信します。

あなたとローカライズ・チームは、翻訳済テキスト文字列内のエラーの解決について責任を負います。オブジェクトが追加、削除または変更されるたびにカタログのコンテンツが更新される点を考慮してください。

最初の画像は、エクスポートしたキャプションの翻訳前の XML ファイルから抽出したものを示しています。ファイル名は `myfoldercaptions.xml` です。2 目目の画像は、翻訳後のファイルから抽出したものを示しています。ファイル名は `myfoldercaptions_fr.xml` です。

```

myfolderscaptions.xml - Notepad
File Edit Format View Help
<webMessageTable system="catalog" type="folder" path="/users/weblogic/_selections">
  <webMessage name="kcap12766171_15" use="Caption" status="existing">
    <TEXT>_selections</TEXT>
  </webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="folder" path="/users/weblogic/_subscriptions">
  <webMessage name="kcap12766171_16" use="Caption" status="existing">
    <TEXT>_subscriptions</TEXT>
  </webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="object" path="/users/weblogic/another report">
  <webMessage name="kcap12766171_17" use="Caption" status="existing">
    <TEXT>Another Report</TEXT>
  </webMessage>
  <webMessage name="kcap12766184_1" use="title" status="new">
    <TEXT>Another Report</TEXT>
  </webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="object" path="/users/weblogic/my report">

```

```

myfolderscaptions_fr.xml - Notepad
File Edit Format View Help
  <TEXT>_selections</TEXT>
</webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="folder" path="/users/weblogic/_subscriptions">
  <webMessage name="kcap12766171_16" use="Caption" status="existing">
    <TEXT>_subscriptions</TEXT>
  </webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="object" path="/users/weblogic/another report">
  <webMessage name="kcap12766171_17" use="Caption" status="existing">
    <TEXT>Une Autre Report</TEXT>
  </webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="object" path="/users/weblogic/my report">
  <webMessage name="kcap12766121_1" use="Caption" status="existing">
    <TEXT>Moi Report</TEXT>
  </webMessage>
</webMessageTable>
<webMessageTable system="catalog" type="object" path="/users/weblogic/new agent">
  <webMessage name="kcap12766171_19" use="Caption" status="existing">

```

ローカライズしたキャプションをカタログにアップロード

キャプションを必要な言語でローカライズした後、翻訳済の XML ファイルをキャプションのエクスポート元と同じ Oracle Analytics 環境にアップロードすることで、その言語をデプロイします。言語ごとに次の手順を実行します。

1. クラシック・ホーム・ページで、ユーザー・プロファイル・アイコン、「管理」の順にクリックします。
2. 「カタログ・キャプションの管理」領域で、「キャプションのインポート」をクリックします。
3. 「参照」をクリックし、ローカライズ済の XML ファイルに移動して選択し、「OK」をクリックします。
4. 「言語の選択」オプションを使用してローカライズ先の言語を選択し、「OK」をクリックします。

インポート済 XML ファイルは選択された言語の MsgDb フォルダにコピーされます。

アクション用のカスタム JavaScript の有効化

分析およびダッシュボードを使用しているユーザーは、Web サーバーからアクセス可能なカスタム JavaScript を呼び出すアクション・リンクを追加できます。この機能を有効にするには、管理者は「システム設定」で Web サーバーの URL を指定し、Web サーバーを安全ドメインとして登録します。

1. スクリプトを JavaScript で開発し、それを Web サーバーに格納し、カスタム・スクリプトを含む JavaScript (*.JS) ファイルを指す URL をノートに取ります。

たとえば、myscripts.js に格納する mycurrencyconversion という名前の通貨換算スクリプトを開発した場合、URL は `http://example.com:8080/mycustomscripts/myscripts.js` になります。

2. 「システム設定」で Web サーバーの URL を指定します。
 - a. 「コンソール」をクリックしてから、「システム設定」をクリックします。
 - b. ブラウザ・スクリプト・アクションの URL に、ステップ 1 でノートに取った URL を入力します。
 - c. プロンプトが表示されたら、「適用」をクリックします。
3. Web サーバーを安全ドメインとして登録します:
 - a. 「コンソール」をクリックしてから、「安全ドメイン」をクリックします。
 - b. ステップ 2 で指定した URL にドメインのエントリを追加します。

たとえば、`example.com:8080` を追加します。
 - c. オプションで、「スクリプト」および「接続」を選択します。
4. 構成をテストします。
 - a. クラシック・ホームで、分析を開くか、作成します。
 - b. 列の「列のプロパティ」を表示し、「相互作用」、「アクション・リンクの追加」の順にクリックします。
 - c. 「新規アクションの作成」、「ブラウザ・スクリプトの起動」の順にクリックします。
 - d. 「関数名」の下に、JavaScript (*.JS) ファイル内のスクリプトの名前を入力します。

たとえば、`USERSCRIPT.mycurrencyconversion` などです。
 - e. 詳細を保存し、分析を開きます。
 - f. アクションを追加した列をクリックしてから、そのアクションをクリックします。

カスタム JavaScript を使用した分析における問合せの検証とブロック

JavaScript で検証スクリプトを開発し、分析基準や列の計算式を検証し、無効な問合せをブロックできます。

- 分析での問合せのブロック

- 基準に基づいて分析をブロックする JavaScript の開発
- 計算式に基づいて分析をブロックする JavaScript の開発
- 検証ヘルパー関数

分析での問合せのブロック

分析を担当するユーザーは、カスタム JavaScript を呼び出して、分析基準や列の計算式を検証できます。検証を使用すると、分析を編集する際に問合せをブロックできます。カスタム JavaScript には Web サーバーからアクセスすることが必要です。この機能を有効にするには、管理者はシステム設定で Web サーバーの URL を指定し、Web サーバーを安全ドメインとして登録します。

1. カスタム検証スクリプトを JavaScript で開発し、それを Web サーバーに格納し、カスタム・スクリプトを含む JavaScript (*.JS) ファイルを指す URL をメモしておきます。
たとえば、ブロックするためのスクリプトを開発して myblocking.js に格納し、URL が `http://example.com:8080/mycustomscripts/myblocking.js` になります。
2. システム設定で Web サーバーの URL を指定します:
 - a. 「**コンソール**」をクリックしてから、「**システム設定**」をクリックします。
 - b. **分析で問合せをブロックするための URL** に、ステップ 1 でメモした URL を入力します。
3. Web サーバーを安全ドメインとして登録します:
 - a. 「**コンソール**」をクリックしてから、「**安全ドメイン**」をクリックします。
 - b. ステップ 2 で指定した URL にドメインのエントリを追加します。
たとえば、`example.com:8080` を追加します。
 - c. オプションで、「**スクリプト**」および「**接続**」を選択します。
4. 検証スクリプトをテストします:
 - a. 分析を開きます。
 - b. 有効な基準と無効な基準の両方を使用して分析を実行します。
 - c. 問合せが予期したとおりにブロックされることを確認します。

基準に基づいて分析をブロックする JavaScript の開発

ユーザーが分析を実行しようとするたびに、Oracle Analytics は関数 `validateAnalysisCriteria` を呼び出します。独自の基準に基づいて問合せを検証してブロックするように、`validateAnalysisCriteria` をカスタマイズできます。関数が `true` を返すと、問合せは実行されます。関数が `false` を返すかメッセージを表示すると、問合せはブロックされます。

たとえば、次に示すのは、`myblocking.js` という名前の JavaScript プログラムのサンプル・コードです。

```
// This is a blocking function. It ensures that users select what  
// the designer wants them to.
```

```
function validateAnalysisCriteria(analysisXml)
{
    // Create the helper object
    var tValidator = new CriteriaValidator(analysisXml);
    // Validation Logic
    if (tValidator.getSubjectArea() != "Sample Sales")
        return "Try Sample Sales?";
    if (!
tValidator.dependentColumnExists("Markets","Region","Markets","District"))
    {
        // If validation script notifies user, then return false
        alert("Region and District are well suited, do you think?");
        return false;
    }
    if (!tValidator.dependentColumnExists("Sales
Measures","", "Periods", "Year"))
        return "You selected a measure so pick Year!";
    if (!tValidator.filterExists("Sales Measures", "Dollars"))
        return "Maybe filter on Dollars?";
    if (!tValidator.dependentFilterExists("Markets", "Market", "Markets"))
        return "Since you are showing specific Markets, filter the markets.";
    var n = tValidator.filterCount("Markets", "Region");
    if ((n <= 0) || (n > 3))
        return "Select 3 or fewer specific Regions";
    return true;
}
```

関数が false 以外を返すと、基準が有効とみなされて、分析が実行されます。この関数を使用して、プレビューや保存の操作の基準を検証することもできます。

計算式に基づいて分析をブロックする JavaScript の開発

ユーザーが列の計算式を入力または変更しようとするたびに、Oracle Analytics は関数 `validateAnalysisFormula` を呼び出して演算を確認します。独自の基準に基づいて計算式を検証してブロックするように、`validateAnalysisFormula` をカスタマイズできます。関数が true を返すと、計算式は受け入れられます。関数が false を返すと、計算式は拒否され、カスタム・メッセージが表示されます。

メッセージを表示して、ユーザーが続行できるようにするには、関数が true を返す必要があります。問合せをブロックするには、false またはメッセージを返します。関数は、検証のための JavaScript 文字列と正規表現の手法を使用し、渡される計算式を調査する必要があります。

ヘルパー関数を使用することによって、問合せブロック関数でフィルタや列などをチェックできます。[検証ヘルパー関数](#)を参照してください。

たとえば、次のコードは、ユーザーが入力した計算式を受け入れられない場合に問合せをブロックする方法を示しています。

```
// This is a formula blocking function. It makes sure the user doesn't enter
an unacceptable formula.
function validateAnalysisFormula(sFormula, sAggRule)
{
    // don't allow the use of concat || in our formulas
```

```

var concatRe = /\|\|\|/gi;
var nConcat = sFormula.search(concatRe);
if (nConcat >= 0)
    return "You used concatenation (character position " + nConcat +
"). That isn't allowed.";
// no case statements
var caseRe = /CASE.+END/gi;
if (sFormula.search(caseRe) >= 0)
    return "Don't use a case statement.";
// Check for a function syntax: aggrule(formula) aggrule shouldn't
contain a '.'
var castRe = /^s*\w\s*(.+)\s*$/gi;
if (sFormula.search(castRe) >= 0)
    return "Don't use a function syntax such as RANK() or SUM().";
return true;
}

```

検証ヘルパー関数

使用できるいくつかの検証ヘルパー関数が JavaScript ファイルにあります。

検証ヘルパー関数	説明
<code>CriteriaValidator.getSubjectArea()</code>	分析で参照されるサブジェクト領域の名前を返します。通常、これは関数内で他の検証を実行する前に <code>switch</code> 文で使用されます。分析がセット・ベースの基準である場合は <code>null</code> を返します。
<code>CriteriaValidator.tableExists(sTable)</code>	指定されたフォルダ(表)がコンテンツ設計者によって分析に追加された場合は <code>true</code> を返します。フォルダが追加されなかった場合は <code>false</code> を返します。
<code>CriteriaValidator.columnExists(sTable, sColumn)</code>	指定された列がコンテンツ設計者によって分析に追加された場合は <code>true</code> を返します。列が追加されなかった場合は <code>false</code> を返します。
<code>CriteriaValidator.dependentColumnExists(sCheckTable, sCheckColumn, sDependentTable, sDependentColumn)</code>	<code>checkColumn</code> がある場合に、 <code>dependentColumn</code> が確実に存在することを確認します。 <code>checkColumn</code> がない場合、または <code>checkColumn</code> と依存列がある場合は、 <code>true</code> を返します。 <code>checkColumn</code> と <code>dependentColumn</code> が <code>null</code> の場合、フォルダは検証されません。 <code>checkTable</code> のいずれかの列が存在する場合、 <code>dependentTable</code> の列が存在する必要があります。
<code>CriteriaValidator.filterExists(sFilterTable, sFilterColumn)</code>	指定された列に対してフィルタが存在する場合は <code>true</code> を返します。フィルタがない場合は <code>false</code> を返します。
<code>CriteriaValidator.dependentFilterExists(sCheckTable, sCheckColumn, sFilterTable, sFilterColumn)</code>	<code>checkColumn</code> が射影リストにある場合に、 <code>dependentFilter</code> が確実に存在することを確認します。 <code>checkColumn</code> がない場合、または <code>checkColumn</code> と依存フィルタがある場合は、 <code>true</code> を返します。

検証ヘルパー関数	説明
CriteriaValidator.filterCount (sFilterTable, sFilterColumn)	特定の論理列に指定されたフィルタ値の数を返します。フィルタ値が、"equals"、"null"、"notNull"、"in"のいずれかの場合、選択された値の数を返します。列がフィルタ内で使用されていない場合は、ゼロを返します。列がデフォルトなしで要求されている場合は-1を返します。他のすべてのフィルタ演算子("greater than"、"begins with"など)については値の数を判別できないため、999を返します。

ライトバックのデプロイ

ライトバックにより、ユーザーは分析からデータを更新できます。

トピック:

- [管理者のライトバックについて](#)
- [分析およびダッシュボードでのライトバックの有効化](#)
- [ライトバックの制限](#)
- [ライトバック・テンプレート・ファイルの作成](#)

管理者のライトバックについて

ライトバックにより、ユーザーはダッシュボードおよび分析からデータを直接更新できます。

「**データベースへのライトバック**」権限を持つユーザーには、ライトバック・フィールドが分析で編集可能フィールドとして表示されます。入力した値はデータベースに保存されます。「**データベースへのライトバック**」権限がないユーザーには、ライトバック・フィールドは読取り専用フィールドとして表示されます。

ユーザーが編集可能なフィールドに値を入力してライトバック・ボタンをクリックすると、アプリケーションはライトバック・テンプレートに定義されている SQL の insert または update コマンドを実行します。コマンドが成功した場合、分析は新しい値で更新されます。テンプレートの読取り中または SQL コマンドの実行中にエラーが発生した場合、エラー・メッセージが表示されます。

insert コマンドは、レコードがまだ存在せず、ユーザーが新しいデータを表に入力したときに実行されます。この場合、ユーザーが入力した表レコードの元の値は null でした。update コマンドは、ユーザーが既存のデータを変更したときに実行されます。まだ物理表に存在しないレコードを表示するには、同様の表をもう 1 つ作成します。この同様の表を使用して、ユーザーが変更できるプレースホルダ・レコードを表示します。

ノート:

ライトバック・テンプレートを作成する際、insert コマンドと update コマンドの両方が使用されない場合でも両方を含める必要があります。たとえば、この XML コードのように insert のみを実行している場合、空の update 文 <update></update> を含める必要があります:

次のサンプルのライトバック XML ファイルには 2 つの insert コマンドと 2 つの空の update 文が含まれています。ライトバック XML ファイルの作成と構成の詳細は、[ライトバック・テンプレート・ファイルの作成](#)を参照してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-
instance" xmlns="oracle.bi.presentation/writebackschemas/v1">
<WebMessageTable lang="en-us" system="WriteBack" table="Messages">
  <WebMessage name="SetQuotaUseID">
    <XML>
      <writeBack connectionPool="Supplier">
        <insert>INSERT INTO regiontypequota
VALUES (@{c5f6e60e1d6eb1098},@{c5d7e483445037d9e},'@{c3a93e65731210ed1}'
,'@{c6b8735ea60ff3011}',@{c0432jkl53eb92cd8})</insert>
        <update></update>
      </writeBack>
    </XML>
  </WebMessage>
<WebMessage name="SetForecastUseID">
  <XML>
    <writeBack connectionPool="Supplier">
      <insert>INSERT INTO regiontypeforecast
VALUES (@{c83ebf607f3cb8320},@{cb7e2046a0fba2204},'@{c5a93e65d31f10e0}'
,'@{c5a93e65d31f10e0}',@{c7322jkl93ev92cd8})</insert>
      <update></update>
    </writeBack>
  </XML>
</WebMessage>
</WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

分析およびダッシュボードでのライトバックの有効化

管理者は、ユーザーによる分析およびダッシュボードでデータの編集を有効にできません。

1. セマンティック・モデルを設定します

ノート:

モデル管理ツールを使用してセマンティック・モデルを開発する場合は、これらのステップを実行してください。セマンティック・モデラーを使用する場合は、次を参照してください
列でのライトバックの有効化。

- a. モデル管理ツールで、セマンティック・モデル(.rpd ファイル)を開きます。
- b. 物理レイヤーで、ライトバックを有効にする列を含む物理表をダブルクリックします。

- c. 「物理表」ダイアログの「一般」タブで、「キャッシュ可能」が選択されていないことを確認します。このオプションを選択解除すると、プレゼンテーション・サービスのユーザーは更新をすぐに確認できます。
 - d. 「ビジネス・モデルとマッピング」レイヤーで、対応する論理列をダブルクリックします。
 - e. 「論理列」ダイアログで、「書込み可能」を選択し、「OK」をクリックします。
 - f. 「プレゼンテーション」レイヤーで、ライトバックを有効にした論理列に対応する列をダブルクリックします。
 - g. 「プレゼンテーション列」ダイアログで、「権限」をクリックします。
 - h. 適切なユーザーおよびアプリケーション・ロールに「読取り/書込み」権限を選択します。
 - i. 変更内容を保存します。
2. 1つ以上のライトバック・テンプレートを使用してXMLドキュメントを作成します。[ライトバック・テンプレート・ファイルの作成](#)を参照してください。

XMLドキュメントには、複数のテンプレートを含めることができます。この例で示すXMLドキュメントには2つのテンプレート(SetQuotaUseIDおよびSetForecastUseID)が含まれています。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xmlns="oracle.bi.presentation/writebackschemas/v1">
<WebMessageTable lang="en-us" system="WriteBack" table="Messages">
  <WebMessage name="SetQuotaUseID">
    <XML>
      <writeBack connectionPool="Supplier">
        <insert>INSERT INTO regiontypequota
VALUES (@{c5f6e60e1d6eb1098},@{c5d7e483445037d9e},'@{c3a93e65731210ed1}',
'@{c6b8735ea60ff3011}',@{c0432jkl153eb92cd8})</insert>
        <update>UPDATE regiontypequota SET
Dollars=@{c0432jkl153eb92cd8} WHERE YR=@{c5f6e60e1d6eb1098} AND
Quarter=@{c5d7e483445037d9e} AND Region='@{c3a93e65731210ed1}' AND
ItemType='@{c6b8735ea60ff3011}'</update>
      </writeBack>
    </XML>
  </WebMessage>
<WebMessage name="SetForecastUseID">
  <XML>
    <writeBack connectionPool="Supplier">
      <insert>INSERT INTO regiontypeforecast
VALUES (@{c83ebf607f3cb8320},@{cb7e2046a0fba2204},'@{c5a93e65d31f10e01}',
'@{c5a93e65d31f10e01}',@{c7322jkl193ev92cd8})</insert>
      <update>UPDATE regiontypeforecast SET
Dollars=@{c7322jkl193ev92cd8} WHERE YR=@{c83ebf607f3cb8320} AND
Quarter=@{cb7e2046a0fba2204} AND Region='@{c5a93e65d31f10e01}' AND
ItemType='@{c5a93e65d31f10e01}'</update>
    </writeBack>
  </XML>
</WebMessage>
</WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

ノート: 両方が使用されない場合でも<insert>要素と<update>要素を含める必要があります。たとえば、insertのみを実行している場合、空の update 文 <update></update>を含める必要があります。

3. ライトバック・テンプレートを含む XML ドキュメントをクリップボードにコピーします。
4. ライトバック・テンプレートを Oracle Analytics に適用します。
 - a. 「**コンソール**」をクリックしてから、「**システム設定**」をクリックします。
 - b. 「**ライトバック・テンプレート XML**」に、ステップ 3 でコピーしたライトバック・テンプレートを貼り付けます。
5. ライトバック・コードを使用する権限を付与します。
 - a. クラシック・ホームに移動し、「**管理**」をクリックします。
 - b. 「**セキュリティ**」で、「**権限の管理**」をクリックし、「**ライトバック**」に移動します。
 - c. 「**認証されたユーザー**」に「**データベースへのライトバック**」を付与します。
 - d. 「**BI サービス管理者**」に「**ライトバックの管理**」を付与します。
6. 列でのライトバックを有効にするには:
 - a. 分析エディタで、ライトバックを有効にする列の「列のプロパティ」を表示します。
 - b. 「列のプロパティ」ダイアログで、「**ライトバック**」タブをクリックします。
セマンティック・モデルで、列に対してライトバックが有効になっている場合、「**ライトバックの有効化**」ボックスが使用可能です。
 - c. 「**ライトバックの有効化**」オプションを選択します。
 - d. デフォルトを変更する場合は、他のオプションの値を指定します。
 - e. 変更内容を保存します。列を含む分析で、この列に対してライトバックが有効になります。
7. 表ビューでのライトバックを有効にするには:
 - a. 分析エディタで、編集する表ビューを開きます。
 - b. 「**プロパティの表示**」をクリックします。
 - c. 「表のプロパティ」ダイアログで、「**ライトバック**」タブをクリックします。
 - d. 「**ライトバックの有効化**」オプションを選択します。
 - e. 「**テンプレート名**」ボックスを選択し、ステップ 2 で指定したライトバック・テンプレートに"WebMessage name="の値を指定します。
たとえば、ステップ 2 のサンプル・テンプレートの「**テンプレート名**」は 'SetQuotaUseID' です。
 - f. 変更内容を保存します。

ライトバックの制限

ユーザーは、Oracle Analytics からの SQL 問合せの実行を許可するすべてのデータ・ソースにライトバックできます。

ライトバックを構成する際に、次の制限を考慮してください：

- 数値列は数値のみを含む必要があります。ドル記号(\$)、ポンド記号すなわちハッシュ記号(#)、パーセント記号(%)など、文字形式のデータを含むことはできません。
- テキスト列は文字列データのみを含む必要があります。
- ログオンしたユーザーがすでに表示しているダッシュボードに、ライトバックを使用して変更されたデータの分析が含まれる場合、ダッシュボードのデータは自動的にハリフレッシュされません。更新されたデータを表示するには、ユーザーが手動でダッシュボードをリフレッシュする必要があります。
- テンプレート・メカニズムを使用できるのは、表ビューを使用する場合のみ、単一値データに対してのみです。テンプレート・メカニズムは、ピボット表ビューや他のタイプのビュー、複数値データ、または単一値データを含むドロップダウン列ではサポートされていません。
- ライトバック列のすべての値は編集可能です。印刷用ではないコンテキストで表示されるとき、編集可能な列は、ユーザーが「データベースへのライトバック」権限を持っているかのように表示されます。ただし、論理列がマップされている物理列が変化する可能性があるとき、論理列は複数レベルの交差を返します。このシナリオでは問題が発生する可能性があります。
- 分析のすべてのフィールドは、ユーザーが作成したライトバック表から導出されていない場合でも、ライトバック・フィールドとしてフラグを設定できます。ただし、表がライトバック対応でない場合、ライトバック操作を正常に実行することはできません。フィールドのタグ設定を正しく行う責任はコンテンツ設計者にあります。
- テンプレートには insert と update 以外の SQL 文を含めることができます。ライトバック機能がこれらの文をデータベースに渡します。ただし、insert または update 以外の文の使用はサポートされず、推奨もされません。
- Oracle Analytics は、データ入力の実行の最小限の検証のみを実行します。フィールドが数値の場合にユーザーがテキスト・データを入力すると、Oracle Analytics はそれを検出して、無効なデータがデータベースの送られないようにします。ただし、他の形式の無効なデータ入力(範囲外の値、テキストと数値の混在など)は検出されません。ユーザーがライトバック・ボタンをクリックし、挿入または更新が実行されると、無効なデータのためにデータベースでエラー・メッセージが生成されます。その後、正しくない入力をユーザーが修正できます。コンテンツ設計者が、「英数字が混在する値の数値フィールドへの入力は許可されません」といったテキストをライトバック分析に含めると、ユーザーにとって役立ちます。
- テンプレート・メカニズムは、任意の新規レコードの入力には適していません。つまり、データ入力ツールとして使用しないでください。
- ライトバック用の表を作成するときは、少なくとも 1 つの列にライトバック機能がなく、各行に一意の値を含んでおり null ではないことを確認します。
- ライトバック分析ではドリルダウンはサポートされません。ドリルダウンによって表構造が変更されるため、ライトバック・テンプレートが機能しません。

▲ 注意:

テンプレート・メカニズムは、ユーザーの入力を受け取り、それをデータベースに直接書き込みます。物理データベースのセキュリティはユーザー自身の責任になります。最適なセキュリティのためには、ライトバック・データベース表を一意のデータベース・インスタンスに格納してください。

ライトバック・テンプレート・ファイルの作成

ライトバック・テンプレート・ファイルは、1つ以上のライトバック・テンプレートを
含む XML 形式のファイルです。

ライトバック・テンプレートは、テンプレートの名前を指定する `WebMessage` 要素、接
続プール、および作成したライトバック表および列でのレコードの挿入と更新に必要な
SQL 文によって構成されます。コンテンツ設計者が表ビューのライトバックを有
効にするときは、表ビューのレコードの挿入と更新に使用するライトバック・テン
プレートの名前を指定する必要があります。

ライトバック・テンプレートの要件

ライトバック・テンプレートは次の要件を満たす必要があります:

- `WebMessage`: `WebMessage` 要素の `name` 属性を使用してライトバック・テンプレ
ートの名前を指定する必要があります。

ライトバックが正しく機能するためには、表ビューのライトバックを有効にする
ときに、コンテンツ設計者がビューのレコードの挿入と更新に使用するライトバ
ック・テンプレートの名前を指定する必要があります。

この例では `SetQuotaUseID` という名前のライトバック・テンプレートを示します。

```
<WebMessage name="SetQuotaUseID">
```

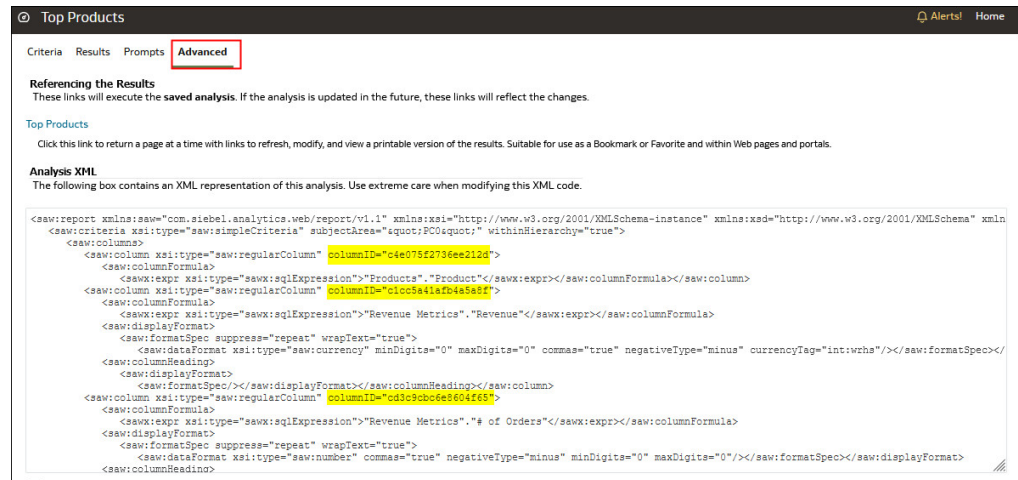
- `connectionPool`: セキュリティ要件を満たすには、接続プールと一緒に、レコード
を挿入および更新するための SQL コマンドも指定する必要があります。これらの
SQL コマンドは、ライトバック・スキーマに渡される値を参照して、データベー
ス表を変更する SQL 文を生成します。

- `VALUES`: 列の値は列 ID または列位置で参照できます。列 ID の使用をお勧めしま
す。

文字列と日付の値は一重引用符で囲みます。数値には一重引用符は必要ありませ
ん。

- **列 ID** - 各列 ID はランダムに生成された英数字です。列 ID は、分析エディタの
「詳細」タブにある分析の XML 定義で確認できます。たとえば、
`@{c5f6e60e1d6eb1098}`、`@{c3a93e65731210ed1}`、`'@{c6b8735ea60ff3011}'`な
どが列 ID の値です

列 ID を使用すると、列の順序が変化する場合にもライトバックが作動します。



– **列位置** - 列位置は 1 から始まる数です。たとえば、@1、@3、'@5'などが列位置の値です

列の順序が変化するとライトバックは作動しなくなります。これが列 ID をお勧めする理由です。

- テンプレートには<insert>要素と<update>要素の両方を含める必要があります。要素に SQL コマンドを含めない場合は、開始タグと終了タグの間に空白を挿入する必要があります。たとえば、次のように要素を入力してください:

```
<insert> </insert>
```

次のようにしないでください:

```
<insert></insert>
```

空白を省略すると、「システムがライトバック・テンプレート'my_template'を読み取ることができません。」のようなライトバック・エラー・メッセージが表示されます。

- パラメータのデータ型が integer または real の数値ではない場合は、一重引用符で囲みます。データベースが自動的にコミットを実行しない場合、オプションの postUpdate ノードを insert ノードと update ノードの後に追加してコミットを強制します。postUpdate ノードは通常は次の例のようになります:

```
<postUpdate>COMMIT</postUpdate>
```

列 ID 構文を使用したライトバック・テンプレートの例

列 ID で値を参照するライトバック・テンプレート・ファイルはこの例のようになります:

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web/message/v1">
<WebMessageTable lang="en-us" system="WriteBack" table="Messages">
  <WebMessage name="SetQuotaUseID">
    <XML>
      <writeBack connectionPool="Supplier">
        <insert>INSERT INTO regiontypequota
VALUES (@{c5f6e60e1d6eb1098},@{c5d7e483445037d9e},'@{c3a93e65731210ed1}','@{c6
```

```
b8735ea60ff3011}',@{c0432jkl153eb92cd8})</insert>
  <update>UPDATE regiontypequota SET
Dollars=@{c0432jkl153eb92cd8} WHERE YR=@{c5f6e60e1d6eb1098} AND
Quarter=@{c5d7e483445037d9e} AND Region='@{c3a93e65731210ed1}' AND
ItemType='@{c6b8735ea60ff3011}'</update>
  </writeBack>
</XML>
</WebMessage>
</WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

列位置構文を使用したライトバック・テンプレートの例

列位置で値を参照するライトバック・テンプレート・ファイルはこの例のようになります:

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web/message/v1">
<WebMessageTable lang="en-us" system="WriteBack" table="Messages">
  <WebMessage name="SetQuota">
    <XML>
      <writeBack connectionPool="Supplier">
        <insert>INSERT INTO regiontypequota
VALUES (@1,@2,'@3','@4',@5)</insert>
        <update>UPDATE regiontypequota SET Dollars=@5 WHERE YR=@1
AND Quarter=@2 AND Region='@3' AND ItemType='@4'</update>
      </writeBack>
    </XML>
  </WebMessage>
</WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

データ・エンリッチメントのためのカスタム・ナレッジの追加

カスタム・ナレッジを **Oracle Analytics** に追加して、システム・ナレッジを拡張します。たとえば、処方薬を **USP 医薬品** カテゴリの鎮痛薬または麻酔薬に分類するカスタム・ナレッジ参照を追加する場合があります。

チュートリアル

カスタム・ナレッジを使用すると、**Oracle Analytics** セマンティック・プロファイラでさらに多くのビジネス固有のセマンティック・タイプを識別し、さらに多くの関連する管理対象エンリッチメントの推奨を作成できます。

開始する前に、カスタム・ナレッジ参照ファイル(**CSV 形式**)をダウンロードして、これらをアップロード用にローカルで使用できるようにします。独自のカスタム・ナレッジ参照ファイルを **CSV 形式**で作成することもできます。カスタム・ナレッジの推奨を参照してください。

1. **Oracle Analytics** のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。

2. 「参照ナレッジ」をクリックします。
3. 「カスタム・ナレッジ」で、**カスタム・ナレッジの追加**をクリックします。
4. 「開く」ダイアログでカスタム・ナレッジの CSV ファイルに移動して選択し、「開く」をクリックします。
5. 「ダイアログからのカスタム・ナレッジの作成」で名前を指定し、アップロード・オプションを確認してから「OK」をクリックします。

「カスタム・ナレッジ」ページに、「**含む**」オプションを選択した新規ファイルがリストされます。コンテンツ作成者がデータセットをエンリッチすると、Oracle Analytics ではこのデータに基づいてエンリッチメントの推奨が提示されます。

数字のみのキーの使用

カスタム・ナレッジを Oracle Analytics に追加するとき、場合によっては先頭のゼロを削除せずに数字のみのキー(数値キー)をプロファイルしたいことがあります。これは、Oracle Analytics が数値を取り込む通常の方法です。たとえば、Oracle Analytics で UNSPSC 分類コード '0010101501' を '10101501' ではなく '0010101501' として取り込みたい場合があります。ワークブック設計者は、参照ナレッジに完全なキーを保持することで、推奨にアクセスしてデータをエンリッチできます。この例では、名前、ファミリー、区分などの UNSPSC データが提供されます。

数字のみのキーの追加に関するヒント

ソース・ファイルで、キー列をテキストとして定義し、最初の列にします。ファイルの他の列の形式を変更する必要はありません。

たとえば、UNSPSC 分類コード・データセットの Commodity 列には各行のキー識別子が保持されます。Commodity キーは先頭にゼロがいくつか付いた数字です。Oracle Analytics では、Commodity 列の値が属性として扱われます

← Create Custom Knowledge from UNSPSC Classification Codes2020.xlsx

Name: UNSPSC Classification Codes2020 Owner: LUIS.RIVAS@ORACLE.COM
 Description: Uploaded from UNSPSC Classification Codes2 Created On: In Progress
 Uploaded File: UNSPSC Classification Codes2020.x Modified On: In Progress
 Sheet: Sheet1 Refreshed: Never

A Commodity	A Commodity N...	# Segment	A Segment Name	# Family	A Family Name	#
0010101501	Cats	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101502	Dogs	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101504	Mink	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101505	Rats	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101506	Horses	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101507	Sheep	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101508	Goats	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101509	Asses	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101510	Mice	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101511	Swine	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10
0010101512	Rabbits	10,000,000	Live Plant and Animal Material and Accessories and Supplies	10,100,000	Live animals	10

ワークブック設計者がこのカスタム・ナレッジに基づいてデータを追加すると、エンリッチメント推奨がそのデータに適したものになります。この例では、Commodity 列の UNSPSC 分類コードのエンリッチ推奨を使用すると、名前、ファミリー、区分などの商品データでビジュアライゼーションをエンリッチできます。

ORDER_LINE_ID	ORDER_ID	ORDER_PRIORITY	CUSTID	CUSTOMER_SE	COMMODITY	PRODUCT_NAME	PROFIT	QUANTITY_ORC
5196	86337	Critical	C1945	Consumer	0044103007	Xerox 1284	-24.30	
7633	86982	Medium	C2785	Corporate	0043232302	Heviect Packard LaserJet 3310 Copier	7,430.56	
1770	86175	Not Specified	0972	Small Business	0043211517	Innovation Primaris 3.5" 2HD Unformatted I	-51.77	
3883	86397	High	C1441	Consumer	004411963	GB Binding covers	129.43	
3287	90884	High	C1242	Small Business	0044109001	Xerox 1263	-10.73	
1288	90371	Critical	C409	Corporate	0043221726	Fellowes Internet Keyboard, Platinum	-58.92	
4954	91223	Critical	C1824	Corporate	0056111601	Eldon 300 Class Desk Accessories, Black	-30.94	
6997	86467	High	C2540	Consumer	0044111514	Bonaire 99.97% HEPA Air Cleaner	-37.05	
8216	88920	Medium	C2994	Small Business	0044102301	Eldon Simplefile Box Office	-14.79	

使用状況のトラッキング

使用状況トラッキングにより、管理者はコンテンツに対するユーザー・レベルの間合せをトラッキングできます。

使用状況トラッキングは、間合せの頻度やレスポンス時間に基づいて、パフォーマンスのボトルネックの原因となっているユーザー間合せを特定する上で役立つ方法です。管理者は、ユーザー間合せをトラッキングする基準を設定したり、データベースの最適化、集計統計、または消費されたリソースに基づくユーザーまたは部門への請求などの様々な方法で使用可能な使用状況レポートを生成します。

トピック:

- [使用状況トラッキングについて](#)
- [使用状況トラッキング表の理解](#)
- [使用状況のトラッキングの一般的なワークフロー](#)
- [使用状況トラッキング・データベースの指定](#)
- [使用状況トラッキング・パラメータの設定](#)
- [使用状況トラッキング・データの分析](#)

使用状況トラッキングについて

エンタープライズ・モデリング機能を提供するサービスで使用状況トラッキングを構成できます。使用状況情報は、詳細なユーザー間合せレベルでトラッキングされるため、次のような質問に回答できます。

- ユーザーは **Oracle Analytics Cloud** とどのように関わっていますか。
- ユーザーはどこで時間を費やしていますか、または費やしていませんか。
- ユーザーは各セッション内、セッション間、および間合せ間でどれくらいの時間を費やしていますか。
- セッション内の間合せ、セッション間の間合せ、およびユーザー全体にわたる間合せは互いにどのように関連していますか。

- ユーザーは分析内でドリルアップおよびドリルダウンしていますか。
- 問題が報告されたときにどのような問合せが実行されていますか。

収集した使用状況統計は、システムの使用状況とパフォーマンスの監視に役立つため、ユーザーの行動をよりよく理解し、予測できます。システムがどのように使用される可能性が高いかを事前に認識すると、効率が上がり、エラーが削減されます。

使用状況トラッキングを有効にすると、システムによって、実行される各問合せのデータ・レコードが収集され、それらがすべてデータベース表に書き込まれます。論理問合せと物理問合せの両方がトラッキングされ、問合せの実行にかかった時間や、ユーザー問合せの処理中に検索された行数などの各種パフォーマンス測定値とともに、別々の表に記録されます。

使用状況トラッキングの前提条件

使用状況のトラッキングを行う場合は、次の前提条件を満たしていることを確認します。

- 現在、セマンティック・モデラーまたはモデル管理ツールを使用して、セマンティック・モデルを管理している。
使用状況トラッキングを構成するには、セマンティック・モデラーまたはモデル管理ツールを使用して、使用状況トラッキング・データベースの詳細をセマンティック・モデルに追加する必要があります。
- 使用状況情報を格納するデータベースに対する適切なアクセス権限がある。
データベース・スキーマに使用状況トラッキング表を作成し、その表に使用状況データを書き込む権限を持つユーザーの資格証明が必要です。
- データベースで使用状況トラッキングがサポートされている: Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse
- 使用状況トラッキング・データベースへのデータ接続が、次の設定で作成されている。データへの接続を参照してください。
 - **システム接続** - 「**システム接続**」チェック・ボックスを選択します。
「**システム接続**」チェック・ボックスを選択すると、接続がセマンティック・モデラーで使用可能になります。モデル管理ツールでも同様に、「**システム接続**」オプションを使用すると、「**データ・ソース名**」フィールドに接続の詳細を手動で入力するのではなく、「**データ接続の使用**」を選択して、接続の**オブジェクト ID**を入力できるようになります。[使用状況トラッキング・データベースの指定](#)を参照してください。
 - 「**ユーザー名**」および「**パスワード**」 - **ユーザー名**は、使用状況トラッキングに使用するデータベースのスキーマ名と一致する必要があります。たとえば、使用するスキーマが UT_Schema の場合、「**ユーザー名**」は UT_Schema にする必要があります。

ノート:

モデル管理ツールを使用している場合は、コンソールを使用して、セマンティック・モデルおよび使用状況トラッキング・データベースのデータベース接続を定義することもできます。Oracle Cloud データベースのデータへの接続を参照してください。コンソールを使用する場合、「**データ・ソース名**」フィールドに接続の詳細を入力するのではなく、モデル管理ツールに使用状況トラッキング・データベースを指定する際に、**コンソール接続の使用**を選択して、接続の「名前」を選択できます。

Oracle Autonomous Data Warehouse を使用状況トラッキング・データベースとして使用する場合は、セマンティック・モデルに使用状況トラッキング・データベースを指定する前に、次に示す追加のタスクを実行してください:

- Oracle Autonomous Data Warehouse ウォレットをダウンロードします。『*Oracle Autonomous Database Serverless の使用*』の「クライアント資格証明(ウォレット)のダウンロード」を参照してください。
- Oracle Autonomous Data Warehouse ウォレットを Oracle Analytics Cloud にアップロードします。「SSL によるデータベース接続の保護」を参照してください。
- Oracle Autonomous Data Warehouse へのセルフサービス接続を作成し、「**システム接続**」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。「Oracle Autonomous Data Warehouse への接続」を参照してください。

使用状況トラッキング・データベースについて

システムでは、指定したデータベースに使用状況トラッキングの詳細が格納されます。データベースは、Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse のいずれかです。セマンティック・モデルまたはモデル管理ツールを使用して、セマンティック・モデル内のデータベースおよび接続プールの詳細を指定します。

[使用状況トラッキング・データベースの指定](#)を参照してください。

使用状況トラッキング・パラメータについて

使用状況トラッキング情報を格納するデータベースを指定した後、コンソール(「システム設定」ページ)を介して、様々な使用状況トラッキング・パラメータを設定する必要があります。

使用状況トラッキングの構成に必要なパラメータは、次のとおりです:

- 使用状況トラッキングの有効化
- 接続プール名
- 物理および論理問合せロギング表名
- 使用状況トラッキング表内の問合せ行の最大数

これらのパラメータを設定して変更を適用すると、Oracle Analytics では次が行われません:

- セマンティック・モデル内に指定されたデータベースで物理および論理問合せロギング表を作成します。表名は、物理および論理問合せロギング表名パラメータに指定する名前に基づいています。
- これらの表への使用状況トラッキング・データの記録を開始します。

[使用状況トラッキング・パラメータの設定](#)を参照してください。

使用状況データの分析について

システムを使用して、物理および論理問合せロギング表に追加したトラッキング・データから役に立つ使用状況レポートを作成できます。

データベースに接続し、表からデータセットを作成し、レポートおよびビジュアライゼーションを作成することにより、ユーザーの問合せを理解し、パフォーマンスを改善するための適切なアクションを実行しやすくなります。

使用状況トラッキング表の理解

システムでは、使用状況トラッキング・データが3つのデータベース表に格納されます。

使用状況トラッキング・プロセスでは、「システム設定」ページでの設定を介して指定する表名を使用してこれらの表が作成されます。

- 使用状況トラッキング論理問合せロギング表
- 使用状況トラッキング物理問合せロギング表
- 使用状況トラッキング初期化ブロック表

[使用状況トラッキング・パラメータの設定](#)を参照してください。

使用状況トラッキング論理問合せロギング表

次の表で、論理問合せをトラッキングするデータベース表の各列について説明します。該当する場合、可変文字フィールド(**varchar** および **varchar2**)と長さなどのデータ型を指定します。この表の説明を参照すると、特定の時間関連の列を加算または減算することで、正確な値と等しくできると考えられるかもしれません。たとえば、**TOTAL_TIME_SEC** は **END_TS** から **START_TS** を減算した値であると考えたとします。しかし、次の理由により、列にはそのような正確な値はありません。

- 様々なプロセスが並列して実行され、それらの速度は負荷やデータベースのパフォーマンスによって異なります。サーバーベースの操作は軽い場合や集約的な場合があります。
- すべての接続がいっぱいである場合、問合せはキューに入り、処理されるまで待機します。タイミングは、負荷や構成によって異なります。

ユーザー、セッションおよび ID 関連の列

列	説明
ID	論理問合せ表で、この列は一意的な行識別子を示します。物理問合せ表で、この列は LOGICAL_QUERY_ID という名前です。
NODE_ID	<hostname>:obis1 を含みます。たとえば、examplehost:obis1 (単一のインスタンスの場合)です。
PRESENTATION_NAME	カタログの名前を示します。デフォルトは Null で、データ型は Varchar(128) です。
IMPERSONATOR_USER_NAME	偽装ユーザーのユーザー名を指定します。リクエストが偽装ユーザーとして実行されない場合、値は None です。デフォルトは None で、データ型は Varchar(128) です。
USER_NAME	問合せを送信したユーザーの名前を指定します。
ECID	システム生成の実行コンテキスト ID を示します。データ型は Varchar2(21024) です。
TENANT_ID	初期化ブロックを実行したユーザーのテナント名を指定します。データ型は Varchar2(2128) です。
SERVICE_NAME	サービスの名前を指定します。データ型は Varchar2(2128) です。
SESSION_ID	セッションの ID を示します。データ型は Number(10) です。

列	説明
HASH_ID	論理問合せの HASH 値を示します。データ型は Varchar2(2128) です。

問合せ元関連の列

列	説明
QUERY_SRC_CD	<p>リクエストのソース。</p> <p>リクエストは QUERY_SRC_CD を任意の文字列値に設定してそれ自体を識別できます。</p> <p>使用可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Report - ソースが分析または任意のエクスポート操作である場合。 • ドリル - ドリルアップまたはドリルダウンが原因でディメンション内のソースが変更された場合。 • ValuePrompt - ソースがフィルタ・ダイアログまたはダッシュボード・プロンプト内の「値」ドロップダウン・リストである場合。 • VisualAnalyzer - ソースがデータをビジュアル化するワークブックである場合。 • DisplayValueMap、MemberBrowserDisplayValues または MemberBrowserPath - ソースが分析の表示に関連する値である場合。 • SOAP - ソースが DataSetSvc などの Web サービスからのコールである場合。 • Seed - ソースが、分析サーバーのキャッシュをシードするエージェントである場合。 • Null - ソースが管理ツール物理表または列行数、またはビュー・データである場合。
SAW_DASHBOARD	ダッシュボードのパス名を示します。問合せがダッシュボードを介して送信されなかった場合、値は NULL です。
SAW_DASHBOARD_PG	ダッシュボード内のページ名を示します。リクエストがダッシュボード・リクエストでない場合、値は NULL です。デフォルトは Null で、データ型は Varchar(150) です。
SAW_SRC_PATH	分析のカタログ内のパス名を指定します。

問合せ詳細関連の列

列	説明
ERROR_TEXT	バックエンド・データベースからのエラー・メッセージが含まれます。この列が適用されるのは、 SUCCESS_FLAG が 0 (ゼロ)以外の値に設定されている場合のみです。複数のメッセージが連結され、システムによって解析されません。デフォルトは Null で、データ型は Varchar(250) です。
QUERY_BLOB	切捨てなしに論理 SQL 文全体が含まれます。 QUERY_BLOB 列は、 Long 型の文字列です。

列	説明
QUERY_KEY	論理 SQL 文からシステムによって生成される MD5 ハッシュ・キーが含まれます。デフォルトは Null で、データ型は Varchar(128)です。
QUERY_TEXT	問合せに対して送信された SQL 文を示します。データ型は Varchar(1024)です。 この列の長さは(ALTER TABLE コマンドを使用して)変更できます。ただし、この列に書き込まれるテキストは常に物理レイヤーに定義されているサイズに切り捨てられます。セマンティック・モデル管理者は、この列の長さを、バックエンド物理データベースによってサポートされている問合せの最大長より大きい値に設定しないようにする必要があります。たとえば、Oracle Database では Varchar の最大値を 4000 に設定できますが、4000 文字ではなく 4000 バイトに切り捨てられます。複数の文字セットを使用する場合、使用されている文字セットおよび文字に応じて、実際の最大文字サイズの文字数は変化します。
REPOSITORY_NAME	問合せがアクセスするセマンティック・モデルの名前を指定します。
SUBJECT_AREA_NAME	アクセスしているビジネス・モデルの名前が含まれます。
SUCCESS_FLG	次のリストに定義されている問合せの完了ステータスを示します。 <ul style="list-style-type: none"> 0 - 問合せがエラーなしで正常に完了しました。 1 - 問合せがタイムアウトになりました。 2 - 行制限を超えたため、問合せが失敗しました。 3 - その他の理由のため、問合せが失敗しました。

実行タイミング関連の列

列	説明
COMPILE_TIME_SEC	問合せをコンパイルするのに必要な時間(秒単位)が含まれます。COMPILE_TIME_SEC の値は TOTAL_TIME_SEC に含まれます。
END_DT	論理問合せが完了した日付を示します。
END_HOUR_MIN	論理問合せが完了した時間と分を示します。
END_TS	論理問合せが完了した日時を示します。開始および終了タイムスタンプには、リソースが使用可能になるまで問合せが待機するために費やした時間も反映されます。問合せを送信したユーザーが問合せの終了前にページを離れた場合、最終フェッチは一切行われず、タイムアウト値の 3600 が記録されます。ただし、タイムアウト前にユーザーがページに戻った場合、フェッチがその時間に完了し、これが end_ts 時間として記録されます。

列	説明
START_DT	論理問合せが送信された日付を示します。
START_HOUR_MIN	論理問合せが送信された時間と分を示します。
START_TS	論理問合せが送信された日時を示します。
TOTAL_TIME_SEC	クライアントが分析に対するレスポンスを待機している間にシステムが問合せの処理に費やした時間(秒単位)を示します。TOTAL_TIME_SEC には、COMPILE_TIME_SEC の時間が含まれます。
RESP_TIME_SEC	問合せレスポンスにかかった時間を示します。データ型は Number(10) です。

実行詳細関連の列

列	説明
CUM_DB_TIME_SEC	データベースに送信されたすべての問合せの累積時間が含まれます。問合せは並列して実行されるため、累積問合せ時間は、データベースに接続されている合計時間以上です。たとえば、論理リクエストによって 4 つの物理 SQL 文が生成されてデータベースに送信され、3 つの問合せの問合せ時間が 10 秒で、1 つの問合せが 15 秒である場合、問合せは並列して実行されるため、CUM_DB_TIME_SEC には 45 秒が表示されます。
CUM_NUM_DB_ROW	バックエンド・データベースから返された行の合計数が含まれます。
NUM_DB_QUERY	論理問合せリクエストを満たすためにバックエンド・データベースに送信された問合せの数を示します。問合せが成功した(SuccessFlag = 0)場合、この数は 1 以上です。
ROW_COUNT	問合せクライアントに返される行数を示します。問合せから大量のデータが返される場合、この列はユーザーがすべてのデータを表示するまでは移入されません。
TOTAL_TEMP_KB	問合せで受信された合計 KB を指定します。データ型は Number(10) です。

キャッシュ関連列

列	説明
CACHE_IND_FLG	Y の場合、問合せのキャッシュ・ヒットを示し、N の場合、キャッシュ・ミスを示します。デフォルトは N です。
NUM_CACHE_HITS	問合せに対してキャッシュ結果が返された回数を示します。NUM_CACHE_HITS は 32 ビットの整数(または 10 桁の整数)です。デフォルトは Null です。

列	説明
NUM_CACHE_INSERTED	問合せによってキャッシュ・エントリが生成された回数を示します。デフォルトは Null です。NUM_CACHE_INSERTED は 32 ビット の整数(または 10 桁 の整数)です。

使用状況トラッキング物理問合せロギング表

次の表で、物理問合せをトラッキングするデータベース表について説明します。このデータベース表には、論理問合せロギング表に格納されている論理問合せの物理 SQL 情報が記録されます。物理問合せ表には、論理問合せ表に対する外部キー関係があります。

ユーザー、セッションおよび ID 関連の列

列	説明
ID	一意の行識別子を指定します。
LOGICAL_QUERY_ID	論理問合せロギング表内の論理問合せを参照します。データ型は Varchar2(250) です。
HASH_ID	論理問合せの HASH 値を示します。データ型は Varchar2(2128) です。
PHYSICAL_HASH_ID	物理問合せの HASH 値を示します。データ型は Varchar2(2128) です。

問合せ詳細関連の列

列	説明
QUERY_BLOB	切捨てなしに物理 SQL 文全体が含まれます。QUERY_BLOB 列は、 long 型の文字列です。
QUERY_TEXT	問合せに対して送信された SQL 文が含まれます。データ型は Varchar(1024) です。

実行タイミング関連の列

列	説明
END_DT	物理問合せが完了した日付を示します。
END_HOUR_MIN	物理問合せが完了した時間と分を示します。
END_TS	物理問合せが完了した日時を示します。開始および終了タイムスタンプには、リソースが使用可能になるまで問合せが待機するために費やした時間も反映されます。
TIME_SEC	物理問合せの実行時間を示します。
START_DT	物理問合せが送信された日付を示します。
START_HOUR_MIN	物理問合せが送信された時間と分を示します。
START_TS	物理問合せが送信された日時を示します。

実行詳細関連の列

列	説明
ROW_COUNT	問合せクライアントに返される行数が含まれます。

使用状況トラッキング初期化ブロック表

次の表で、初期化ブロックの情報をトラッキングするデータベース表について説明します。

ノート:

現在、初期化ブロック使用状況トラッキング表に含まれるのはセッション初期化ブロックのみであり、セマンティック・モデル初期化ブロックは含まれません。

ユーザー、セッションおよび ID 関連の列

列	説明
USER_NAME	初期化ブロックを実行したユーザーの名前。データ型は <code>Varchar2(128)</code> です。
TENANT_ID	初期化ブロックを実行したユーザーのテナント名。データ型は <code>Varchar2(128)</code> です。
SERVICE_NAME	サービスの名前。データ型は <code>Varchar2(128)</code> です。
ECID	システム生成の実行コンテキスト ID。データ型は <code>Varchar2(1024)</code> です。
SESSION_ID	セッションの ID。データ型は <code>Number(10)</code> です。

問合せ詳細関連の列

列	説明
REPOSITORY_NAME	問合せがアクセスするセマンティック・モデルの名前。データ型は <code>Varchar2(128)</code> です。
BLOCK_NAME	実行された初期化ブロックの名前。データ型は <code>Varchar2(128)</code> です。

実行タイミング関連の列

列	説明
START_TS	初期化ブロックが開始した日時。
END_TS	初期化ブロックが終了した日時。開始および終了タイムスタンプには、リソースが使用可能になるまで問合せが待機するために費やした時間も反映されます。
DURATION	初期化ブロックの実行に要した時間の長さ。データ型は <code>Number(13,3)</code> です。

実行詳細関連の列

列	説明
NOTES	初期化ブロックとその実行に関するノート。データ型は <code>Varchar2(1024)</code> です。

使用状況のトラッキングの一般的なワークフロー

ここでは、Oracle Analytics Cloud へのユーザーレベルの問合せをトラッキングするためのタスクを示します。

タスク	説明	詳細情報
使用状況トラッキング・データを保存する場所の決定	使用状況トラッキングに使用できるデータベース・タイプを把握します。	使用状況トラッキング・データベースについて
使用状況トラッキング・データベースへの接続の設定	使用状況トラッキング情報を格納するデータベースへのデータ接続(またはコンソール接続)を作成します。	使用状況トラッキングの前提条件
使用状況トラッキング・データベースの指定	セマンティック・モデルでの使用状況トラッキング・データベースを定義します。	使用状況トラッキング・データベースの指定
使用状況トラッキング・パラメータの指定	システムの使用状況トラッキングを有効化し、使用状況トラッキング・データベースの接続の詳細と表名を指定します。	使用状況トラッキング・パラメータの設定
使用状況トラッキング・データの分析	使用状況トラッキング・データから使用状況レポートを作成します。	使用状況トラッキング・データの分析

使用状況トラッキング・データベースの指定

システム上のレポート、ダッシュボードおよびデータ・ビジュアライゼーション・ワークブックの使用状況をトラッキングする前に、セマンティック・モデルの使用状況トラッキング・データを格納するデータベースを指定する必要があります。

指定するデータベースには、少なくとも1つのスキーマが定義されている必要があります。システムは、データベース接続の詳細で指定したユーザー名が名前と一致するスキーマ内に使用状況トラッキング表を作成します。たとえば、使用状況トラッキング・データベースのスキーマの名前が `UT_Schema` の場合、接続の「ユーザー名」フィールドに `UT_Schema` を指定する必要があります。使用状況トラッキング表は、`UT_Schema` という名前のスキーマに作成されます。

セマンティック・モデルの物理レイヤーでデータベースおよび接続プールの詳細を構成する必要があります。セマンティック・モデラーまたはモデル管理ツールを使用して、使用状況トラッキング・データベースを構成します。

- [セマンティック・モデラーによる使用状況トラッキング・データベースの指定](#)
- [モデル管理ツールによる使用状況トラッキング・データベースの指定](#)

Oracle Autonomous Data Warehouse を使用状況トラッキング・データベースとして使用する場合は、使用状況トラッキング・データベースを指定する前に、次に示す Oracle Autonomous Data Warehouse 関連の追加のタスクを実行する必要があります。[使用状況トラッキングの前提条件](#)を参照してください。

セマンティック・モデラーによる使用状況トラッキング・データベースの指定

現在、セマンティック・モデラーを使用してセマンティック・モデルを開発している場合は、セマンティック・モデラーを使用して、使用状況トラッキング・データベースを構成します。

1. まだ行っていない場合は、「**システム接続**」オプションを選択して、使用状況トラッキング・データベースへのデータ接続を作成します。

データベース・タイプは Oracle Database か Oracle Autonomous Data Warehouse のいずれかにし、データベースへの接続に使用する**ユーザー名**は、ユーザー・トラッキング表を格納するスキーマの名前と同一にする必要があります。[使用状況トラッキングの前提条件](#)を参照してください。

2. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」、「**セマンティック・モデル**」の順にクリックします。「セマンティック・モデル」ページで、セマンティック・モデルをクリックして開きます。
3. 使用状況トラッキング・データベースのデータベース・オブジェクトを作成します。
 - a. 「**物理レイヤー**」をクリックします。
 - b. 「物理レイヤー」ペインで、「**作成**」、「**データベースの作成**」の順にクリックします。
 - c. 「**名前**」に、使用状況トラッキング・データベースの名前(UsageTracking など)を入力して、「**OK**」をクリックします。
4. 使用状況トラッキング・データベースに接続するための接続プールを追加します。
 - a. 「データベース」タブで、「**接続プール**」をクリックします。
 - b. 「**ソースの追加**」をクリックします。
 - c. 「**名前**」フィールドをダブルクリックして、接続プールの名前を入力します。UTConnectionPool などです。
 - d. 「**接続**」フィールドをダブルクリックして、使用するデータ接続をリストから選択します。MyUTDatabase などです。

ノート:

- **システム接続** - セマンティック・モデルで使用できるのは、「**システム接続**」オプションが選択されているデータ接続のみです。セマンティック・モデルの接続についてを参照してください。
- 「**ユーザー名**」および「**パスワード**」 - データ接続に指定する**ユーザー名**は、使用状況トラッキングに使用するデータベースのスキーマ名と一致する必要があります。たとえば、使用するスキーマが UT_Schema の場合、「**ユーザー名**」は UT_Schema にする必要があります。[使用状況トラッキングの前提条件](#)を参照してください。

- e. 「**詳細を開く**」をクリックします。「接続プール」ペインで、「**完全修飾表名が必要**」チェック・ボックスが選択されていないことを確認します。
5. 変更内容を検証します。セマンティック・モデルのデプロイ前の拡張整合性チェックの実行を参照してください。
6. 変更内容を保存します。

モデル管理ツールによる使用状況トラッキング・データベースの指定

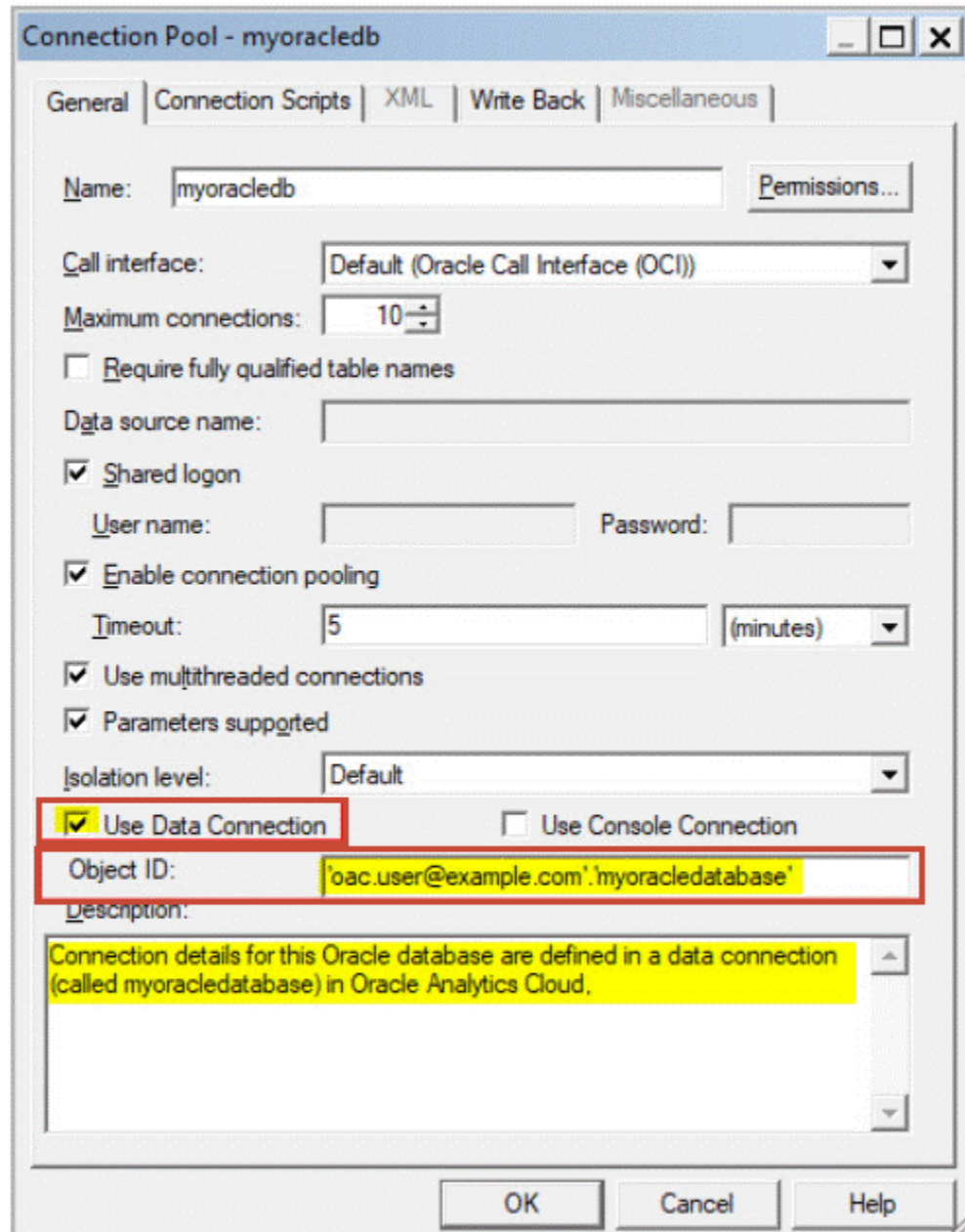
現在、モデル管理ツールを使用してセマンティック・モデルを開発している場合は、モデル管理ツールを使用して、使用状況トラッキング・データベースを構成します。

既存のデータベースまたは接続プールでの使用状況をトラックする場合、セマンティック・モデルに更新を行う必要はありません。これらのステップはスキップできます。既存のデータベース、接続プールおよび表を、使用状況トラッキング・システム構成の一部として使用できます。表スキーマが古い表と新しい表で一致する場合、使用状況トラッキングによって、既存の表が削除され、同じ名前の新しい表が作成されることはありません。

1. モデル管理ツールで、クラウド内のセマンティック・モデルを開きます。
「**ファイル**」メニューから、「**開く**」、「**クラウド内**」を選択し、インスタンスの接続情報を入力します。
 2. 使用状況トラッキング・データベースを指定します。
 - a. セマンティック・モデルの物理レイヤーで、右クリックして**新規データベース**を選択します。
 - b. 「データベース」ダイアログで、データベースの名前を入力し、データベース・タイプ(Oracle 12c など)を指定し、「**OK**」をクリックします。
 - c. 新しく作成したデータベースを右クリックし、「**新規オブジェクト**」、「**接続プール**」の順に選択します。
 - d. 「接続プール」ダイアログで、接続プールの詳細を入力し、次の値を指定します:
 - **コール・インタフェース**: 「デフォルト」(Oracle Call Interface (OCI))を選択します。
 - **完全修飾表名が必要**: このチェック・ボックスが選択されていないことを確認します。
 - **データソース名****: この接続プールを接続して物理問合せを送信する対象のデータ・ソースを指定します。例: (DESCRIPTION = (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = <DB Host>) (PORT = <DB port>)) (CONNECT_DATA = (SERVER = DEDICATED) (SERVICE_NAME = <Servicename>)))
 - **ユーザー名およびパスワード**: 使用状況トラッキング・データベースで使用可能なスキーマの名前と一致するユーザー名を入力します。
- **データ・ソース名**を指定するかわりに、「接続プール」ダイアログで、既存のデータベース接続を名前参照することも可能です。
- **データ接続 - 使用状況トラッキング・データベースとして「データ」タブから定義したデータベースの接続の詳細を使用するには、「データ・ソース名」フィールドに接続の詳細を手動で入力するのではなく、「データ接続の使用」を選択して、接続の**オブジェクト ID**を入力します。使用するデータ接続は、「**システム接続**」オプションが選択された状態で作成されたものであることを確認します。データ接続を使用したデータ・ソースへの接続を参照してください。**

- コンソール接続 - モデル管理ツールを使用する場合は、コンソールを使用して、セマンティック・モデルのデータベース接続を定義できます。使用状況トラッキング・データベースとしてコンソールから定義したデータベースの接続の詳細を使用するには、「**コンソール接続の使用**」チェック・ボックスを選択して、「**接続名**」フィールドにデータベース接続の名前を入力します。コンソール接続を使用したデータ・ソースへの接続を参照してください。

例:



3. 「ツール」、「整合性チェックの表示」、「全オブジェクト確認」の順にクリックし、変更を検証します。
4. オプション: 「ファイル」、「保存」の順にクリックし、変更をローカルに保存します。

5. 「ファイル」、「クラウド」、「公開」の順にクリックして、編集したセマンティック・モデルの.rpd ファイルをアップロードします。

使用状況トラッキング・パラメータの設定

使用状況の情報の記録を開始するには、使用するデータベースの接続の詳細、および使用状況のトラッキングに使用するデータベース表の名前を指定する必要があります。これらのパラメータはコンソール(「システム設定」ページ)から設定します。

1. サービスにサインインします。
2. 「コンソール」をクリックします。
3. 「システム設定」をクリックします。
4. 「使用状況トラッキング」をクリックします。
5. システムの使用状況トラッキングを有効化します。「使用状況トラッキングの有効化」がオンになっていることを確認します。
6. 次のプロパティを設定します。
 - **使用状況トラッキング接続プール**
使用状況トラッキング・データベース用として作成した接続プールの名前で、<database name>.<connection pool name>という書式で示されます。たとえば、UsageTracking.UTConnectionPool などです。
 - **使用状況トラッキング初期化ブロック表**
初期化ブロックの情報を格納するために使用するデータベース表の名前で、<database name>.<catalog name>.<schema name>.<table name>または<database name>.<schema name>.<table name>という書式で示されます。たとえば、UsageTracking.UT_Schema.InitBlockInfo です。
 - **使用状況トラッキング物理問合せロギング表**
物理問合せの詳細を格納するために使用するデータベース表の名前で、<database name>.<catalog name>.<schema name>.<table name>または<database name>.<schema name>.<table name>という書式で示されます。たとえば、UsageTracking.UT_Schema.PhysicalQueries です。
 - **使用状況トラッキング論理問合せロギング表**
論理問合せの詳細を格納するために使用するデータベース表の名前で、<database name>.<catalog name>.<schema name>.<table name>または<database name>.<schema name>.<table name>という書式で示されます。たとえば、UsageTracking.UT_Schema.LogicalQueries です。
 - **使用状況トラッキング最大行数**
使用状況トラッキング表に必要な最大行数。最小値は 1、最大値は 100,000 です。0 は無制限を意味します。行数が最大行数を超えると、使用状況トラッキング・プロセスにより、超過した行がタイムスタンプの古いものから削除されます。
7. 「適用」をクリックします。

Oracle Analytics により、使用状況トラッキング表が作成され、ユーザー問合せの記録が開始されます。

使用状況トラッキング・データの分析

使用状況レポートを作成して、ユーザー問合せを理解し、適切な操作を行います。

これらの例に従います:

- [データセットの作成による使用状況トラッキング・データの分析](#)
- [セマンティック・モデルのサブジェクト領域を使用した使用状況トラッキング・データの分析](#)

データセットの作成による使用状況トラッキング・データの分析

ユーザーの問合せを理解するために、物理および論理問合せロギング表のデータでデータセットを作成することで、使用状況レポートを作成します。

1. 「ホーム」 ページで、「**ページ・メニュー**」をクリックし、「**クラシック・ホームを開く**」を選択します。分析を作成し実行します。

システムにより、使用状況トラッキング・データベース内の使用状況トラッキング表に問合せが移入されます。
2. ホーム・ページで、「**作成**」、「**データセット**」の順にクリックします。
3. 「データセットの作成」で、使用状況トラッキング・データベースへの接続をクリックし、「システム設定」内の物理問合せおよび論理問合せロギングの表名で指定されているスキーマを選択します。たとえば、物理問合せおよび論理問合せロギングの表名の<database name>.<schema name>.<table name>で指定されているスキーマ名です。

これは、使用状況トラッキングを設定するために作成したデータベース接続です。[使用状況トラッキングの前提条件](#)を参照してください。
4. 「データセットの追加」で、使用状況トラッキングの物理問合せロギング表を検索し、すべての列を追加し、データセットに名前を付け(たとえば、**Physical Queries**)、「**追加**」をクリックします。同様に、使用状況トラッキングの論理問合せ表を検索し、すべての列を追加し、データセットに名前を付け(たとえば、**Logical Queries**)、「**追加**」をクリックします。
5. データセットの「結果」ページで、「**ワークブックの作成**」をクリックします。両方のデータセットをワークブックに追加します(たとえば、**Physical Queries** データセットと **Logical Queries** データセット)。ワークブックに名前を付けます(たとえば、**Usage Tracking**)。
6. ワークブックの「準備」タブで、「**データ・ダイアグラム**」をクリックし、ID 列などの列を使用してデータセット間の結合を作成します。
7. 「ビジュアル化」で、データをドラッグして、要件に基づいてビジュアライゼーションを作成します。

「使用状況トラッキング表の理解」内の使用状況トラッキング表の説明を参照して、適切な列を選択します。たとえば、何件の問合せにどのくらいの時間がかかったかを示すビジュアライゼーションを作成できます。

セマンティック・モデルのサブジェクト領域を使用した使用状況トラッキング・データの分析

ユーザーの問合せを理解するために、セマンティック・モデルのサブジェクト領域を使用して使用状況レポートを作成します。

メタデータをインポートして、物理データとメタデータが確実に同期されるようにする必要があります。スキーマが不一致になる問題を回避するために、新しい列を使用状況トラッキング表に追加してカスタマイズしないでください。

1. 「ホーム」 ページで、「**ページ・メニュー**」 をクリックし、「**クラシック・ホームを開く**」 を選択します。分析を作成し実行します。

システムにより、使用状況トラッキング・データベース内の使用状況トラッキング表に問合せが移入されます。

2. 使用状況トラッキング表を問合せ結果で更新するセマンティック・モデルをインポートします。セマンティック・モデルを作成するためのデプロイ済モデルのインポートを参照してください。
3. ホーム・ページで「**データ**」 をクリックし、「**データセット**」 の下で使用状況トラッキング表に対応するサブジェクト領域を選択して、ワークブックを作成します。
4. 「新規ワークブック」 ページの「**ビジュアル化**」 で、データをドラッグして、要件に基づいてビジュアライゼーションを作成します。

「使用状況トラッキング表の理解」 内の使用状況トラッキング表の説明を参照して、適切な列を選択します。たとえば、何件の問合せにどのくらいの時間がかかったかを示すビジュアライゼーションを作成できます。

問合せキャッシュの管理

Oracle Analytics Cloud では、問合せ結果セットのローカル・キャッシュを問合せキャッシュに保持します。

トピック:

- [問合せキャッシュについて](#)
- [問合せキャッシュの有効化または無効化](#)
- [キャッシュのモニターおよび管理](#)
- [キャッシュを使用するためのストラテジ](#)

問合せキャッシュについて

問合せキャッシュにより、Oracle Analytics Cloud では、バックエンド・データベースにアクセスすることなく後続の多くの問合せリクエストを処理でき、これによって問合せのパフォーマンスが向上します。ただし、バックエンドのデータ・ソースに更新があると、問合せキャッシュ・エントリが古くなる可能性があります。

キャッシュの利点

問合せを処理する最も速い方法は、大量の処理を回避し、事前計算された問合せ結果を使用することです。

問合せキャッシュを使用すると、**Oracle Analytics Cloud**により事前計算された問合せの結果がローカル・キャッシュに格納されます。別の問合せでこれらの結果を使用する場合、その問合せのデータベース処理はすべて回避されます。これにより、問合せの平均レスポンス時間が大幅に向上します。

パフォーマンスの向上に加え、ローカル・キャッシュから問合せに返答することで、ネットワーク・リソースと、データベース・サーバーでの処理時間を節約できます。中間結果が**Oracle Analytics Cloud**に返されないため、ネットワーク・リソースが節約されます。データベース上で問合せを実行しないため、データベース・サーバーは解放され、他の作業を実行できます。データベースでチャージ・バック・システムを使用する場合、実行する問合せが減ることで予算のコストも削減される可能性があります。

キャッシュを使用して問合せに返答することのもう1つの利点は、特に問合せ結果が複数のデータベースから取得される場合に、**Oracle Analytics Cloud**での処理時間が節約されることです。問合せによっては、サーバーで多数の結合およびソート処理が行われる場合があります。問合せがすでに計算されている場合、この処理は回避され、サーバー・リソースが解放されて他のタスクに使用されます。

要約すると、問合せキャッシュは、問合せのパフォーマンスを劇的に向上させ、ネットワーク・トラフィック、データベース処理および処理のオーバーヘッドを削減できます。

キャッシュのコスト

問合せキャッシュには多くの明らかな利点がありますが、特定のコストもあります。

- キャッシュされている結果が古い可能性
- キャッシュを管理する管理コスト

キャッシュの管理によって、通常はメリットがコストをはるかに上回ります。

キャッシュに関連する管理タスク

管理タスクの中にはキャッシュに関連しているものがあります。物理表ごとにキャッシュ永続時間を適切に設定し、その表内のデータの更新頻度を認識しておく必要があります。

更新頻度が変わる場合は、変更が発生するタイミングを追跡し、必要に応じて手動でキャッシュをパージする必要があります。

キャッシュを最新の状態に維持

基礎となるデータベース内のデータが変更されたときにキャッシュ・エントリがパージされないと、問合せによって古い結果が返される可能性があります。

これを許容できるかどうかを評価する必要があります。キャッシュに、古いデータが含まれていても許容できる場合があります。古いデータをどの程度許容できるかを判断し、そのレベルを反映するようにルールを構成(して順守)する必要があります。

たとえば、アプリケーションで大規模なコングロマリットの企業データを分析し、その企業の様々な部門のサマリーを毎年実行しているとします。新しいデータは翌年のサマリーのみに影響するため、実質的には問合せに影響しません。この場合、キャッシュをパージするかどうかを天秤にかけ、キャッシュにエントリを残す方がよいと判断される可能性があります。

しかし、データベースが1日に3回更新され、当日のアクティビティに対して問合せを実行しているとします。この場合、頻繁にキャッシュをパージするか、キャッシュをまったく使用しないことを検討する必要があります。

もう1つのシナリオは、定期的に(たとえば、週に1回)データセットを一から再構築する場合です。この例では、データセットを再構築するプロセスの一部としてキャッシュ全体をパージして、キャッシュに古いデータがないようにします。

どのような状況にせよ、ユーザーに最新でない情報が返されることについてどの程度許容できるかを評価する必要があります。

ユーザー間でのキャッシュの共有

特定の接続プールで共有ログオンが有効な場合、ユーザー間でキャッシュを共有でき、ユーザーごとにシードする必要はありません。

共有ログオンが有効でなく、ユーザー固有のデータベース・ログインが使用される場合、各ユーザーは独自のキャッシュ・エントリを生成します。

問合せキャッシュの有効化または無効化

Oracle Analytics Cloud では、問合せキャッシュはデフォルトで有効です。問合せキャッシュは、「システム設定」ページで有効にしたり、無効にできます。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**システム設定**」をクリックします。
3. 「**パフォーマンスと互換性**」をクリックします。
4. **キャッシュ有効**をオンまたはオフに設定します。
 - オン — データ問合せキャッシュは有効です。
 - オフ — キャッシュは無効です。
5. 「**適用**」をクリックします。

変更内容がシステム全体でリフレッシュされるまでしばらく待機します。

キャッシュのモニターおよび管理

基礎となるデータベースの変更を管理してキャッシュ・エントリをモニターするには、キャッシュ管理ストラテジを策定する必要があります。

キャッシュ・エントリを構成する基になる表のデータが変更されたときにキャッシュ・エントリを無効にするプロセス、および望ましくないキャッシュ・エントリをモニター、識別、および削除するプロセスが必要です。

この項では、次のトピックについて説明します:

- [キャッシュ管理ストラテジの選択](#)
- [セマンティック・モデルの変更による問合せキャッシュへの影響](#)

キャッシュ管理ストラテジの選択

キャッシュ管理ストラテジの選択は、基礎となるデータベースのデータの変更度と、その変更度の原因となる変更の予測可能性に応じて異なります。

また、キャッシュを構成する問合せの数やタイプ、それらの問合せの扱われ方によっても異なります。この項では、キャッシュ管理に対する様々なアプローチの概要を示します。

システムのキャッシュの無効化

システム全体のキャッシュを無効にして、すべての新しいキャッシュ・エントリを停止し、新しい問合せによる既存のキャッシュの使用を停止できます。キャッシュを無効にした場合、キャッシュに格納されているエントリを失うことなく、後で有効にできます。

キャッシュを一時的に無効にすることは、古いキャッシュ・エントリがあることが疑われ、エントリまたはキャッシュ全体をパージする前に実際に古いかどうかを確認する場合に有用な戦略です。キャッシュに格納されているデータがまだ有用であるとわかった場合、または問題のあるエントリを安全に削除した後は、キャッシュを安全に有効にできます。キャッシュを再度有効にする前に、必要に応じて、キャッシュ全体または特定のビジネス・モデルに関連付けられているキャッシュをパージします。

指定した物理表のキャッシュとキャッシュ永続時間

物理表ごとにキャッシュ可能属性を設定し、将来の問合せを処理するために、その表に対する問合せをキャッシュに追加するかどうかを指定できます。

表のキャッシュ機能を有効化すると、その表に関連する問合せがキャッシュに追加されます。デフォルトでは、すべての表がキャッシュ可能に設定されていますが、適切なキャッシュ永続時間設定を設定しない場合、一部の表はキャッシュに含めることに適していない可能性があります。たとえば、毎分更新される株式相場データを格納する表があるとします。その表のエントリを 59 秒ごとにパージすることを指定できます。

また、キャッシュ永続時間設定を使用して、その表のエントリを問合せキャッシュに保持する期間を指定できます。これは、頻繁に更新されるデータ・ソースに有用です。

1. モデル管理ツールの物理レイヤーで、物理表をダブルクリックします。
セマンティック・モデラーを使用する場合は、次を参照してください 物理表の全般プロパティとは
2. 「物理表」プロパティ・ダイアログの「一般」タブで、次のいずれかの選択をします:
 - キャッシュを有効にするには、「**キャッシュ可能**」を選択します。
 - 表がキャッシュされないようにするには、「**キャッシュ可能**」を選択解除します。
3. キャッシュの有効期限を設定するには、**キャッシュ永続時間**を指定し、単位(日数、時間、分または秒)を指定します。キャッシュ・エントリが自動的に期限切れにならないようにする場合、「**キャッシュ有効期限なし**」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

セマンティック・モデルの変更による問合せキャッシュへの影響

セマンティック・モデラーまたはモデル管理ツールを使用してセマンティック・モデルを変更すると、変更によってキャッシュに格納されているエントリが影響を受ける可能性があります。たとえば、物理オブジェクトまたは動的セマンティック・モデル

変数の定義を変更すると、そのオブジェクトまたは変数を参照するキャッシュ・エントリは無効でなくなる場合があります。これらの変更により、キャッシュをパーズする必要性が生じる可能性があります。注意すべき2つのシナリオがあります。それは、既存のセマンティック・モデルを変更する場合、および新しいセマンティック・モデルを作成(またはアップロード)する場合です。

セマンティック・モデルに対する変更

セマンティック・モデルを変更したり、別の.rpd ファイルをアップロードすると、キャッシュ・エントリに影響を与える変更の場合、変更されたオブジェクトを参照するすべてのキャッシュ・エントリが自動的にパーズされます。変更をアップロードすると、パーズが行われます。たとえば、セマンティック・モデルから物理表を削除すると、その表を参照するすべてのキャッシュ・エントリは、チェックイン時にパーズされます。論理レイヤーのセマンティック・モデルに行われた変更により、そのセマンティック・モデルのすべてのキャッシュ・エントリがパーズされます。

グローバル・セマンティック・モデル変数への変更

グローバル・セマンティック・モデル変数の値は、問合せから返されたデータによってリフレッシュされます。グローバル・セマンティック・モデル変数を定義する場合は、初期化ブロックを作成するか、SQL 問合せを含む既存の初期化ブロックを使用します。問合せを実行するスケジュールも構成し、定期的に変数の値をリフレッシュします。

グローバル・セマンティック・モデル変数の値が変更された場合、列でこの変数を使用するキャッシュ・エントリは古くなり、そのエントリのデータが再度必要になったときに新しいキャッシュ・エントリが生成されます。古いキャッシュ・エントリはすぐには削除されず、通常のキャッシュ・メカニズムによってクリーンアップされるまで残ります。

キャッシュを使用するためのストラテジ

問合せキャッシュの主な利点の1つは、問合せパフォーマンスの大幅な向上です。

問合せキャッシュは、問合せを実行してその結果をキャッシュすることで営業時間外にキャッシュをシードする場合に有用です。適切なシード・ストラテジでは、どのような場合にキャッシュ・ヒットが起こるかを理解している必要があります。

すべてのユーザーについてキャッシュをシードする場合、次の問合せでキャッシュをシードできます:

```
SELECT User, SRs
```

SELECT User, SRs を使用してキャッシュをシードした後、次の問合せはキャッシュ・ヒットです:

```
SELECT User, SRs WHERE user = valueof(nq_SESSION.USER) (and the user was USER1)
SELECT User, SRs WHERE user = valueof(nq_SESSION.USER) (and the user was USER2)
SELECT User, SRs WHERE user = valueof(nq_SESSION.USER) (and the user was USER3)
```

この項では、次のトピックについて説明します:

- [キャッシュ・ヒットについて](#)
- [一連の問合せの実行によるキャッシュへの移入](#)
- [エージェントを使用した問合せキャッシュのシード](#)
- [モデル管理ツールを使用した、特定の表のキャッシュの自動パーズ](#)

キャッシュ・ヒットについて

キャッシュが有効化されている場合、各問合せが評価されてキャッシュ・ヒットとみなされるかどうか判断されます。

キャッシュ・ヒットとは、**Oracle Analytics Cloud** がキャッシュを使用して問合せに返答できるため、データベースでの処理がまったく発生しないことを意味します。**Oracle Analytics Cloud** は、問合せキャッシュを使用して、同じレベル以上の集計レベルの問合せに返答します。

多くの要因でキャッシュがヒットするかどうか判断されます。次の表で、これらの要因について説明します。

要因またはルール	説明
SELECT リストの列のサブセットが一致する必要があります	<p>キャッシュ・ヒットとしてみなすには、新しい問合せの SELECT リストにあるすべての列が、キャッシュされた問合せに存在するか、または問合せの列から計算できる必要があります。</p> <p>このルールは、キャッシュがヒットするための最小要件を示しますが、このルールを満たすことが、キャッシュヒットを保証するものではありません。この表にリストされているその他のルールも適用されます。</p>
SELECT リストの列は、キャッシュされた問合せの列に対する式で構成できます	<p>Oracle Analytics Cloud では、キャッシュされた結果に対する式を計算して新しい問合せに返答できますが、キャッシュされた結果にすべての列が含まれている必要があります。たとえば、次の問合せでは:</p> <pre>SELECT product, month, averageprice FROM sales WHERE year = 2000</pre> <p>次の問合せでキャッシュがヒットします:</p> <pre>SELECT product, month, dollars, unitsales FROM sales WHERE year = 2000</pre> <p>averageprice は、dollars および unitsales から計算できるからです(averageprice = dollars/unitsales)。</p>

要因またはルール	説明
<p>WHERE 句は、セマンティックが同じであるか、論理サブセットである必要があります</p>	<p>問合せがキャッシュ・ヒットとみなされるには、WHERE 句の制約が、キャッシュされた結果と同等であるか、キャッシュされた結果のサブセットである必要があります。</p> <p>サブセットが次のいずれかの基準を満たす場合、キャッシュされた問合せの論理サブセットである WHERE 句はキャッシュ・ヒットとみなされます:</p> <ul style="list-style-type: none"> IN リストの値のサブセット。キャッシュされた問合せの IN リストの要素より少ない要素を要求する問合せは、キャッシュ・ヒットとみなされます。たとえば、次の問合せをします。
	<pre>SELECT employeename, region FROM employee, geography WHERE region in ('EAST', 'WEST')</pre>
	<p>次のキャッシュされた問合せに対するヒットとみなされます:</p>
	<pre>SELECT employeename, region FROM employee, geography WHERE region in ('NORTH', 'SOUTH', 'EAST', 'WEST')</pre>
	<ul style="list-style-type: none"> キャッシュされた結果より少ない(ただし、同一の)OR 制約が含まれます。 リテラル比較の論理サブセットが含まれます。たとえば、次の述部では:
	<pre>WHERE revenue < 1000</pre>
	<p>次の述部を使用する同様の問合せに対するキャッシュ・ヒットとみなされます:</p>
	<pre>WHERE revenue < 5000</pre>
	<ul style="list-style-type: none"> WHERE 句がありません。WHERE 句のない問合せがキャッシュされている場合、他のすべてのキャッシュ・ヒット・ルールを満たす問合せは、その WHERE 句に関係なく、キャッシュ・ヒットとみなされます。 <p>また、WHERE 句に使用される列は、射影リストに含まれている必要があります。たとえば、次の問合せをします。</p>
	<pre>SELECT employeename FROM employee, geography WHERE region in ('EAST', 'WEST')</pre>
	<p>REGION が射影リストにないため、前述のリストのシード問合せのキャッシュ・ヒットになりません。</p>
<p>ディメンションのみの問合せは完全一致である必要があります</p>	<p>ディメンションのみの問合せの場合、つまり、ファクトまたはメジャーが問合せに含まれていない場合、キャッシュされた問合せの射影列の完全一致のみがキャッシュにヒットします。この動作により、1つのディメンション表に対して複数の論理ソースが存在する場合の偽陽性が回避されます。</p>

要因またはルール	説明
特別な関数を含む問合せは完全一致である必要があります	時系列関数(AGO、TODATE および PERIODROLLING)、制限およびオフセット関数(OFFSET および FETCH)、関係関数(ISANCESTOR、ISLEAF、ISROOT および ISSIBLING)、外部集計関数などの特別な関数を含み、通常メトリックをフィルタする他の問合せも、キャッシュされた問合せの射影列の完全一致である必要があります。このような場合、フィルタも完全一致である必要があります。フィルタ・メトリックについては、フィルタ・メトリックを WHERE 句として書き換えることができる場合は、サブセット・キャッシュが利用される可能性があります。
論理表のセットが一致する必要があります	キャッシュ・ヒットとみなされるには、新しい問合せにはすべて、キャッシュ・エントリと同じセットの論理表が存在する必要があります。このルールによって、誤ったキャッシュ・ヒットが回避されます。たとえば、SELECT * FROM product は、SELECT * FROM product, sales に一致しません。
セキュリティ・セッション変数を含む、セッション変数値が一致する必要があります	論理 SQL または物理 SQL 文がセッション変数を参照する場合、セッション変数値が一致する必要があります。そうでない場合、キャッシュはヒットしません。 また、セキュリティ・センシティブなセッション変数の値は、論理 SQL 文自体がセッション変数を参照していなくても、セマンティック・モデルに定義されているセキュリティ・セッション変数値と一致する必要があります。 行レベルのデータベース・セキュリティを使用する場合の正しいキャッシュ結果の保証 を参照してください。
同等の結合条件	キャッシュ・ヒットとみなされるには、結果として得られる新しい問合せリクエストの結合論理表が、キャッシュされた結果と同じ(またはそのサブセット)である必要があります。
DISTINCT 属性が同じである必要があります	キャッシュされた問合せが DISTINCT 処理(たとえば、SELECT DISTINCT...)で重複レコードを除去している場合、キャッシュされた列に対するリクエストにも DISTINCT 処理が含まれている必要があります。同じ列に対する DISTINCT 処理を含まないリクエストは、キャッシュ・ミスになります。
問合せに、互換性のある集計レベルが含まれている必要があります	集計レベルの情報を要求する問合せでは、より低い集計レベルのキャッシュされた結果を使用できます。たとえば、次の問合せは、サプライヤ、地域、および都市レベルで販売された数量を要求します: SELECT supplier, region, city, qtysold FROM suppliercity 次の問合せは、都市レベルで販売された数量を要求します: SELECT city, qtysold FROM suppliercity 2 つ目の問合せは、1 つ目の問合せのキャッシュ・ヒットとなります。
限られた追加集計	たとえば、列 qtysold を含む問合せがキャッシュされている場合、RANK(qtysold) のリクエストはキャッシュ・ミスになります。また、国レベルの qtysold を要求する問合せは、国、地域レベルの qtysold を要求する問合せからキャッシュ・ヒットを得られます。

要因またはルール	説明
ORDER BY 句は、選択リストの列で構成されている必要があります	選択リストに含まれていない列で並べ替える問合せは、キャッシュ・ミスになります。
キャッシュ・ヒット動作の診断	<p>キャッシュ・ヒットの動作をより適切に評価するには、次の例に示すように <code>ENABLE_CACHE_DIAGNOSTICS</code> セッション変数を 4 に設定します:</p> <pre>ENABLE_CACHE_DIAGNOSTICS=4</pre>

行レベルのデータベース・セキュリティを使用する場合の正しいキャッシュ結果の保証

仮想プライベート・データベース(VPD)などの行レベルのデータベース・セキュリティ・ストラテジを使用する場合、返されるデータの結果は、ユーザーの認可資格情報に依存します。

このため、Oracle Analytics Cloud は、データ・ソースが行レベルのデータベース・セキュリティを使用しているかどうか、どの変数がセキュリティに関連しているかを認識する必要があります。

セキュリティセンシティブなすべての変数が含まれ、一致するキャッシュ・エントリでのみキャッシュ・ヒットとなるようにするには、モデル管理ツールで次のようにデータベース・オブジェクトおよびセッション変数オブジェクトを正しく構成する必要があります:

- データベース・オブジェクト。**物理レイヤーにおいて、「データベース」ダイアログの「一般」タブで「仮想プライベート・データベース」を選択し、データ・ソースが行レベルのデータベース・セキュリティを使用していることを指定します。

行レベルのデータベース・セキュリティと共有キャッシュを使用している場合、このオプションを選択して、セキュリティセンシティブな変数が一致しないキャッシュ・エントリが共有されないようにする必要があります。

- セッション変数オブジェクト。**セキュリティに関連する変数については、行レベルのデータベース・セキュリティ・ストラテジを使用する場合、「セッション変数」ダイアログで「セキュリティ・センシティブ」を選択し、セキュリティ・センシティブとして識別します。このオプションにより、キャッシュ・エントリがセキュリティセンシティブ変数を含むとマークされ、以降のすべての問合せでセキュリティセンシティブ変数マッチングが有効になります。

一連の問合せの実行によるキャッシュへの移入

キャッシュ・ヒットの可能性を最大化するための1つのストラテジは、一連の問合せを実行してキャッシュにデータを移入することです。

キャッシュをシードするための一連の問合せを作成する際に使用する問合せのタイプに関するいくつかの推奨事項を次に示します。

- 一般的なビルド済み問合せ。**よく実行される問合せ(特に処理にコストがかかる問合せ)は、優れたキャッシュ・シード問合せです。結果がダッシュボードに埋め込まれる問合せは、一般的な問合せの良い例です。
- 式のない SELECT リスト。**SELECT リストの列の式を削除すると、キャッシュ・ヒットの可能性が広がります。式を含むキャッシュされた列は、同じ式を含む新しい問合せにのみ返答できますが、式を含まないキャッシュされた列は、任意の式を含むその列に対するリ

クエストに応じることができます。たとえば、次のようなキャッシュされたリクエストでは:

```
SELECT QUANTITY, REVENUE...
```

次のような新しい問合せに返答できます:

```
SELECT QUANTITY/REVENUE...
```

しかし、その逆はありません。

- **WHERE 句なし。** キャッシュされた結果に WHERE 句がない場合は、射影リスト内の列を含む WHERE 句を使用する選択リストのキャッシュ・ヒット・ルールを満たす問合せに応じるために使用できます。

一般的に、キャッシュのシードに最も適した問合せは、データベース処理リソースを大量に消費し、再発行される可能性が高い問合せです。多数の行を返す単純な問合せでキャッシュをシードしないように注意してください。このような問合せ(たとえば、PRODUCTS が単一のデータベーステーブルに直接マップされる場合の SELECT * FROM PRODUCTS)に必要なデータベース処理は非常に少ないです。このコストはネットワークとディスクのオーバーヘッドで、これらはキャッシュによって軽減されない要因です。

Oracle Analytics Cloud がセマンティック・モデル変数をリフレッシュする場合、ビジネス・モデルを確認して、セマンティック・モデル変数を参照しているかどうかを判断します。している場合、Oracle Analytics Cloud は、それらのビジネス・モデルに対するすべてのキャッシュをパーズします。セマンティック・モデルの変更による問合せキャッシュへの影響を参照してください。

エージェントを使用した問合せキャッシュのシード

Oracle Analytics Cloud 問合せキャッシュをシードするようエージェントを構成できます。

キャッシュをシードすると、ユーザーが分析を実行したり、ダッシュボードに埋め込まれている分析を表示した場合のレスポンス時間が向上します。これは、このデータをリフレッシュするリクエストを実行するようエージェントをスケジュールすることで実現できます。

1. Oracle Analytics Cloud で、クラシック・ホーム・ページを開き、「**エージェント**」(「**作成**」セクション)を選択します。
2. 「一般」タブで、「**実行者**」オプションに「**受信者**」を選択します。パーソナライズされたキャッシュ・シードでは、各受信者のデータの可視性を使用して、各受信者のエージェント配信コンテンツをカスタマイズします。
3. 「スケジュール」タブで、キャッシュをシードするタイミングを指定します。
4. オプション: 「**条件**」を選択して、条件リクエストを作成または選択します。たとえば、ETL プロセスを実行するタイミングを決定するビジネス・モデルがあります。このビジネス・モデルに基づくレポートを、キャッシュ・シードを開始するための条件付きトリガーとして使用することができます。
5. 「配信コンテンツ」タブで、キャッシュをシードするための個々のリクエストまたはダッシュボード・ページ全体を選択します。ダッシュボード・ページを選択すると、時間を節約できます。
6. 「受信者」タブで、個々のユーザーまたはグループを受信者として選択します。

7. 「送信先」タブで、すべてのユーザー宛先をクリアし、「**Oracle Analytics Server キャッシュ**」を選択します。
8. 右上隅の「**保存**」ボタンを選択してエージェントを保存します。

キャッシュをシードしているエージェントと他のエージェントとの唯一の違いは、前のキャッシュが自動的に消去され、ダッシュボードにアラートとして表示されないことです。

ノート:

キャッシュをシードしているエージェントは、完全一致の問合せのみをパーズするため、失効データが引き続き存在する可能性があります。エージェント問合せはアドホック問合せまたはドリルに対処していないため、キャッシュ・ストラテジにキャッシュのパーズが常に含まれるようにします。

モデル管理ツールを使用した、特定の表のキャッシュの自動パーズ

キャッシュをパーズすると、問合せキャッシュからエントリが削除され、コンテンツが最新の状態に保たれます。モデル管理ツールで各表に「**キャッシュ永続時間**」フィールドを設定すると、特定の表のキャッシュ・エントリを自動的にパーズできます。

ノート:

セマンティック・モデラーを使用する場合は、「物理表の全般プロパティとは」を参照してください

これは、頻繁に更新されるデータ・ソースに有用です。たとえば、毎分更新される株式相場データを格納する表の場合、「**キャッシュ永続時間**」設定を使用して **59** 秒ごとにその表のエントリをパーズできます。[指定した物理表のキャッシュとキャッシュ永続時間を参照してください。](#)

拡張オプションの構成

管理者は、「システム設定」ページを使用して複数の拡張オプションを設定できます。

トピック:

- [システム設定について](#)
- [コンソールを使用したシステム設定の構成](#)
- [プレビュー機能を使用可能にする方法](#)
- [REST API を使用したシステム設定の管理](#)

システム設定について

管理者は、「システム設定」ページから様々なサービス・レベルの拡張オプションを設定できます。たとえば、分析およびダッシュボードのデフォルトの通貨とタイム・ゾーンを、組織に適した値に変更できます。

- [分析コンテンツ・オプション](#)
- [接続オプション](#)
- [エージェントによって配信される電子メールのオプション](#)
- [書式オプション](#)
- [その他のオプション](#)
- [パフォーマンスおよび互換性のオプション](#)
- [プレビュー・オプション](#)
- [プロンプト・オプション](#)
- [セキュリティ・オプション](#)
- [使用状況トラッキング・オプション](#)
- [ビュー・オプション](#)

分析コンテンツ・オプション

次のオプションを使用して、ダッシュボード、分析およびレポートのデフォルトとカスタマイズを設定します。たとえば、分析エディタをデフォルトで「基準」タブまたは「結果」タブで開くように構成できます。

ノート:

分析コンテンツ設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
Analytics Publisher レポート・ツールバー・モード	<p>ダッシュボードに含まれるピクセルパーフェクト・レポートの代替ツールバーを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 — ピクセルパーフェクト・レポートのツールバーは表示されません。 2 — ロゴ、ツールバー、タブまたはナビゲーション・パスを表示せずに、レポートの URL を表示します。 3 — ヘッダーまたはパラメータの選択肢を表示せずに、レポートの URL を表示します。「テンプレート選択」、「表示」、「エクスポート」および「送信」などのコントロールは引き続き使用可能です。 4 — レポートの URL のみを表示します。その他のページ情報またはオプションは表示されません。 6 — レポートのパラメータ・プロンプトをツールバーに表示します。 <p>有効な値: 1、2、3、4、6 デフォルト: 1 API キー: AnalyticsPublisherReportingToolbarMode エディション: Enterprise のみ</p>
回答エディタ開始タブ	<p>分析エディタをデフォルトで「基準」タブと「結果」タブのどちらで開くかを指定します。</p> <p>この設定は、ユーザーがダッシュボード、ホーム・ページまたはカタログ・ページから分析の「編集」リンクをクリックすると適用されます。ユーザーは、「アカウント」ダイアログで「フル・エディタ」オプションを指定することにより、このデフォルト設定をオーバーライドできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> answerResults — 分析エディタをデフォルトで「結果」タブで開きます。 answerCriteria — 分析エディタをデフォルトで「基準」タブで開きます。 <p>有効な値: answerResults、answerCriteria デフォルト: answerResults API キー: AnswersEditorStartTab エディション: Enterprise のみ</p>
回答サブジェクト領域のソート順	<p>サブジェクト領域コンテンツ・ツリーのデフォルトのソート順を設定します。ユーザーは、「アカウント: サブジェクト領域のソート順」ダイアログでこのデフォルト設定をオーバーライドできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> asc — A から Z へソートします。 desc — Z から A へソートします。 rpd — 元の分析に指定されているサブジェクト領域のソート順を使用します。 <p>有効な値: asc、desc、rpd デフォルト: rpd API キー: AnalysisSubjectAreaSortingOrder エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
カスタム・リンク XML	<p>クラシック・ホーム・ページのヘッダーのカスタマイズを含む XML コードを指定します。</p> <p>この XML コードを使用して、ユーザーのニーズにより適合するようにホーム・ページのグローバル・ヘッダー・セクションをカスタマイズできます。たとえば、特定のリンクを無効にしたり、カスタム・リンクを追加できます。クラシック・ホーム・ページのリンクのカスタマイズを参照してください。</p> <p>API キー: CustomLinksXml エディション: Enterprise のみ</p>
分析で問合せをブロックするための URL	<p>JavaScript ファイルで問合せ条件を検証して問合せをブロックするための URL を指定します。カスタム JavaScript を使用した分析における問合せの検証とブロックを参照してください。</p> <p>API キー: QueryBlockingScriptURL エディション: Enterprise のみ</p>
ライトバック・テンプレート XML	<p>データ要素のライトバックを実行するための XML 構成を定義します。たとえば、XML テンプレートを使用することにより、ダッシュボード・ページまたは分析のユーザーが、表に表示されているデータを変更またはライトバックできるようにすることができます。</p> <p>API キー: WriteBackTemplateXML エディション: Enterprise のみ</p>

接続オプション

次のオプションを使用して、接続関連のデフォルトを構成します。

ノート:

接続設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
接続外部化有効	<p>管理者が Oracle Analytics Cloud でコンソールを使用してセマンティック・モデルに構成したデータベース接続を外部化するかどうかを指定します。</p> <p>接続情報を外部化すると、モデル管理ツールを使用してセマンティック・モデルを編集するすべてのユーザーは、接続詳細(接続プール設定)をすべて再入力するのではなく、データベース接続を名前によって参照できます。コンソールによって定義された接続を使用したデータ・ソースへの接続を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 管理者がコンソールを使用してセマンティック・モデルに定義したデータベース接続を外部化します。 • Off — データベース接続詳細を外部化しません。モデル管理ツールを使用してセマンティック・モデルを編集するすべてのユーザーは、「接続プール」ダイアログにデータベース接続情報を入力する必要があります。 <p>デフォルト: オン API キー: EnableConnectionExternalization エディション: Enterprise のみ</p>

エージェントによって配信される電子メールのオプション

次のオプションを使用して、エージェントによる電子メールの配信方法をカスタマイズできます。

システム設定	詳細情報
最大電子メール・サイズ(KB)	<p>1つの電子メールの最大サイズ(KB)を指定します。</p> <p>最大電子メール・サイズを設定すると、SMTPサーバーによって大きすぎる電子メールが拒否されることがなくなり、電子メールが設定された制限を超えた場合、エージェントが失敗し、電子メール作成者に警告されるだけでなく、電子メール受信者にエラー・メッセージが送信されます。</p> <p>有効な値: 0-20480 デフォルト: 0 (無制限の電子メール・サイズ) API キー: EmailMaxEmailSizeKB エディション: Enterprise のみ</p>
電子メール当たりの最大受信者数	<p>1つの電子メールの To: または Bcc: 行に許可される最大受信者数を指定します。</p> <p>電子メール受信者の最大数を設定すると、一部の SMTP サーバーによって、これらの電子メールがスパムとして除外されなくなります。受信者リストが設定された制限を超えると、各リストの人数が許可された最大数になるように、小さなリストに分割されます。</p> <p>有効な値: 0-1024 デフォルト: 0 (無制限の電子メール受信者数) API キー: EmailMaxRecipients エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
安全ドメイン	<p>Oracle Analytics が電子メールを送信できる電子メール・ドメインを制限する場合は、ドメインの名前を入力します。たとえば、examplemaildomain.com です。</p> <p>複数のドメイン名を区切るにはカンマを使用します。たとえば、exampledomain1.com, exampledomain2.com です。デフォルトでは、制限はありません。</p> <p>API キー: EmailSafeDomains エディション: Enterprise のみ</p>
BCC の使用	<p>電子メール受信者の名前を To: または Bcc: 行に含めるかどうかを指定します。デフォルトでは、電子メール受信者は Bcc: 行に追加されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> On - 電子メール受信者を Bcc: 行に追加します。電子メール受信者の名前は表示されません。 Off - 電子メール受信者を To: 行に追加します。電子メールのすべての受信者に受信者リストが表示されます。 <p>デフォルト: オン API キー: EmailUseBcc エディション: Enterprise のみ</p>
RFC 2231 エンコーディングの使用	<p>MIME 電子メール・パラメータのエンコード方法を指定します。デフォルトでは、RFC 2047 が使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> On - RFC 2231 を使用して、MIME 電子メール・パラメータ値をエンコードします。RFC 2231 は、マルチバイト言語をサポートしています。マルチバイト・キャラクタを含む電子メールを配信し、Microsoft Outlook for Office 365、Google Gmail などの RFC 2231 をサポートする電子メール・サーバーを使用する場合、オンを選択します。 Off - RFC 2047 を使用して、MIME 電子メール・パラメータ値をエンコードします。 <p>デフォルト: オフ API キー: EmailUseRFC2231 エディション: Enterprise のみ</p>

書式オプション

これらのオプションを使用して、分析とダッシュボードのデフォルトの通貨およびタイム・ゾーンの設定を構成します。

これらのオプションは分析およびダッシュボードにのみ適用されます。データ・ビジュアライゼーションには適用されません。

ノート:

書式設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
通貨 XML	<p>分析およびダッシュボードの通貨データに表示されるデフォルト通貨を定義します。たとえば、米ドル(\$)をユーロ(E)に変更できます。</p> <p>API キー: AnalysisCurrenciesXml</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
デフォルトのデータ・オフセットのタイム・ゾーン	<p>分析およびダッシュボードでユーザーに表示される、元のデータのタイム・ゾーン・オフセットを指定します。グリニッジ標準時(GMT)との時間差を示すオフセット値を入力します。</p> <p>たとえば、グリニッジ標準時(GMT)から-5時間の米国東部標準時間(EST)の値を表示するには、値 GMT-05:00 または同等の値(分単位)-300と入力します。</p> <p>このオプションを設定しないと、値は「不明」であるため、タイム・ゾーン変換は発生しません。</p> <p>ユーザーごとに異なるオフセット値を指定</p> <p>セッション変数(式や計算など)を使用できるオフセット値を別々に指定する場合は、「デフォルトのデータ・オフセットのタイム・ゾーン」設定を使用しないでください。かわりに、セマンティック・モデルにシステム・セッション変数 DATA_TZ を設定します。セッション変数についてを参照してください。</p> <p>API キー: DefaultDataOffsetTimeZone</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
日付計算のデフォルト・タイム・ゾーン	<p>現在の日時の取得、日時値の日付への切捨ておよび日時式からの時間フィールドの抽出などの日付計算の評価に使用されるタイム・ゾーンを指定します。</p> <p>このフィールドを空白のままにすると、Oracle Analytics では、日付計算の評価時に協定世界時(UTC)のタイムゾーンが使用されます。</p> <p>API キー: DefaultTimeZoneforDateCalculations</p> <p>エディション: Professional および Enterprise</p>
デフォルトのユーザー優先タイムゾーン	<p>ユーザーが「マイ・アカウント」の「プリファレンス」ダイアログで独自のタイム・ゾーンを選択する前に、分析およびダッシュボードでユーザーに表示されるデフォルトの優先タイム・ゾーンを指定します。</p> <p>このオプションを設定しないと、Oracle Analytics でローカル・タイム・ゾーンが使用されます。</p> <p>ユーザーごとに異なるタイム・ゾーンを指定</p> <p>セッション変数(式や計算など)を使用できるオフセット値を別々に指定する場合は、「デフォルトのユーザー優先タイムゾーン」設定を使用しないでください。かわりに、セマンティック・モデルにシステム・セッション変数 TIMEZONE を設定します。セッション変数についてを参照してください。</p> <p>API キー: DefaultUserPreferredTimeZone</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ユーザー通貨プリファレンス XML	<p>「マイ・アカウント」の「プリファレンス」ダイアログの「通貨」オプション、およびユーザーが使用可能な通貨のリストをユーザーに表示するかどうかを決定します。「通貨」オプションを表示すると、ユーザーは任意の通貨を選択して、分析およびダッシュボードに通貨データの列を表示できます。</p> <p>API キー: UserCurrencyPreferencesXml</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>

その他のオプション

コンソールのこれらのシステム設定オプションによって、データベース問合せ、デフォルトの URL、表示のデフォルト、ソートなどの様々なアクションの動作を設定できます。

ノート:

これらの設定のいずれかを変更した場合、特に明記されていないかぎり、新しい値を有効にするには変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
VARCHAR データの右スペース削除の無効化	<p><code>varchar</code> 列からの末尾のスペースの自動削除が有効(オフ)か無効(オン)かを指定します。たとえば、このプロパティが有効(オフ)になっている場合、ユーザーがフィールドへの値の入力を開始すると、フィルタ・ダイアログによって末尾のスペースが自動的に削除されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> オン — <code>varchar</code> 列の末尾の空白を保持します。主に Oracle Database ソースを使用する場合、末尾の空白を削除せずに保持するという Oracle Database のデフォルトの動作を維持することが必要な場合があります。このプロパティをオンに切り替えると、スペース削除のオーバーヘッドが回避され、パフォーマンスが向上する可能性があります。このプロパティを無効に(On に設定)し、<code>PRODUCT_DESCRIPTION = 'My Product')</code>などのフィルタを作成する場合は、使用される末尾の空白の数が <code>varchar</code> 列値と厳密に一致することを確認する必要があります。そうでない場合は、フィルタがデータ値と正しく一致しません。 オフ — 問合せの処理時に <code>varchar</code> 列の末尾の空白を削除します。これは Oracle Analytics でのデフォルトです。たとえば、テキスト 'My Product' を入力した場合は、'My Product' となります。 <p>デフォルト: オフ API キー: DataQueryDisableRightTrimVARCHARData エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定	詳細情報
サブリクエスト送信の有効化	<p>ソース・データベースへのサブリクエストを、スタンドアロンの問合せと別に実行するか、一緒に実行するかを指定します。サブリクエストが多数ある複雑なレポートを実行する場合、パフォーマンスが向上するので、デフォルトでは、サブリクエストは分けて送信されます(つまり、複雑で大きな問合せ 1 つをすべて一度に送信するより、サブリクエストを複数の簡単な問合せに分けて送信する方が好まれます)。</p> <p>Oracle BI Enterprise Edition では、デフォルトは NO に設定されています。Oracle BI Enterprise Edition を使用していて、以前のデフォルトの動作を保持する場合は、このプロパティを NO に設定し、データベースのサブリクエストを一緒に実行し続けます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • デフォルト — データベースのサブリクエストは分けて送信されます。これは、「はい」の値と同じです。 • はい — データベースのサブリクエストは分けて送信されません。 • いいえ — データベースのサブリクエストは、一度にまとめて送信されます。 <p>デフォルト: デフォルト API キー: EnableSubrequestShipping エディション: Professional および Enterprise</p>
アクションでの安全ドメインの強制	<p>ユーザーが分析およびダッシュボードに追加したアクション・リンクが、すべての URL または管理者が安全ドメイン・リストで指定した URL のみを起動できるかを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 安全ドメイン・リストにない URL を起動するアクションは許可されません。 • Off — URL が安全ドメインとしてリストされていなくても、URL を起動するアクションを許可します。 <p>デフォルト: 新しいサービスでは On であり、既存サービスでは Off です。 変更の適用が必要: いいえ API キー: EnforceSafeDomainsActions エディション: Enterprise のみ</p>
アクセス権のない EPM Cloud メンバーの非表示	<p>ユーザーが、一部の EPM ディメンション・メンバーへのデータ・アクセス権がない場合でも、階層プロンプト値リストで、またはキャンバスに階層を追加するときに、すべての EPM ディメンション・メンバーを表示できるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — ユーザーにデータ・アクセス権がある EPM ディメンションのメンバーのみを表示します。 この設定が On の場合、ディメンション階層のルート・メンバーへのアクセス権がないユーザーには、階層または階層プロンプトに EPM メンバーが一切表示されません。 • Off — ユーザーは、一部のメンバーのデータを表示するアクセス権がない場合でも、EPM ディメンションのすべてのメンバーを表示できます。 <p>デフォルト: オフ API キー: HideEPMCloudMembersWithNoAccess エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定	詳細情報
ロード・メッセージの非表示	<p>データ・ロードの処理中に詳細メッセージを表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 詳細メッセージは表示されず、簡略化されたメッセージロード中がかわりに表示されます。 • Off — 詳細なロード・メッセージが表示されます。 <p>デフォルト: オフ API キー: HideLoadingMessages エディション: Professional および Enterprise</p>
ロケール	<p>Oracle BI Enterprise Edition から移行されたコンテンツに適用されます。</p> <p>Oracle BI Enterprise Edition 環境から Oracle Analytics にコンテンツを移行すると、分析内のメッセージ、日付または通貨に異なる言語が表示される場合があります。</p> <p>たとえば、移行された分析をポーランド語で見ると、通貨や日付が、元の Oracle BI Enterprise Edition のロケールではなく、Oracle Analytics のデフォルトのロケールに基づいて表示される場合があります。Oracle BI Enterprise Edition の通貨と日付を Oracle Analytics で保持するには、この設定を「ポーランド語 Polish」に変更します。</p> <p>API キー: DataQueryLocale エディション: Professional および Enterprise</p>
ポータル・パス	<p>ユーザーが Oracle Analytics にサインインする場合にデフォルトで表示されるダッシュボード・ページのパスを指定します。たとえば、/shared/<folder>/_portal/<name>などです。</p> <p>すべてのユーザーに対して単一のパスを指定したり、ユーザー・ロール別に複数のパスを指定したりできます({"application role 1":"catalog dashboard path 1","application role 2":"catalog dashboard path 2","default":"catalog dashboard path 3"}など)。</p> <p>この設定はすべてのユーザーに適用されますが、ユーザーはサインインした後にオーバーライドできます。</p> <p>このフィールドには最大 5,000 文字まで入力できます。</p> <p>API キー: PortalPath エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
再帰的日時型チェック	<p>すべてのデータ・ソースまたはすべてのデータセットで、同じデータ型(整数と整数など)または互換性がないデータ型(整数と短整数)間の比較に対して厳密な再帰データ型チェックを強制するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — すべてのデータ・ソースまたはすべてのデータセットで、同じまたは互換性がないデータ型に対して厳密な再帰データ型チェックを強制します。 • Off — すべてのデータ・ソースまたはすべてのデータセットで、日時データ型に対して厳密な再帰データ型チェックを緩和します。ただし、データ型の不一致が多すぎる場合、列と値を比較する際に、互換性があるようにデータ型を変更するか、正しいデータ型の定数を使用します。たとえば、Oracle BI Enterprise Edition のコンテンツを Oracle Analytics に移行した後、Oracle BI Enterprise Edition の以前のバージョンによって厳密なチェックが強制されなかったため、このタイプのチェック・エラーがレポートに表示される場合があります: [nQSError: 22024] 互換性のないタイプ<type1>と<type2>を比較しようとしています。 <p>デフォルト: オン API キー: RecursiveDatetimeTypeChecking エディション: Professional および Enterprise</p>
表およびピボットの Excel エクスポートでの行の繰返し	<p>表およびピボット表を Excel にエクスポートするときに、複数の行にまたがるセルと複数の列にまたがるセルが繰り返されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — オンに切り替えた場合、分析エディタの「値の抑制」設定に関係なく、複数の行にまたがるセルと複数の列にまたがるセルが繰り返されます。 • Off — オフに切り替えた場合、分析エディタの「値の抑制」設定が反映されて、表およびピボット表を Excel にエクスポートするときに、複数の行にまたがるセルと複数の列にまたがるセルが繰り返されません。 <p>デフォルト: オフ API キー: AnalysisRepeatRowsExcelExportsTablesPivots エディション: Enterprise のみ</p>
Null 値を最初にソート	<p>NULL 値を他の値の前にソートする(On)か、後にソートする(Off)かを指定します。データベースに一致する値を選択します。この設定がデータベース設定に一致しない場合、データベース設定が優先されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — NULL 値を他の値の前にソートします。 • Off — NULL 値を他の値の後にソートします。 <p>デフォルト: オフ API キー: SortNullValuesFirst エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定	詳細情報
ソート順序のロケール	<p>Oracle BI Enterprise Edition から移行されたコンテンツに適用されます。</p> <p>Oracle BI Enterprise Edition 環境から Oracle Analytics にコンテンツを移行すると、分析で異なるソート動作が発生する場合があります。</p> <p>たとえば、移行された分析をポーランド語で見ると、大文字と小文字が、元の Oracle BI Enterprise Edition のロケールではなく、Oracle Analytics のデフォルトのロケールに基づいてソートされる場合があります。Oracle BI Enterprise Edition のソート動作を Oracle Analytics で保持するには、この設定を「ポーランド語」に変更します。</p> <p>API キー: DataQuerySortOrderLocale エディション: Professional および Enterprise</p>

パフォーマンスおよび互換性のオプション

これらのオプションを使用して、Oracle BI Enterprise Edition と Oracle Analytics 間のパフォーマンスおよび互換性の設定を構成します。たとえば、一時ファイルの最大サイズを設定できます。

 [LiveLabs スプリント](#)

ノート:

パフォーマンスおよび準拠設定を変更した場合、特に明記されていないかぎり、新しい値を有効にするには変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
データセットに対するブラッシングの有効化	<p>データセットのデータを使用するワークブックに対してデフォルトでブラッシングを有効にするかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — データセットのデータを使用するワークブックに対してブラッシングはデフォルトではオンです。 • Off — データセットのデータを使用するワークブックに対してブラッシングはデフォルトではオフです。 <p>ユーザーは、ワークブックおよびキャンパスのプロパティでこの設定をオーバーライドできます。</p> <p>デフォルト: オン API キー: EnableBrushingDatasets エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定	詳細情報
サブジェクト領域に対するブラッシングの有効化	<p>サブジェクト領域のデータを使用するワークブックに対してデフォルトでブラッシングを有効にするかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — サブジェクト領域のデータを使用するワークブックに対してブラッシングはデフォルトではオンです。 • Off — サブジェクト領域のデータを使用するワークブックに対してブラッシングはデフォルトではオフです。 <p>ユーザーは、ワークブックおよびキャンパスのプロパティでこの設定をオーバーライドできます。</p> <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: EnableBrushingSubjectAreas</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ダッシュボード・リストのキャッシュ・ドロップダウン・メニュー	<p>Oracle Analytics Classic ホーム・ページのダッシュボード・メニュー・リストが、ユーザー・セッション中に移入される頻度を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — ダッシュボード・メニュー・リストが移入されるのは、ユーザー・セッションごとに1回のみです。この場合、パフォーマンスは向上しますが、ユーザーがログアウトしてから再度ログインして、リストがリフレッシュされるまで、リストの状態が古いままになる可能性があります。 • Off — ダッシュボード・メニュー・リストは、開かれるたびに移入されます。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: CacheDashboardListingDropdownMenu</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
キャッシュ有効化	<p>データ問合せキャッシュが有効か無効かを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — データ・キャッシュは有効です。 • Off — キャッシュは無効です。 <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: EnableDataQueryCache</p> <p>エディション: Professional および Enterprise</p>
データセットでの自動インサイトの有効化	<p>データセットが作成または変更されたとき自動インサイト機能が使用可能かどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「インサイトの有効化」オプションは、データセットの検査ダイアログで使用可能であり、インサイトは自動的に生成され、「インサイトの有効化」オプションが選択されているデータセットを使用するワークブックで使用可能です。 • Off — 自動インサイトおよびその関連機能は無効化されません。 <p>デフォルト: オン</p> <p>変更の適用が必要: いいえ。ただし、この設定を変更すると、有効になるまで数分かかる場合があります。</p> <p>API キー: EnableAutoInsightsDatasets</p> <p>エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定	詳細情報
データ・フローでのデータベース・アナリティクス・ノードの有効化	<p>データベース・アナリティクス・ノードをデータ・フローに表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — データベース・アナリティクス・ノードをデータ・フローで使用できるため、データ・フローの設計者はデータベース・アナリティクス機能をデータに適用できます。 • Off — データベース・アナリティクス・ノードをデータ・フローで使用できません。これにより、データ・フロー設計者が潜在的に多数の SQL 文を生成し、データベースのパフォーマンスを低下させるのを防ぎます。 <p>デフォルト: オン API キー: EnableDatabaseAnalyticsNodeDataFlows エディション: Professional および Enterprise</p>
ダッシュボードの即時レンダリングを有効化	<p>使用可能なダッシュボード・コンテンツをすぐに表示するか、すべてのダッシュボード・コンテンツの準備が整うまで待機するかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 準備が整っていないコンテンツがある場合でも、ダッシュボード・コンテンツをすぐに表示します。 • Off — すべてのダッシュボード・コンテンツの準備が整うまで待機してから、コンテンツを表示します。 <p>デフォルト: オフ API キー: EnableImmediateDashboardRendering エディション: Enterprise のみ</p>
サポート・レベルの評価	<p>次のデータベース関数を発行できるユーザーを指定します: EVALUATE、EVALUATE_ANALYTIC、EVALUATE_AGGR および EVALUATE_PREDICATE。</p> <p>デフォルト(0)では、EVALUATE データベース関数は無効です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1 — サービス管理者のみ。BI サービス管理者アプリケーション・ロールを持つユーザーは、EVALUATE データベース関数を起動できます。 • 2 — すべてのユーザー。Oracle Analytics にサインインするすべてのユーザーが EVALUATE データベース関数を起動できます。 • 0 (または他の値) — 対象者なし。Oracle Analytics では、すべての EVALUATE データベース関数が無効です。 <p>有効な値: 0、1、2 デフォルト: 0 API キー: EvaluateSupportLevel エディション: Professional および Enterprise</p>
複数スレッドを使用したセマンティック・モデルのロード	<p>セマンティック・モデルが複数スレッドを使用してロードされるかどうかを指定します。大規模なデータセットのロードに時間がかかり、システムの処理時間に影響を与える場合には、このオプションを有効にしてパフォーマンスを改善できる場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • オン — セマンティック・モデルが並行でロードされます。 • オフ — セマンティック・モデルは並行でロードされません。 <p>デフォルト: オフ API キー: LoadSemanticModelsWithMultipleThreads エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
作業ファイルの最大パーセント・サイズ	<p>指定したグローバル作業ディレクトリ・サイズ制限のパーセンテージを一時ファイルが超えないよう指定します。</p> <p>一時ファイルのデフォルトのサイズ制限は、(100GB の) 5%で、5GB に相当します。ファイルの制限は、各一時ファイルに個別に適用されますが、合計のグローバル作業ディレクトリに指定されたサイズは、作成したすべての一時ファイルにまとめて適用されます。</p> <p>この値は 5%から 50%までの範囲内で増減できます。これにより、一時ファイルのサイズが 5GB から 50GB まで使用可能になります。この設定を 50%より大きい値に上げると、大規模な操作の同時性が制限されます。</p> <p>有効な値: 5-50 デフォルト: 5 API キー: MaximumWorkingFilePercentSize エディション: Enterprise のみ</p>
モバイル・ウォッチ・サービス有効	<p>データ・ウォッチ・サービスがアクティブかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • オン — データ・ウォッチ・サービスがアクティブで、すべてのモバイル・ユーザーがリマインダのしきい値を指定できます。 • オフ — データ・ウォッチ・サービスは非アクティブです。 <p>デフォルト: オン API キー: EnableMobileDataWatchService エディション: Professional および Enterprise</p>
モバイル・ウォッチ・サービス頻度	<p>データ・ソースの変更頻度に基づいて、データ・ウォッチ・サービスが、サーバーの変更の有無をスキャンする必要がある頻度を指定します。</p> <p>デフォルトは 240 (4 時間)です。このサービスは、この設定頻度を 0 に変更するか、「モバイル・ウォッチ・サービス有効」設定をオフに切り替えると無効化できます。</p> <p>有効な値: 0-10139 デフォルト: 240 API キー: MobileDataWatchServiceFrequency エディション: Professional および Enterprise</p>
OBIEE 互換性リリース	<p>機能の互換性に関するオンプレミスの Oracle BI Enterprise Edition のバージョン番号を指定します。これが適用されるのは、Oracle BI Enterprise Edition から Oracle Analytics にアップグレードし、Oracle Analytics で特定のオンプレミス・リリースの機能を使用する必要がある場合のみです。</p> <p>有効な値: 11.1.1.9、11.1.1.10、11.1.1.11、12.2.1.0、12.2.1.1、12.2.1.3、12.2.1.4、12.2.2.0、12.2.3.0、12.2.4.0、12.2.5.0 API キー: OBIEECompatibilityRelease エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定	詳細情報
データベース機能のオーバーライド	<p>ユーザーがリクエスト変数を使用してデータベース機能をオーバーライドできるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1 — 管理者のみがデータベース機能をオーバーライドできません。 • 2 — すべてのユーザーがデータベース機能をオーバーライドできます。 • 0 — ユーザーはデータベース機能をオーバーライドできません。 <p>有効な値: 0、1、2 デフォルト: 0 API キー: OverrideDatabaseFeatures エディション: Enterprise のみ</p>
データ・エクスポートおよび配信の制限	<p>書式設定されたコンテンツおよび書式設定されていないコンテンツ内の、ユーザーがエクスポートまたは電子メールで配信できる最大行数を制限します。データ・エクスポートおよび配信制限は、Oracle Analytics サービスのサイズによって決まります。コンピュータ・サイズによるデータ・エクスポートおよび配信の制限を参照してください。</p> <p>有効な値: No Throttle、90% of Maximum、80% of Maximum、70% of Maximum、60% of Maximum、50% of Maximum、40% of Maximum、30% of Maximum、20% of Maximum、10% of Maximum、Minimum - 1000 rows デフォルト: No Throttle API キー: RestrictDataExportAndDelivery エディション: Professional および Enterprise</p>
厳密な日時型チェック	<p>日付と時刻のデータ型について厳密なチェックを強制するかどうか、および日付と時刻のデータ型に互換性がない問合せを拒否するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 日付と時刻のデータ型について厳密なチェックを強制します。 • Off — 日付と時刻のデータ型について厳密なチェックを緩和します。ただし、無効な問合せや日付と時刻の厳密な互換性がない問合せは、引き続き拒否される可能性があります。たとえば、リレーショナル・データベースがこれらのデータ型に対して厳密なチェックを使用している場合、日付と時刻の非互換性は拒否される可能性があります。 <p>デフォルト: オン API キー: StrongDatetimeTypeChecking エディション: Professional および Enterprise</p>

プレビュー・オプション

管理者はいくつかのプレビュー機能のオンとオフを切り替えることができます。この方法で、組織は、新しい機能がデフォルトでロールアウトされる前に、新しい機能の使用方法を評価および学習できます。

システム設定	詳細情報
ワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)	<p>このオプションを有効にすると、管理者はスケジュールを設定して、ワークブックを PDF または PNG 形式で 1 人以上の電子メール受信者と定期的に共有できます。ワークブック電子メール・スケジュールを使用したビジュアライゼーションの共有(プレビュー)を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> オン — ワークブックに対する読取り/書込みアクセス権および共有の編集権限を持つ BI サービス管理者アプリケーション・ロールのユーザーには、ワークブックの「アクション・メニュー」に「スケジュール」オプションが表示されます。 オフ — ワークブックの「アクション・メニュー」の「スケジュール」オプションは無効になり、表示されません。 <p>デフォルト: オフ 変更の適用が必要: いいえ API キー: PreviewWorkbookEmailScheduler エディション: Enterprise のみ</p>
バースティングによるワークブック電子メール・スケジュールリング(プレビュー)	<p>このオプションを有効にすると、管理者は、Shared Folders に保存されたワークブックをメール送信するときにバースティングのオプションを設定できます。このオプションを使用するには、「ワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)」が有効になっている必要があります。ワークブック電子メール・スケジュールを使用したビジュアライゼーションの共有(プレビュー)およびバースティング・ワークブック電子メール・スケジュールの作成(プレビュー)を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> オン — ワークブックに対する読取り/書込みアクセス権および共有の編集権限を持つ BI サービス管理者アプリケーション・ロールのユーザーは、ワークブックが Shared Folders に保存されていれば、そのワークブック・スケジュールの「メール送信」タブで「バースティング」オプションを有効にできます。 オフ — ワークブック・スケジュールの「メール送信」タブの「バースティング」オプションは無効になります。 <p>デフォルト: オフ 変更の適用が必要: いいえ API キー: PreviewWorkbookEmailBursting エディション: Enterprise のみ</p>

プロンプト・オプション

次のオプションを使用して、分析およびダッシュボードでのプロンプトの動作を構成します。たとえば、ユーザーが検索パラメータを入力したときに「検索」をクリックしなくても検索結果が自動的に強調表示されるようにできます。

これらのオプションは分析およびダッシュボードにのみ適用されます。データ・ビジュアライゼーションには適用されません。

 ノート:

プロンプト設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
ダッシュボードのプロンプト値の自動適用	<p>いずれのボタンもクリックせずにプロンプト値を適用できるように「適用」ボタンを非表示にするオプションを有効にします。</p> <p>このプロパティが On の場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ページ設定の編集」ダイアログに「適用 ボタンの表示」および「リセット ボタンの表示」フィールドを表示します。 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログに「適用 ボタンのプロンプト」および「リセット ボタンのプロンプト」フィールドを表示します。 ダッシュボード・ビルダーの「ツール」メニューに現在のページのプロンプト・ボタン・オプションを表示します。 <p>デフォルト: オン API キー: AutoApplyDashboardPromptValues エディション: Enterprise のみ</p>
プロンプト値検索ダイアログでの自動検索	<p>ユーザーが検索パラメータを入力したときに「検索」をクリックしなくても検索結果が自動的に表示および強調表示されるようになります。</p> <p>デフォルト: オン API キー: EnableAnalysisAutoSearchPromptDialog エディション: Enterprise のみ</p>
大/小文字の区別なしのオートコンプリート	<p>ユーザーが分析およびダッシュボードにプロンプト値を入力したとき、オートコンプリート機能で大小文字を区別しないかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> On —ユーザーがプロンプト値を入力するとき、「Oracle」と「oracle」のように大小文字は考慮されません。 Off —ユーザーがプロンプト値を入力ときに大/小文字が考慮されるため、Oracle レコードを検索するには、ユーザーは「oracle」ではなく「Oracle」と入力する必要があります。 <p>デフォルト: オン API キー: AutoCompletePromptDropDownsCaseInsensitive エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
列が Null 値可能な場合に Null 値を表示	<p>データベースで Null 値が許可されている場合、ドロップダウン・リストの列セパレータの上にある列プロンプトに、実行時に「NULL」という語を表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • always — ドロップダウン・リストの列セパレータの上に「NULL」という語を常に表示します。 • never — ドロップダウン・リストに「NULL」という語を表示しません。 • asDataValue — ドロップダウン・リストのセパレータの上に「NULL」という語を表示するのではなく、ドロップダウン・リストにデータ値を表示します。 <p>有効な値: always、never、asDataValue デフォルト: always API キー: <code>AnalysisPromptsShowNullValueWhenColumnIsNullable</code> エディション: Enterprise のみ</p>
オートコンプリートのサポート	<p>プロンプトで使用できるオートコンプリート機能を有効化または無効化します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — オートコンプリートを有効にします。「マイ・アカウント」ダイアログおよび「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログに「プロンプトのオートコンプリート」フィールドが表示され、「オン」に設定されます。 • Off — オートコンプリートを無効にします。「マイ・アカウント」ダイアログおよび「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログのオートコンプリート・フィールドは使用不可になります。 <p>デフォルト: オフ API キー: <code>EnableAnalysisAutoCompletePrompt</code> エディション: Enterprise のみ</p>

セキュリティ・オプション

セキュリティ・オプションを使用して、ユーザーが分析およびダッシュボードで特定のアクションを実行する方法を制御します。

これらのオプションは分析およびダッシュボードにのみ適用されます。データ・ビジュアライゼーションには適用されません。

ノート:

セキュリティ設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
HTML/JavaScript/CSS コンテンツの許可	<p>ユーザーが HTML、JavaScript および CSS マークアップを分析およびダッシュボードのさまざまなテキスト・フィールドに適用できるかどうかと、以前に保存したマークアップを使用する方法を決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 常時 — ユーザーがマークアップを適用できるようにします。追加の書式設定が有効な各種ダイアログに 「HTML/JavaScript/CSS マークアップを含みます」 オプションを表示します。例: <ul style="list-style-type: none"> 分析の場合: 分析エディタの様々なダイアログ、「分析プロパティ」ダイアログ、「列のプロパティ」(列書式)ダイアログ、「列式の編集」ダイアログ、「ナレーティブ」ダイアログ、「ティッカ」ダイアログ、「静的テキスト」ダイアログ、「新規計算済メジャー」ダイアログ。 ダッシュボードの場合、ダッシュボード・エディタの様々なダイアログ、「テキスト・プロパティ」ダイアログ、「ヘッダーの編集」および「フッターの編集」ダイアログ(「印刷」および「エクスポート」オプションの下)。 ノート: 「常時」オプションは、以前は「オン」という名前でした。 なし — ユーザーがマークアップを適用できないようにします。「HTML/JavaScript/CSS マークアップを含みます」オプションを非表示にします。ユーザーはプレーン・テキストのみ入力できます。Oracle Analytics では、ユーザーが以前に入力し、分析およびダッシュボードのために保存したマークアップは無視されます。 HTML のみ — ユーザーが HTML マークアップを適用できるようにします。追加の書式設定が有効だが、安全な HTML のみが許可される(Javascript や CSS なし)各種ダイアログに 「HTML/JavaScript/CSS マークアップを含みます」 オプションを表示します。分析またはダッシュボードが開くと、Oracle Analytics はユーザーが入力したマークアップをサニタイズし、HTML マークアップのみを適用します。 オープン時 — ユーザーが追加のマークアップを適用できないようにします(既存のマークアップが保持されます)。「HTML/JavaScript/CSS マークアップを含みます」 オプションを非表示にするため、ユーザーはプレーン・テキストのみを入力できます。以前に保存した分析およびダッシュボードのマークアップは引き続き提供されます。ノート: 「オープン時」オプションは、以前は「オフ」という名前でした。 <p>API キー: AllowHTMLJavaScriptCSSContent エディション: Enterprise のみ</p>
プッシュ通知の有効化	<p>モバイル・アプリケーションのプッシュ通知が有効(オン)か無効(オフ)かを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> オン — モバイル・アプリケーションのプッシュ通知を有効にしてアラートとメッセージを受信します。 オフ — モバイル・アプリケーションのプッシュ通知を無効にしてアラートとメッセージの受信を停止します。 <p>デフォルト: オン API キー: EnableMobilePushNotifications エディション: Professional および Enterprise</p>

システム設定

詳細情報

データを CSV ファイルおよびタブ区切りファイルにテキストとしてエクスポート

データを CSV ファイルまたはタブ区切りファイルにエクスポートする際に、すべてのフィールドがテキストとして処理されるように、先頭にアポストロフィを追加するかどうかを指定します。

- **オン** — エクスポート時に、CSV ファイルおよびタブ区切りファイルに先頭のアポストロフィが自動的に追加されます。
- **オフ** — データはそのまま CSV ファイルにエクスポートされます。

▲ 注意:

オフの場合、エクスポートされた CSV ファイルを開くと、不要な数式が呼び出される可能性があります。分析の結果のエクスポートを参照してください。

✎ ノート:

この設定は、ビジュアライゼーションと分析にのみ適用されます。ピクセルパーフェクト・レポートには適用されません。

デフォルト: オフ

API キー: ExportDataToCSVFilesAsText

エディション: Professional および Enterprise

ログアウト後のリダイレクト URL

ユーザーが Oracle Analytics からサインアウトする際にリダイレクトされる URL を指定します。たとえば、ユーザーを会社の Web ページにリダイレクトしたり、クラシック・ホーム・ページを開くサインインの詳細を表示できます。

✎ ノート:

この設定は、2023 年 1 月 23 日以降に作成された Oracle Analytics Cloud インスタンスで機能します。2023 年 1 月 23 日より前に作成された Oracle Analytics Cloud インスタンスのログアウト後の URL を構成する場合は、Oracle Support にサービス・リクエストを発行します。

API キー: PostLogoutRedirectURL

エディション: Enterprise のみ


システム設定

詳細情報

ワークブック・サムネイルの保存

ワークブックの内容を識別できるように、Oracle Analytics はワークブックのサムネイル・イメージをホーム・ページに表示できます。これらのサムネイルに表示される情報は、データ作成者と同じアクセス権を持たないユーザーに機密データが公開されないよう保護するためにぼかされます。

この設定は、「ワークブック・プロパティ」ダイアログで設定された「サムネイルの保存」値を、個々のワークブック・レベルでオーバーライドします。

 ノート:

ウォッチリストではサムネイルが使用されないため、この設定は、ウォッチリストには適用されません。かわりに、ウォッチリストには小さいビジュアライゼーションが表示され、ホーム・ページをリフレッシュするたびにリロードされます。

- **オン** — ホーム・ページのぼかされたワークブック・サムネイルを表示します。この設定が有効(オン)になっている場合、ワークブックの所有者は、必要に応じて個々のワークブックのサムネイルを非表示にできます。ワークブック・サムネイルの設定を参照してください。
- **オフ** — ホーム・ページにワークブック・サムネイルを表示しません。かわりに、すべてのワークブックの標準アイコンを表示します。

デフォルト: オン

API キー: SaveWorkbookThumbnail

エディション: Professional および Enterprise

非アクティブ・ユーザーの自動サイン・アウト

非アクティブ・タイムアウトに達した後に、ユーザーを自動的にサイン・アウトするかどうかを指定します。

- **オン** — 非アクティブ・タイムアウトに達すると、ユーザーが自動的にサイン・アウトされます。
- **オフ** — 非アクティブ・タイムアウトに達しても、ユーザーはサイン・インしたままです。

デフォルト: オフ

API キー: SignOutInactiveUsersAutomatically

エディション: Professional および Enterprise

ブラウザ・スクリプト・アクションの URL

カスタム・ブラウザ・スクリプト・アクションが含まれる JavaScript ファイルの URL を指定します。

API キー: URLBrowserScriptActions

エディション: Enterprise のみ

システム設定	詳細情報
ユーザーの非アクティブのタイムアウト(分数)	<p>ここで指定した時間(分数)にわたってユーザーの非アクティブ状態が続くと、ブラウザまたはモバイル接続を再認証する必要があります。</p> <p>有効な値: 5 - 480</p> <p>デフォルト: 60</p> <p>API キー: UserInactivityTimeout</p> <p>エディション: Professional および Enterprise</p>

使用状況トラッキング・オプション

次のオプションを使用して、システム使用状況をモニターする方法を指定します。たとえば、使用状況トラッキング表に格納する行数を設定できます。

ノート:

使用状況トラッキング設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
使用状況トラッキングの有効化	<p>使用状況トラッキングを有効化するかどうかを指定します。このページの「使用状況トラッキング」セクションでその他すべての設定をアクティブ化するには、この設定を有効にする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • オン— このページの「使用状況トラッキング」セクションで有効になっているすべての設定がアクティブ化されます。 • オフ— このページの「使用状況トラッキング」セクションで有効になっていても、どの設定もアクティブ化されません。 <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: EnableUsageTracking</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
使用状況トラッキング接続プール	<p>使用状況トラッキング統計データベース用として作成した接続プールの名前を指定します。たとえば、<database name>.<connection pool name>などです。</p> <p>API キー: UsageTrackingConnectionPool</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
使用状況トラッキング初期化ブロック表	<p>セマンティック・モデルの物理レイヤーに表示されるとおりに、初期化ブロック統計に対応するレコードを挿入するために使用する完全修飾データベース表の名前を指定します。たとえば、<database name>.<catalog name >.<schema name >.<table name>または<database name>.<schema name >.<table name>などです。</p> <p>API キー: UsageTrackingInitBlockTable</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
使用状況トラッキング論理問合せロギング表	<p>論理問合せの詳細を格納するために使用するデータベース表の名前を指定します。たとえば、<database name>.<catalog name>.<schema name>.<table name>または<database name>.<schema name>.<table name>などです。</p> <p>API キー: UsageTrackingLogicalQueryLoggingTable</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
使用状況トラッキング最大行数	<p>使用状況トラッキング表で許可されている行数を示し、値 0 は無制限の行数を示します。</p> <p>有効な値: 任意の正の整数(最大 64 ビットの整数)</p> <p>デフォルト: 0</p> <p>API キー: UsageTrackingMaximumRows</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
使用状況トラッキング物理問合せロギング表	<p>物理問合せの詳細を格納するために使用するデータベース表の名前を指定します。たとえば、<database name>.<catalog name>.<schema name>.<table name>または<database name>.<schema name>.<table name>などです。</p> <p>API キー: UsageTrackingPhysicalQueryLoggingTable</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
サービス・ログでのユーザー識別子としてのユーザー名	<p>サービス・ログでユーザー名によってユーザーを識別するかどうかを指定します。この設定が無効(オフ)の場合、ユーザーはサービス・ログでユーザー GUID によって識別されます。この設定が有効(オン)の場合、ユーザー名がログに記録されるため、ログをモニターしている管理者にとってユーザーの識別が容易になる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • オン — アクションを実行しているユーザーの名前をサービス・ログに記録します。 • オフ — アクションを実行しているユーザーの GUID をサービス・ログに記録します。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: UserNamesInServiceLogs</p> <p>エディション: Professional および Enterprise</p>

ビュー・オプション

次のオプションを使用して、分析とダッシュボードを操作するユーザーのデフォルトの検索および表示設定を構成します。

これらのオプションは分析およびダッシュボードにのみ適用されます。データ・ビジュアライゼーションには適用されません。

ノート:

表示設定を変更した場合、新しい値を有効にするには、変更を適用する必要があります。

システム設定	詳細情報
デフォルトのスクロール有効	<p>表、ピボット、ヒート・マトリックス、単純トレリス・ビューおよび拡張トレリス・ビジュアライゼーションでデータをスクロールする方法を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 固定ヘッダーとコンテンツ・スクロール・コントロールとともにデータが表示され、ユーザーがデータを参照できます。 • Off — コンテンツ・ページ・コントロールとともにデータが表示され、ユーザーがデータを参照できます。 <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: AnalysisDefaultScrollingEnabled</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ワークブックでのエンリッチメントの有効化	<p>ワークブック・エディタがデータ・パネルから直接ビジュアライゼーションにデータセット・エンリッチメントを追加できるかどうかを指定します。この設定により、すべてのユーザーに対してワークブックのエンリッチメントが有効になります。データセットを所有しているか、データセットの編集権限を持つワークブック・エディタは、「ナレッジ・エンリッチメントの有効化」オプションを使用して、そのデータセットのナレッジ・エンリッチメントを有効または無効にできます。ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの有効化を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • オン — ワークブック・エディタは、エンリッチメント・ベースのデータ要素をビジュアライゼーション・キャンバスにドラッグ・アンド・ドロップできます。 • オフ — ナレッジ・エンリッチメントはデータセットでは使用できません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: EnableEnrichmentsInWorkbook</p> <p>エディション: Professional および Enterprise</p>
プロンプト自動完一致レベル	<p>ユーザーがプロンプト・フィールドに入力したプロンプト値を検索するために、オートコンプリート機能で一致を使用するかどうかを指定します。ユーザーが「検索」ダイアログにアクセスし、プロンプト値を検索して指定する場合、この設定は適用されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • StartsWith — ユーザーが入力したテキストで始まる一致語句を検索します。たとえば、ユーザーが M を入力すると、格納されている値(「MicroPod」、「MP3 Speakers System」など)が表示されます。 • WordStartsWith — 語または複数の語で始まる一致語句を検索します。たとえば、ユーザーが C と入力すると、格納されている値(「ComCell」、「MPEG Camcorder」、「7 Megapixel Digital Camera」など)が表示されます。 • MatchAll — 語または複数の語の中で一致するすべての語句を検索します。 <p>有効な値: StartsWith、WordStartsWith、MatchAll</p> <p>デフォルト: MatchAll</p> <p>API キー: AnalysisPromptAutoCompleteMatchingLevel</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
表/ピボット・ビュー: 表示できる最大の行数	<p>分析やダッシュボードの表およびピボット表ビューのコンテンツ・ページングに表示する最大の行数を指定します。</p> <p>表示用に指定できる最小の行数は 100 です。</p> <p>有効な値: 100-5000</p> <p>デフォルト: 5000</p> <p>API キー: TablePivotViewMaximumVisibleRows</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: 値の追加/除去	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「値の追加/除去」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「値の追加/除去」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「値の追加/除去」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsAddRemoveValues</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: 計算項目の作成/編集/除去	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「計算項目の作成/編集/除去」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「計算項目の作成/編集/除去」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「計算項目の作成/編集/除去」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsCreateEditRemoveCalculatedItems</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: グループの作成/編集/除去	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「グループの作成/編集/除去」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「グループの作成/編集/除去」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「グループの作成/編集/除去」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsCreateEditRemoveGroups</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: 累計の表示/非表示	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「累計の表示/非表示」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「累計の表示/非表示」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「累計の表示/非表示」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsDisplayHideRunningSum</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>

システム設定	詳細情報
ビュー相互作用: 小計の表示/非表示	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「小計の表示/非表示」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「小計の表示/非表示」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「小計の表示/非表示」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsDisplayHideSubtotals</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: ドリル	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「ドリル」オプション(プライマリ相互作用でない場合)がデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「ドリル(プライマリ相互作用でない場合)」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「ドリル(プライマリ相互作用でない場合)」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オフ</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsDrill</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: 列を含める/除外	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列を含める/除外」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列を含める/除外」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列を含める/除外」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsIncludeExcludeColumns</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: 列の移動	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列の移動」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列の移動」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列の移動」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsMoveColumns</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>
ビュー相互作用: 列のソート	<p>「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列のソート」オプションがデフォルトで選択されるかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • On — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列のソート」オプションがデフォルトで選択されます。 • Off — 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブで「列のソート」オプションがデフォルトで選択されません。 <p>デフォルト: オン</p> <p>API キー: AnalysisViewInteractionsSortColumns</p> <p>エディション: Enterprise のみ</p>

コンソールを使用したシステム設定の構成

コンソールを使用して、Analytics Cloud 環境に合わせてシステム設定を構成およびカスタマイズします。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「システム設定」をクリックします。
3. プロパティ値を更新します。
4. 「適用」をクリックして変更を保存し、「OK」をクリックして確認します。
変更内容がシステム全体でリフレッシュされるまでしばらく待機します。

REST API を使用したシステム設定の管理

Oracle Analytics Cloud の REST API を使用すると、システム設定をプログラムで表示および管理することが可能です。たとえば、使用状況トラッキング・オプションを更新するスクリプトを作成できます。

- [システム設定の REST API の使用に関する一般的なワークフロー](#)
- [システム設定の REST API のキー値](#)
- [システム設定の REST API の例](#)

システム設定の REST API の使用に関する一般的なワークフロー

ここでは、Oracle Analytics Cloud の REST API を使用して、プログラムによるシステム設定の表示および管理を開始するための一般的な作業を示します。システム設定の REST API を初めて使用する場合は、次の作業をガイドにして進めてください。

タスク	説明	REST API のドキュメント
前提条件の把握	前提条件の複数のタスクを把握して実行します。 REST API を使用してシステム設定を管理するには、Oracle Analytics Cloud の管理者(BI サービス管理者)権限が必要です。	前提条件
OAuth 2.0 トークン認証の把握	Oracle Analytics Cloud での認証と認可は、Oracle Identity Cloud Service で管理されています。Oracle Analytics Cloud の REST API にアクセスするには、認可に使用する OAuth 2.0 アクセス・トークンが必要です。	OAuth 2.0 トークン認証
システム設定の API キーの把握	各システム設定には公開 API キー名があり、それを使用して REST API 操作を行います。	システム設定の REST API のキー値
システム設定の詳細の取得	特定のシステム設定、すべてのシステム設定、またはまだ適用されていないシステム設定の詳細を取得します。	システム設定の取得
システム設定の更新	1 つ以上のシステム設定を更新します。	システム設定の更新

システム設定の REST API のキー値

各システム設定には、それぞれに REST API のキー名があります。たとえば、システム設定「**キャッシュ有効化**」の REST API キーは、**EnableDataQueryCache** です。この REST API キーは、REST API 操作でシステム設定を識別するために使用します。

たとえば、「**キャッシュ有効化**」設定を無効にする場合は、値 `false` を使用してキーの名前 (`EnableDataQueryCache`) を指定します。

```
{
  "items": [
    {
      "key": "EnableDataQueryCache",
      "value": "false"
    }
  ]
}
```

システム設定の表示名	REST API のキー値
HTML/JavaScript/CSS コンテンツの許可	AllowHTMLJavaScriptCSSContent
Analytics Publisher レポート・ツールバー・モード	AnalyticsPublisherReportingToolbarMode
回答エディタ開始タブ	AnswersEditorStartTab
回答サブジェクト領域のソート順	AnalysisSubjectAreaSortingOrder
ダッシュボードのプロンプト値の自動適用	AutoApplyDashboardPromptValues
プロンプト値検索ダイアログでの自動検索	EnableAnalysisAutoSearchPromptDialog
データ・セットに対するブラッシングの有効化	EnableBrushingDatasets
サブジェクト領域に対するブラッシングの有効化	EnableBrushingSubjectAreas
ダッシュボード・リストのキャッシュ・ドロップダウン・メニュー	CacheDashboardListingDropDownMenu
キャッシュ有効化	EnableDataQueryCache
大/小文字の区別なしのオートコンプリート	AutoCompletePromptDropDownsCaseInsensitive
接続外部化有効	EnableConnectionExternalization
通貨 XML	AnalysisCurrenciesXml
カスタム・リンク XML	CustomLinksXml
デフォルトのデータ・オフセットのタイム・ゾーン	DefaultDataOffsetTimeZone
デフォルトのスクロール有効	AnalysisDefaultScrollingEnabled
日付計算のデフォルト・タイム・ゾーン	DefaultTimeZoneforDateCalculations
デフォルトのユーザー優先タイムゾーン	DefaultUserPreferredTimeZone
VARCHAR データの右スペース削除の無効化	DataQueryDisableRightTrimVARCHARData
データセットでの自動インサイトの有効化	EnableAutoInsightsDatasets
データ・フローでのデータベース・アナリティクス・ノードの有効化	EnableDatabaseAnalyticsNodeDataFlows
ワークブックでのエンリッチメントの有効化	EnableEnrichmentsInWorkbook
ダッシュボードの即時レンダリングを有効化	EnableImmediateDashboardRendering
プッシュ通知の有効化	EnableMobilePushNotifications
サブリクエスト送信の有効化	EnableSubrequestShipping

システム設定の表示名	REST API のキー値
使用状況トラッキングの有効化	EnableUsageTracking
アクションでの安全ドメインの強制	EnforceSafeDomainsActions
サポート・レベルの評価	EvaluateSupportLevel
データを CSV ファイルおよびタブ区切りファイルにテキストとしてエクスポート	ExportDataToCSVFilesAsText
アクセス権のない EPM Cloud メンバーの非表示	HideEPMCloudMembersWithNoAccess
ロード・メッセージの非表示	HideLoadingMessages
ロケール	DataQueryLocale
最大電子メール・サイズ(KB)	EmailMaxEmailSizeKB
電子メール当たりの最大受信者数	EmailMaxRecipients
作業ファイルの最大パーセント・サイズ	MaximumWorkingFilePercentSize
モバイル・データ・ウォッチ・サービス有効	EnableMobileDataWatchService
モバイル・データ・ウォッチ・サービス頻度	MobileDataWatchServiceFrequency
OBIEE 互換性リリース	OBIEECompatibilityRelease
データベース機能のオーバーライド	OverrideDatabaseFeatures
ポータル・パス	PortalPath
ログアウト後のリダイレクト URL	PostLogoutRedirectURL
ワークブック電子メール・スケジューラ(プレビュー)	PreviewWorkbookEmailScheduler
バースティングによるワークブック電子メール・スケジューリング(プレビュー)	PreviewWorkbookEmailBursting
プロンプト自動完了一致レベル	AnalysisPromptAutoCompleteMatchingLevel
再帰的日時型チェック	RecursiveDatetimeTypeChecking
表およびピボットの Excel エクスポートでの行の繰り返し	AnalysisRepeatRowsExcelExportsTablesPivots
データ・エクスポートおよび配信の制限	RestrictDataExportAndDelivery
安全ドメイン	EmailSafeDomains
ワークブック・サムネイルの保存	SaveWorkbookThumbnail
列が Null 値可能な場合に Null 値を表示	AnalysisPromptsShowNullValueWhenColumnsNullable
非アクティブ・ユーザーの自動サイン・アウト	SignOutInactiveUsersAutomatically
Null 値を最初にソート	SortNullValuesFirst
ソート順序のロケール	DataQuerySortOrderLocale
厳密な日時型チェック	StrongDatetimeTypeChecking
オートコンプリートのサポート	EnableAnalysisAutoCompletePrompt
表/ピボット・ビュー: 表示できる最大の行数	TablePivotViewMaximumVisibleRows
ブラウザ・スクリプト・アクションの URL	URLBrowserScriptActions
使用状況トラッキング接続プール	UsageTrackingConnectionPool
使用状況トラッキング初期化ブロック表	UsageTrackingInitBlockTable
使用状況トラッキング論理問合せロギング表	UsageTrackingLogicalQueryLoggingTable
使用状況トラッキング最大行数	UsageTrackingMaximumRows
使用状況トラッキング物理問合せロギング表	UsageTrackingPhysicalQueryLoggingTable
BCC の使用	EmailUseBcc
RFC 2231 エンコーディングの使用	EmailUseRFC2231
ユーザー通貨プリファレンス XML	UserCurrencyPreferencesXml

システム設定の表示名	REST API のキー値
ユーザーの非アクティブのタイムアウト (分数)	UserInactivityTimeout
サービス・ログでのユーザー識別子としてのユーザー名	UserNamesInServiceLogs
ビュー相互作用: 値の追加/除去	AnalysisViewInteractionsAddRemoveValues
ビュー相互作用: 計算項目の作成/編集/除去	AnalysisViewInteractionsCreateEditRemoveCalculatedItems
ビュー相互作用: グループの作成/編集/除去	AnalysisViewInteractionsCreateEditRemoveGroups
ビュー相互作用: 累計の表示/非表示	AnalysisViewInteractionsDisplayHideRunningSum
ビュー相互作用: 小計の表示/非表示	AnalysisViewInteractionsDisplayHideSubtotals
ビュー相互作用: ドリル	AnalysisViewInteractionsDrill
ビュー相互作用: 列を含める/除外	AnalysisViewInteractionsIncludeExcludeColumns
ビュー相互作用: 列の移動	AnalysisViewInteractionsMoveColumns
ビュー相互作用: 列のソート	AnalysisViewInteractionsSortColumns
WriteBack Template XML	WriteBackTemplateXML

システム設定の REST API の例

Oracle Analytics Cloud REST API には、システム設定の REST API の使用方法を説明する例がいくつか記載されています。

システム設定の取得 - 例

- 例 1 - すべてのシステム設定とその現行値のリストの取得
- 例 2 - システム設定の特定セットの現行値の取得
- 例 3 - まだ適用されていないシステム設定のリストの取得

システム設定の更新 - 例

- 例 1 - JSON ファイルを使用したシステム設定の更新
- 例 2 - システム設定の直接更新

8

データのレプリケート

データ・レプリケーションを使用すると、Oracle Analytics Cloud でのビジュアライゼーションや分析のために、Oracle Fusion Cloud Applications Suite のデータを高パフォーマンスのデータ・ストア(Oracle Autonomous Data Warehouse や Oracle Database Classic Cloud Service など)にインポートできます。

追加の抽出、変換、ロード(ETL)のツールを使用せずに、データ・レプリケーションによってデータをインポートして変換できます。

トピック

- [データをレプリケートするための一般的なワークフロー](#)
- [データ・レプリケーションの概要](#)
- [データのレプリケート](#)
- [データの定期的なレプリケート](#)
- [レプリケーション・フローの変更](#)
- [レプリケーション・フローのモニターおよびトラブルシューティング](#)
- [レプリケートしたデータの別のターゲット・データベースへの移動](#)

データをレプリケートするための一般的なワークフロー

次に、Oracle Analytics Cloud 管理者がビジュアライゼーションのデータをレプリケートするために実行できるタスクを示します。

タスク	説明	詳細情報
レプリケートするデータの定義	データ・ソースへの接続およびレプリケーション・ターゲットを設定し、レプリケートするデータを定義します。	データのレプリケート
レプリケーション・スケジュールの設定	データを最新状態に維持するには、レプリケーション・フローをスケジュールして定期的に行います。	データの定期的なレプリケート
レプリケーション・ジョブのモニター	進捗の確認や問題のトラブルシューティングのために、レプリケーション・フローをモニターします。	レプリケーション・フローのモニターおよびトラブルシューティング
レプリケートしたデータの別のデータベースへの移動	データ・レプリケーション用のターゲット・データベースを変更する場合、現在のデータを新しいデータベースに移行し、その新しいデータベースにレプリケートするための接続を再構成できます。	レプリケートしたデータの別のターゲット・データベースへの移動

データ・レプリケーションの概要

Oracle Analytics Cloud のデータ・レプリケーションによって、ビジュアライゼーションや分析にデータを使用しやすくなり、負荷の高い問合せやデータ抽出を元のデータ・ソースで繰り返し実行する必要がなくなります。データ・レプリケーションを使用して、Oracle Fusion Cloud Applications にコンテンツ・パックを構築することもできます。

データ・レプリケーションの実装に関するヒント

- データ・レプリケーションは、Oracle Analytics Cloud Enterprise Edition で使用できます。
- パフォーマンスを最大にするために、extract データ・ストアによるデータ・レプリケーションを使用してください(ビュー・オブジェクト(VO)の VO 名に "ExtractPVO"を付ける)。
- データ・レプリケーションに関する上位 FAQ を参照してください。

extract データ・ストアの詳細なリストは、[Oracle Fusion Cloud Application Suite](#) を参照してください。例:

- [会計](#)
- [調達](#)
- [販売](#)
- [サプライ・チェーンと製造](#)

データ・レプリケーションの前提条件

始める前に、データ・レプリケーションに必要な正しいコンポーネントがあることを確認します。

Oracle Planning and Budgeting Cloud Service のサポートされているバージョンを見つけるには、サポートされるデータ・ソースを参照してください。

次が必要です:

- Oracle Analytics Cloud Enterprise Edition。
- Oracle Analytics Cloud でのデータ・レプリケーション権限(BI サービス管理者ロール)。
- Oracle Fusion Cloud Applications Suite のアプリケーションや Oracle Fusion Cloud B2C Service (RightNow)などのサポートされているデータ・ソース(そこからデータをソーシングします)。
- Oracle Database や Oracle Autonomous Data Warehouse などのサポートされているデータ・ターゲット(そこでデータをレプリケートします)。
- Oracle Fusion Cloud Applications Suite からデータをレプリケートする場合、次が必要です:
 - **BI Cloud Connector:**
 - * Oracle Fusion Cloud Applications Suite 環境にデプロイされた BI Cloud Connector。

- * Oracle Fusion Cloud Applications Suite 環境での BI Cloud Connector コンソールへのアクセス。
- * BI Cloud Connector コンソールの外部ストレージの構成ページで指定された Oracle Cloud Infrastructure のストレージ・インスタンスの接続詳細。
- **Oracle Cloud Infrastructure:**
 - * オブジェクト・ストレージを管理できる Oracle Cloud Infrastructure での計算権限。
 - * Oracle Cloud Infrastructure ストレージ。Oracle Cloud Infrastructure Object Storage または Oracle Cloud Infrastructure Object Storage Classic を使用できます。すでに Object Storage Classic からデータをレプリケートしている場合、Object Storage に簡単に切り替えることができます。
 - * Oracle Cloud Infrastructure の既存のストレージ・バケットの詳細(ストレージ・バケット名、バケットが存在するネームスペース、およびバケットが存在するテナントの Oracle Cloud Identifier (OCID)を含む)。
 - * Oracle Analytics Cloud とデータ・ソース(たとえば Oracle Fusion Cloud Applications)の両方からストレージ・バケットにアクセスするためのユーザー・アカウントの Oracle Cloud Identifier (OCID)。

データ・レプリケーションに必要な情報

始める前に、データ・レプリケーションに必要な詳細があることを確認します。

Oracle BI Cloud Connector

- Oracle BI Cloud Connector の https://fa_url/biacm リンク。

Oracle Fusion Cloud Applications

- Oracle Fusion Cloud Applications インスタンスのホスト名および接続詳細。

Oracle Cloud Infrastructure Storage

- Oracle Cloud Infrastructure ストレージ・インスタンス(Oracle Cloud Infrastructure Object Storage または Oracle Cloud Infrastructure Classic Storage)のホスト名、ストレージ・サービス名およびコンテナ名。この情報を使用して、Oracle Storage Cloud ストレージ・インスタンスを指すように Oracle BI Cloud Connector を構成します。
- Oracle Cloud Infrastructure ストレージ・インスタンスの REST エンドポイント URL。

URL の最初の部分はストレージ・ホストで、最後の部分はストレージ名/サービス名です。
例:

```
https://uscom-{location}.storage.oraclecloud.com/v1/Storage-mystoragecloudclassic
```

REST エンドポイント URL を取得するには、Oracle Cloud Infrastructure Classic コンソールに移動して **Storage Classic** にナビゲートし、「**アカウント**」をクリックして REST エンドポイント URL をコピーします。

- Oracle Cloud Infrastructure のオブジェクト・ストレージ・バケットの詳細(ストレージ・バケット名、バケットが存在するネームスペース、およびバケットが存在するテナントの Oracle Cloud Identifier (OCID)を含む)。

- ストレージ・バケットへのアクセス権を持つユーザーの Oracle Cloud Identifier (OCID)。

レプリケート可能なデータ

次のソースからデータをレプリケートできます。

- Oracle Eloqua
- Oracle Fusion Cloud Applications (Oracle Cloud Infrastructure Object Storage または Object Storage Classic を含む)
- Oracle Fusion Cloud B2C Service (RightNow)
- Oracle Talent Acquisition Cloud (Taleo)

データのレプリケート先として指定できるターゲット・データベース

これらのタイプのデータベースにデータをレプリケートできます。

- Oracle Autonomous Data Warehouse
- Oracle Autonomous Transaction Processing
- Oracle Database

実行可能なレプリケーション・タスク

多数のデータ・レプリケーション・タスクを実行できます。

- データ・フローを作成してデータをレプリケートします(レプリケーション・データ・フローとも呼ぶ)。
- レプリケーション・データ・フローをスケジュールして、定期的な増分更新を実行します。
- フィルタを使用してレプリケートするデータを制限します。

必要な権限と許可

データ・レプリケーションに必要な権限と許可があることを確認します。

データをレプリケートするには、BI サービス管理者のアプリケーション・ロールか、BI サービス管理者を含むその他のロールが必要です。

Oracle Database の場合、ユーザーのスキーマにレプリケートするには、次の権限が必要です。

- CREATE SESSION
- CREATE TABLE

Oracle Database の場合、データをターゲット・データベース内の他のスキーマにデータをレプリケートするには、次のすべての権限が必要です。

- CREATE ANY TABLE
- SELECT ANY TABLE

- ALTER ANY TABLE
- COMMENT ANY TABLE
- INSERT ANY TABLE
- UPDATE ANY TABLE
- DELETE ANY TABLE
- DROP ANY TABLE
- CREATE ANY INDEX
- ALTER ANY INDEX
- DROP ANY INDEX
- ANALYZE ANY

Oracle Fusion Cloud Applications データ・ソースからデータをレプリケートする際に使用できるオプション

Oracle Fusion Cloud Applications データ・ソースからデータをレプリケートするときは、次のオプションを使用します。

一部のビュー・オブジェクトは、変更履歴を記録します(緩やかに変化するディメンションと同様)。変更履歴をレプリケートするには、レプリケーション設定ダイアログで「履歴を含める」をクリックします。

レプリケーション設定ダイアログの「削除を含む」オプションを使用して、レプリケートされたデータとソース・データの同期化を維持します。「削除を含む」を選択し、ソース・データからレコードが削除された場合は、そのレコードはターゲット・データベースからも削除されます。

データを同期するには、増分データ・ロードで「削除を含む」オプションを使用します(「ロード・タイプ」オプションが「増分」の場合)。完全データ・ロードでは、ターゲット表の行はレプリケーションが開始する前に削除されます。

カスタム・ビュー・オブジェクトを使用すると、レプリケーション設定ダイアログの「カスタム・ビュー・オブジェクトの追加」オプションを使用して、カスタム・ビューのデータをレプリケートできます。ビューのフル・パスと名前を入力し(例:

FscmTopModelAM.TaskDffBIAM.FLEX_BI_TaskDFF)、「追加」をクリックして「レプリケート・オブジェクト」リストにビューを追加すると、フィールドを選択できるようになります。

データのレプリケート

データ・レプリケーションでは、レプリケーション・フローを使用して、Oracle Analytics Cloud で分析を行うためのデータを、データ・ソースからデータ・ターゲットにコピーします。たとえば、Oracle Fusion Cloud Applications データ・ソースから Oracle Autonomous Data Warehouse にデータをコピーできます。

1. データ・ソースに接続を設定します:

- a. ホーム・ページで、「作成」、「レプリケーション接続」の順にクリックしてから、コピー元データ・ソースのタイプを選択します。

たとえば、Oracle Fusion Cloud Applications データ・ソースからデータをレプリケートするには、「Oracle Fusion Application Storage」をクリックします。

- b. 「接続の作成」ダイアログで、接続詳細を指定します。
たとえば、Oracle Fusion Cloud Applications からデータをレプリケートするには、Oracle Cloud Infrastructure Object Storage または Object Storage Classic インスタンスの接続詳細を指定します。[Oracle Fusion Cloud Applications 用のレプリケーション接続の作成](#)を参照してください。
2. データ・ターゲットに接続を設定します:
 - a. ホーム・ページで、「作成」、「レプリケーション接続」の順にクリックしてから、データのコピー先データ・ソースのタイプを選択します。
 - b. 「接続の作成」ダイアログで、データ・ターゲットの接続詳細を指定します。
たとえば、Oracle Autonomous Data Warehouse にレプリケートするには、**Oracle Autonomous Data Warehouse Cloud** をクリックします。
3. ホーム・ページで、「作成」、「データ・レプリケーション」の順にクリックします。
4. 「データ・レプリケーションの作成 - ソース接続の選択」ダイアログで、ステップ 1 で作成したソース接続を選択します。
5. 「データ・レプリケーションの作成 - ターゲット接続の選択」ダイアログで、ステップ 2 で作成したターゲット接続を選択します。
6. レプリケーション・ターゲットに複数のスキーマがある場合は、「スキーマ」リストを使用して、使用するスキーマを選択します。
7. 「レプリケート・オブジェクト」領域で、レプリケートするオブジェクトを選択します。
 - レプリケートする各オブジェクトの横にあるチェック・ボックスをクリックします。

Fusion Applications データ・ソースの場合、レプリケートするビューがリストに表示されないときは、リストの下にある「カスタム・ビュー・オブジェクトの追加」オプションをクリックします。ビューのフル・パスと名前(例: FscmTopModelAM.TaskDffBIAM.FLEX_BI_TaskDFF)を入力し、「追加」をクリックします。
 - 表を選択すると、すべての属性がデフォルトで含まれます。右側のペインにあるチェック・ボックスを使用して、属性を選択または選択解除します。
 - 主キーを変更するには、キー・アイコンをクリックして、「主キーの割当」または「主キーの順序変更」を選択します。主キーをアップサート操作に使用して、レコードを挿入するか、更新するかを決定します。

索引付けを改善する場合、ベスト・プラクティスは、最も選択する列を最初にして最も選択しない列を最後にするように列を並べ替えることです。これを行うには、主キー列のいずれかのコンテキスト・メニューから「主キーの順序変更」オプションをクリックします。
 - 複数の列を主キーとして使用するには、キーに含める各列の横にあるキー・アイコンを選択します。
 - フィルタに基づいてデータのサブセットをレプリケートするには、「フィルタの編集」をクリックしてフィルタ・エディタを表示し、フィルタ式(終了セミコロンなし)を指定します。使用する式の書式は、データ・ソースでサポートされているフィルタ言語に応じて異なります。一般的なフィルタ言語には、SQL や XML などがあります。詳細は、該当するデータ・ソースのドキュメントを参照してください。

データ・ソース・フィルタ式の例 タイプ

Oracle Fusion Cloud Applications	"_DATASTORE_.LookupType not in ('GROUPING_SEPARATOR','HZ_FORMAT_DELIMITERS','ICX_NUMERIC_CHARACTERS)'"
Oracle Fusion Cloud B2C Service (RightNow)	lookupname like 'Admin%' id > 2
Oracle Eloqua	'{{Account.Field(M_Annual_Revenue1)}}' > '2000'

「検証」オプションを使用して式を検証し、「OK」をクリックしてフィルタを保存します。

- タイムスタンプに基づいてデータのサブセットをレプリケートするには、「**レプリケート元**」カレンダー・アイコンをクリックし、開始日を指定します。

「**レプリケート元**」オプションは、少なくとも 1 つの増分識別子列が定義されている表にのみ適用されます。

- 「**ロード・タイプ**」を使用して、増分ロードを実行するか、またはフル・ロードを実行するかを指定します。

「**増分**」を選択した場合、最初の実行ですべてのデータをレプリケートし、後続の実行では新しいデータのみをレプリケートします。増分更新では、主キーおよび 1 つ以上の増分識別子列が含まれる表が必要です。

「**完全**」を選択した場合は、ターゲット表が初期化され、すべてのデータをレプリケートします。

8. レプリケーション・ワークブックを保存します。
9. データ・ロードを開始するには、「**レプリケーション・フローの実行**」をクリックします。

Oracle Fusion Cloud Applications 用のレプリケーション接続の作成

Oracle Fusion Cloud Applications からデータをレプリケートするには、Oracle Analytics Cloud でデータ・レプリケーション接続を設定します。

1. Oracle Analytics Cloud で、「**作成**」をクリックしてから「**レプリケーション接続**」をクリックします。
2. 「**Oracle Fusion Application Storage**」をクリックします。
3. 次の接続の詳細を指定します:
 - **ストレージ・タイプ** - Oracle Cloud Infrastructure Object Storage の場合は「**OCI**」を、Oracle Cloud Infrastructure Object Storage Classic の場合は「**クラシック**」を選択します。
 - **ストレージ・リージョン** - ストレージ・バケットが存在する Oracle Cloud Infrastructure リージョンを指定します(us-ashburn-1 など)。Object Storage API エンドポイントでは、リージョンは oraclecloud.com の直前に指定されます。たとえば、https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com などです。
 - **ストレージ・テナンシ OCID** - バケットが存在するテナンシの Oracle Cloud Identifier (OCID)を指定します。

- **ストレージ・ユーザー OCID** - ストレージ・バケットにアクセスするユーザーの Oracle Cloud Identifier (OCID)を指定します。
 - **ストレージ・バケット** - ストレージ・バケットの名前を指定します。
 - **URL** - Fusion Enterprise Scheduler Web サービスの API エンドポイントを指定します。たとえば、`https://<fa-host>/bi/ess/esswebservice` またはホスト名のみ<fa-host>などです。
 - **ユーザー名** - BI Cloud Connector にアクセスする権限を持つ Oracle Fusion Cloud Applications ユーザーの名前を指定します。
 - **パスワード** - BI Cloud Connector にアクセスする権限を持つ Oracle Fusion Cloud Applications ユーザーのパスワードを指定します。
 - **ストレージ API キー** - 「生成」をクリックしてから「コピー」をクリックし、API 署名キーを作成します。Oracle Analytics Cloud データ・レプリケーションでは、このキーを使用して、オブジェクト・ストレージ・バケットへのアクセス時に認証を行います。
 - **ストレージ接続** - BI Cloud Connector コンソールでストレージ接続を指定し、抽出データの記述時に使用します。BI Cloud Connector ストレージ接続は、Oracle Analytics Cloud 接続と同じバケットを参照している必要があります。
4. 個別のブラウザ・ウィンドウまたはタブで、Oracle Cloud Infrastructure コンソールに移動し、ナビゲーション・メニューを開きます。「**アイデンティティとセキュリティ**」で、「**ドメイン**」をクリックし、Oracle Analytics Cloud で使用されるアイデンティティ・ドメインを選択し、「**ユーザー**」をクリックします。レプリケーション・ユーザー・アカウントのユーザーの名前を見つけクリックします。「**ドメイン**」リンクが表示されない場合、「**ユーザー**」をクリックします。
 5. 「**API キー**」セクションで、次のキーを追加します:
 - ステップ 4 でクリップボードにコピーしたデータ・レプリケーション接続の公開キーを追加します。
 - BI Cloud Connector コンソールの外部ストレージの構成ページでストレージ接続を作成したときに保存された公開キーを追加します。
 6. Oracle Analytics Cloud のブラウザ・ウィンドウまたはタブに戻り、「Oracle Fusion Application Storage」ダイアログで「**保存**」をクリックします。情報を正しく入力した場合、接続が保存されます。

データの定期的なレプリケート

データ・レプリケーションでは、レプリケーション・フローをスケジュールして定期的に行うことができます。たとえば、ソース・データを毎週変更する場合、週に 1 回データをレプリケートして最新の状態を維持できます。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」、「**データ**」、「**データ・レプリケーション**」の順にクリックします。

スケジュールできるレプリケーション・フローのリストが表示されます。レプリケーション・フローをまだ作成していない場合、最初にそれを作成します。
2. 定期的に行うレプリケーション・フローを右クリックして、「**新規スケジュール**」をクリックします。
3. 「スケジュール」ダイアログで、レプリケーション・フローを開始するタイミングとその実行頻度を指定します。

4. スケジュールされたジョブの進捗をモニターするには、ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「ジョブ」をクリックします。
5. スケジュールを変更するには、スケジュールしたレプリケーション・フローを右クリックし、「検査」をクリックしてから「スケジュール」をクリックし、変更を行います。

レプリケーション・フローの変更

データ・レプリケーションでは、データをロードするレプリケーション・フローを変更して、データをレプリケートする方法を変更できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「データ」、「データ・レプリケーション」の順にクリックします。
2. 変更するレプリケーション・フローを右クリックして、「開く」をクリックし、変更を行います。

レプリケーション・フローのモニターおよびトラブルシューティング

データ・レプリケーションでは、レプリケーション・フローをモニターすることで、進捗の確認や問題のトラブルシューティングを行えます。

データ・レプリケーションに関する上位 FAQ を参照してください。

レプリケーション・フロー中にエラーが発生し、レプリケーションが再度実行される場合、レプリケーションは前回のエラーが発生した場所から開始され、重複行はすべて除去されます。

1. レプリケーション・フローに関連付けられているジョブをモニターするには:
 - a. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「ジョブ」をクリックします。
 - b. 「ステータス」列でジョブの現在のステータスを確認します。
 - c. ジョブ履歴を表示するには、ジョブを右クリックして「検査」、「履歴」の順にクリックします。
 - d. ジョブを停止するには、ジョブを右クリックして「取消」をクリックします。
2. レプリケーション・フローの最後のデータ・ロードを調査またはトラブルシューティングするには:
 - a. ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「データ」、「データ・レプリケーション」の順にクリックします。
 - b. 調査するレプリケーション・フローを右クリックして、「検査」、「実行の詳細」の順にクリックします。

「履歴」ダイアログには、各レプリケーション実行の実行時間、ステータスおよび継続時間が表示されます。詳細を表示するには、レプリケーション実行をクリックし、「ステータス」タブを選択して各表のロードされた行数、拒否された行数、開始時刻、継続時間、ステータスおよび各表の警告を表示します。

レプリケートしたデータの別のターゲット・データベースへの移動

データ・レプリケーションでは、ターゲット・データベースを変更する場合、現在のデータを新しいデータベースに移行し、新しいデータベースにレプリケートする接続を再構成できます。

たとえば、組織が Oracle Cloud Infrastructure - Classic から Oracle Cloud Infrastructure へ移行する場合、状況に応じてこれを実行する必要があります。

1. 必要な権限と許可が新しいターゲット・スキーマに割り当てられていることを確認します。必要な権限と許可を参照してください。
2. レプリケートした表および次のレプリケーション・システム表を新しいターゲット・スキーマにコピーします。
 - レプリケートしたすべての表(対応する索引と制約を含む)
 - REPL\$_ERR_SUMMARY
 - E\$_*
 - SDS_*
3. 新しいターゲット・データベース用のレプリケーション接続を構成します。
 - 新しいターゲット・データベースが古いターゲット・データベースと同じタイプの場合、単に既存のレプリケーション接続を編集して接続の詳細を更新します。「接続」ページで、レプリケーション接続を見つけて「**検査**」をクリックし、「一般」タブを使用して新しいターゲット・データベースの詳細を更新します。
 - 新しいターゲット・データベースが異なるタイプの場合、そのタイプの新しいレプリケーション接続を作成して接続の詳細を指定します。「**作成**」をクリックしてから「**レプリケーション接続**」をクリックし、適切なタイプを選択して詳細を指定します。
4. 古いターゲット・データベース接続の詳細を使用するように構成されている各データ・レプリケーション・エントリを更新します。
 - a. 「**データ・レプリケーション**」ページを開き、編集するデータ・レプリケーションを選択します。
 - b. 「**レプリケーション・ターゲット**」領域で：
 - 新しいターゲット・データベースが古いターゲット・データベースと同じタイプの場合、「**スキーマ**」が新しいデータベース用に正しく設定されていることを確認します。
 - 新しいターゲット・データベースが異なるタイプの場合、「**選択**」をクリックして新しいターゲット接続を選択し、「**スキーマ**」をクリックして新しいデータベース用に正しく設定します。
5. ホーム・ページから、「**データ**」、「**接続**」の順に移動します。ターゲット・データベース用のレプリケーション接続を見つけ、「**検査**」をクリックし、「**表**」タブを使用して新しいターゲット・スキーマの表情報を確認します。

これで、新しいデータベースに対して増分モードのデータ・レプリケーションを再開できます。

第 IV 部

リファレンス

このパートでは、リファレンス情報について説明します。

付録:

- [よくある質問](#)
- [パフォーマンスに関するヒント](#)
- [トラブルシューティング](#)

A

よくある質問

次の参考文献には、Oracle Analytics Cloud の構成や管理を担当する管理者からよく寄せられる質問に対する回答が記載されています。

トピック:

- [Oracle Analytics Cloud の構成および管理に関する上位 FAQ](#)
 - 現在サインインしているユーザー数を確認できますか。
 - サービスの公開キーはどこにありますか。
 - データセットの記憶域の制限はありますか。
 - 分析で生成された SQL を確認したりログを分析できますか。
 - Oracle Analytics Cloud のサブスクリプションを終了するとコンテンツはどうなりますか。
 - Oracle Analytics Cloud からレポートとビジュアライゼーションを配信するためにプライベート・メール・サーバーを構成できますか。
- [ユーザー・コンテンツをバックアップおよび復元するための上位 FAQ \(スナップショット\)](#)
 - バックアップを行うには何が必要ですか。
 - スナップショットはどれくらいの頻度で作成する必要がありますか。
 - スナップショットはいつエクスポートすればよいですか。
 - API を使用して、スナップショット操作を自動化できますか。
 - 失われたコンテンツの復元を、オラクル社に支援していただくことはできますか。
- [ディザスタ・リカバリに関する上位 FAQ](#)
 - 障害時リカバリ計画を実装するために使用できる Oracle Analytics Cloud の機能は何ですか。
 - ディザスタ・リカバリに関する情報はどこにありますか。
- [コンテンツとデータの索引付けに関する上位 FAQ](#)
 - 何に索引付けできますか。
 - 認証済データセットとは何ですか。
 - どれくらいの頻度でクローलをスケジュールする必要がありますか。
 - 英語以外の言語のコンテンツに索引付けできますか。
 - 大きい表を含むサブジェクト領域に索引付けする場合に考慮する事項はありますか。
 - 検索結果はどのように順序付けされるのですか。
 - カタログ項目を保護するには「索引付けしない」を使用する必要がありますか。
 - 索引を最も効率的に作成する方法は何ですか。

- 索引付けの処理中にデータベースに多くの `select distinct` 問合せがあるのはなぜですか。
- **Publisher の構成および管理に関する上位 FAQ**
 - **Publisher** の配信チャンネルはどのように構成しますか。
 - 配信チャンネルへのアクセスはどのように制限しますか。
 - **FTP** および **SFTP** の配信再試行はどのように構成しますか。
 - **Publisher** で監査データの表示はどのように有効化できますか。
 - 構成固有のファイルはどのようにアップロードしますか。
- **データ・レプリケーションに関する上位 FAQ**

Oracle Analytics Cloud の構成および管理に関する上位 FAQ

ここでは、Oracle Analytics Cloud の構成と管理に関する上位 FAQ について説明します。

現在サインインしているユーザー数を確認できますか。

はい。ホーム・ページを表示し、「**コンソール**」、「**セッションおよび問合せキャッシュ**」の順にクリックします。[サインインするユーザーのモニター](#)を参照してください。

サービスの公開キーはどこにありますか。

ホーム・ページを表示し、「**コンソール**」、「**接続**」をクリックし、メニュー・アイコンをクリックして、「**公開キーの取得**」をクリックします。

データセットの記憶域の制限はありますか。

Oracle Analytics Cloud には、すべてのユーザーで共有されているデータ・ファイル用の 250GB の記憶域の固定割当てがあります。個別のユーザーの制限は 50GB です。ユーザーが組織から離れるときに、管理者は、未使用のデータセットを削除して記憶域スペースを解放できます。

組織の要件がこれらの制限を超えている場合は、Oracle サポートに連絡してください。

分析で生成された SQL を確認したりログを分析できますか。

はい。ホーム・ページを表示し、「**コンソール**」、「**セッションおよび問合せキャッシュ**」の順にクリックします。[SQL 問合せおよびログの分析](#)を参照してください。

Oracle Analytics Cloud のサブスクリプションを終了するとコンテンツはどうなりますか。

サブスクリプションを終了する前に、システムのスナップショット(最新のセマンティック・モデル、カタログ・コンテンツ、アプリケーション・ロールなど)を作成します。その後、Oracle Analytics Cloud をサブスクリプションする場合は、このアーカイブ・ファイルからコンテンツをインポートできます。

[スナップショットのアップロードおよびスナップショットからの復元](#)を参照してください。

デプロイメント全体のデフォルトのロゴおよびダッシュボード・スタイルを変更できますか。

はい。管理者としてログインし、クラシック・ホーム・ページに移動し、ユーザー・プロフィール・アイコンをクリックして、「管理」をクリックしてから「テーマの管理」をクリックします。ロゴ、ブランド、ページの色およびリンクの色などのダッシュボード・プロパティを含む新しいテーマを作成し、「アクティブ」をクリックします。この新しいスタイルは、すべての新しいブラウザ・セッションに適用されます。

Oracle BI Enterprise Edition および Oracle Analytics Server からセマンティック・モデルの RPD ファイルをアップロードできますか？

はい。Oracle BI Enterprise Edition または Oracle Analytics Server でビジネス・データをモデリングした場合は、Oracle Analytics Cloud で最初から始める必要はありません。

- **セマンティック・モデラー** - RPD ファイルをセマンティック・モデラーにアップロードできます。セマンティック・モデルを作成するためのファイルのインポートを参照してください。
- **モデル管理ツール** - RPD ファイルをモデル管理ツールにアップロードできます。Oracle BI Enterprise Edition および Oracle Analytics Server からのセマンティック・モデルのアップロードを参照してください。

Oracle Analytics Cloud からレポートとビジュアライゼーションを配信するためにプライベート・メール・サーバーを構成できますか。

いいえ、Oracle Analytics Cloud をプライベート・メール・サーバーに接続することはできません。Oracle Analytics Cloud では、パブリック・インターネットからアクセスできる SMTP メール・サーバーのみがサポートされます。[レポート配信のための電子メール・サーバーの設定](#)を参照してください。たとえば、Oracle Cloud Infrastructure で使用可能な SMTP メール・サーバーを使用できます。[電子メール配信のための Oracle Cloud Infrastructure の SMTP メール・サーバーの使用](#)を参照してください。

パブリックにアクセスできる SMTP メール・サーバーが、アクセスを制限するために許可リストを使用している場合は、ご使用の OAC インスタンスのゲートウェイ IP アドレスを確認して、それをメール・サーバーの許可リストに追加します。OAC インスタンスのゲートウェイ IP アドレスの確認を参照してください。

Oracle Analytics Cloud を、プライベート・アクセス・チャンネルを介してプライベート・データ・ソースに接続する必要があります。これを行うにはどうすればよいですか。

Oracle Cloud Infrastructure Console を使用して、Oracle Analytics Cloud のプライベート・アクセス・チャンネルを設定したり、プライベート・データ・ソースへのアクセスを構成します。[Oracle Cloud Infrastructure での Oracle Analytics Cloud の管理 \(Gen 2\) のプライベート・アクセス・チャンネルを介したプライベート・データ・ソースへの接続およびプライベート・データ・ソースに関する上位 FAQ に関する項](#)を参照してください。

ユーザー・コンテンツをバックアップおよび復元するための上位 FAQ (スナップショット)

このトピックでは、ユーザー・コンテンツのバックアップと復元に関する上位 FAQ について説明します。

バックアップを行うには何が必要ですか。

ユーザーが作成するすべてのコンテンツを、スナップショットというファイルに定期的にバックアップすることをお勧めします。ユーザー・コンテンツには、レポート、ダッシュボード、データ・ビジュアライゼーション・ワークブック、ピクセル対応レポート、データセット、データ・フロー、セマンティック・モデル、セキュリティ・ロール、サービス設定などのカタログ・コンテンツが含まれます。

コンテンツまたはサービスに問題がある場合は、スナップショットに保存したコンテンツに戻すことができます。スナップショットは、コンテンツをあるサービスから別のサービスに移動または共有する場合にも役立ちます。

ユーザー・コンテンツをバックアップするには、スナップショットの作成を参照してください。

ユーザー・コンテンツを復元するには、スナップショットからの復元を参照してください。

スナップショットはどれくらいの頻度で作成する必要がありますか。

スナップショットは、コンテンツまたは環境に大きな変更を加える前など、重要なチェックポイントで作成することをお勧めします。また、定期的な週次スナップショットを作成するか、環境の変更率やロールバック要件に基づいて独自に定義した頻度で作成することをお勧めします。

オンラインで保持できるスナップショットは最大 40 で、必要なだけオフライン(ローカル・ファイル・システム、またはお客様ご自身の Oracle Cloud ストレージ)にエクスポートできます。

スナップショットはいつエクスポートすればよいですか。

オフライン・ストレージへのスナップショットの定期的なエクスポートを習慣付けることをお勧めします。ご使用のファイル・システムにスナップショットをエクスポートし、ローカルで保存することが可能です。また、お客様ご自身の Oracle Cloud ストレージにスナップショットをエクスポートすることもできます。スナップショットのエクスポートを参照してください。

サイズの大きなスナップショット(5GB を超えるものや、ご使用のブラウザのダウンロード制限を超えるもの)を定期的にエクスポートする場合は、Oracle Cloud にストレージ・バケットを設定し、スナップショットをクラウド・ストレージに保存することをお勧めします。この方法では、スナップショットをローカル・ファイル・システムにエクスポートする際に発生することがある、サイズ制限やタイムアウトが原因のエクスポート・エラーを回避できます。スナップショット用の Oracle Cloud Storage Bucket バケットの設定を参照してください。

API を使用して、スナップショット操作を自動化できますか。

はい。REST API を使用したスナップショットの管理を参照してください。

失われたコンテンツの復元を、オラクル社に支援していただくことはできますか。

いいえ。お客様のデータのバックアップ、保存、リカバリまたは復元は、スナップショット(BAR ファイル)、カタログ・アーカイブ(CATALOG ファイル)、エクスポート・アーカイブ(DVA ファイル)を使用して、お客様個人の責任で行ってください。オラクル社が管理するインフラストラクチャのバックアップは、インフラストラクチャに問題が発生した場合にサービスを維持するために作成されます。オラクル社が維持するバ

バックアップは、ユーザーが作成したデータ管理には提供されません。[Oracle PaaS and IaaS Public Cloud Services - ピラー・ドキュメント](#)を参照してください。

Oracle Cloud Infrastructure のロギング・サービスを使用して、スナップショット間のコンテンツの変更を追跡し、トラブルシューティングすることをお勧めします。使用状況および診断ログを有効化すると、すべてのカタログ・オブジェクト(クラシック分析、ダッシュボード、ワークブック、ピクセルパーフェクト・レポート、フォルダ、データセット、セルフサービス接続、データ・フロー、シーケンス、スクリプトなど)に対する作成、更新、削除および権限の変更操作をモニターできます。使用状況および診断ログのモニターを参照してください。

ディザスタ・リカバリに関する上位 FAQ

ディザスタ・リカバリに関する上位 FAQ は、このトピックで確認できます。

障害時リカバリ計画を実装するために使用できる Oracle Analytics Cloud の機能は何ですか。

Oracle Analytics Cloud には、ユーザーの中断を最小限に抑えるために実装できる機能がいくつか用意されています。

- **スナップショット:** スナップショットにユーザー・コンテンツを定期的にバックアップすることをお勧めします。必要に応じて、重複する Oracle Analytics Cloud 環境にスナップショットのコンテンツを復元できます。[スナップショットの作成および復元](#)を参照してください。
- **一時停止と再開:** 受動バックアップ Oracle Analytics Cloud 環境をデプロイし、一時停止と再開機能を使用してコストの測定と最小化を制御できます。[サービスの一時停止と再開](#)を参照してください。
- **多様なリージョン可用性:** Oracle Analytics Cloud は、複数のグローバル・リージョンで利用できます。重複する Oracle Analytics Cloud 環境を別のリージョンにデプロイして、リージョン全体のイベントのリスクを緩和できます。[プラットフォームおよびインフラストラクチャ・サービスのデータ・リージョン](#)を参照してください。

ディザスタ・リカバリに関する情報はどこにありますか。

[テクニカル・ペーパー](#)を参照してください。さらなるサポートや支援については、コンサルティング・リソース(オラクル社またはサード・パーティ)の契約を結ぶか、[Oracle Analytics コミュニティ](#)にアクセスしてください。

コンテンツとデータの索引付けに関する上位 FAQ

このトピックでは、セマンティック・モデルおよびカタログ・コンテンツの索引付けに関する上位 FAQ について説明します。

何に索引付けできますか。

管理者は、次のものに索引付けできます:

- セマンティック・モデル - サブジェクト領域、ディメンション名と値、およびメジャー名と値。セマンティック・モデルの索引付けプリファレンスの変更を行うには管理者である必要があります。

- カタログ・コンテンツ - ワークブック、分析、ダッシュボードおよびレポート。カタログの索引付けプリファレンスの変更を行うには管理者である必要があります。
- ファイルベースのデータセット - ファイルベースのデータセットに索引付けすると、指定されたユーザーが、データセットのデータを使用してビジュアライゼーションを作成できるようになります。または、指定されたユーザーがホーム・ページからデータを検索できるように、ファイルベースのデータセットを認証できます。すべてのユーザーがファイルベースのデータセットを設定して、データセットの索引付けまたは認証を行えます。

[検索索引付けの構成](#)を参照してください。

認証済データセットとは何ですか。

すべてのユーザーがスプレッドシートをアップロードしてデータセットを作成でき、アップロードされるスプレッドシートの品質はそれぞれ異なります。ユーザーが共有データセットを認証している場合、他のユーザーがホーム・ページから検索できる質のよい信頼できるデータがデータセットに含まれていると確認していることを意味します。自分またはデータセットへのアクセス権が付与されているユーザーがホーム・ページから検索する際、認証済データセット内のデータは、検索結果でのランクが高くなります。

どれくらいの頻度でクロールをスケジュールする必要がありますか。

ユーザーがカタログ・コンテンツを追加または変更すると、索引が自動的に更新されます。デフォルトで、カタログおよびセマンティック・モデル・クロールは 1 日 1 回実行されます。自動索引付けが実行されなかった、またはデータの更新の頻度が低い (1 か月に 1 回など) など、場合によっては、BAR ファイルのインポート後にこのデフォルトを変更できます。

英語以外の言語のコンテンツに索引付けできますか。

はい。28 の言語のコンテンツに索引付けできます。

- **セマンティック・モデルおよびカタログ・コンテンツ** - 一度に複数の言語の索引を生成できます。「**検索索引**」ページに移動し、対象となっている 28 言語の 1 つ以上を [Ctrl] キーを押しながらクリックします。たとえば、会社の本社は米国に、自分の事務所はイタリアにある場合、「**英語**」と「**イタリア語**」を選択すると、英語とイタリア語の両方の索引を作成できます。[検索索引付けの構成](#)を参照してください。
- **データセット** - 一度に 1 つの言語のデータセットに索引付けできます。データセットの「**検査**」ダイアログに移動し、対象となっている 28 言語の 1 つを選択します。「データセットの索引付け」を参照してください。

ノート:

データが英語で、索引の言語が英語の場合、フランス語など、別の言語のデータは検索できません。たとえば、データに英語の製品名 (*chair*、*desk*、*matches* など) がある場合、フランス語の製品名 (*chaise*、*bureau*、*alumettes* など) で検索することはできません。

大きい表を含むサブジェクト領域に索引付けする場合に考慮する事項はありますか。

任意のサイズの表に索引付けできますが、大きい表の場合、索引付けに時間がかかります。多くの表または大きい表を含む大きいサブジェクト領域の場合、ユーザーが検索する必要がある列のみに索引付けすることを検討してください。

索引ファイルはコンパクトであるため、Oracle Analytics が索引用に予約しているストレージ領域を超えることはめったにありません。

検索結果はどのように順序付けされるのですか。

検索結果は次の順序でリストされます。

1. セマンティック・モデル(セマンティック・レイヤー)
2. 認証済データセット
3. 個人データセット
4. カタログ・アイテム(ワークブック、分析、ダッシュボードおよびレポート)

カタログ項目を保護するには「索引付けしない」を使用する必要がありますか。

いいえ。カタログをユーザーに対して非表示にする手段として、「クロール・ステータス」フィールドを「索引付けしない」に設定することはお薦めしません。項目は検索結果またはホーム・ページ上に表示されませんが、項目にアクセスすることはできます。かわりに、権限を使用して適切なセキュリティを項目に適用します。

索引を最も効率的に作成する方法は何ですか。

最適な結果を得るには、サブジェクト領域、ディメンション、カタログ項目に索引付けし、ユーザーが検出する必要があるデータセットを認証します。すべての項目に索引付けすると、生成される検索結果が多くなりすぎます。すべてのセマンティック・モデルおよびカタログ項目を選択解除し、ユーザーが必要とする項目のみを選択することをお薦めします。次に、必要に応じて項目を索引に追加できます。

索引付けの処理中にデータベースに多くの select distinct 問合せがあるのはなぜですか。

理由として可能性が最も高いのは、セマンティック・モデルの索引付けオプションが「索引」に設定されていることです。このオプションを「索引」に設定した場合、メタデータおよび値が索引付けされ、これは、索引付けの処理中に select distinct 問合せが実行され、索引付け対象として構成されているすべてのサブジェクト領域内のすべての列のデータ値がフェッチされることを意味します。

このシステム・オーバーヘッドが許容されない場合、またはユーザーがホーム・ページの検索バーからデータ値をビジュアル化する追加機能が必要としない場合、「コンソール」に移動し、「検索索引」をクリックして、索引付けオプションを「メタデータのみ索引付け」に設定します。このオプションを「メタデータのみ索引付け」に設定すると、ディメンションおよびメジャー名のみが索引付けされ、select distinct 問合せは実行されません。

Publisher の構成および管理に関する上位 FAQ

このトピックでは、Publisher の構成と管理に関する上位 FAQ について説明します。

Publisher の配信チャネルはどのように構成しますか。

Publisher の管理ページを使用して、配信チャネルへの接続を追加し、接続をテストします。

配信チャンネルへのアクセスはどのように制限しますか。

配信チャンネルのロールベースのアクセスを構成できます。配信チャンネルの構成ページで、「使用可能なロール」リストから、配信チャンネルへのアクセス権を付与するロールを 1 つ以上選択し、「許可ロール」リストに追加します。

FTP および SFTP の配信再試行はどのように構成しますか。

「FTP/SFTP 配信再試行の有効化」ランタイム・プロパティを true に設定すると、最初の試行が失敗した場合、Publisher は FTP または SFTP 配信チャンネルへのレポートの配信を再試行します。

Publisher で監査データの表示はどのように有効化できますか。

Publisher の「サーバー構成」ページの「モニターと監査の有効化」プロパティを使用して、Publisher カタログ・オブジェクトの監査データの表示を有効または無効にします。

構成固有のファイルはどのようにアップロードしますか。

Publisher のシステム管理ページの「アップロード・センター」を使用して、フォント、デジタル署名、ICC プロファイル、SSH 秘密キー、SSL 証明書および JDBC クライアント証明書に関する構成固有のファイルをアップロードおよび管理します。

電子メールのサイズの制限はいくつですか。

Oracle.com がインターネットから受信し、Oracle.com から配信する電子メール・メッセージの最大サイズは 15MB です。つまり、メッセージ・テキスト、ヘッダー、添付ファイル、埋込み画像のサイズの合計が 15MB 未満であることが必要です。

データ・レプリケーションに関する上位 FAQ

次に示す FAQ では、Oracle Fusion Cloud Applications からのデータの抽出とレプリケーション、オブジェクト・ストレージへのデータのアップロードとオブジェクト・ストレージからのデータのダウンロード、ターゲット・データベースへのデータのロードなど、データ・レプリケーション・タスクの詳細がわかります。

データ・レプリケーション・ジョブが長時間実行されている場合はどうしたらよいですか。

ジョブが長時間実行されている場合は、次のことを試行します：

- レプリケートされたビュー・オブジェクト(VO)が抽出 VO (つまり、VO 名が ExtractPVO で終わらない)ではない場合は、データ・レプリケーション・エディタを使用して、その VO の新しいデータ識別子から必要のない LastUpdateDate 列を除外します。
- 長時間実行されているビュー・オブジェクトで、新しいデータ識別子または増分フィルタに複数の LastUpdateDate 列が選択されている場合は、次のようにします：
 - VO のプライマリ・エンティティの **LastUpdateDate** オプションを選択します。
 - (機能していない)補助エンティティの列の **LastUpdateDate** オプションの選択を解除します。

- 新しいデータ識別子のオプションの選択を解除できない場合は、次の手順を実行します:
 1. ジョブを取り消します。
 2. ステージング表 TMP\$ を削除します。
 3. メイン・メニューに移動して、「データ」、「接続」の順にクリックします。
 4. 「ターゲット接続」をクリックして、「検査」を選択し、「表」タブをクリックします。
 5. 表を選択し、「更新時間のリセット」、「すべてのデータのリロード」の順に選択します。

データ・レプリケーション・ジョブのパフォーマンスを向上させるにはどうしたらよいですか。

パフォーマンスを向上させるには、次のことを試行します:

- extract データ・ストアによるレプリケーションのみを行います(ビュー・オブジェクト (VO)の VO 名に"ExtractPVO"を付けます)。
- レプリケートされた VO が抽出 VO (つまり、VO 名が"ExtractPVO"で終わらない)ではない場合は、データ・レプリケーション・エディタを使用して、その VO の新しいデータ識別子から必要のない LastUpdateDate 列をすべて除外します。
- パブリック・ビュー・オブジェクト(PVO)のロード・タイプが、必要ではないのに、FULL モードに設定されていないことを確認します。PVO で、少なくとも 1 つの列が Key 列として構成され、1 つの LastUpdateDate 列が新しいデータ識別子として構成されている場合は、ロード・タイプを Incremental に設定します。
- レプリケーション用に選択または有効化されている不要な列を削除します。
- レプリケーションが警告で終了した場合は、ターゲット・スキーマのエラー表を確認し、PVO 構成に適切な変更を行います。
- Oracle Fusion Cloud Applications のデータ・ソースの PVO で、データ・レコードが頻繁に削除されることを確認してください。そうでない場合は、「削除を含む」オプションをクリアします。
- ジョブが失敗する場合や取り消す場合は、ジョブを再度実行する前に、ステージング表とエラー表を削除します。

同じデータ・レプリケーションでも、日によって実行する時間が異なるのはなぜですか。

データ・レプリケーション・ジョブの実行にかかる時間は、次に示すような様々な要因で変わる場合があります:

- Oracle Autonomous Data Warehouse のパフォーマンスが、特定の日のタイミングに影響する可能性があります。
- レプリケーション・ジョブを実行している Oracle Analytics Cloud インスタンスが、スケジュール済メンテナンスにより、一時的に使用できない場合があります。

データ・レプリケーション・ジョブに追加できる表の数に制限はありますか。

いいえ、ジョブに追加できる表の数に制限はありません。同時に実行できるレプリケーション・ジョブは 3 つまでですが、ジョブのスケジュールはいくつでも同時に行えます。たとえば、3 つのジョブを同時に実行し、他のジョブはキューに入れることが可能です。

1つのデータ・レプリケーション・ジョブで処理できるデータの量や行の数に制限はありますか。

いいえ、データ量または行数がいくつでも、1つのデータ・レプリケーション・ジョブで処理できます。

データ・レプリケーションに関して、従う必要のあるヒントは他にありますか。

データ・レプリケーションでは、次のヒントに従ってください：

- 各レプリケーションの PVO の数を増やし、作成するレプリケーションの数を少なくします。推奨される抽出 PVO を使用します。
- レプリケーションの定義で、PVO から不要な列の選択を解除します。
- 同時実行性を最大限にするために、Oracle Autonomous Data Warehouse の low データベース・サービスを使用します。
- Oracle Autonomous Data Warehouse の負荷が低いときに実行するよう、レプリケーション・ジョブをスケジュールします。
- POV のロード・タイプの設定は、デフォルトである増分モードのままにします。

B

パフォーマンスに関するヒント

このトピックには、Oracle Analytics Cloud でのパフォーマンスの分析と最適化に役立つ情報が含まれています。

トピック:

- [問合せログの収集および分析](#)
- [Apache JMeter を使用したパフォーマンスのテスト](#)

問合せログの収集および分析

問合せログに含まれる強力な診断情報を使用すると、管理者は、問合せのパフォーマンス、エラー・シナリオ、正しくない結果に関連する問題を分析したりトラブルシューティングしたりすることができます。Oracle Analytics で問合せログを有効にすると、解析、最適化、実行計画、物理問合せ、サマリー統計などに関する情報が問合せログに書き込まれます。

- [問合せログへのアクセス](#)
- [問合せログ・レベル](#)
- [問合せログの読取り](#)
 - [論理 SQL 問合せ](#)
 - [論理リクエスト](#)
 - [実行計画](#)
 - [物理リクエストすなわちデータベース・リクエスト](#)
 - [サマリー統計](#)
- [問合せログに関する考慮事項](#)
- [ワークブックに関する問合せログへのアクセス](#)

問合せログへのアクセス

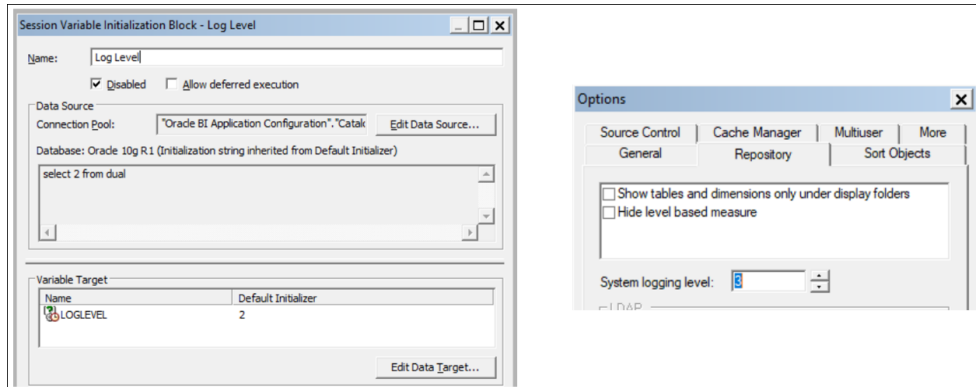
問合せログには、問合せの実行と同じ順序でシステム全体から順次書き込まれます。各セッションとリクエストは一意的 ID で識別されます。管理者は、コンソールの「**セッションと問合せキャッシュ**」ページからこれらの問合せログにアクセスできます。このページにアクセスする方法の詳細は、[SQL 問合せおよびログの分析](#)を参照してください。

ノート:

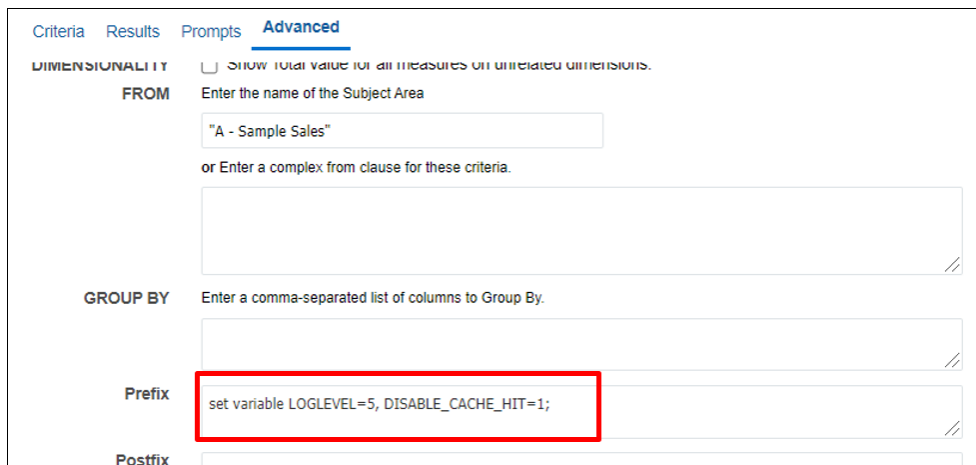
ワークブックの作成者は、問合せの情報(ワークブック内のビジュアライゼーション・コンポーネントに関する問合せ時間、サーバー時間、ストリーミング時間など)にアクセスすることもできます。このトピックの最期にある[ワークブックに関する問合せログへのアクセス](#)を参照してください。

問合せログ・レベル

- ログ・レベルによって、生成されるログの詳細と量が決まります。
- システム、セッションまたはレポートのレベルにログ・レベルを設定できます。
- セマンティック・モデル(RPD)のグローバル・ログ・レベルの定義は、「システム・ロギング・レベル」プロパティ(「ツール」、「オプション」、「リポジトリ」の下)を使用するか、セッション変数を使用して行うことができます。



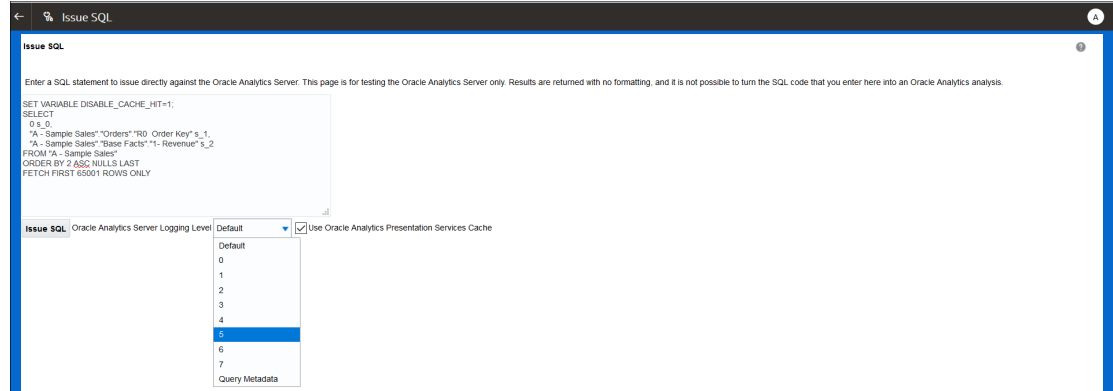
- レポートの「詳細」タブにある LOGLEVEL 変数を **Prefix** プロパティに追加して、レポートのログ・レベルをオーバーライドできます。
- キャッシュ・ヒットを回避して完全なログを取得するためには、変数 `DISABLE_CACHE_HIT=1` を LOGLEVEL と一緒に含めます。



- ログ・レベル(LOGLEVEL)の値の範囲は 0-7 です。
 - LOGLEVEL=0 は、ロギングが無効であることを意味します。
 - LOGLEVEL=7 は、主に Oracle 開発チームによって使用される最高のロギング・レベルです。
 - LOGLEVEL=2 は、パフォーマンスのチューニングや基本的な理解のために適しています。
 - LOGLEVEL=3 は、行レベルのデータ・セキュリティ・フィルタのトラブルシューティングに必要です。

- 問合せログには、ログ・レベルに応じて、問合せに関する情報(論理リクエスト、ナビゲーションおよび実行計画、生成される物理問合せ、実行時間、様々な実行ノードで取得される行数とバイト数、キャッシュ関連情報など)が含まれます。

管理者は、コンソールの「SQL の発行」ページで、適切な LOGLEVEL と変数を設定した問合せを実行することで、問合せログを抽出できます。

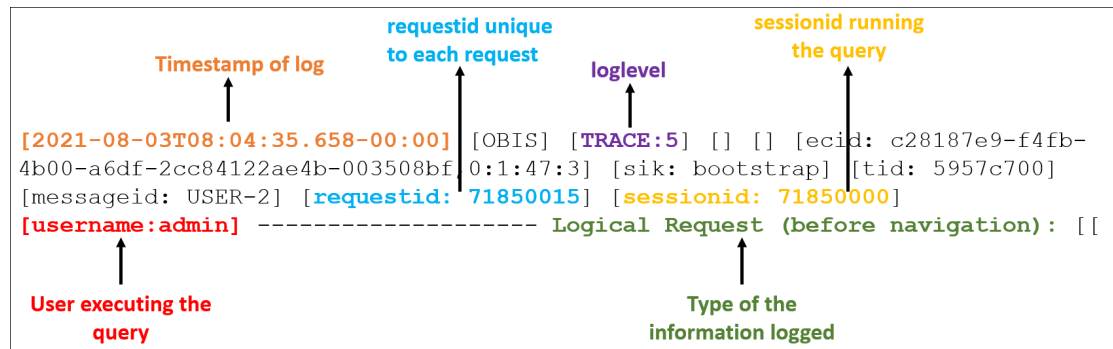


問合せログの読取り

「セッションと問合せキャッシュ」ページに、現在アクティブなすべての問合せとセッションがリスト表示されます。管理者はコンソールからこのページにアクセスできます。

ID	User	Refs	Status	Time	Action	Last Accessed	Statement	Information	Records
556732	admin	1	Finished	1s	Close View Log BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:34:41 PM GMT+05:30	SET VARIABLE QUERY_SMC_CACHE_HIT=1; SELECT 0,0, 'A - Sample Sales' Products TO Product 's_1, 'A - Sample Sales' Products TO Product 's_2 FROM 'A - Sample Sales' ORDER BY 2 ASC NULLS LAST FETCH FIRST 50001 ROWS ONLY	Type=Report	20
557193	admin	1	Finished	1s	Close View Log BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:36:57 PM GMT+05:30	SET VARIABLE QUERY_SMC_CACHE_HIT=1; SELECT 0,0, 'A - Sample Sales' Offices TO Department 's_1, 'A - Sample Sales' Offices TO Organization 's_2, 'A - Sample Sales' Offices TO Company 's_3 FROM 'A - Sample Sales' ORDER BY 3 ASC NULLS LAST, 4 ASC NULLS LAST FETCH FIRST 50001 ROWS ONLY	Type=Report	10
557274	admin	1	Finished	1s	Close View Log BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:36:57 PM GMT+05:30	DBE Execution:parameter cursor: ID=557193,cache key=557193-1801r1r0h070h4f7f70e61a	Type=DXEExecution	0+
557411	admin	1	Finished	0s	Close BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:37:13 PM GMT+05:30	(call requestlevelattributes('A - Sample Sales', '1', 'Base Facts', '1', '1'))		0
557602	admin	1	Finished	0s	Close BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:37:17 PM GMT+05:30	(call requestlevelattributes('A - Sample Sales', '1', 'Base Facts', '1', '1'))		0
557623	admin	1	Finished	0s	Close BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:37:17 PM GMT+05:30	(call requestlevelattributes('A - Sample Sales', '1', 'Base Facts', '1', '1'))		0
557670	admin	1	Finished	0s	Close BI/PS Diagnostics	03-08-2021 1:37:17 PM GMT+05:30	(call requestcustomcolumns('A - Sample Sales', '1', 'Base Facts', '1', '1'))		13

このページの各エントリから、設定されたレベル(つまりセマンティック・モデル、セッションまたはレポート・レベル)の、特定の問合せの問合せログにアクセスできます。



各リクエストには Oracle Analytics で一意の requestid があります。

論理 SQL 問合せ

次に Oracle Analytics のサンプルの論理 SQL 問合せを示します。

List of variables set are report level	SET VARIABLE QUERY_SRC_CD='Report',SAW_SRC_PATH='/shared/SupportBootCamp/SessionLog',LOGLEVEL=5;
Selected columns in the report and sortkeys/aggregations as defined in the RPD or column formula	SELECT s_0, s_1, s_2, s_3, s_4, s_5, s_6, s_7 FROM (SELECT 0 s_0, "E - Sample Essbase"."Products"."P3 LOB" s_1, "E - Sample Essbase"."Time"."T05 Per Name Year" s_2, case when "E - Sample Essbase"."Products"."P3 LOB" in ('Games','Services','TV') then 'Others' else "E - Sample Essbase"."Products"."P3 LOB" end s_3, SORTKEY("E - Sample Essbase"."Products"."P3 LOB") s_4, SORTKEY("E - Sample Essbase"."Time"."T05 Per Name Year") s_5, "E - Sample Essbase"."Base Facts"."1- Revenue" s_6, REPORT_SUM("E - Sample Essbase"."Base Facts"."1- Revenue" BY case when "E - Sample Essbase"."Products"."P3 LOB" in ('Games','Services','TV') then 'Others' else "E - Sample Essbase"."Products"."P3 LOB" end,"E - Sample Essbase"."Time"."T05 Per Name Year") s_7
FROM subject area	FROM "E - Sample Essbase"
Maximum rows to be retrieved from Database) djq ORDER BY 1, 6 ASC NULLS LAST, 4 ASC NULLS LAST FETCH FIRST 65001 ROWS ONLY

これらは論理 SQL リクエストで使用される共通の変数の一部です:

- QUERY_SRC_CD: 問合せ元: 「プロンプト」、「レポート」、「DV」、「SQL の発行」など。
- SAW_SRC_PATH: カタログの問合せへのパス(問合せが保存される場合)。
- SAW_DASHBOARD: カタログのダッシュボードへのパス(問合せがダッシュボードに組み込まれる場合)。
- SAW_DASHBOARD_PG: ダッシュボード・ページの名前。

論理リクエスト

論理リクエストは、セキュリティ・フィルタ(ある場合)の追加後に、問合せをプレゼンテーション・レイヤーからビジネス・モデルとマッピング・レイヤーに変換したものです。

```
[2021-08-03T09:20:11.680-00:00] [OBIS] [TRACE:6] [] [] [ecid: c28187e9-f4fb-4b00-a6df-2cc84122ae4b-00351cba,0:2:18:3] [sik: bootstrap] [tid: 59b82700] [messageid: USER-2] [requestid: 6bda000a] [sessionid: 6bda0000] [username: admin] ----- Logical Request (before navigation): [[

RqList [1,4]
  0 as c1 GB,
  D3 Offices.D2 Department as c2 GB,
  1- Revenue:[DAggr(F0 Sales Base Measures.1- Revenue by [ D3 Offices.D2 Department, D3 Offices.D2k Dept Key] )] as c3 GB,
  2- Billed Quantity:[DAggr(F0 Sales Base Measures.2- Billed Quantity by [ D3 Offices.D2 Department, D3 Offices.D2k Dept Key] )] as c4 GB,
  D3 Offices.D2k Dept Key as c5 GB
OrderBy: c2 asc NULLS LAST
```

Oracle Analytics は、論理リクエストに基づいて、問合せが既存のキャッシュでヒットするかどうかを判断します。ヒットしない場合は、データベースから取得する必要があります。

```
[2021-05-30T18:45:24.131+05:30] [OBIS] [TRACE:5] [] [] [ecid: ] [sik: ssi] [tid: 406c] [messageid: USER-21] [requestid: 6e00020] [sessionid: 6e00000] [username: SE] ----- Cache Hit on query:
Matching Query:
```


実行計画

実行計画とは、実際の論理リクエストを実行用に最適化された計画に変換するものです。これには各操作の送信計画と、それがデータベースと **Oracle Analytics** のどちらで実行されるかが含まれます。操作が **Oracle Analytics** で処理されるとき、問合せログに [for database 0:0,0] と示されます。

```
sum(F10 Billed Rev.Units by [ D30 Offices.Dept_Key] ) as c1 GB [for database
3023:85:01 - Sample App Data (ORCL),78],
sum(F10 Billed Rev.Revenue by [ D30 Offices.Dept_Key] ) as c2 GB [for database
3023:85:01 - Sample App Data (ORCL),78] → Operation shipped to the database

sum_SQL99(D1.c56 by [ D1.c1, D1.c2, D1.c3, D1.c4] at_distinct [ D1.c1, D1.c2,
D1.c3, D1.c4, D1.c32] ) as c39 [for database 0:0,0],
sum_SQL99(D1.c59 by [ D1.c1, D1.c2, D1.c3, D1.c4] at_distinct [ D1.c1, D1.c2, D1.c3
D1.c4, D1.c32] ) as c40 [for database 0:0,0] → Processed within OBI Server
```

問合せの実行時に、**Oracle Analytics** はこのツリーを正確にトラバースします。詳細ログには、処理された行に関する情報が実行ツリーのノードごとにあります。

```
[2021-08-02T07:34:13.596+00:00] [OBIS] [TRACE:7] [USER-20] [] [ecid:
005m8uOVozg4ulj5x3T4iW0003SQ0006Kc,0:3:3:2] [sik: ssi] [tid: 145b0700]
[messageId: USER-20] [requestid: d596000c] [sessionid: d5960000] [username:
admin] ----- Execution Node for logical request hash 3ac332c2
: <<3385229>> Post-aggr Projection, Close Row Count = 123, Row Width = 1040
bytes, Temporary file size = 0 bytes
```

物理リクエストすなわちデータベース・リクエスト

Oracle Analytics は、実行計画に基づいて、指定されたデータベースで実行するために物理 SQL を生成します。1 つ以上のリクエストが 1 つ以上のデータベースに送信される場合があります。

```
[2021-08-03T09:20:11.691-00:00] [OBIS] [TRACE:6] [] [] [ecid: c28187e9-f4fb-
4b00-a6df-2cc84122ae4b-00351cba,0:2:18:5] [sik: bootstrap] [tid: 59b82700]
[messageid: USER-18] [requestid: 6bda000a] [sessionid: 6bda0000] [username:
admin] ----- Sending query to database named 01 - Sample App
Data (ORCL) (id: <<1914627>>), connection pool named Sample Relational
Connection, logical request hash 800dcd6b, physical request hash 8f6d13dd:
[]
```

データベースに送信される物理リクエストごとに、取得された行数とバイト数のログがあります。

```
[messageid: USER-26] [requestid: 6bda000a] [sessionid: 6bda0000] [username:
admin] ----- Rows 10, bytes 10640 retrieved from database query
id: <<1914627>>, physical request hash 8f6d13dd
```

複数の問合せがあるとき、問合せ ID (この例には 1914627) を使用して、セクション「Sending query to the database」のロギングされた正確な問合せと照合します。複数のデータベース・リクエストがあるとき、こうすることで、問合せと取得した行をマップできます。

レポートの構造とセマンティック・モデルの定義によっては、1 つのレポートが、複数の問合せを 1 つ以上のデータベースに送信できます。たとえば、この問合せログでは、3 つの物理問合せがデータベースに送信されました。

```
[messageid: USER-29] [requestid: 6bda000a] [sessionid: 6bda0000] [username:
admin] ----- Physical Query Summary Stats: Number of physical
queries 3, Cumulative time 8.178, DB-connect time 0.001 (seconds)
```

ログによって、実行計画のすべてのノードについて処理された行に関する類似した情報が提供されます。最後に、クライアントに送信された行がロギングされます。

```
[messageid: USER-24] [requestid: 6bda000a] [sessionid: 6bda0000] [username:
admin] ----- Rows returned to Client 10
```

ログには、完全な実行時間を含む統計の最終的なサマリーも含まれます。この時間を相関付けて、パフォーマンスの問題を分析および調査できます。

```
Logical Query Summary Stats: Elapsed time 2.934, Total time in BI Server 2.932, Execution time 2.929,
Response time 2.930, Compilation time 0.694 (seconds)
```

サマリー統計

問合せログのサマリーには時間に関するいくつかの統計が表示されます。

- **Elapsed time** - 論理問合せが受信されたからクライアントがカーソルを閉じるまでの合計経過時間。Oracle Analytics のように、ユーザーによる結果のスクロールがクライアントによって許可される場合、ユーザーが別のページにナビゲートするかログアウトするまで、カーソルが長い間開いたままになることがあります。
- **Compilation time** - Oracle Analytics が、論理 SQL 問合せから実行計画と物理問合せを生成するために費やす時間。
- **Total time in BI Server** - クライアントがレスポンスを待機する合計時間。これには、物理問合せの実行時間、フェッチ中の待機時間、内部での実行のために Oracle Analytics で費やされる時間が含まれます。
- **Execution time** - 論理問合せが Oracle Analytics によって受信されてから、論理問合せの実行が完了するまでの時間。これには、論理問合せの実行が完了した後で、クライアントが結果をフェッチする際にかかった時間は含まれません。
- **Response time** - 論理問合せが Oracle Analytics によって受信されてから、最初の行がクライアントに返されるまでの時間。

問合せログに関する考慮事項

- シングル・スレッド・アクティビティ。問題がある状況では、ログ・レベルを 2 より大きくするとパフォーマンスのボトル・ネックが発生する可能性があります。
- 表示および計算される時刻は、エントリがログに書き込まれる時点のもですが、これはほとんどの場合に発生した時刻と同じです。そうでない場合は、ロギングに影響する他のボトルネックがあります。
- 問合せロギングは診断用であり、使用状況情報を収集するためのものではありません。使用状況トラッキングの詳細は、[使用状況のトラッキング](#)を参照してください。

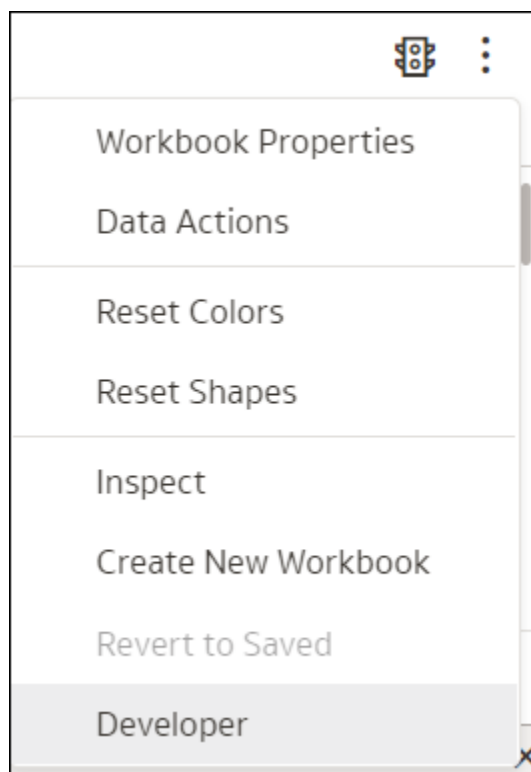
ワークブックに関する問合せログへのアクセス

管理者のみが、コンソールの「**セッションと問合せキャッシュ**」ページを使用してログにアクセスできます。ただし、コンテンツ作成者は、「**開発者**」メニューを使用してワークブックのビジュアライゼーション問合せのログ情報にアクセスできます。これは、問合せのパフォーマンスをトラブルシューティングする作成者にとって役立つツールです。ワークブックのパフォーマンス・ツール(「**開発者**」メニュー・オプション)

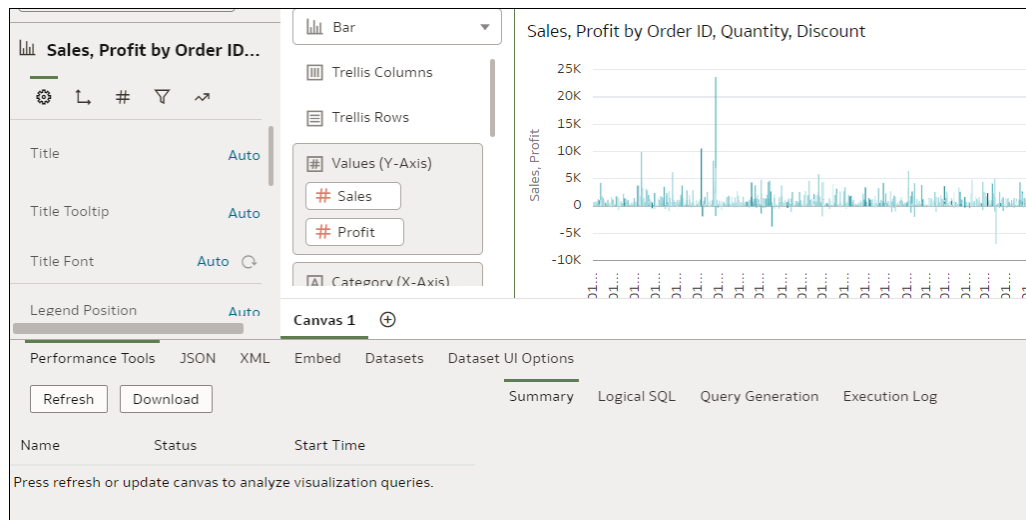
にアクセスするには、ユーザーが「**開発者オプションの有効化**」をオンにする必要があります。これは、「**マイ・プロフィール**」の「**詳細**」メニューにあります。



有効になると、「**開発者**」メニュー・オプションがワークブックのメニューに表示されます。



「**開発者**」オプションを使用すると、ユーザーが臨機応変に、キャンバス上の任意のビジュアルライゼーションに対して様々なログを表示して分析できるようになります。キャンバスの下に、情報の種類ごとに異なるタブを含む別のフレームが表示されます。デフォルトでは、ビジュアルライゼーションの実行時にログに値が入力されたりリフレッシュされたりすることはありません。



分析しようとするビジュアライゼーションを選択し、「リフレッシュ」をクリックしてログを生成します。リフレッシュされると、ビジュアライゼーションに関連する様々な情報が表示されます。特定のビジュアライゼーションのログ情報を分析できます。複数のビジュアライゼーションを分析するには、それらを個々にリフレッシュして1つずつ分析する必要があります。

Name	Status	Start Time
Sales, Profit by Order ID, Quantity, Discount	Complete	5:40:1

コンテンツ作成者は、「開発者」オプションを使用して、パフォーマンス・ログ、JSON、XML、データセット関連情報など、様々な情報を分析できます。つまり、ログを分析するために、「セッションと問合せキャッシュ」ページに対する管理者アクセス権は必要ありません。

ノート:

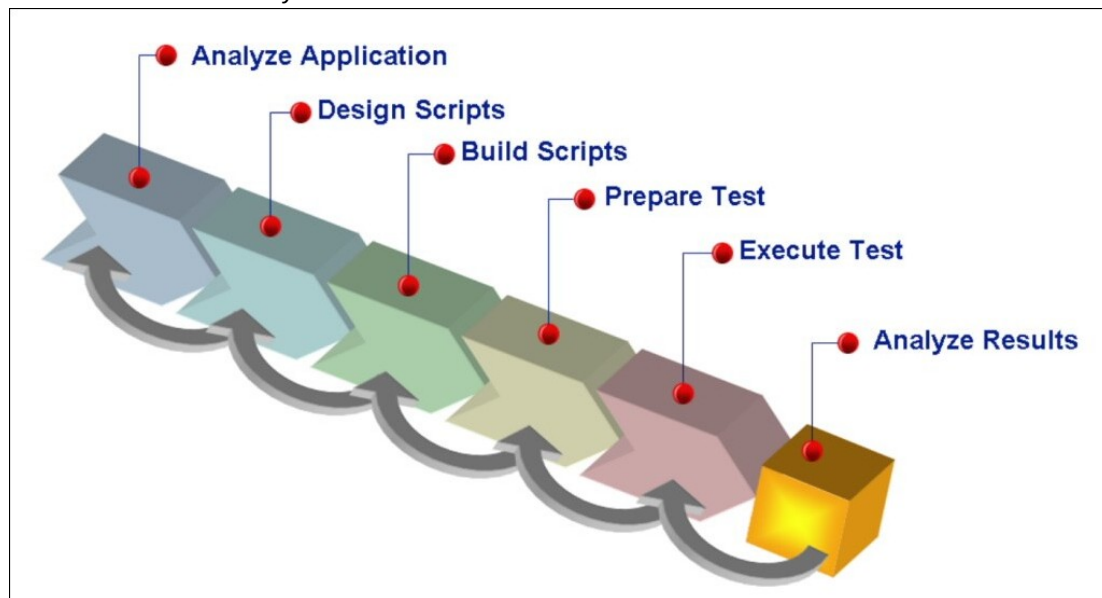
「開発者」メニューはワークブックのみで使用できます。従来の分析とダッシュボードの場合は、「セッションと問合せキャッシュ」ページで問合せログにアクセスします。

Apache JMeter を使用したパフォーマンスのテスト

パフォーマンスのテストは、Oracle Analytics Cloud が予期したワークロードを処理でき、パフォーマンスが落ちないことを確認するための重要なステップです。パフォーマンス・テストのためのオープンソース・ツールである Apache JMeter を使用して、

実際のユーザー・エクスペリエンスをシミュレートし、Oracle Analytics Cloud レポートのパフォーマンスを計測できます。

この図は、Oracle Analytics Cloud のパフォーマンス・テストのプロセスを示しています。



1. 現実的なシナリオに基づいてパフォーマンス・メトリックを決定します。

パフォーマンス・メトリックを決定するには、Oracle Analytics Cloud の要件とユーザーの期待を理解する必要があります。たとえば、Oracle Analytics Cloud で多数のユーザーに対応したい場合は、パフォーマンス・メトリックでレスポンス時間とスループットを重視する必要があります。同じく、Oracle Analytics Cloud で大容量のデータに対応したい場合は、パフォーマンス・メトリックでリソース利用率を重視する必要があります。パフォーマンス・メトリックを定義した後で、パフォーマンス目標を設定できます。

2. メトリックのテスト計画を設計します。

現実のシナリオとワークロードをシミュレートするようにテスト計画を設計する必要があります。つまり、一意の仮想ユーザーの数、テスト期間、リクエストの間の検討時間を特定する必要があります。一意の仮想ユーザーの数を、実際に予期されるワークロードをシミュレートする現実的な値に設定します。同様に、テストの期間を、ユーザーがレポートを実行する際にかかる時間に相当する現実的な値に設定します。検討時間は、ユーザーがリクエストとリクエストの間にかかる時間です。現実的なシナリオをシミュレートするために、現実的な検討時間の値も設定する必要があります。

また、リクエストが現実的なペースで送信されるようにスクリプトにペーシングも含める必要があります。正確で実用的な結果を得るためには、固定した検討時間を使用するのではなく、様々なアクティビティで異なる検討時間を使用することをお勧めします。たとえば、ダッシュボードの単純なナビゲーションには 20 秒という短い検討時間をお勧めしますが、プロンプトの選択には 60 秒という中程度の検討時間をお勧めします。同じく、レポートを表示するときは、ランダムに 120-200 秒の長い検討時間を使用することをお勧めします。このアプローチによって、テストが実際のユーザーの行動を正確に反映し、信頼できる結果が得られることが保証されます。

3. 動的な値を相関付けます。

相関では、スクリプトでの動的な値(アクセス・トークン、セッション状態 ID、CSRF トークン、他の動的パラメータなど)のキャプチャと置換が行われます。これらの値の相関に失敗すると、エラーが発生し、正しくない結果が生成されることがあります。相関は、Oracle Analytics Cloud のようなクラウドベースのアプリケーションには不可欠です。動

的な値を使用して、セッションを管理し、ユーザーのリクエストを処理するためです。このプロセスを容易にするために、[Oracle Analytics Cloud のサンプルの相関ルール・ライブラリ COR ファイル](#) をダウンロードできます。これには事前ビルド済の相関ルール・セットが含まれ、Oracle Analytics Cloud のテスト・スクリプトの作成に使用できます。

4. テスト・スクリプトを記録して再生します。

JMeter には、ユーザー・アクションを記録してテスト・スクリプトに変換する機能が用意されています。この機能を使用すると、Oracle Analytics Cloud でのユーザー・アクションを記録し、現実のシナリオをシミュレートするテスト・スクリプトを作成できます。記録したスクリプトを何回も再生して、レポートのパフォーマンスを検証できます。テスト・スクリプトは、現実のシナリオ(データの検索、レポートの生成、データのビジュアル化など)をシミュレートするように設計する必要があります。

5. 現実的なワークロードでテストします。

現実的なワークロードをシミュレートするには、仮想ユーザーの数を、予期されるワークロードをシミュレートする現実的な値に設定します。その後、ワークロードを少しずつ増やして、アプリケーションの最大処理能力を特定することができます。現実のシナリオをシミュレートするために少なくとも 1 時間はテストを実行することと、ピーク使用期間(会計年度末の月末など)をシミュレートするようにワークロードを設計することをお勧めします。

6. 結果を分析します。

テストが完了したら、結果を分析してパフォーマンスのボトルネック(レスポンス時間の遅さ、エラー率の高さ、問合せ処理能力稼働率の超過など)を特定します。これは、[Oracle Cloud Infrastructure Monitoring サービス](#)で使用可能なメトリックおよび JMeter の組込み分析ツールを使用して行うことができます。パフォーマンスのボトルネックを特定したら、判明したことに対してレポートのパフォーマンスを改善することができます。これには、問合せの最適化、システム設定構成の改善、または OCPU 数の追加が含まれます。

レポートがパフォーマンス目標を達成できないとしても、ボトルネックを識別して対処することで最適化できます。JMeter のリスナーは最も遅いリクエストの特定に役立ちます。ログを分析すると、パフォーマンスの問題の根本原因を判別できます。Oracle Analytics Cloud のパフォーマンスを改善するために、データベース問合せの最適化、キャッシュ設定の調整、またはインフラストラクチャのスケール・アップが必要になることもあります。

これらのガイドラインに従って、Oracle Analytics Cloud がパフォーマンスの要件を満たし、高速かつシームレスなエクスペリエンスを組織のために実現できるようにします。定期的なパフォーマンス・テストにより、問題がユーザーに影響を与える前に特定して対処することができます。

C

トラブルシューティング

このトピックでは、Oracle Analytics Cloud におけるデータの準備中に発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法について説明します。

トピック:

- 一般的な問題のトラブルシューティング
 - サインインできない
 - パスワードをリセットできない
 - ホーム・ページから特定のオプションにアクセスできない
 - Mozilla Firefox の使用時にパフォーマンスが低下する
 - Microsoft Access からエクスポートしたスプレッドシート(XLSX)から、データをアップロードできない
 - 自分の分析またはワークブックのタイムアウト
 - ホーム・ページの検索結果に探しているデータが含まれていない
 - サービス・リクエストで HAR ファイルを提供する必要がある
 - サービス・リクエストでクライアント・スクリプト・エラーの詳細を提供する必要がある
 - ユーザーが MS Power BI コネクタを使用していると、100 秒くらいで認証エラーが発生する
- 構成の問題のトラブルシューティング
 - コンソールのオプションにアクセスできない
 - スナップショットをアップロードできません
- 索引付けのトラブルシューティング
 - ホーム・ページの検索で結果が返されない
 - ホーム・ページの検索で返される結果が多すぎる、または重複する項目が返される
 - 予期された項目が検索結果から欠落している

一般的な問題のトラブルシューティング

このトピックでは、発生する可能性のある一般的な問題とその解決方法について説明します。

Oracle Analytics Cloud にサインインできない

誤った資格証明を使用してサインインしようとしている可能性があります。Oracle Analytics Cloud にサインインするには、Oracle からメールで送信されるか、または管理者から指示された Oracle Cloud アイデンティティ・ドメインの資格証明を使用する必要があります。

Oracle.com のアカウント資格証明を使用して Oracle Analytics Cloud にサインインすることはできません。

パスワードをリセットできない

Oracle Analytics Cloud を使用するためにサインアップする場合は、一時パスワードを含む電子メールを取得します。このパスワードをコピーして貼り付ける場合は注意が必要です。コピーするときにパスワードの前後に誤って空白が含まれると、そのパスワードを貼り付けても認識されません。空白を含まずにパスワードのみを貼り付けたことを確認してください。

ホーム・ページから特定のオプションにアクセスできない

必要なオプションにアクセスする正しい権限があることを管理者に確認してください。

Mozilla Firefox の使用時にパフォーマンスが低下する

Mozilla Firefox を使用しており、クラウド・サービスのパフォーマンスの低下に気付いた場合、**履歴の保存**オプションが有効であることを確認してください。Firefox が訪問済ページの履歴を保存しないよう設定されている場合、**Web コンテンツ・キャッシュ**も無効になっていると、サービスのパフォーマンスに大きな影響を与えます。このオプションの設定の詳細は、Firefox のドキュメントを参照してください。

Microsoft Access からエクスポートしたスプレッドシート(XLSX)から、データをアップロードできない

Microsoft Excel でスプレッドシートを開き、Excel ワークブック(*.xlsx)として再保存します。

その他のツールからスプレッドシートをエクスポートする場合は、ファイル形式が若干異なる可能性があります。これは、Microsoft Excel からデータを再度保存することで解決できます。

ユーザーには、ワークブック・エディタ内の「ビジュアル化」キャンバスに「**自動インサイト**」オプションは表示されません。

コンソールで「システム設定」、パフォーマンスと互換性の順に移動し、**データセットでの自動インサイトの有効化**オプションを有効にします。次に、データセット開発者に、インサイトが必要なデータセットのデータセットの検査ダイアログの「**インサイトの有効化**」オプションを選択するよう依頼します。その後、ワークブック・ユーザーは、ワークブック・エディタ内の「ビジュアル化」キャンバスの「**自動インサイト**」オプションを使用できるようになります。

自分の分析またはワークブックのタイムアウト

分析またはワークブックを実行しようとして、タイムアウトになることがわかりました。次のようなメッセージが表示されます。

```
[nQSError: 60009] ユーザー・リクエストが、実行時間を管理する最大問合せを超えました。
```

このメッセージは、Oracle Analytics 問合せがデータ・ソースとの通信に割り当てられた時間より長い時間を費やした場合に表示されます。パフォーマンス上の理由から、単一の問合せの実行は **11 分**に制限されています。

もう一度問合せを実行してみてください。このエラーを防ぐには、長時間実行問合せを避けるか、問合せを複数の問合せに分割します。

 ノート:

Oracle Database への直接接続の場合、問合せ制限は、時々発生する長時間実行問合せに対応するために自動的に 60 分に延長されます。データベースに対する過剰な負荷を回避するために、どの時点でも、Oracle Analytics は自動延長できる問合せ数を制限しています。分析またはワークブックで他のデータ・ソースに接続する場合、またはデータ・ゲートウェイを介して Oracle Database に間接的に接続する場合、問合せ制限は常に 11 分で、11 分を超えて延長されません。

ホーム・ページの検索結果に探しているデータが含まれていない

ホーム・ページの検索結果に表示するには、ユーザーがファイルから作成したデータセットに索引付け(および一部の場合は認証)する必要があります。

- ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けする必要があります。
- データセットにアクセスする権限を持つ他のユーザーが、ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けして認証する必要があります。

データセットの索引付けについておよびホーム・ページからのデータのビジュアル化を参照してください。

サービス・リクエストで HAR ファイルを提供する必要がある

ユーザーのパフォーマンスの問題を報告するためにサービス・リクエスト(SR)を記録する場合、ブラウザ・セッションを記録し、HTTP アーカイブ形式(HAR)でレポートを Oracle Support に提供するように求められる場合があります。HAR ファイルには、Web ブラウザと Oracle Analytics Cloud の対話が記録されています。

ブラウザ・セッションの記録には任意のサポート対象ブラウザを使用できますが、Chrome のデベロッパ・ツールを使用することをお勧めします。Chrome を使用してブラウザ・セッションを記録するには:

1. Chrome で、「Google Chrome の設定」を選択し、「その他のツール」、「デベロッパー ツール」の順に選択します。
2. 「ネットワーク」タブにナビゲートします。
3. 「キャッシュを無効化」および「ログを保持」を選択し、ページをリフレッシュします。
4. 記録がまだ開始されていない場合は、「記録」をクリックします。
5. パフォーマンス問題の原因となっているステップを実行します。
6. 「ネットワーク ログの記録を停止」をクリックします。
7. 表またはグリッドを右クリックして、「すべてをコンテンツのある HAR として保存」を選択します。
8. 画面の指示に従って、HAR ファイルをローカルに保存します。

サービス・リクエストでクライアント・スクリプト・エラーの詳細を提供する必要がある

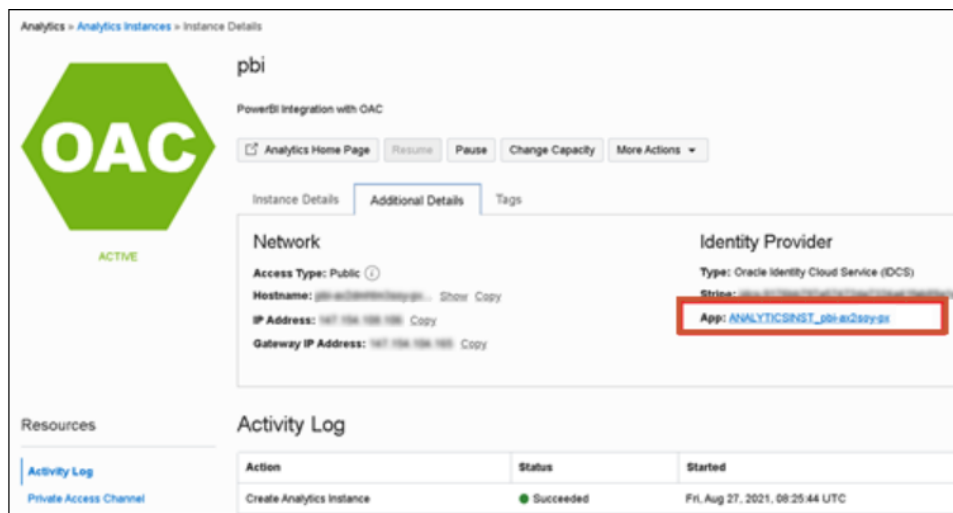
クライアント側の問題に関するサービス・リクエストを記録する場合は、クライアント・スクリプト・エラーの詳細を Oracle Support に送信するように求められる場合があります。

クライアント・スクリプト・エラーの収集には任意のサポート対象ブラウザを使用できますが、**Chrome** のデベロッパ・ツールを使用することをお勧めします。**Chrome** を使用してクライアント・スクリプト・エラーを収集するには:

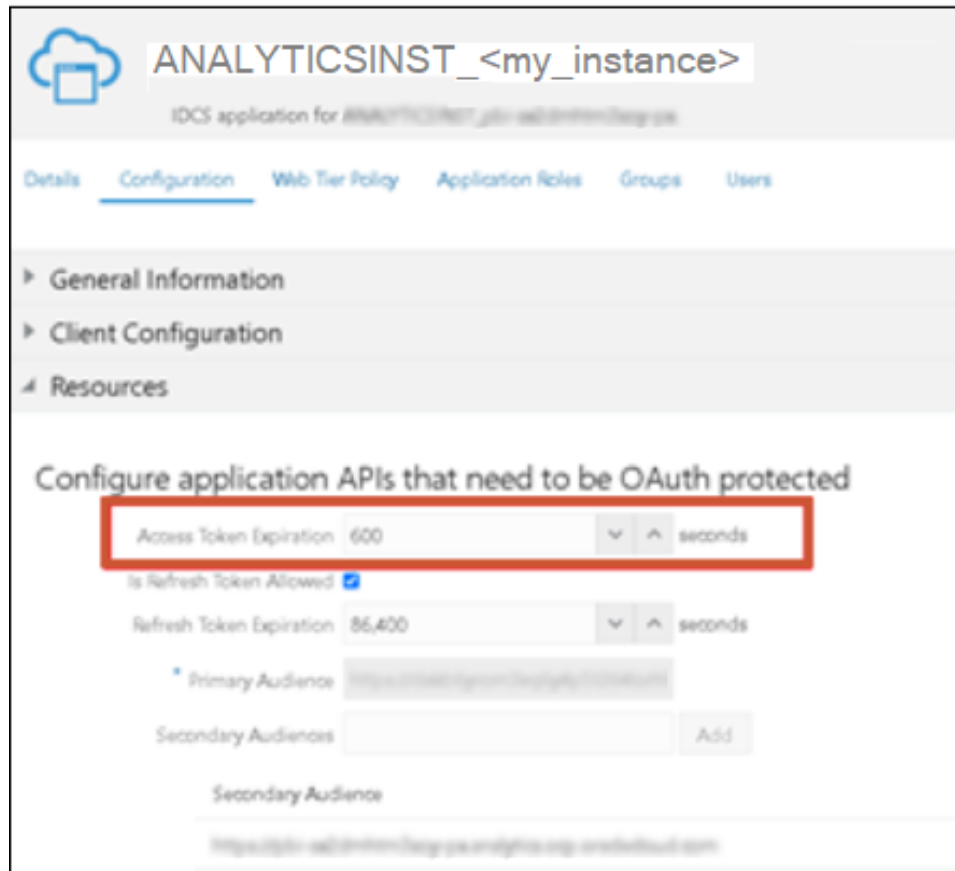
1. **Chrome** で、**Oracle Analytics Cloud** にサインインし、問題が発生したページにナビゲートします。
2. 「**Google Chrome の設定**」を選択し、「**その他のツール**」、「**デベロッパー ツール**」の順に選択します。
3. 「**コンソール**」タブをクリックします。
4. 「**コンソールを消去**」をクリックして、コンソールから既存のメッセージをすべて削除します。
5. 「**コンソール サイドバーを表示します**」をクリックし、「**エラー**」オプションをクリックして、エラーのみ(赤い円で囲まれた十字)を表示します。
6. 問題を再現し、エラーが発生して記録されていることをコンソールで確認します。
7. エラー・メッセージを右クリックし、「**名前を付けて保存...**」を選択して、ファイルをコンピュータに保存します。
8. エラー・ファイルを **SR** にアップロードします。

ユーザーが MS Power BI コネクタを使用していると、100 秒くらいで認証エラーが発生する

Oracle Analytics Cloud のアクセス・トークンの有効期限を調整してください。Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、Microsoft Power BI で接続する Oracle Analytics Cloud インスタンスに移動します。



「**追加詳細**」をクリックし、「**アイデンティティ・プロバイダ**」の下にある「**アプリケーション**」リンクをクリックします。「**構成**」タブで、「**リソース**」を展開し、**アクセス・トークンの有効期限**を 600 秒(10 分)に増やします。



構成の問題のトラブルシューティング

このトピックでは、Oracle Analytics Cloud の構成や管理の際に発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法について説明します。

コンソールのオプションにアクセスできない

未許可メッセージが表示されたり、コンソールにオプションが表示されない場合は、BI サービス管理者アプリケーション・ロールがない可能性があります。「ユーザーとロール」、「スナップショット」、「接続」、「安全ドメイン」、「セッションと問合せキャッシュ」、「SQL の発行」、「ウィルス・スキャナ」、「メール・サーバー」および「検索索引」など、ほとんどのコンソール・オプションにアクセスするには、BI サービス管理者アプリケーション・ロールが必要です。

権限の確認を管理者に依頼してください。ユーザーへのアプリケーション・ロールの割当てを参照してください。

スナップショットをアップロードできません

アップロードできるのは、Oracle Analytics Cloud、Oracle Business Intelligence Cloud Service、Oracle Data Visualization Cloud Service、Oracle BI Enterprise Edition (12c) および Oracle Analytics サーバーから取得したスナップショットのみです。アップロードしようとしている .bar ファイルがどこからダウンロードしたものか確認してください。

モデル管理ツールを SSL モードで使用できません

デフォルトのセキュリティ証明書を使用できない場合は、サーバー・セキュリティ証明書をインポートしてください。たとえば、モデル管理ツールをインストールしたマシンで、キーおよび証明書管理ツール(keytool)を使用して、次のコマンドを実行します:

```
C:\Oracle\Middleware\oracle_common\jdk\jre\bin\keytool.exe -importcert
-alias oacserver -file
C:\Oracle\Middleware\oracle_common\jdk\jre\lib\security\server.crt -
keystore
C:\Oracle\Middleware\oracle_common\jdk\jre\lib\security\cacerts -
storepass
thepassword
```

索引付けのトラブルシューティング

このトピックでは、セマンティック・モデルおよびカタログ・コンテンツに索引付けする時に発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法について説明します。

ホーム・ページの検索で結果が返されない

ホーム・ページで検索し、結果が返されなかった場合、「**ユーザー・フォルダの索引付け**」オプションが選択されていることを確認します。このオプションが選択されていない場合、カタログ内の内容は索引付けされません。

このオプションは、「検索索引」ページの「カタログ」タブにあります。

ホーム・ページの検索で返される結果が多すぎる、または重複する項目が返される

検索結果が有意義ではない場合、索引付けする項目の数を減らします。たとえば、売上げと呼ばれるディメンションが 20 のサブジェクト領域に含まれており、すべてのサブジェクト領域が索引付けされている場合、売上げを検索すると、結果には売上げと呼ばれる 20 の項目が含まれます。

「検索索引」ページの「データ・モデル」および「カタログ」タブに移動し、索引付けする項目数を減らします。すべての選択を解除し、次に必要な項目のみを選択することをお勧めします。

予期された項目が検索結果から欠落している

検索結果から欠落している項目がある場合、クロール・ジョブが正常に完了しているかを確認します。クロールが終了する、または進行状況の合計がゼロの場合があります。このような場合は、クロールを再実行します。

1. 「**コンソール**」をクリックします。
2. 「**検索索引**」をクリックします。
3. 「**クロールのモニター**」をクリックします。
4. 「**クロールの構成**」リンクをクリックします。
5. 「データ・モデル」タブで、「**データ・モデル・クロールの有効化**」チェック・ボックスを選択解除し、再度選択します。
6. 「**保存**」をクリックします。

7. 「**クロールのモニター**」リンクをクリックし、スケジュール済のジョブを見つけます。修正されたクロールが数分以内に実行されます。